

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第187集

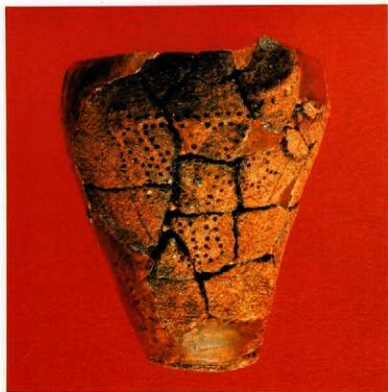
# 館IV遺跡発掘調査報告書

国道107号新珊瑚橋整備関連遺跡発掘調査

助 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 館Ⅳ遺跡発掘調査報告書

国道107号新珊瑚橋整備関連遺跡発掘調査



人体・動物モチーフ付土器( IC-9住居跡出土)

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えてゆくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日の課題であり、岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の館IV遺跡は、北上川左岸の河岸低地に立地し、平成元年・2年・3年の発掘調査によって縄文時代と平安時代の集落跡が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました岩手県土木部北上土木事務所、北上市教育委員会をはじめ関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 工藤 巖

## 例 言

1. 本報告書は、北上市黒沢尻町字立花第3地割38-1ほかに所在する館IV遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道107号新珊瑚橋整備に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県土木部北上土木事務所と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 館IV遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は、次のとおりである。

遺跡番号	ME67-1627
遺跡略号	T TIV-89・90・91

4. 発掘調査は、平成元年度から3年度にわたって実施した。各々の調査期間および調査面積は、次のとおりである。

平成元年度	7月1日～11月10日	6,500㎡
平成2年度	7月2日～9月14日	2,200㎡
平成3年度	4月9日～5月2日	252㎡

5. 発掘調査は平成元年度光井文行・佐々木弘、2年度田鎖寿夫・佐々木弘・齋藤邦雄、3年度佐々木弘・佐々木務が担当し、報告書の作成は佐々木弘が担当した。

6. 検出された遺構の種類と遺構数は次のとおりである。

縄文時代の竪穴住居跡	15	平安時代の竪穴住居跡	6	土坑	104	配石遺構	2		
溝状遺構	1	陥し穴状遺構	2	カマド状遺構	1	焼土遺構	15	柱穴群	5

7. 分析や鑑定は、次の方々に依頼した（敬称略）。

火山灰・須恵器の胎土分析	三辻 利一（奈良教育大学教授）
炭化穀類種子同定	バリノ・サーヴェイ株式会社
炭化樹種の同定	早坂松次郎（社団法人岩手県木炭協会）
石質鑑定	佐藤 二郎（佐藤地質工学研究所）

8. 遺跡の基準点測量は、株式会社吉田測量設計に委託した。
9. 野外調査および室内整理では、次の機関や方々の御協力、御教示を賜った（敬称略）。  
北上市教育委員会 岩手県土木部北上土木事務所 齋藤尚己 沼山源喜治 本堂寿一 稲野裕介 稲野彰子（北上市立埋蔵文化財センター） 中村良幸（大迫町教育委員会）
10. 現地調査には、地元の方々の御協力をいただいた。
11. 調査によって得られた資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目次

## 序 例言

## 本文

I. 調査に至る経過	2	4. 石製品・その他	234
II. 遺跡の立地と環境	3	VI. まとめ	252
1. 位置	3	1. 遺構	252
2. 地形	3	(1)縄文時代の竪穴住居跡	252
3. 遺跡及び周辺の地形	7	(2)平安時代の竪穴住居跡	256
4. 基本層序	7	(3)土坑	258
5. 周辺の遺跡	9	(4)その他の遺構	263
III. 調査方法と室内整理	14	2. 出土遺物	265
1. 野外調査	14	(1)縄文～弥生・後北式土器	265
2. 室内整理	15	(2)平安時代の土器	273
IV. 検出された遺構と遺物	19	(3)石器	273
1. 縄文時代の竪穴住居跡	19	(4)その他	274
2. 平安時代の竪穴住居跡	55	VII. 分析・鑑定の結果	276
3. 土坑	65	1. 館IV遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	276
4. 陥し穴状遺構	134	2. 岩手県下の遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	277
5. 配石遺構	134	3. 館IV遺跡出土試料種子同定報告書	281
6. カマド状遺構・焼土遺構	137		
7. 柱穴群	144		
8. 溝状遺構	148		
V. 遺構外出土遺物	214		
1. 土器	214		
2. 土製品	221		
3. 石器	232		

## 図 版

第1図 遺跡位置図	1	第31図 I C-56・57・58土坑	68
第2図 地形分類図	4	第32図 I C-59・60・61・62土坑	71
第3図 周辺の地形	5・6	第33図 I C-63・64・66土坑	73
第4図 土層柱状図(1)	8	第34図 I C-67・68・70土坑	75
第5図 土層柱状図(2)	9	第35図 I C-69・71・72土坑	77
第6図 周辺の遺跡	12	第36図 I C-73・74・75土坑	79
第7図 遺構配置図	17・18	第37図 I C-76・77・78土坑	81
第8図 I C-1 住居跡	20	第38図 I C-82・83・84土坑	84
第9図 I C-2 住居跡(1)	22	第39図 I C-86・87・89土坑	86
第10図 I C-2 住居跡(2)	23	第40図 I C-91・92・93・94土坑	88
第11図 I C-3 住居跡	27	第41図 I C-95・96・97土坑	90
第12図 I C-4 住居跡(1)	29	第42図 I C-98・99・100土坑	92
第13図 I C-4 住居跡(2)	30	第43図 I C-101・102・103土坑	94
第14図 I C-5 住居跡	33	第44図 I D-51・52・53土坑	96
第15図 I C-6 住居跡	34	第45図 I D-54・55・56土坑	98
第16図 I C-7 住居跡(1)	36	第46図 I D-57・58・59土坑	100
第17図 I C-7 住居跡(2)	37	第47図 I D-60・61・62土坑	102
第18図 I C-9 住居跡	39	第48図 I D-63・64・65・66土坑	104
第19図 I C-10・12住居跡	42	第49図 I D-68・70・72土坑	107
第20図 I D-2 住居跡	46	第50図 I D-74・75・76土坑	109
第21図 I D-3 住居跡	47	第51図 I D-77・78・79土坑	111
第22図 I D-5 住居跡	50	第52図 I D-80・81・82・83土坑	113
第23図 II E-1 住居跡	51	第53図 I D-85・I E-51・II E-51土坑	116
第24図 II E-2 住居跡	53		
第25図 I C-8 住居跡	56	第54図 II E-53・54・55・56土坑	118
第26図 I C-11・13住居跡	57	第55図 II E-57・58・59土坑	120
第27図 I D-1 住居跡	59	第56図 II E-60・61・62土坑	122
第28図 IV C-1 住居跡	61	第57図 II E-63・64・65土坑	124
第29図 IV D-1 住居跡	63	第58図 II E-66・67・68土坑	126
第30図 I C-52・53・54・55土坑	66	第59図 II E-69・70・71土坑	128

第60図	II E-72・73・IV E-51土坑……………130	第88図	I C-4住居跡出土遺物(3) ……163
第61図	IV C-51・V D-51土坑……………132	第89図	I C-4住居跡出土遺物(4) ……164
第62図	OB-51・I B-51・52土坑……………133	第90図	I C-5・6住居跡出土遺物……………165
第63図	I D-151・152陥し穴状遺構……………135	第91図	I C-7住居跡出土遺物(1) ……166
第64図	I C-1・2号配石遺構……………136	第92図	I C-7住居跡出土遺物(2) ……167
第65図	IV C-1号カマド状遺構……………137	第93図	I C-7住居跡出土遺物(3) ……168
第66図	IV C-201・202・203・204・205 ・206・207焼土遺構……………139	第94図	I C-9住居跡出土遺物(1) ……169
第67図	IV C-208・209・210・IV D-201 ・202焼土遺構……………141	第95図	I C-9住居跡出土遺物(2) ……170
第68図	IV D-203・V C-201・V D-201焼 土遺構……………143	第96図	I C-9住居跡出土遺物(3) ……171
第69図	OB区柱穴状土坑……………144	第97図	I C-9住居跡出土遺物(4) ……172
第70図	I C・I D区柱穴群……………145	第98図	I C-9住居跡出土遺物(5) ……173
第71図	II E区柱穴群……………146	第99図	I C-9住居跡出土遺物(6) ……174
第72図	IV C区柱穴群……………147	第100図	I C-9住居跡出土遺物(7) ……175
第73図	V D-101溝状遺構 ……148	第101図	I C-9住居跡出土遺物(8) ……176
第74図	I C-1住居跡出土遺物……………149	第102図	I C-9住居跡出土遺物(9) ……177
第75図	I C-2住居跡出土遺物(1) ……150	第103図	I C-9住居跡出土遺物(10) ……178
第76図	I C-2住居跡出土遺物(2) ……151	第104図	I C-10住居跡出土遺物(1) ……179
第77図	I C-2住居跡出土遺物(3) ……152	第105図	I C-10住居跡出土遺物(2) ……180
第78図	I C-2住居跡出土遺物(4) ……153	第106図	I C-10住居跡出土遺物(3) ……181
第79図	I C-2住居跡出土遺物(5) ……154	第107図	I C-10住居跡出土遺物(4) ……182
第80図	I C-2住居跡出土遺物(6) ……155	第108図	I C-10住居跡出土遺物(5) ……183
第81図	I C-2住居跡出土遺物(7) ……156	第109図	I C-10住居跡出土遺物(6) ……184
第82図	I C-2住居跡出土遺物(8) ……157	第110図	I D-2住居跡出土遺物(1) ……185
第83図	I C-2住居跡出土遺物(9) ……158	第111図	I D-2(2)・3住居跡出土遺物(1) ……………186
第84図	I C-3住居跡出土遺物(1) ……159	第112図	I D-3住居跡出土遺物(2) ……187
第85図	I C-3住居跡出土遺物(2) ……160	第113図	I D-3住居跡出土遺物(3) ……188
第86図	I C-3(3)・4住居跡出土遺物(1) ……………161	第114図	I D-3住居跡出土遺物(4) ……189
第87図	I C-4住居跡出土遺物(2) ……162	第115図	I D-3住居跡出土遺物(5) ……190
		第116図	I D-3住居跡出土遺物(6) ……191
		第117図	I D-3住居跡出土遺物(7) ……192
		第118図	I D-3住居跡出土遺物(8) ……193



第119図	I D - 3 住居跡出土遺物(9) ……194	坑出土遺物 ……213	
第120図	I D - 3 住居跡出土遺物(10) ……195	第139図	遺構外出土遺物：土器(1) ……223
第121図	I D - 5 住居跡出土遺物(1) ……196	第140図	遺構外出土遺物：土器(2) ……224
第122図	I D - 5 住居跡出土遺物(2) ……197	第141図	遺構外出土遺物：土器(3) ……225
第123図	II E - 1・2 住居跡出土遺物 ……198	第142図	遺構外出土遺物：土器(4) ……226
第124図	I C - 8・13・I D - 1 住居跡出土遺物(1) ……199	第143図	遺構外出土遺物：土器(5) ……227
第125図	I D - 1 住居跡出土遺物(2) ……200	第144図	遺構外出土遺物：土器(6) ……228
第126図	I D - 1 住居跡出土遺物(3) ……201	第145図	遺構外出土遺物：土器(7) ……229
第127図	IV C - 1・IV D - 1 住居跡出土遺物(1) ……202	第146図	遺構外出土遺物：土器(8) ……230
第128図	IV D - 1 住居跡出土遺物(2) ……203	第147図	遺構外出土遺物：土製品 ……231
第129図	I C - 55・56土坑出土遺物 ……204	第148図	遺構外出土遺物：石器(1) ……235
第130図	I C - 57・58・60・61・67・70・73(1)土坑出土遺物 ……205	第149図	遺構外出土遺物：石器(2) ……236
第131図	I C - 73(2)・74・76・78・84(1)土坑出土遺物 ……206	第150図	遺構外出土遺物：石器(3) ……237
第132図	I C - 84(2)・87・89・91・96(1)土坑出土遺物 ……207	第151図	遺構外出土遺物：石器(4) ……238
第133図	I C - 96(2)・98・99・101・I D - 52・53(1)土坑出土遺物 ……208	第152図	遺構外出土遺物：石器(5) ……239
第134図	I D - 53(2)・66(1)土坑出土遺物 ……209	第153図	遺構外出土遺物：石器(6) ……240
第135図	I D - 66(2)・68・70・74・81・83(1)土坑出土遺物 ……210	第154図	遺構外出土遺物：石器(7) ……241
第136図	I D - 83(2)・85・II E - 64土坑出土遺物 ……211	第155図	遺構外出土遺物：石器(8) ……242
第137図	II E - 68・69・72・IV C - 51・V D - 51・52土坑・I C - 2号配石(1)出土遺物 ……212	第156図	遺構外出土遺物：石器(9) ……243
第138図	I C - 2号配石(2)・IV C - 203焼土・O B - 33・II E - 31・34柱穴状土	第157図	遺構外出土遺物：石器(10) ……244
		第158図	遺構外出土遺物：石器(11) ……245
		第159図	遺構外出土遺物：石器(12) ……246
		第160図	遺構外出土遺物：石器(13) ……247
		第161図	遺構外出土遺物：石器(14) ……248
		第162図	遺構外出土遺物：石器(15) ……249
		第163図	遺構外出土遺物：石器(16)・石製品(1) ……250
		第164図	遺構外出土遺物：石製品(2)・古銭 ……251
		第165図	複式炉集成図 ……254
		第166図	縄文時代中期(後～末葉)住居跡の時期と占地 ……257

第167図	タイプ別土坑の占地	262
第168図	第II群3類土器(大木9式)集成図	269
第169図	第II群4類土器(大木10式)集成図(1)	271

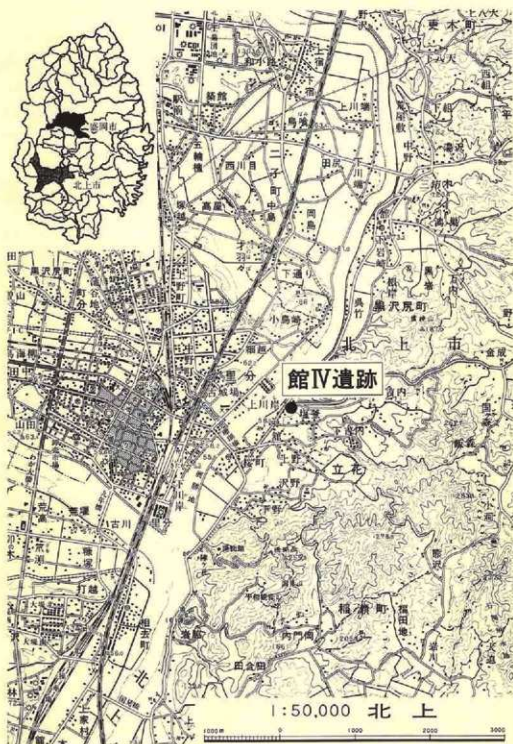
第170図	第II群4類土器(大木10式)集成図(2)	272
-------	-----------------------	-----

## 写真図版

写真図版1	遺跡遺景他	287	写真図版23	IVD-1住居跡(1)	309
写真図版2	IC-1住居跡	288	写真図版24	IVD-1住居跡(2)	310
写真図版3	IC-2住居跡	289	写真図版25	IC-52・53・54・58・55土坑	311
写真図版4	IC-3住居跡	290	写真図版26	IC-56・57・59土坑	312
写真図版5	IC-4住居跡	291	写真図版27	IC-60・61・62土坑	313
写真図版6	IC-5住居跡	292	写真図版28	IC-63・64・66土坑	314
写真図版7	IC-6住居跡	293	写真図版29	IC-67・68・69土坑	315
写真図版8	IC-7住居跡	294	写真図版30	IC-70・73・71・72土坑	316
写真図版9	IC-9住居跡	295	写真図版31	IC-74・75・77土坑	317
写真図版10	IC-10・12住居跡(1)	296	写真図版32	IC-76・84・78・82土坑	318
写真図版11	IC-10・12住居跡(2)	297	写真図版33	IC-83・86・87土坑	319
写真図版12	ID-2住居跡	298	写真図版34	IC-89・91・92・93・94土坑	320
写真図版13	ID-3住居跡	299	写真図版35	IC-96・97・98土坑	321
写真図版14	ID-5(1)・IIE-1住居跡 (1)	300	写真図版36	IC-99・100・101土坑	322
写真図版15	ID-5(2)・IIE-1住居跡 (2)	301	写真図版37	IC-102・103・ID-51・55 土坑	323
写真図版16	IIE-2住居跡	302	写真図版38	ID-52・53・54土坑	324
写真図版17	IC-8住居跡	303	写真図版39	ID-56・57・58・59土坑	325
写真図版18	IC-11住居跡	304	写真図版40	ID-60・62・63土坑	326
写真図版19	IC-13住居跡	305	写真図版41	ID-65・64・66・72土坑	327
写真図版20	ID-1住居跡	306	写真図版42	ID-74・75・76・78・81・82 土坑	328
写真図版21	IVC-1住居跡(1)	307			
写真図版22	IVC-1住居跡(2)	308			

写真図版43	I D-61・77・79・80土坑…329	写真図版66	I C-3住居跡出土遺物(1) 352
写真図版44	I D-83・85・I E-51土坑 ……………330	写真図版67	I C-3住居跡出土遺物(2) 353
写真図版45	II E-51・53・54土坑……………331	写真図版68	I C-4住居跡出土遺物(1) 354
写真図版46	II E-55・57・58土坑……………332	写真図版69	I C-4住居跡出土遺物(2) 355
写真図版47	II E-59・60・61土坑……………333	写真図版70	I C-4(3)・5・6住居跡出土 遺物(1)……………356
写真図版48	II E-62・63・64土坑……………334	写真図版71	I C-6(2)・7住居跡出土遺物 (1)……………357
写真図版49	II E-65・66・67土坑……………335	写真図版72	I C-7住居跡出土遺物(2) 358
写真図版50	II E-68・69・70・71土坑…336	写真図版73	I C-9住居跡出土遺物(1) 359
写真図版51	II E-56・73・IV C-51・V D -51土坑……………337	写真図版74	I C-9住居跡出土遺物(2) 360
写真図版52	O B-51・I B-51・52土坑 ……………338	写真図版75	I C-9住居跡出土遺物(3) 361
写真図版53	I C-1・2号配石遺構……………339	写真図版76	I C-9住居跡出土遺物(4) 362
写真図版54	I D-151・152陥し穴状遺構 V D-101溝状遺構……………340	写真図版77	I C-9住居跡出土遺物(5) 363
写真図版55	IV C-1号カマF状遺構・IV C -201・202焼土遺構……………341	写真図版78	I C-9住居跡出土遺物(6) 364
写真図版56	IV C-203・204・205・206・207 焼土遺構……………342	写真図版79	I C-9住居跡出土遺物(7) 365
写真図版57	IV C-208・209・210・IV D- 201焼土遺構……………343	写真図版80	I C-10住居跡出土遺物(1) 366
写真図版58	IV D-202・203・V C-201 ・V D-201焼土遺構……………344	写真図版81	I C-10住居跡出土遺物(2) 367
写真図版59	I C-1・2住居跡出土遺物(1) ……………345	写真図版82	I C-10住居跡出土遺物(3) 368
写真図版60	I C-2住居跡出土遺物(2) 346	写真図版83	I D-2住居跡出土遺物(1) 369
写真図版61	I C-2住居跡出土遺物(3) 347	写真図版84	I D-2(2)・3住居跡出土遺物 (1)……………370
写真図版62	I C-2住居跡出土遺物(4) 348	写真図版85	I D-3住居跡出土遺物(2) 371
写真図版63	I C-2住居跡出土遺物(5) 349	写真図版86	I D-3住居跡出土遺物(3) 372
写真図版64	I C-2住居跡出土遺物(6) 350	写真図版87	I D-3住居跡出土遺物(4) 373
写真図版65	I C-2住居跡出土遺物(7) 351	写真図版88	I D-3住居跡出土遺物(5) 374
		写真図版89	I D-3住居跡出土遺物(6) 375
		写真図版90	I D-3住居跡出土遺物(7) 376
		写真図版91	I D-5住居跡出土遺物(1) 377
		写真図版92	I D-5(2)・II E-1・2住居 跡出土遺物……………378

写真図版93	IC-8・13・ID-1住居跡 出土遺物(1)……………379	写真図版104	IC-2号配石(2)・IVC-203 焼土・OB-33・IE-31・34 柱穴出土遺物……………390
写真図版94	ID-1住居跡出土遺物(2) ……………380	写真図版105	遺構外出土遺物：土器(1)…391
写真図版95	IVC-1・IVD-1住居跡出土 遺物(1)……………381	写真図版106	遺構外出土遺物：土器(2)…392
写真図版96	IVD-1住居跡出土遺物(2) ……………382	写真図版107	遺構外出土遺物：土器(3)…393
写真図版97	IC-55・56・57・58土坑出土 遺物……………383	写真図版108	遺構外出土遺物：土器(4)…394
写真図版98	IC-60・61・67・70・73・74 76・78・84(1)土坑出土遺物 ……………384	写真図版109	遺構外出土遺物：土器(5)…395
写真図版99	IC-84(2)・87・89・91・96 土坑出土遺物……………385	写真図版110	遺構外出土遺物：土器(6)…396
写真図版100	IC-98・99・101・ID-52・ 53(1)土坑出土遺物……………386	写真図版111	遺構外出土遺物：土器(7)…397
写真図版101	ID-53(2)・66・68(1)土坑出 土遺物……………387	写真図版112	遺構外出土遺物：土製品…398
写真図版102	ID-68(2)・70・74・81・83・ 85土坑出土遺物……………388	写真図版113	遺構外出土遺物：石器(1)…399
写真図版103	IE-64・68・69・72・IVC- 51・VD-51・IB-51・52土 坑・IC-2号(1)配石出土遺 物……………389	写真図版114	遺構外出土遺物：石器(2)…400
		写真図版115	遺構外出土遺物：石器(3)…401
		写真図版116	遺構外出土遺物：石器(4)…402
		写真図版117	遺構外出土遺物：石器(5)…403
		写真図版118	遺構外出土遺物：石器(6)…404
		写真図版119	遺構外出土遺物：石器(7)…405
		写真図版120	遺構外出土遺物：石器(8)…406
		写真図版121	遺構外出土遺物：石器(9)…407
		写真図版122	遺構外出土遺物：石器(10) 408
		写真図版123	遺構外出土遺物：石器(11)・ 石製品・古銭……………409



第1図 遺跡位置図

## I. 調査に至る経過

一般国道107号は太平洋岸の大船渡市を起点に北上市・横手市などを經由し、日本海岸の本庄市に至る東北地方横断道路である。新珊瑚橋橋梁整備事業は、北上市街の東部を南流する北上川には珊瑚橋の老朽化が著しく、また狹隘であることから、国庫補助事業として新たに上流1キロの地点に架橋するものである。橋長355メートル、幅員10.5メートル、取り付け道路は右岸590メートル、左岸155メートルであり、平成元年度から工事に着手している。

この事業に関わる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、岩手県教育委員会と岩手県土木部との間で協議が行われた。協議と調査に至る経過は次のとおりである。

昭和61年9月26日付け 「北土952号」により岩手県教育委員会に対し、路線内における遺跡分布調査の依頼がなされた。

昭和62年10月 岩手県教育委員会による分布調査が実施された。

昭和62年8月24日付け 「教文411号」により北上土木事務所に対し、上川岸Ⅱ遺跡と館Ⅳ遺跡の存在および発掘調査の必要性が回答された。

その後、岩手県教育委員会の調整によって、上川岸Ⅱ遺跡については昭和63年と平成元年度の岩手県文化振興事業団の委託事業となり、埋蔵文化財センターによって同年に発掘調査が実施された。また、館Ⅳ遺跡についても同様に平成元年6月30日付けと平成2年7月1日付けおよび平成3年4月1日付けの委託契約によって、埋蔵文化財センターの委託事業として発掘調査が実施されることとなった。

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 位置

館IV遺跡は岩手県北上市黒沢尻町字立花第3地割38-1ほかに所在し、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の東北東約2kmに位置している。地形図上では、国土地理院発行の5万分の1地形図「北上」N J-54-14-13（一関13号）の図幅に含まれ、北緯39度17分10秒、東経141度8分41秒付近に位置している。

本遺跡が所在する北上市は、盛岡市の南方約64km、岩手県南部の西側にある。東北本線・東北新幹線・国道4号・東北縦貫自動車道が南北に縦断し、秋田県と岩手県を結ぶ国道107号が東西に横断している。北側に花巻市、西側に沢内村・湯田町、南側に胆沢町・金ヶ崎町・江刺市、東側に東和町が隣接している。

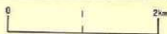
### 2. 地形

北上市は、西に岩手山(2041m)、焼石岳(1548m)などが連なる奥羽山脈、東に早池峰山(1914m)を最高峰とする北上山地が南北に走り、その間を岩手県北部の岩手町に源を発し、宮城県石巻湾に注ぐ北上川が南流している。

花巻市内で東より猿ヶ石川、西より瀬川・豊沢川等を合流した北上川は、途中北上市二子町付近で流路を東に変えながら更に南下を続け、黒沢尻町の南東で西方から東流してきた和賀川と合流する。一方、和賀川の支流夏油川は北に流れ、岩崎新神田付近で和賀川に注ぐ。これらの河川は両岸部に1~4km幅の河岸低地を形成し、北上川河岸低地により、本地域の地形を大きく東西に二分している。即ち、西部は扇状地性の台地群を、東部は小起伏山地を含む丘陵地形を形成している。

北上川西部は、分水嶺を奥羽山脈にもち、それより東流する河川によって形成された扇状地や段丘が広く発達しており、北上川中流域沿岸の段丘発達地域の中央部を占めている。ここには、西根段丘(高位段丘)、村崎野段丘(中位段丘)、金ヶ崎段丘(低位段丘)などがあり、金ヶ崎段丘は山麓部から東方へ広大な扇状地をなして広がる。この金ヶ崎段丘に埋め残された形で、かなりの面積を占める村崎野段丘の発達がみられる。西根段丘は六原付近で金ヶ崎段丘にとり囲まれて残片的に分布し西方の後背地縁部によく発達している。

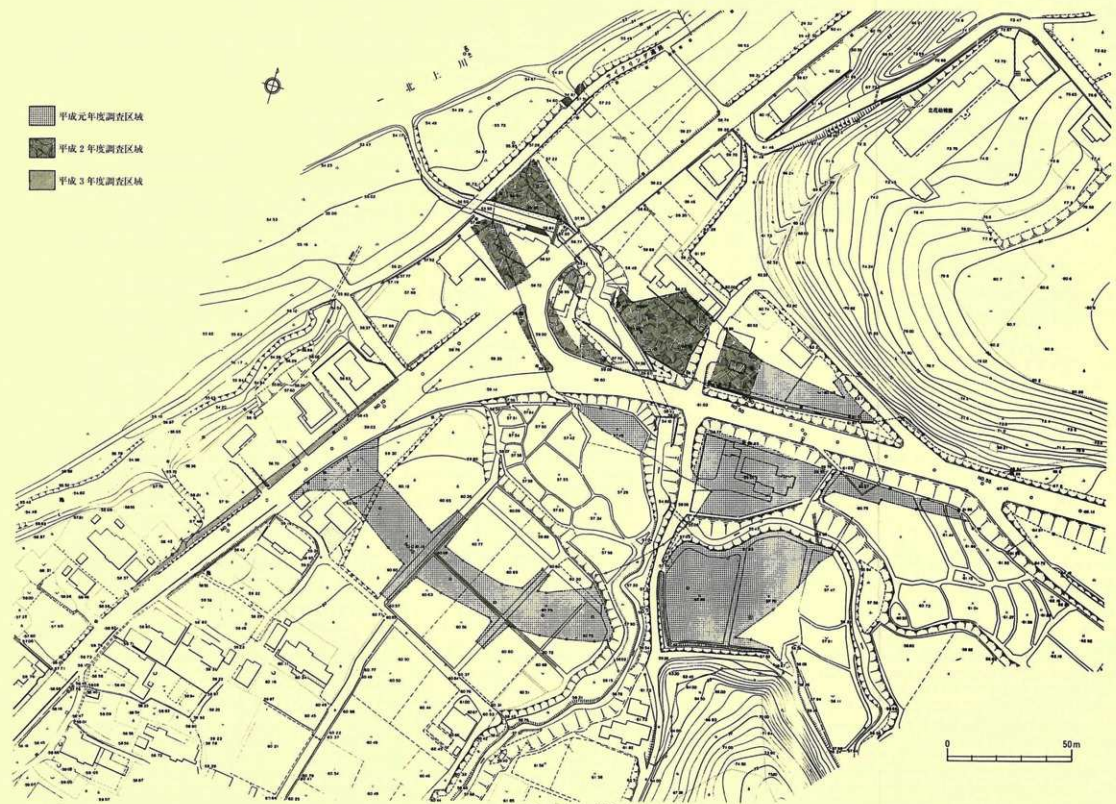
北上川東部は、北上山地縁辺部にあたり、起伏量100~200m以内の低い山地や丘陵地から成り、段丘の発達は西部に比べ著しく不良である。山地は、丘陵地の中に散在する小起伏山地だけであり、300m以上の山頂高度をもつ明神岳山地及び300m以下の珊瑚岳山地などがある。丘陵地は、北上川東部一帯に分布し、200m以上のところに主だった頂上部をもつ丘陵Iと200m



- |                                                                                           |                                                                                            |                                                                                          |                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
|  小起伏山地 |  山麓・緩斜面 |  丘陵地Ⅰ |  丘陵地Ⅱ  |
|  中位段丘  |  下位段丘   |  沖積台地 |  層状地   |
|  自然風防  |  河原     |  河岸低地 |  人工改変地 |

第2図 地形分類図





第3図 周辺の地形

以下の丘陵地Ⅱに分けられる。東北部に大きく広がる物見山丘陵を除きそのほとんどが丘陵地Ⅱに属している。

### 3. 遺跡及び周辺の地形

遺跡は北上川左岸の河岸低地に立地している。遺跡の北西約40mには北上川が北東から南西方向に流れており、下流約4.5kmで和賀川と合流している。

調査区内の地形は、東南東から北上川に流れる小沢を挟んだ北東側の緩斜面、南東～南西側のやや高い平坦面及び西南西方向に緩やかに傾斜する面、北上川に沿った低地面の三つに分けることができる。北東側緩斜面は、北東側約2kmにある雷神山(187m)に連なる丘陵地が迫っており、やや急に傾斜しながら続いている。南東～南西側のやや高い平坦面は、北上川東岸にわずかに発達した村崎野段丘に続き、更に東南東約4.4kmにある明神岳(358.8m)、南側約2.1kmにある珊瑚岳(259.5m)に連なる丘陵地・小起伏山地へと続いている。

調査区内の現況は、北東側緩斜面が畑地・宅地、南東～南西側平坦面が畑地・水田、北上川沿いの低地面が畑地・水田・宅地である。調査区内の標高は、57～61mであり、北上川との比高は、3～7mである。

### 4. 基本層序

遺跡の層序は、前述のような地形面によって異なっており、それぞれの対応関係も明確ではない。したがって、調査区西南西側の低地面(I B区)、南東～南西側のやや高い平坦面及び西南西方向に緩やかに傾斜する面(I C～II E区)、北北西側の北上川に沿った低地面(IV B区)、北東側緩斜面(IV C～V D区)の地区毎に概観し、遺構・遺物の集中したI C～II E区、IV C～V D区は幾分補説する。なお、本文・表等に記載してある遺物の出土層位や検出面などは、それぞれの地区の層序に対応している。

#### < I B区 >

I層 表土で宅地の盛土層である。礫を多量に含み、黄褐色土や暗褐色土が混入する。層厚15～70cm。

II層 暗褐色(10Y R3/3)シルト 旧表土で、遺物を少量含む。しまり・粘性ともにある。層厚0～20cm。

III層 色調や混合物によって2層に細分され、境界面に遺物を多く含む。

a 黒褐色(10Y R3/2)粘土質シルト 暗褐色シルトがブロックで少量混じる。粘性があり、堅くしまる。層厚15～30cm。

b 黒褐色(10Y R2/3)粘土質シルト 粘性があり、堅くしまる。層厚20～30cm。

IV層 黒褐色 (10Y R2/2) シルト 粘性・しまりともにややある。層厚15~30cm。

V層 暗褐色 (10Y R3/4) 砂質シルト 粘性・しまりともに弱い。

< I C ~ II E 区 >

I層 黒褐色 (10Y R3/2) シルト 表土で畑や水田の耕作土であり、遺物を少量含む。粘性はないが堅くしまっている。層厚20~25cm。

II層 黒褐色 (10Y R2/2~2/3) 粘土質シルト 傾斜面に見られ、遺物を含む。しまり・粘性ともにある。I B 区のIII層に対応すると思われる。

III層 褐色 (10Y R4/6) 粘土質シルト しまり・粘性ともにある。層厚25~30cm。

IV層 黄褐色 (10Y R5/6) 粘土質シルト しまり・粘性ともにある。層厚40~50cm。

V層 褐色 (7.5Y R4/4) 砂質シルト しまり・粘性ともに弱い。層厚20~30cm。

VI層 褐色 (7.5Y R4/6) 砂質シルト しまり・粘性ともに弱い。層厚10~15cm。

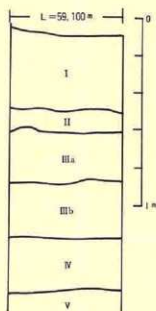
VII層 黄褐色 (10Y R5/6) シルト しまり・粘性ともにややある。

遺構はIII層から掘り込まれており、住居跡はIII層・IV層、土坑の多くはIV層・V層まで掘り込んでつくられている。出土遺物はI層(表土)及び傾斜面にみられるII層に包含される。調査区南西側(I D区)~南東側(II E区)は水田の区画整理等による削平・攪乱が著しく、III層まで削られている。

< IV B 区 >

I層 暗褐色 (10Y R3/3) 砂質シルト 表土。畑の耕作土で、しまりがなくやわらかい。層厚15~25cm。

II層 暗褐色 (10Y R3/3) 砂質シルト しまりはややあり、粘性はない。褐色の砂がブロック状に混じる。また、炭化物を微量含む。層厚25~40cm。



< I B 区 >



< I C ~ II E 区 >

第4図 土層柱状図(1)

III層 暗褐色 (10Y R3/4) 砂質シルト しまり・粘性ともにややある。

<IVC～VD区>

I層 暗褐色(10Y R3/3)シルト 表土。畑の耕作土で、粘性はないが堅くしまる。炭化物を微量含む。層厚10～20cm。

II層 黒褐色 (10Y R3/2) 粘土質シルト 粘性があり、堅くしまる。径4～6cmの小礫や遺物を含む。層厚15～30cm。

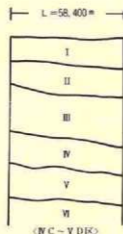
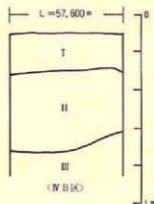
III層 暗褐色 (10Y R3/3～3/4) 粘土質シルト 粘性があり、堅くしまる。径7～15cmの礫や遺物を含む。層厚10～20cm。

IV層 黒褐色 (10Y R2/3) 粘土質シルト 粘性があり、堅くしまる。遺物を含む。層厚10～25cm。

V層 暗褐色 (10Y R3/3) シルト 粘性・しまりともにある。層厚15～40cm。

VI層 にぶい黄褐色 (10Y R4/3) 砂礫層である。

遺構はII層下位から検出され、V層上面が最終検出面で、住居跡はV層まで掘り込まれている。北東側丘陵地からの流れ込みや北上川の氾濫などによる再堆積を繰り返しており、遺物の層位的把握は難しい。



第5図 土層柱状図(2)

## 5. 周辺の遺跡

全国遺跡地図「岩手県」(1984、文化庁)によると、本遺跡のある北上市に登録されている旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世の遺跡数は340数カ所である。10数年前から東北新幹線建設、東北縦貫自動車道建設、東北横断自動車道秋田線建設、工業団地建設などに伴い、記録保存を目的とした緊急発掘調査が多く行われている。以下、竪穴住居跡が検出されている遺跡を中心に、周辺の遺跡について、時代、時期別に概観を述べる。遺構、遺物の時期決定については報告書に従っている。

### 旧石器時代

北上駅の南西約5.5kmの標高95mほどの金ヶ崎段丘にのる北上市下成沢遺跡から石器工房跡が検出されている。今から約2万年前の後期旧石器時代に属するものである。台石、ハンマー・

ストーンなどの石器製作の道具類、石核・剥片などの素材や碎片、磨製石器など総数321点が出土している。隣接する湯田町大台野遺跡からも後期旧石器時代の石器が多く出土している。

### 縄文時代

#### 早期

遺構が検出されている遺跡は、北上市内では少ない。北上駅の西方約11.2kmに位置する和賀川右岸の河岸段丘に立地している石曾根遺跡から早期末葉の土坑1基、陥し穴状遺構数基が検出されている。北上市阿弥陀堂遺跡から貝殻文系土器が出土している。

#### 前期

北上駅の北北東約6.2kmに位置し、北上川西岸の河岸段丘にのる物見崎遺跡から住居跡14棟(前葉9棟、後葉1棟、他5棟)検出されている。和賀川右岸の河岸段丘に立地する煤孫遺跡からは大木6式の住居跡が6棟検出されている。

#### 中期

北上駅の南西約2.7kmに位置する和賀川右岸の河岸段丘に立地している滝ノ沢遺跡から大木7a式に比定される土器が出土している。また、堅川目駅の南～南東約2.5kmの和賀川右岸の河岸段丘に立地する本郷遺跡、石曾根遺跡からは中期中葉の住居跡(本郷18棟、石曾根16棟)が検出されている。北上駅の南東5kmに位置し、北上川左岸の標高80～100mの河岸段丘にのる樺山遺跡から大木8式の住居跡が1棟検出されている。大木9式に比定される遺跡は、横穴遺跡、大木9～10式期にまたがるものでは本遺跡や大迫町観音堂遺跡などがある。観音堂遺跡からは29棟検出されており、多角形のプランをもち、複式炉を伴う径7～8mの住居跡も検出されている。大木10式期に比定される遺跡に樺山遺跡、八天遺跡がある。その他、北上駅の西南西4.2kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘に立地する柳上遺跡からは中期末～後期初頭の住居跡100棟以上が多くの土坑とともに検出されている。

#### 後期

北上駅の北東8kmに位置し、北上川東岸の舌状台地に立地する八天遺跡から、後期初頭～中葉を中心とした遺構・遺物が検出されている。中でも10回の建て替えがある住居跡や貯蔵穴から土製の鼻・耳・口が出土している。その他、大迫町立石遺跡から11個の配石遺構群が検出されるとともに、多量の土偶・鐙形土製品や石鏃が出土している。

#### 晩期

北上駅の西1km、和賀川左岸の標高59mの自然堤防上にある九年橋遺跡から大洞C～A式の遺物が多量に出土し、9基の石囲炉も検出されている。北上駅から北東1.5kmの北上川西岸の河岸低地に立地する牡丹畑遺跡からも晩期中葉を中心とした遺物が多く出土している。

### 弥生時代

江釣子駅の南南西2.3kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘にのる上鬼柳Ⅰ遺跡からは初頭の住居跡が7棟、近隣の鬼柳Ⅱ遺跡からは1棟検出されている。北上駅の北北東6.2kmに位置し、北上川西岸の河岸段丘にのる物見崎遺跡から初頭の住居跡が2棟検出されている。

### 古墳時代

和賀川左岸の自然堤防や一段高い金ヶ崎段丘に立地している江釣子猫谷地遺跡から8基検出されている。胆沢町には主軸の長さ43～44.4mの前方後円墳である角塚古墳がある。5世紀末～6世紀に位置づけられている古墳である。

### 奈良～平安時代初頭

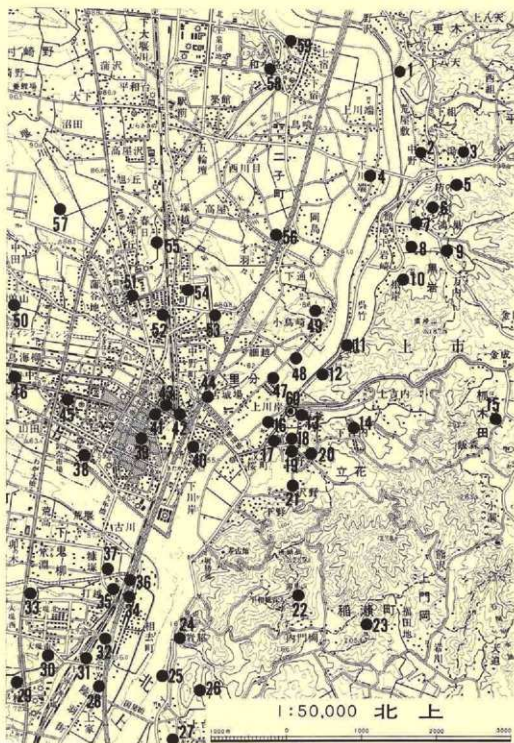
北上川西岸の河岸低地に立地する尻引遺跡から住居跡3棟、牡丹畑遺跡からも3棟、村崎野段丘にのる藤沢遺跡から4棟検出されている。また、江釣子には末期古墳と称する古墳群が多く分布している。

### 平安時代

北上駅の北北東8kmにある堀ノ内遺跡、北北東4.5kmにある野田Ⅱ遺跡から住居跡が各1棟、南西2kmにある西野遺跡から3棟、南西1.6kmにある鬼柳西裏遺跡から16棟検出されている。いずれも自然堤防上に立地している。北上駅の北西4.8kmにある藤沢遺跡から3棟、南西5kmにある成沢遺跡から6棟、南西5kmにある上谷地遺跡から6棟検出されている。3遺跡は村崎野段丘に立地している。河岸低地にある遺跡では牡丹畑遺跡から2棟、尻引遺跡から3棟、上川岸Ⅱ遺跡から25棟検出されている。また、平成元年度から開始された東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査により、和賀川右岸の河岸段丘上から多くの遺構・遺物が検出されている。住居跡が検出されている遺跡は、西から、八幡野Ⅱ遺跡、八幡館遺跡、石曾根遺跡、本郷遺跡、煤孫遺跡、梅ノ木台地Ⅰ遺跡、岩崎台地遺跡群、上鬼柳Ⅱ～Ⅳ遺跡、柳上遺跡などがある。この中で岩崎台地遺跡群は全体で120数棟の住居跡の他、当該期のものと思われる堀立柱建物跡、方形周溝が多数検出されている。その他、平安時代後期の遺跡として多くの堂塔跡が発見されている国見山の裾に立地する極楽寺跡がある。

### 鎌倉～江戸時代

北上駅の南西1.6kmにある自然堤防上に立地する鬼柳西裏遺跡から中世の溝、中～近世の堀が各1条、また、南南西2kmにある村崎野段丘に立地している南館遺跡から中世の墳墓6基が検出されている。その他、南西3～4kmにある標高66～78mの台地に立地する丸子館跡や鹿島館跡から中世の堀や堀立柱建物跡が多く検出されている。



第6図 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
1	八 天	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器、石器	31	小 糠 沢	散布地	縄文土器(中期)、須恵器
2	三 坊 木	散布地	縄文土器	32	松 の 木	散布地	土師器
3	湯 沢 館	散布地	縄文土器(中期)	33	滝の沢地区	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器、石器、須恵器、土師器
4	尻引遺跡群	集落跡	縄文土器(晩期)、弥生	34	西 野	散布地	土師器
5	神 行 田	散布地	縄文土器(中期)	35	南 館	墳墓	縄文土器(晩期)、墳墓(江戸)
6	鴻 巣	散布地	縄文土器	36	鬼柳西裏	土師器	
7	白山鹿寺	寺院跡	布目瓦	37	観 音 館	館跡	
8	元 館	散布地	縄文土器(中期)	38	九 年 橋	散布地	竪穴住居跡、縄文土器、石器
9	四十九里	散布地	縄文土器	39	清水小路東	散布地	須恵器
10	根 岸	散布地	縄文土器、磨製石斧、石匙、石鏃	40	黒沢尻橋跡	館跡	竪穴住居跡、須恵器
11	岩 浜	散布地	土師器、縄文土器	41	諏訪神社	散布地	土師器
12	横 町	散布地	縄文土器	42	浮島古墳	古墳	
13	館 III	散布地	縄文土器(中期)	43	和 野	集落跡	縄文土器(中期)
14	高 館	散布地	縄文土器、館	44	方八丁館	館跡	
15	飯 森	散布地	土師器	45	火薬庫西	集落跡	縄文土器
16	立 花	散布地	土師器	46	鳥 海 柳	集落跡	土器、土師器、須恵器
17	館 I	散布地	縄文土器(中期)	47	上川岸II	集落跡	竪穴住居跡(平土・縄文)、土師器、須恵器
18	館 II	散布地	縄文土器(中期)	48	牡 丹 畑	散布地	縄文土器(晩期)、石器
19	立花小学校下	散布地	縄文土器、打製石斧	49	鶴 渡 館	散布地	
20	館 V	散布地	縄文土器、打製石器	50	荻 島	集落跡	土器、墨書土師器、田舟
21	沢 野	散布地	縄文土器、石器	51	常 盤 台	集落跡	須恵器、土師器
22	国見山麓寺	寺院跡	寺院址、土師器、須恵器	52	馬表坂北高グラウンド	集落跡	土師器、須恵器、鎌、砥石
23	八王子森	散布地	弥生土器	53	梨 子 山	散布地	縄文土器(中期)
24	岩 脇	散布地	縄文土器、石器	54	諏訪上町住宅	集落跡	土師器
25	斉 羽 場	散布地	灰切沢、縄文土器(早期)、旧石器、石鏃	55	下 春 木 場	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器
26	上 台	集落跡	竪穴住居跡、土師器	56	野 田 I	散布地	縄文土器(晩期)、弥生土器、須恵器
27	相 田	散布地	配石、縄文土器、石器	57	藤 沢 I	散布地	縄文土器、土師器、須恵器
28	八 木 畑	散布地	土師器、須恵器	58	秋 子 沢	集落跡	竪穴住居跡、須恵器、土師器
29	平 林	集落跡	土器、土師器、須恵器	59	二 子 城	館跡	
30	高前塚I	集落跡	土器、土師器、須恵器	60	館 IV	※ 本 遺 跡	

表 1 周辺の遺跡一覧表



### III. 調査方法と室内整理

#### 1. 野外調査

##### (1) 調査区の設定と遺構名

調査範囲は南西から東北東に走る国道107号を挟んで、南側の平坦面や緩斜面、北側の山地部分に続く緩斜面や北西側の北上川に隣接する面と不連続・不整形につながり、調査期間も3年に及ぶ。調査区割はそれらの範囲をカバーできるような次に行い、2年次以降は、初年度に設定した地区割に沿って調査を行った。

測量座標は調査区南西側道路建設部分にはほぼ平行する地点に基準点A・Bの任意の2点を40m幅で設定し、基準点Aと基準点Bを結ぶ線をグリットの東西方向とし、基準点Bを座標の原点とした。原点より北へ1m、2mはN1、N2、南へはS1、S2、同様に東西にはE1、E2、W1、W2と表した。調査区は、原点を中心に40m×40mの大区画を設定し、南から北へI～V、西から東へA～Dを与え、その組み合わせでIIA、III Cと呼ぶことにした。それぞれの大区画は更に100分割して4m×4mの小区画を設定し、南から北へ0～9、西から東へa～jを与え、大区画と組み合わせでIIA-6c、III B-2aのように呼称した。粗掘りの際に出土した遺物や遺構外の遺物は小区画毎に記名し取り上げた。

検出された遺構は、大区画毎に分け、竪穴住居跡には1～、柱穴状土坑には31～、土坑には51～、溝状遺構には101～、陥穴状遺構には151～、焼土遺構には201～の番号を概ね検出順に付し、大区画名と組み合わせでIC-1住居跡、II B-51土坑のように呼称した。また、遺構数の少ない配石遺構やカマド状遺構は、大区画名に1号～を組み合わせIC-1号配石遺構のように呼ぶことにした。

基準点A・Bの平面直角座標X系による成果値、及び杭高(L)は、以下の通りである。なおグリット上の南北軸は真北に対して35度11分東偏する。

(グリット上の点)

基準点A (NS0, W40) X = -79,284.543m Y = 26,797.994m L = 60.149m

基準点B (NS0, EW0) X = -79,307.608m Y = 26,830.663m L = 60.91 m

##### (2) 粗掘り・遺構検出・精査

当初、2m～4mのトレンチをグリットに沿って入れ、遺跡全体の把握につとめた。畑地・水田については手掘りをして、宅地跡や遺物の出土量の少ない所は必要に応じて重機を使用した。

調査区北西側北上川寄りの部分、及び東側水田部分は、遺構・遺物とも皆無であったことから、トレンチ掘りのみで調査を終了させた。

遺構は、調査区西南西から南東へと緩やかにカーブする道路建設部分と、調査区北東側山地

部分に緩やかに傾斜する箇所に集中した。検出面は、前者がII層～III層上面、後者はII層下位～V層上面である。表土を取り除いた後、徐々に掘り下げて遺構の検出を行った。

遺構の精査は住居跡は4分法、土坑・焼土遺構・柱穴状土坑は2分法を原則とし、陥し穴状遺構は長軸中央に、溝跡は適宜ベルトを残して掘り進めた。出土遺物は遺構名・地区名・層位などを記入し取り上げた。遺構内出土の遺物は埋土中のものはQ<sub>1</sub>～Q<sub>4</sub>の4分割・2分割にし、層位をつけ、IC-1(住)Q<sub>1</sub>埋土下部のように記入し取り上げた。床面出土の遺物は写真撮影後、図面のにせて通し番号を付し、IVC-2(住)床面No2のように記入し取り上げた。

### (3) 実測・写真

平面実測はグリッド軸に合わせた1mメッシュを基本とする簡易遺り方測量法で行った。実測の縮尺は20分の1を原則とした。

写真撮影は2名の調査員が担当し、検出状況、埋土土層断面、完掘全景、カマド・炉の断ち割り、遺物出土状況など、できるだけ多くの状況を記録するようにした。写真撮影には6×7cm判カメラ(白黒用)1台、35mm判カメラ(白黒、カラースライド用)2台を使用した。

## 2. 室内整理

### (1) 遺構

実測してきた図面の座標、セクションポイントの位置、基準高などを点検しながら必要に応じて第2原図を作成し、トレースを行った。また、土坑の中で、風倒木や住居跡の柱穴と判明したものは名称変更は行わず欠番として記載している。

本報告の図版の縮尺は、竪穴住居跡が60分の1、土坑類・焼土遺構などが40分の1、柱穴群が80分の1である。なお、個々の図版にはスケールを付してある。

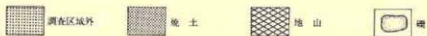
### (2) 遺物

遺物は水洗・注記後、遺構内外に分け、接合・復元を行った。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、実測、土器拓本作成、トレースの順に行い、報告書に掲載した。

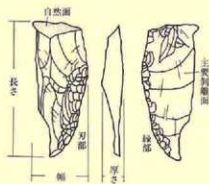
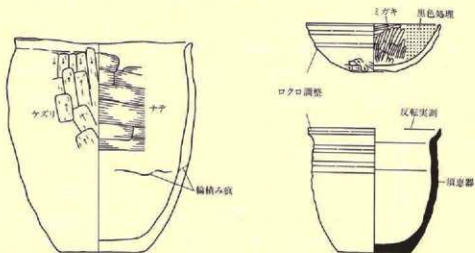
本報告の遺物図版は、土器が3分の1を基本とし、大きいものは4分の1、6分の1で掲載している。石器・石製品・土製品などは大小に応じて、3分の2、2分の1、3分の1に分けて縮小している。また、遺物図版の下には遺物観察表を表示している。なお、遺物図版も個々にスケールを付している。

### (3) 写真図版

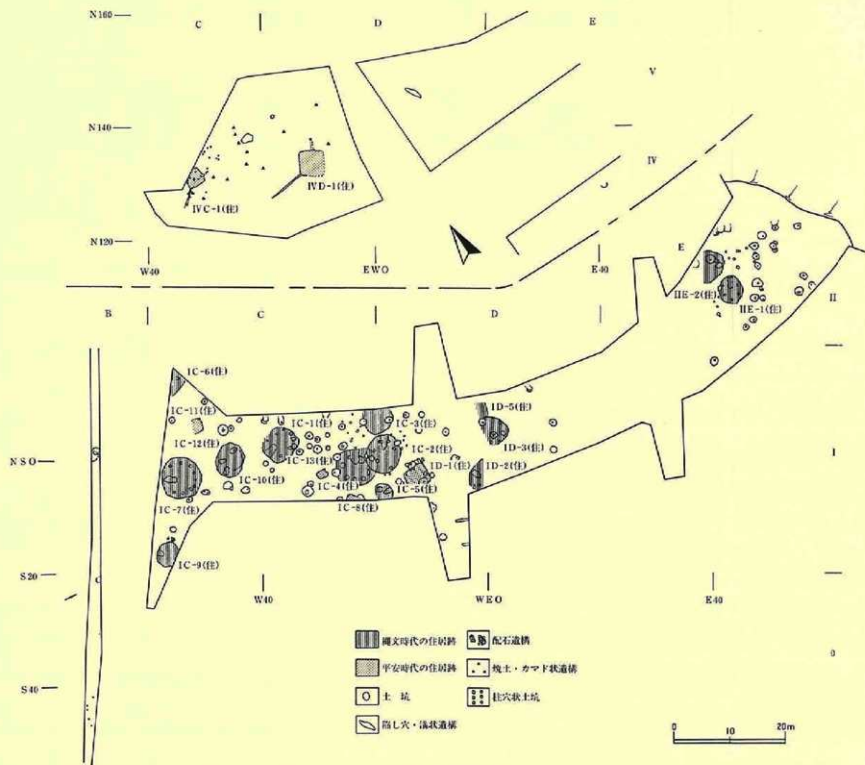
写真図版の縮尺は、遺構・遺物とも不定である。また、遺物の写真番号は遺物図版番号と同一番号である。



P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub> 柱状土坑・小土坑



スクリーン・略号、土器・石器実測図の表し方



第7図 遺構配置図

## IV. 検出された遺構と遺物

平成元年度～3年度の発掘調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡15棟、平安時代の竪穴住居跡6棟、土坑104基、陥し穴状遺構2基、配石遺構2基、溝状遺構1条、カマド状遺構1基、焼土遺構15基、柱穴群である。

出土遺物は、縄文時代（早期～晩期）の土器、土製品、石器、石製品、弥生土器、後北式土器、平安時代の土師器、須恵器、土製品、石製品などである。縄文土器は住居跡に伴って出土した中期後葉～末葉のものが主体である。また、平安時代の遺物も住居跡に伴うものが大半である。

### 1. 縄文時代の竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡は、調査区南東～南西側のやや高い平坦面や西南西側低地面向かって緩やかに傾斜する面から、多くの土坑とともに15棟検出されている。検出された炉は全て複式炉で、縄文時代中期後葉～末葉に属すると思われる。なお、炉等が検出されなくても検出時に住居跡と判断したものは全て竪穴住居跡として記載している。

#### IC-1住居跡

遺構（第8図、写真図版2）

本遺構は調査区西南西側に位置し、西約4mにIC-10住居跡、南東約8mにIC-4住居跡がある。東側でIC-60・68土坑、北東側でIC-103土坑と重複する。切り合い状況から本住居跡の方がIC-60・103土坑より古い、IC-68土坑との新旧関係は不明である。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は、検出された周溝から東西方向に長い隅丸長方形を呈している。規模は、炉の長軸方向で6m、短軸方向で5.4mを測る。

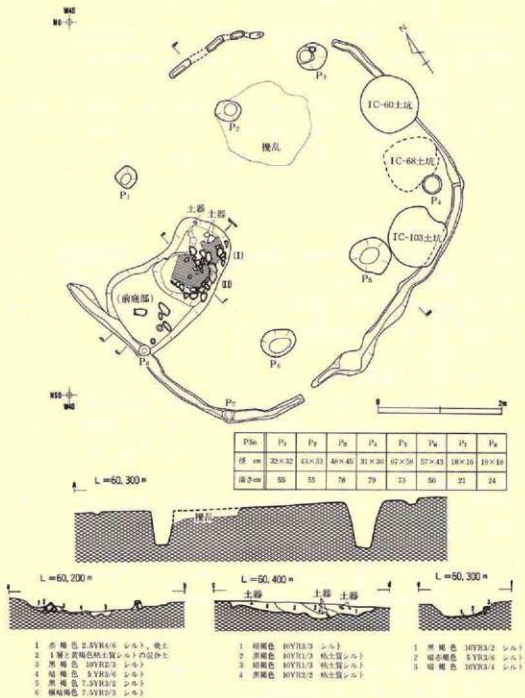
埋土は、検出面がほぼ床面だったため確認できなかった。

床面は、ほぼ平坦で堅くしまっているが、北西方向に緩やかに傾斜しており、北西側は南東～北西方向に緩やかに傾斜する立地条件から消失した可能性が高い。

周溝は、北東～北西側が床面同様消失した可能性が高い。現存する周溝の深さは床面から約4～12cmである。

柱穴状土坑は8個検出され、炉の長軸方向を中心に南北に対称をなすP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>が主柱穴と考えられる。前庭部と周溝の境にあるP<sub>3</sub>、周溝南西隅にあるP<sub>7</sub>は入口状の施設を支える柱であった可能性がある。

炉は、東西方向に長軸をもつ複式炉で、石組炉I・II+掘り込み部（前庭部）から構成され



第8図 IC-1住居跡

ている。炉Ⅰ・炉Ⅱはいずれも北半側の石が抜けており、炉Ⅰが50×70cmの不整な楕円形状を呈し、炉Ⅱが90×90cmの円形状を呈している。床面からの深さは、炉Ⅰが16cm、炉Ⅱが24cmである。これらは同時につくられたのではなく、炉Ⅰの半分程度を壊して炉Ⅱをつくり足したような形態となっている。炉内の焼土は全体にわたっておらず、炉Ⅰ・Ⅱとも部分的に堆積している。炉Ⅱのほうが比較的良く焼成されており、燃焼部に近い組石は強い加熱を受けてヒビ割れている。前庭部は、幅1.2m、長さ0.9mで、西端部で周溝につながる。深さは炉Ⅱに近いところで20cm、周溝部に近いところいで6cmになっており、周溝部分に向かって緩やかに上昇している。

#### 出土遺物（第74図、写真図版59）

炉内、床面及び柱穴埋土から土器及び石器が出土している。土器は全て破片である。

土器 沈線や隆帯による楕円状・逆U字状の文様をもつものが多く、1・5は太い沈線、2・4・7・10は隆帯による施文で、6は隆帯による狭い無文帯が垂下する胴部片である。3は波状を呈する口縁部片で、隆帯による施文区画内に縦長の刺突を充填している。8は緩やかな波状口縁に沿って沈線を巡らし、その中に半截竹管による連続刺突文が施されている。9は隆帯による渦巻文が施されている。11は平行する2つの隆帯間に半截竹管による連続刺突文が2条巡っている。12は器面内外に丹塗り痕が認められる胴部～頸部片で、隆帯文様と橋状把手で構成される。頸部に平行する2列の隆帯を巡らし、それを結ぶように把手がつけられている。把手は上・中・下の3面に円孔をもつものともたないものが交互につけられ、それぞれ2対の8個が配置されていたと思われる。口縁部は無文で、胴部は垂下する隆帯による施文である。

石器 無茎の石鏃が2点出土しており、13が平基、14は浅い挟りが入っている。

時期 出土土器の大半が大木9式の特徴を示しており、縄文時代中期後葉に属する。

### IC-2住居跡

#### 遺構（第9・10図、写真図版3）

本遺構は調査区南西側中央部に位置し、北約1mにIC-3住居跡、南西約2mにIC-5住居跡、南東約2mにID-1住居跡がある。東側でID-58土坑、西側でIC-4住居跡と重複する。切り合い状況から本住居跡のほうがID-58土坑より古いが、IC-4住居跡との新旧関係は不明である。検出面は基本層序第Ⅲ層上面である。

Ⅲ層を15～20cm掘り下げた面（床面）において、一部途切れる箇所があるものの壁に沿う形でほぼ全周を巡る周溝（周溝A）と、東～（南）～西側にかけて周溝Aの内側を一部途切れながら巡る周溝（周溝B）の2つが確認された。したがって本遺構は、周溝を伴わない外側のプラン、周溝Aに伴うプラン、北半部が周溝Aと重複し南半部で周溝Bに連続する内側のプランが







PNo	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>
径 cm	54×46	63×56	66×42	63×52	48×34	66×48	39×27	50×34	66×56	54×50
深さ cm	65	66	33	15	45	62	73	49	29	13

PNo	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>	P <sub>20</sub>
径 cm	-	58×56	-	73×52	68×54	40×35	104×82	88×48	50×42	50×88
深さ cm	16	43	5	14	74	17	35	15	66	54

PNo	P <sub>21</sub>	P <sub>22</sub>	P <sub>23</sub>
径 cm	-	47×46	66×49
深さ cm	30	65	38

第10図 I C-2住居跡(2)

考えられる。周溝重複部分の埋土断面から周溝Bが新しく、一回以上の建て替え（縮小）が行われている。

平面形は、周溝Aに伴うプランが七角形、周溝Bにともなうプランが六角形状を呈している。規模は、周溝Aが、炉の長軸方向で6.8m、短軸方向で6.2mを測り、周溝Bに伴うプランがそれぞれ5.6mを測る。また、周溝Aに伴うプランの床面中央から埋壘が検出されている。

埋土は、層厚20～30cmで、周溝Bから内側は上位から床面にかけて炭化物・暗褐色シルトブロックが混じる黒褐色粘土質シルトが主体で遺物も多く包含され、周溝Bから壁際にかけては暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトや褐色粘土質シルトが堆積している。

壁はやや急に立ち上がり、床面からの壁高は約9～25cmである。

床面はIII層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅くしまっている。

周溝の深さは、周溝Aが10～19cm、周溝Bが4～24cmで西側ほど低くなっている。

柱穴状土坑は23個検出されている。柱穴の重複するP<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>～P<sub>9</sub>、P<sub>15</sub>～P<sub>21</sub>、P<sub>22</sub>～P<sub>23</sub>の新旧関係をみると、それぞれP<sub>2</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>19</sub>、P<sub>23</sub>が一番新しく、P<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>～P<sub>7</sub>～P<sub>15</sub>～P<sub>19</sub>～P<sub>22</sub>の6本柱かP<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>～P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>～P<sub>10</sub>～P<sub>15</sub>～P<sub>19</sub>～P<sub>22</sub>の8本柱が周溝Bのプランに伴う主

柱穴を構成すると考えられる。周溝を伴わない外側のプラン及び周溝Aに伴うプランに相当する柱穴列として、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>16</sub>-P<sub>20</sub>の4本柱、P<sub>5</sub>-P<sub>10</sub>-P<sub>13</sub>-P<sub>18</sub>の3本柱などが考えられるが、上述した6本柱や7本柱との併用も考えられ断定はできない。

炉は、長軸を南西から北東方向にもつ複式炉で、石組炉Ⅰ・Ⅱ+前庭部から構成されている。石組炉Ⅰは径54×52cmの円形状を呈し、炉Ⅱは長さ約30cm最大幅約90cmの台形状を呈している。床面からの深さは、炉Ⅰが10cm、炉Ⅱが26cmである。炉Ⅰと炉Ⅱの間には16cmの段差があり、炉Ⅱから炉Ⅰにかけて幅80~60cm、長さ40cmの台形状に河原石などが3~4段にわたって敷き積み上げられている。炉Ⅱと前庭部の間は、長さ8~9cmの細長い直角鏝を一列に並べて仕切られている。炉内の焼土は、炉Ⅰが最も厚く堆積しており、炉Ⅱは薄く堆積しているだけである。また、炉Ⅰと炉Ⅱの間に積み上げられた鏝も強い加熱を受けていたと思われ、極暗赤褐色に変色している。前庭部は、長さ約1.1m、幅約1.1mで、北東側周溝にむかって開いており、中央部分がやや凹んでいる。

#### 出土遺物 (第75~83図、写真図版59~65)

炉内、埋土及び柱穴状土坑埋土から土器、石器が出土しており、床面出土は少ない。

土器 本住居跡から出土した土器は、沈線や隆帯による楕円文、渦巻文、「∩」状文が組み合せて口縁部から胴下部まで縦方向に文様が流れる大木9式土器が主体である。器形は口縁部が内湾するキャリバー状のもの、口縁部が外傾し頸部でくびれるものなどがある。

15~22はキャリバー形の深鉢形土器である。15・16は頸部~口縁部文様帯と胴部文様帯が別れた様な文様構成で、頸部から口縁部にかけてはU字形を連結させたような大形の波状沈線が横方向に展開し、その間に沈線縦楕円文が施され、胴部には沈線による縦位楕円文や「∩」状の曲線が描かれる。16は胴部の縦位楕円文や「∩」状文の間に渦巻沈線文が垂下する。17は波状口縁で、楕円形・「∩」状の沈線で区画される。18・20は縦位「∩」状の沈線区画内に更に楕円文・「∩」状文が沈線区画されている。19は口縁部付近に沈線により区画された縄文充填帯が施文され、胴下半部は沈線による縦位楕円文である。21は波状口縁で、口縁部付近が断面が三角形の隆帯や沈線によるU字文・渦巻文が口縁に沿って交互に横方向に展開し、それぞれ2対の計4対で構成される。粘土貼付による渦巻文は3個1体で文様が描かれ先端部には縄文が充填される。渦巻3個が重なる箇所は器面から6cm程浮き上がり立体的になっている。また、この渦巻文は左側U字文連結し、U字文の右側の内側はS字状につまみ上げられた形状を呈している。胴下半部は沈線による「∩」状文が施文される。22も波状口縁で、口縁部から縦方向に流れる沈線による「∩」状文の間に沈線区画された横「∩」状やH字状の縄文帯が施文される。23は「∩」状の沈線区画文。24は波状口縁を呈し、頸部が幾分くびれ口縁がやや外反する。文様は沈線による楕円文・「∩」状文と縦方向に流れる沈線区画された「∩」状の縄文帯の組み合わせである。25

は緩やかな波状を呈する口縁部片で外反している。胴下半部は断面が三角形の隆帯による逆U字状の区画がなされていたと思われ、隆帯上部（頸部）が口縁部の無文帯と下部文様帯を区画するような形となっている。26・27は沈線による「∩」状区画文が縦方向に流れ、26の区画内の縄文は26が太さの異なる1段の縄を2本捻合わせたRL単節斜縄文である。28・29は胴部から口縁部がすばまるような器形の土器で、28は頸部付近に3本の平行沈線が巡り、その下に「∩」状か縦楕円形の沈線区画が認められ、沈線区画内に刺突文が施されている。29は隆帯を「∩」状に貼付け、その上部を盛り上げ上下に貫通させることにより把手状にしている。30は頸部がややすばまり口縁部が外反する小形の深鉢形土器で、文様は沈線による縦楕円文・「∩」状文である。31は外反する波状口縁で、口縁に沿って隆帯や沈線による渦巻文や「∩」状の曲線文が描かれる。32・33は沈線による縦楕円文・「∩」状文で、32は縦方向に流れる2つの楕円文を更に「∩」状沈線文が覆っている。34は口縁部付近に沈線が巡り、頸部に軽い段をもっている。頸部～口縁部は無文で、胴下半部は沈線による「∩」状文である。35は頸部付近に刻目文を巡らし、胴下半部は沈線による「∩」状文である。36は沈線による楕円文、37は楕円文と「∩」状文の組み合わせである。38・39は「∩」状文の下部と思われる沈線が垂下している。40は沈線区画された曲線文内に充填縄文が施されている。41・42・44は粗製土器で、42・44は口縁部が幅の狭い無文帯となっている。43は小形の鉢である。45は高台部と考えられるもので、器面中央付近に径1.5cm程の円孔が3ヶ所みられる。46～49はキャリバー形あるいはキャリバー状の器形を呈し、50～56は外反する口縁部片である。文様は沈線による楕円文・「∩」状文が主体で、46～48は沈線区画内に刺突文が施されている。50（3条）・53・54には口縁部付近に平行沈線が巡り、54は平行沈線下に渦巻沈線文が施されている。55・56は波状口縁の頂部に沿って「∩」状の沈線区画内に縄文が充填されている。57は隆帯による「∩」状文、58は沈線による楕円文、59は隆帯渦巻文である。60・61は隆帯による曲線文、62は隆帯による楕円文である。63～65は隆帯沈線による直・曲線文が施文されている。66・67は粗製土器で、66は口縁部が外反し、67は口縁部がすばまる器形である。いずれも地文（LR単節縄文）の口縁部付近を磨消した無文帯をもち、67は沈線で区画している。

石器 剥片石器21点、礫石器8点出土しており、熔岩塊2点を除く27点掲載している。68～80は石鏃である。全て無茎で、68～73は袈りが入る。71は身が細く鋭利である。72は基部が欠損しているが71と似た形状と思われる。74～80は基部が平らか丸味を帯びるものである。81は重さが5g以上あり、尖頭器様である。82・83は石鏃で、82は長い鏃部をもち、頭部まで丁寧な剝離調整がなされている。83は剥片の先端部を鏃部としたもので、頭部と鏃部の区別が不明瞭で、鏃部に比べ頭部の調整が簡単である。84～88は撻器・削器の類である。84～86は剥片の周辺部に剝離調整が行われている。87・88は所謂サイド・スクレイパーと呼ばれるもので、87は鋭

利な1縁辺に丁寧な剝離調整による刃部を作り、88は繋がる2縁辺に両面から丁寧な剝離調整を行い、刃部を作っている。89は磨製石斧で、頭部と刃部が欠損している。90は石皿で大部分は欠損しているが、裏面に脚と思われる凸がみられる。91・92は台石で、いずれも欠損している。93・94は焙岩塊(両輝石安山岩)で、凹や溝状の凹をもち、94は裏面に脚の様な凸がある。これらは砥石の様な機能を持っていたと思われる。

時期 炉内及び埋土下部出土土器の大半は大木9式であり、縄文時代中期後葉に属する。

### IC-3住居跡

#### 遺構(第11図、写真図版4)

本遺構は調査区南西側北東端に位置し、南約1mにIC-2住居跡が隣接する。西壁でIC-84土坑、南東壁でID-62土坑と重複し、切り合い状況からIC-62土坑の方が本住居跡より新しいが、IC-84土坑との新旧関係は不明である。検出面は基本層序III層上面である。

平面形は、北側半分が調査区域外に続くため全体の形状は不明であるが、検出された壁及び周溝から、南北方向に長軸をもつ楕円形あるいは隅丸方形状を呈していたと思われる。しかし、周溝の状況から多角形状を呈していた可能性もある。規模は、現存する壁の東西方向で5.2mを測る。

埋土は、層厚10~20cmで4層に細分される。黒褐色粘土質シルトを主体とするが、リングの根痕などの攪乱を受けており、褐色~暗褐色シルトがブロック状に混入している。特に、北西側に堆積する堅くしまった褐色粘土質シルト(2層)は、風倒木による攪乱によって入った土である。

床面からの壁高は10~18cmで、やや急に立ち上がっている。床面は、堅くしまっているが、木痕などによる攪乱のため凸凹がある。

周溝は、壁の内側を幅14~20cm、床面からの深さ5~16cmの規模で、一部途切れながら巡っている。壁との距離が50cmもあるものや、攪乱部分の南西側を住居跡の内側にカーブする周溝から、一回以上の建て替えや他の住居跡との重複も考えられる。

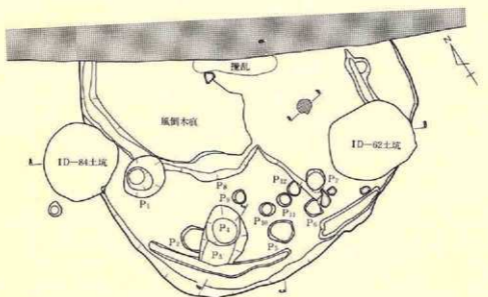
柱穴状土坑は12個検出され、P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>7</sub>が主柱穴と考えられるが、全体の状況は不明である。

焼土は、中央部やや東寄りで検出された。不整な円形状を呈し、規模は径26×24cmである。焼土の厚さは、最大で4cm程であり、炉跡の可能性は少ない。

#### 出土遺物(第84~86図、写真図版66・67)

埋土及び柱穴状土坑から土器・石器が出土しており、床面からの出土はない。

土器 95は沈線によるU字・「∩」状文が施文され、96は波状を呈す口縁部~胴部片で、波状口縁に沿って沈線による渦巻文(蕨手状文)・楕円文・逆U字文が縦方向に流れる。地文は縦位



PNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>
径 cm	25×63	40×—	—	64×54	42×36	28×24	34×32	36×47	24×22	25×21	23×22	22×22
深さ cm	62	3	16	40	7	4	58	9	6	6	4	5



1. 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
2. 黒色 10YR4/4 粘土質シルト
3. 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含砂褐色シルト)



1. 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含砂褐色シルト)
2. 黒褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含砂褐色シルト, 土器片)
3. 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含砂褐色シルト)

L=60,500m



1. 暗赤褐色 2.5YR3/6 シルト



1. 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含砂褐色シルト)
2. 黒褐色 10YR3/2 (含砂褐色シルト)



第11図 IC-3住居跡

燃糸文である。97はキャリバー形の器形をもつ波状口縁部片で、隆帯による渦巻文やU字文などの曲線文が展開する。98～101も隆帯や沈線による渦巻文・「∩」状文が展開する胴部片で、胴上半部の文様区画間の無文帯に刺突文が施文されている。隆帯及び沈線区画部分は丁寧に磨かれ、周囲が浮き出よう様な様相を呈している。97～101は施文方法・地文（RL単節縄文）が同様であることから同一個体の可能性がある。102は外反する口縁部～胴部片で、沈線による「∩」状文が縦方向に流れ、104も「∩」状文の一部と思われる沈線が垂下する胴部片である。103は粗製土器の口縁部片で、105は底部外面に竹状圧痕が認められる底部片である。106は緩やかな波状を呈する口縁部片で、キャリバー形を呈していたと思われ、隆帯による渦巻文がみられる。107は沈線による「∩」状文で、108は沈線区画による曲線文である。109は隆帯による楕円文・「∩」状文、110も隆帯による渦巻文である。111は沈線による「∩」状文で、112は沈線による曲線文で沈線区画内に刺突文が施文されている。113は粗製土器の口縁部片で、口縁部がすばまる。LR単節縄文を回転方向を変えて施文し羽状にしている。また、口縁部付近は磨消され無文帯になっている。

石器 4点出土している。114・115は抉りの入る無茎の石鏃である。116は剥片の側面を両面から半円形に剝離調整し刃部を作っており、刃部には使用による摩耗痕がみられる。117は磨製石斧で、右側側面上部と左側側面が研磨調整されていないのが特徴的である。また、使用時にできたと思われる欠損が刃部左側から表面左側下半に見られる。

時期 出土土器は大木9式の特徴を示しており、縄文時代中期後葉に属する。

#### IC-4住居跡

遺構（第12・13図、写真図版5）

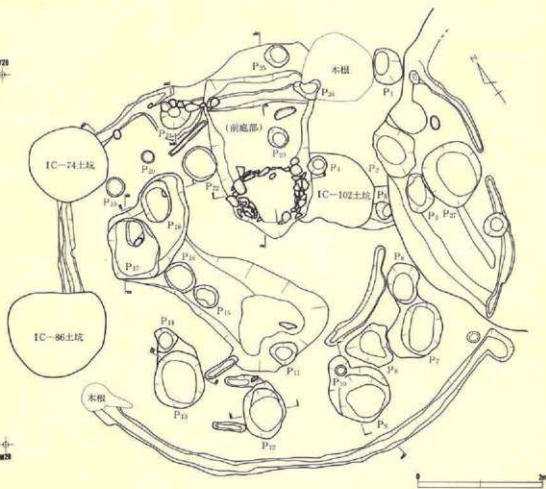
本遺構は調査区南西側中央部に位置し、西約2mにIC-13住居跡、南西約2mにIC-8住居跡、南約2mにIC-5住居跡がある。北西壁・西壁でそれぞれIC-74土坑・IC-86土坑、西側でIC-2住居跡、炉跡南東隅でIC-102土坑と重複する。切り合い状況からIC-74土坑、IC-86土坑の方が本住居跡より新しいが、IC-2住居跡、IC-102土坑との新旧関係は不明である。検出面は基本層序第Ⅲ層上面である。

平面形は、壁や周溝などの状態から七角形状を呈している。規模は、炉の長軸方向で6.2m、短軸方向で7.1mを測る。

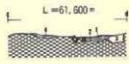
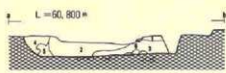
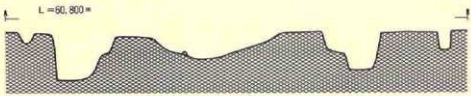
埋土は、褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが2～5cm程度堆積しているだけである。

床面は、Ⅲ層をわずかに掘り込んでつくられている。堅くしまっているが、木根等の攪乱により幾分凹凸がある。床面中央付近にある南北に長い大きな凹みは炉跡とも考えられるが、焼

W2  
E2



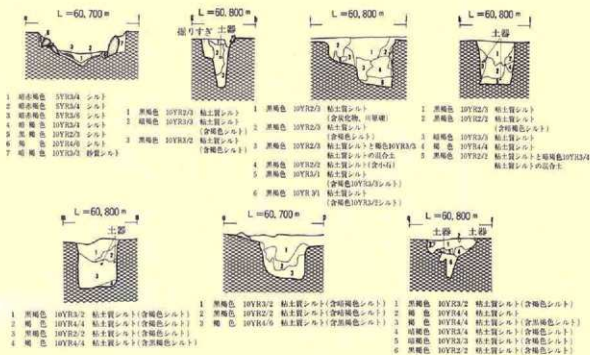
W1  
E1



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含砂土粒、炭化物)
- 3 紫褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗色10YR4/6シルト)
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 5 暗褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含炭化物)

- 1 暗赤褐色 5YR3/1 シルト(含木炭)
- 2 暗赤褐色 5YR3/4 シルト(含木炭)
- 3 暗赤褐色 10YR3/4 シルト(含粘土粒)
- 4 暗赤褐色 10YR5/4 シルト(含黄褐色シルト)

第12図 IC-4住居跡(1)



第13図 IC-4住居跡(2)

土等を伴わず不明である。

周溝は、西側の一部を除いてほぼ全周を巡っている。幅は約29cmで、深さは10～25cmである。また、本住居跡の内側を巡るような周溝が5条検出されており、後述する柱穴とも考え合わせ、建て替えか更にもう1棟包括されていたと考えられる。

柱穴状土坑は27個検出されている。炉の長軸方向を中心に左右対称をなす(P<sub>2</sub>)・P<sub>27</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>17</sub>・(P<sub>18</sub>)の6本柱が本住居跡の主柱穴を構成すると考えられる。また、北北東側周溝と前庭部の境両隅にあるP<sub>21</sub>・P<sub>22</sub>は入口状の施設を支える柱であった可能性がある。その他の柱穴では、本住居跡の内側にあるP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>26</sub>・P<sub>26</sub>・P<sub>23</sub>が楕円形状に配列されており、径5×4.2m前後の本遺構に先行する住居跡が最低1棟存在すると考えられる。



炉は、南南西から北北東方向に長軸をもつ複式炉で、石組炉+前庭部から構成されている。石組炉は、100×80cmの方形～台形状を呈し、床面からの深さは約40cmを測る。この炉は石積炉というべきもので、偏平な河原石を底部から斜め上方に広がる形で4～5段に積み重ねており、石組前面の両側には大きな礫が埋め込まれている。前庭部との境は、礫を2列に直線的に並べ区画している。炉内には明確な焼土層は形成されておらず、木炭混じりの黒褐色土や黄褐色土が大量に混入した暗赤褐色シルト層が6～20cm堆積している。前庭部は、住居跡の周縁に向かって開いており、長さ約1.2m、幅約0.7m、床面からの深さ30cmである。

#### 出土遺物（第86～89図、写真図版68～70）

炉内、柱穴状土坑埋土、床面及び埋土から土器及び石器などが出土しているが、土器の床面からの出土はない。

土器 118は胴下半部のふくらみから底部にかけて急激にすぼまる器形で、胴中央部に波頭状の隆帯がめぐり、胴上部文様帯（無文帯）と下部文様帯（RL単節斜縄文）が区別されている。119は胴下半部に最大径を持つ壺形に近い器形と思われる土器で、隆帯による曲線文が展開し、頸部に2個の把手を持っている。120はミニチュア土器である。波状沈線や連結する「∩」状の細い沈線が無作為に描かれ、文様と言うよりはデッサンの様相を呈している。121・122は沈線による曲線的な無文帯・縄文帯が展開し、123は外反する口縁部片で、頸部に沿って刺突文が回り、口縁部に竹管文が2条巡っている。124～126は沈線による「∩」状文や縦柵文が施文されている。127は内湾する口縁部片で、口縁に沿って隆帯が回り、その下に逆U字文が渦巻文が連結していると思われる。128～130は隆帯による「∩」状文などの曲線文が施文されている。131は口縁部に隆帯が巡っている。132は緩やかな波状口縁を呈し、口縁に沿って隆帯が回り、口縁部無文帯と胴部の地文（L R単節縄文）を区画している。133も緩やかな波状を呈する口縁部片である。134は口縁部が外反する粗製の土器片で、口縁部付近が磨消による無文帯になっている。135は隆沈線による直・曲線文が展開している。

石器 石器は19点出土している。136～139は無茎の石鏃で、170～172は細長い二等辺三角形を呈し、136・137は比較的深い抉りが入っている。138・139は平基であるが、139は全体に丸味を帯び調整も比較的雑である。140は石匙で、刃部は片面だけ細かな剝離調整が行われている。141は、左側半分が欠損しているものの、先端部から右側側面にかけて両面からの剝離調整による刃部が作られ、刃部側面の摩耗が著しいことから、尖頭器であった可能性がある。142は磨製石斧で、刃部は欠損している。143～146は磨石である。ほぼ全面を磨っているもの（143）、両面を磨っているもの（144・146）、両面及び片面側面を磨っているもの（145）などがある。147は欠損部付近が過熱により赤変し、片面のほぼ全面と裏面の上下両端に黒い附着物が認められる。炉の構成礫として使われていた可能性がある。148は焙岩塊（両輝石安山岩）で、使用痕・

加工痕等は認められないが、この種の石材を用いた砥石などが出土しており、記載した。149～151は台石である。152・153は炉の構成跡で、台石（152）や擦石の転用と思われる。154は有脚の石皿である。左側周縁部（図）以外は欠損しているが、楕円形か長方形を呈していたと思われる。縁を残して中央に平坦な凹み部をもっていたと考えられる。

土製品 155は円盤状土製品で、土器片の周囲を打ち欠いて作っている。

時期 出土土器の大半は大木9式～10式の特徴を示しており、縄文時代中期後葉～末葉に属する。

### IC-5住居跡

#### 遺構（第14図、写真図版6）

本遺構は調査区南西端に位置し、東約3mにID-1住居跡、西約2mにIC-8住居跡、北約2mにIC-4住居跡がある。北側でIC-89土坑と重複し、切り合い状況から本住居跡の方が古い。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は、南西側3分の1程度が調査区外に続くため全体の形状は不明であるが、現存する周溝から南北方向に長い楕円形か卵形状を呈していたと思われる。規模は、径3.6×3.1m前後であったと考えられる。

床面は、III層をわずかに掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅くしまっている。

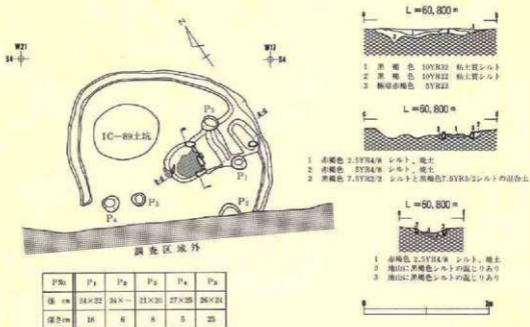
周溝は、幅約20cm、深さ約5cmで西側で途切れているが、ほぼ全周を巡っていたと思われる。柱穴状土坑は5個検出されている。前庭部両端にあるP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>と周溝内側にあるP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が、本住居跡に伴う柱穴と考えられる。

炉は、東西方向に長軸をもつ複式炉で、石組炉+前庭部から構成されている。石組炉は、大半の礎が抜き取られているが、前部に残存する礎の配置から径50×50cm程の方形を呈していたと考えられる。炉内の焼土は、やや南東寄りに堆積しており、厚さは約10cmである。前庭部は、住居跡の周縁に向かって開いており、中央部と東壁寄りの箇所に溝状の浅い掘り込みを2つ伴っている。

#### 出土遺物（第90図、写真図版7）

床面から土器1点のみの出土である。156は沈線による「冂」状文の一部が垂下する胴～底部片で、沈線区画内の地文はRL単節斜縄文である。

時期 出土土器は大木9式の特徴を示しており、縄文時代中期後葉に属する。



第14図 I C-5住居跡

### I C-6住居跡

遺構 (第15図、写真図版7)

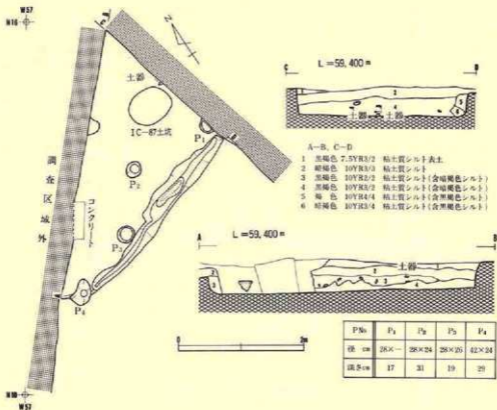
本遺構は調査区西南西側北西端に位置し、南西約4mにI C-72土坑、南約4.5mにI C-69土坑がある。I C-87土坑と重複しており、切り合い状況から本住居跡より新しい。検出面はIII層である。

大半が調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、現存する南壁のやや直線的に伸びる状況から、本遺跡の中でも大型の住居跡の部類に入る長径7m前後の楕円形あるいは多角形状を呈していたと考えられる。

埋土は、攪乱を受けている表土及び暗褐色シルト層を除く3～6層が本住居跡の埋土を構成し、褐色粘土質シルトがブロック状に混じる黒褐色粘土質シルト層(3・4層)が堆積し、壁際に一部堆積する褐色～暗褐色シルト層は壁の崩壊土と思われる。

壁はやや急に立ち上がり、壁高は31～41cmである。

床面は、III層下部まで掘り込んでつくられており、コンクリート・ブロックで攪乱を受けている箇所を除き平坦で堅くしまっている。



第15図 IC-6住居跡

周溝は壁に沿って掘り込まれており、P<sub>4</sub>の手前で途切れている。規模は、長さ3.2m、幅15~30cm、床面からの深さ9~17cmである。

柱穴状土坑は4個検出されているが、全体の配置等は不明である。炉は検出されていない。

出土遺物 (第90図、写真図版70・71)

埋土から土器・石器が出土しており、床面からの出土はない。

土器 157は隆帯による曲線区画文が横方向に展開する口縁部片である。158・159は沈線による区画内に棒状工具による刺突文が施文される口縁部片である。160は隆帯による波頭状の曲線文が横方向に展開している。161は口縁部に沿って沈線が1条走り、162は沈線による曲線文が展開する胴部片である。163・164は隆帯による曲線文が展開する胴部片である。

石器 2点出土している。165は無茎の石鏃で、浅い抉りが入っている。166は磨製石斧で下半が欠損している。

時期 出土土器は大木10式の特徴を示しており、縄文時代中期末葉に属する。

## IC-7住居跡

### 遺構(第16・17図、写真図版8)

本遺構は調査区西南西端に位置し、南にIC-75土坑が隣接し、東約3mにIC-10住居跡、北東約5mにIC-11住居跡がある。検出面は、南東側が基本層序第II層下位、南西側がほぼ床面に近いIII層上面である。

平面形は、北東から南西方向にやや長い円形状であるが、壁や周溝の状況から七角形を呈しているようにも観察される。規模は、炉の長軸方向で6.8m、炉の短軸方向で7.1mを測る。

埋土は、黒褐色粘土質シルトが主体で床面まで堆積している。

壁は、南東半に検出されているだけで、南西半は消失している。南東側の壁高は20~25cmで、急に立ち上がっている。

床面は、III層を僅かに掘り込んでつくられており、堅くしまっているものの、幾分凸凹がみられる。また、床面中央部やや南東寄りの位置に口縁部を欠いた埋設土器を伴っている。

周溝は壁に沿って掘り込まれており、全周を巡っている。幅は10~20cm、床面からの深さは10~31cmで南西側が深くなっている。

柱穴は15個検出され、壁際を巡るP<sub>2</sub>-P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>6</sub>-P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>-P<sub>9</sub>-P<sub>10</sub>-P<sub>11</sub>の9本柱が主柱穴を構成すると考えられる。このうちP<sub>7</sub>-P<sub>11</sub>・P<sub>4</sub>-P<sub>10</sub>・P<sub>5</sub>-P<sub>9</sub>・P<sub>6</sub>-P<sub>8</sub>は、炉の長軸方向を中心に対称をなしている。また、炉の長軸方向の南東隅にあるP<sub>7</sub>の直上から石棒が出土している。

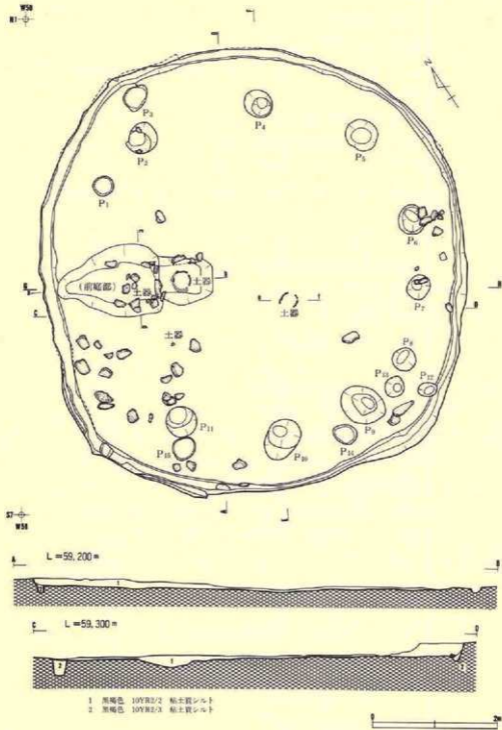
炉は、南東から北西方向に長軸をもつ複式炉で、土器埋設炉+石組炉+前庭部から構成されている。土器埋設炉は、一辺84~80cm、床面からの深さ6~8cmの長方形に掘り込まれており、そのほぼ中央に土器が底部を欠いた状態で埋設されている。また、掘り込み北東縁に長径14~22cmの直角礫が3個埋置されていたが、周縁部を礫で囲っていたかどうかは不明である。焼土は、土器を囲むように形成されており、厚さは最大で約20cmである。石組炉は、辺110×80cmの長方形に掘り込まれ、前庭部との境には礫の抜き取り痕が認められることから、石組内燃焼部は辺60×60cmの方形を呈していたと考えられる。断面をみると、焼土層は検出面より10cm程下方にあり、その場合、床面からの深さは約26cmになり、掘り込みの両縁側は礫が積み上げられていたと考えられる。現存する後部及び側面部の礫は強い加熱を受けヒビ割れている。焼土の厚さは約6cmである。前庭部は、住居跡の周縁に向かってしばむように閉じており、石組炉からの長径約1m、床面からの深さ14~18cmである。

その他、南西側床面や壁際床面に礫が多数出土しているが、本遺構に伴うものかどうか不明である。

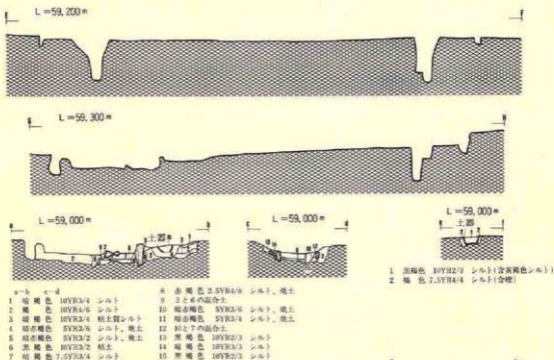
### 出土遺物(第91~93図、写真図版71・72)

炉内・床面及び埋土から土器・石器が出土しており、炉内及び床面出土が多い。

WS  
E1-中



第16図 IC-7住居跡(1)



- 1 黒褐色 10YR3/4 シルト  
 2 褐色 10YR4/6 シルト  
 3 黒褐色 10YR3/4 粘土質シルト  
 4 黒赤褐色 5YR3/6 シルト、焼土  
 5 黒赤褐色 5YR3/2 シルト、焼土  
 6 黒褐色 10YR3/2 粘土  
 7 黒褐色 7.5YR3/4 シルト  
 8 赤褐色 2.5YR4/8 シルト、焼土  
 9 2と6の混合土  
 10 黒赤褐色 5YR3/6 シルト、焼土  
 11 黒赤褐色 5YR3/4 シルト、焼土  
 12 10と7の混合土  
 13 黒褐色 10YR2/3 シルト  
 14 黒褐色 10YR3/3 シルト  
 15 黒褐色 10YR2/3 シルト

PNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>
口縁径	34×33	54×46	42×33	48×42	51×58	48×39	41×35	38×37	76×60	70×51	50×49	30×24	24×30	30×20	41×36
底縁径	38×36	27×24	36×28	19×16	32×26	24×14	18×14	24×12	23×13	23×16	30×26	17×13	14×13	32×24	37×25
深さcm	22	67	13	71	68	71	53	66	63	64	66	28	31	10	5

第17図 IC-7住居跡(2)

土器 167は床面中央に埋設されていた粗製の土器で、口縁部が欠損している。168・169は炉埋設土器である。168は口縁に沿って沈線が1条巡り、口縁部無文帯と胴部縄文帯を区画している。底部は欠損しており、土器を打ち欠いて炉として利用したと思われる。170～174・176～178は沈線による曲線区画文を主体とした土器で、178は沈線区画された口縁下に刺突文が充填されている。179は口縁部に沿って、RとLの1段の縄を結んで押し付けた原体側面疋痕・交互刺突文・円形刺突文が順に施文されている。180は口縁部に刺突文が充填されている。175・181・182は隆帯による曲線文が展開する土器片である。

石器 183・184は無茎の石鏃で、183は基部に浅い袂りが入り、184は平基に近い。185は石鏃で、頭部と錐部の区別が比較的明瞭である。186は両面からの丁寧な刮削調整により三角形状に作っているが、1縁辺が鷲の嘴状に湾曲しているのが特徴的である。基部にタールがまばらに付着しており、柄等に装着し皮剥ぎ等に使用したと思われる。187は縦型の石匙で比較的小さい。

188・189は掻・削器で、縁辺部から先端部にかけて、両面(188)・片面(189)からの剝離調整により刃部を作っている。190・191は縁辺に使用痕や調整痕がみられ、192は剝片である。193は敲石で表面及び側縁に敲打痕が認められる。194・195は台石で、欠損している。196は石棒で断面はほぼ円形である。

時期 小破片がほとんどであるが、炉内及び床面出土土器は大木10式の特徴を示しており、縄文時代中期末葉に属する。

### IC-9 住居跡

#### 遺構 (第18図、写真図版9)

本遺構は調査区西南西側南端に位置し、北東にIC-1号・2号配石遺構が隣接し、北東約8mにIC-7住居跡がある。南側でIC-95土坑と重複し、切り合い状況から本住居跡より新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は、南東壁の一部が調査区外に延びるため不明であるが、検出された壁の状況から北東から南西方向に長い六角形状を呈していたと考えられる。規模は、炉の短軸方向で4.5mを測り、長軸方向は4m前後であったと思われる。

埋土は、黒褐色粘土質シルトが主体で、埋土最下部に黒色粘土質シルトが僅かに堆積している箇所がある。

壁はほぼ直立気味に立ち上がっており、壁高は北東壁で22cm、南西壁で11cm、北西壁で17cmである。

床面は皿層を掘り込んでつくられている。幾分凸凹がみられ、北東壁付近がやや柔らかく、他の部分は堅くしまっている。

周溝は検出されていない。

柱穴状土坑は9個検出されているが、規模や位置関係から主柱穴と考えられるものはない。

炉は、南東から北西方向に長軸をもつ複式炉で、土器埋設石組炉+前庭部から構成されている。土器埋設石組炉は、北東側の跡が抜き取られているものの、床面からの深さ18~24cm、径80cmの円形状に掘り込まれてつくられており、南西端には、土器が口縁部を炉の中央に向ける形で横位に埋設されている。焼土は、炉内全体に堆積しており、厚さは最大で18cmである。埋設土器内の焼土の堆積状況もほぼ同様であり、用途等は別の角度から検討する必要がある。前庭部は、住居跡の周縁に向かって開いており、床面からの深さは10cm程である。

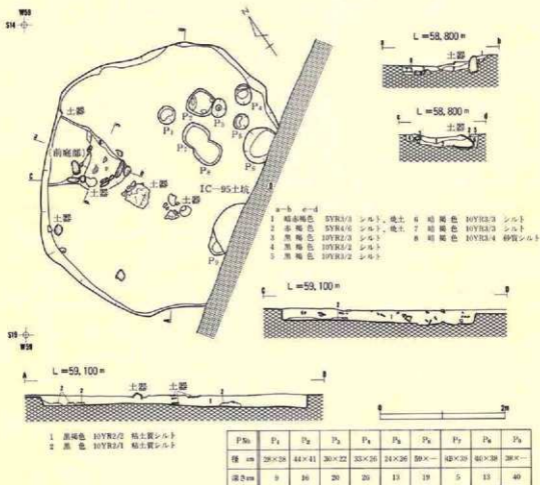
#### 出土遺物 (第94~103図、写真図版73~79)

炉内・床面及び埋土から、土器・石器等が出土しているが、床面からの土器の出土は少ない。

土器 本住居跡出土の土器は、沈線や隆帯に区画された曲線的な縄文帯や無文帯が器面に展



WS9  
514



第18図 IC-9住居跡

開する土器が主体で、大木10式に属するものが多い。区画内に刺突文が充填されるものや、罫状の粘土貼付文を持つものも見られる。器形は胴中央部付近にふくらみを持ち、やや内反気味にあがって緩やかに外反するものと、口縁が内湾するものがある。

197は複式炉に埋設されていた土器で、口縁部は欠損している。胴中央付近に波頭状の沈線が走り、下部文様帯（単節斜縄文）と上部文様帯が区画されている。上部文様帯は沈線区画されたU字形の縄文帯が連結して展開していると思われる。198～201は波状口縁下の沈線区画内などに刺突文が充填される土器である。198は沈線区画されたJ字形の無文帯が展開する土器で、J字文の頂部にあたる波状口縁下の区画内に刺突文が充填されている。また、口唇部は肥厚し

て角張っているのも特徴的である。120は内湾する口縁部を持つ土器で、胴中央部付近に波状の沈線により下部文様帯と上部文様帯を区画している。波状口縁下に刺突文が1条・2条充填され、それに沿う形でO字状の無文帯が下部で繋がる様に展開する。O字文の頂部には鱗状の貼付けがなされ刺突文が充填されている。201はJ字形の無文帯が展開する土器で、J字文の末端が反転して横のJ字文と連結する。波状口縁の頂部下には貫通孔があり、また、口縁に沿う形で刺突文が充填されている。202は口縁部に沿って隆帯が巡り、間に刺突が施される。また、2条の隆帯は鱗状の隆帯によって区画されている。203は口縁突起の破片で刺突文が充填されている。204は橋状把手の破片と思われ、下部に貫通孔をもち、刺突文も充填されている。205~207・213は沈線区画による曲線的な縄文帯や無文帯が描かれ、205は波状口縁の頂部に鱗状の貼付文が施文されている。208~212も沈線や隆帯(210)による区画文が展開するが比較的直線的である。214は沈線区画された胴下半の土器片であるが、無文帯の頂部に鱗状の貼付文が施文されている。

215は人体や動物のモチーフが器面に展開する特異な土器である。出土時には小破片のため埋土中の土器として他の土器片とともに取り上げたものであり、復元によってほぼ完形になることが判明したものである。器形は底部からやや外傾気味に立ち上がり、頸部付近に最大径をもち、口縁部が緩やかに内湾している。大きさは、器高16.9~18.1cm、口径14.3~15.5cm、頸径15.7~16.9cm、底径6.3~6.7cmで、幾分歪んでいる。胎土には径2~3mmの砂を含む極小の砂が多く混じり、色調はにぶい褐~黄褐色が主体で、内面には黒い煤状の付着物が認められる。文様は、頸部から胴下半にかけて細い粘土紐の貼付と細い棒状工具による刺突文によって人体および動物が表現されている。人体は表と裏(図)に1体ずつ、動物は裏の人体を挟む様に左右に1頭ずつ描かれている。人面は、逆三角形の粘土貼付に刺突によって目・鼻穴・口を表し、それを中心に隆起線の粘土貼付によって逆三角形の人体を表している。また、隆起線に沿う形で刺突文が配されている。動物も隆起線の貼付文と刺突文によって、円形の胴体に頭・手足・尾が表されている。口縁部には逆三角形の人体の右側頂部(図)から繋がるように鱗状の突起が付けられている。他に、人体(表)を中心に波頭状の細沈線が左右に展開し、部分的に細かな単節縄文(LR)の施文も見られるが、摩耗が著しく全体の構成は不明である。

216は4個の波状口縁を持つ小形の土器である。217は高台部で底面は抉られている。218は底面に木葉痕のある底部片である。219~233・235・236は波状口縁下の沈線区画内などに刺突文が充填される土器群で、232には鱗状の粘土貼付部にも刺突文が見られる。これらは口唇部が肥厚するのが多いのが特徴である。237は口縁に沿って上から順に原体側面圧痕、交互刺突文、円形刺突文が施文された口縁部片である。234・238~251は沈線区画による曲線的な縄文帯や無文帯が器面に展開する土器群で、252~256・261は隆帯区画による曲線文が展開する土器群であり、

244・257～260の様に無文帯の末端などに鱗状の貼付文を施すものもある。262～276は口縁部に沈線(262～273)や隆帯(274～276)区画による無文帯が明瞭な土器で、胴部文様は不明であるが、粗製に近い土器も含まれると思われる。277～279は粗製の土器の口縁部片である。

石器 19点出土している。280～284は石釧で全て無茎である。280～282は基部に浅い挟りが入り、283・284は平基に近い。285は1縁辺が鷲の嘴状に湾曲する削器で、基部にタールが付着しており、IC-7住居跡出土の186と同様の機能を有すると思われる。286～292は剥片の縁辺に剝離調整による刃部が作られるており、片面からの調整が多い。286・287・289は直線的に繋がる2縁辺に片面から剝離調整がなされ、228は左上に剝離調整がなされている。290～292はやや湾曲しながら繋がる縁辺に片面から剝離調整されており、292は急角度の刃部を持っている。これらは掘削器としての機能を持つと思われる。293は擦石である。294～296は焙岩塊で、器種は不明であるが、295には凹が見られる。297は台石である。298は焙岩塊性の有脚の石皿で半分ほど欠損しているが、縁が明瞭に作られている。細い溝状の擦痕も認められ、砥石の可能性もある。

石製品 有孔石製品が1点(299)出土している。

土製品 耳飾品2点(300・301)と円盤状土製品1点(302)が出土しているが、300はミニチュア土器の可能性もある。

時期 炉埋設土器及び床面を中心とする出土土器は木大10式の特徴を示しており、縄文時代中期末葉に属する。

### IC-10住居跡

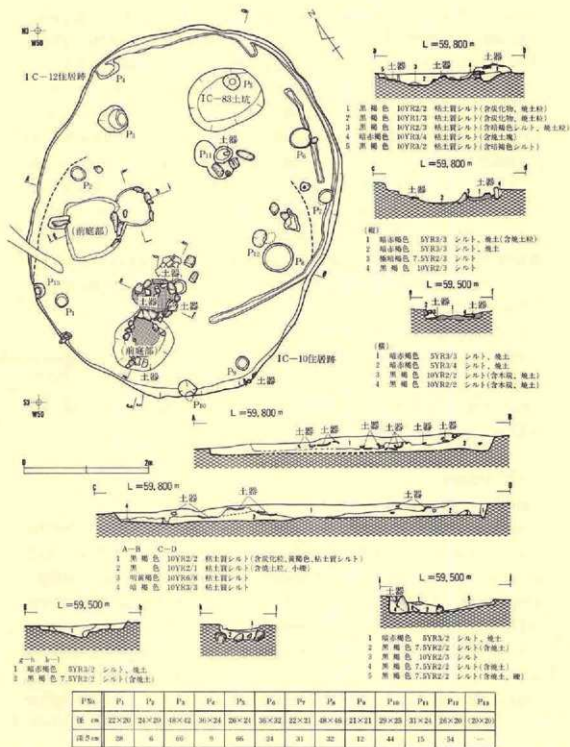
遺構(第19図、写真図版10・11)

本遺構は調査区西南西側に位置し、東約4mにIC-1住居跡、西約3mにIC-7住居跡がある。検出面は基本層序第II層下位～III層上面である。検出時には、後述するIC-12住居跡と同一のプランとして考えていたが、床面精査中に本住居跡と異なるプランをもつ周溝及び炉跡が検出され、重複関係が明確になった。IC-12住居跡との新旧関係は、本住居跡の炉跡がIC-12住居跡を切っていること等から本住居跡の方が新しい。

平面形・規模は、IC-12住居跡と重複する部分のプランを把握できなかったため明確ではないが、残存する南西側の壁の状況から径4.4m前後の円形状を呈していたと考えられる。

埋土は2層に大別され、上層が炭化粒・焼土粒や黄褐色粘土質シルト粒・小礫が混じる黒褐色粘土質シルト層、下層が黒色粘土質シルト層になっている。また、これらの層理面には土器が多量に投げ込まれており、人為的埋め戻しの様相を呈している。

壁は、南南西側が外傾気味に立ち上がり、他は急に立ち上がっている。壁高は10～21cmで、



第19図 IC-10・12住居跡

西側の方が低くなっている。

床面は、田層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅くしまっている。貼床は認められなかった。

柱穴は13個検出（IC-12住居跡も含む）されており、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>-P<sub>11</sub>-P<sub>8</sub>-P<sub>9</sub>が主柱穴を構成すると考えられる。

炉は、北東から南西方向に長軸をもつ複式炉で、土器埋設石組炉+前庭部から構成されている。土器埋設石組炉は、床面からの深さ10~18cm、径80cmの円形状に掘り込まれてつくられており、前部両縁には土器が口縁部を炉の中央に向ける形で横位に埋設されている。石組炉の前部と後部に埋置された亜角礫は、強い加熱によりヒビ割れている。焼土は炉内全体に堆積しており、厚さは最大で8cmである。前庭部は径90×80cmの皿状に掘り込まれ、床面からの深さは16~19cmである。また、前庭部底面には中央部から石組炉にかけて焼土が不整形円形状に広がっており、厚さは2cm程である。

#### 出土遺物（第104~109図、写真図版80~82）

炉内・床面及び埋土から土器・石器が出土しており、床面からの出土は少ない。

土器 本住居跡出土土器は、沈線区画による曲線的な縄文帯や無文帯が器面に展開する大木10式に属する土器が主体である。303・304は石組炉内左右縁辺にほぼ横位に埋設されていた土器で、炉面上方に面した箇所は胴上半~口縁部にかけて欠損していた。303は胴中央付近に波状沈線が巡り、上部文様帯と下部文様帯（単節縄文）が区画されている。上部は沈線区画された横楕円形の縄文帯が施文されている。304は胴部付近に最大径をもち、頸部付近が幾分くぼみ口縁部が外反する粗製の土器で、口縁部は磨消により無文帯になっている。305~307は胴ぶ中央付近の波状沈線によって下部縄文帯と上部文様帯が明確に区画される土器である。上部文様帯は沈線区画によるC字形（305）・C字形+楕円形（306）・「∩」字形+C字形（307）の縄文帯が展開し、307は口縁部に涙滴状に粘土が貼付られ、円形の刺突文が巡らされている。308・309はJ字形の無文帯が展開し、309の無文帯の末端には鱗状の貼付文が施文されている。310は隆帯が巡っている。311~314は底部片で、311は単節縄文と0段多条、312・313は単節縄文、314は単節縄文に綾絡文を地文とし、312は胴下部の沈線が底部無文帯との区画をしている。また、313の底面には木葉痕・314の底面には笹の葉痕が見られる。315~335は沈線区画による曲線的縄文帯や無文帯が展開する土器群で、180~186は口縁下の沈線区画内や無文部に刺突文が施文されている。336・337は口縁部の平行沈線により口縁部無文帯が区画されている。338は幅広の沈線が垂下する胴部片で、339は隆沈線による渦巻文や直・曲線文が施文される胴部片である。

石器 340~342は無茎の石錐で、340・341には抉りが入っている。343は先端部付近を片面からの剝離調整により急角度の刃部が作られている。344は2縁辺に片面からの剝離調整がなされ、

345・346は剥片である。347～350は擦石で、347の両面はよく磨かれている。351は焙岩塊で作られた有溝砥石で、脚を1個持ち、両面に溝状の凹み(表4・裏2)がある。

時期 炉埋設土器を中心とする出土土器の大半は大木10式の特徴を示しており、縄文時代中期末葉に属する。

### IC-12住居跡

#### 遺構(第19図、写真図版10・11)

本遺構は調査区西南西に位置し、IC-10住居跡・IC-83土坑と重複している。IC-10住居跡の床面精査中に検出され、本遺構の方が古いが、IC-83土坑よりは新しい。

平面形は、検出された壁・周溝の状況から円形か隅丸方形状を呈していたと考えられる。規模は、炉の短軸方向で4.6mを測り、長軸方向も同程度の長さだったと思われる。

埋土はIC-10住居跡と同様で、炭化粒・焼土粒の混じる黒褐色粘土質シルトや黒色粘土質シルトであるが、本住居跡寄りの方が土器の出土量が極端に少ない。

壁は急に立ち上がり、壁高は10cm～26cmで西側の方が低くなっている。

床面は、III層を掘り込んでつくられており、平坦で堅くしまっている。

周溝は、東半側に壁に沿う形で検出され、幅約10cm、床面からの深さは2～10cmで東側ほど低い。西半側は、西方に幾分傾斜する立地条件から流された可能性がある。また、東側周溝の内側に同様の周溝が、一旦途切れながら北東側で外側の周溝に繋がっており、建て替え等考えられるが明確ではない。

柱穴は、炉の長軸方向を中心に対称をなすP<sub>9</sub>-P<sub>5</sub>-P<sub>9</sub>・P<sub>12</sub>-P<sub>13</sub>と東壁際にあるP<sub>6</sub>の6本柱が主柱穴を構成すると考えられる(柱穴NoはIC-10住居跡と重複する)。

炉は、東西方向に長軸をもつ複式炉で、石組炉+前庭部から構成されている。石組炉は、径70cmの円形状を呈し、床面から30cm掘り込まれてつくられている。焼土は、炉内上方に約4cm堆積しており、底面までは焼土混じりの黒褐色シルトが堆積している。前庭部は、住居跡の周縁に向かって幾分広がり、長さ約80cm、最大幅92cm、床面からの深さ40～6cmで周縁部に向かって上昇する。

出土遺物・時期 出土土器はIC-10住居跡と重複する南西側(IC-10住居跡の炉跡部分)に集中しており、本住居跡出土土器と判断できるものはなかった。したがって、本住居跡の時期は、炉の形態(複式炉)等からIC-10住居跡よりは古く、縄文時代中期後葉～末葉の範囲で把握できると考えられる。

## ⅠD-2 住居跡

### 遺構 (第20図、写真図版12)

本遺構は調査区南西端東寄りにあり、北約3mにⅠD-72土坑、北東約6mにⅠD-3住居跡がある。検出面は基本層序第Ⅲ層上面のほぼ床面にあたり、炉跡・周溝から住居跡と判明したものである。

平面形・規模は、南側が調査区外に延び、東側が攪乱(水田の区画整理)を受けているため全体の形状は不明であるが、検出された周溝の状況から、径5～6m前後の円形か多角形状を呈していたと思われる。

埋土・壁は削平のためほとんど確認できなかった。

床面はⅢ層を掘り込んでつくられており、平坦で堅くしまっている。

周溝は北西側の一部が検出され、幅12～18cm、床面からの深さ5～10cmである。

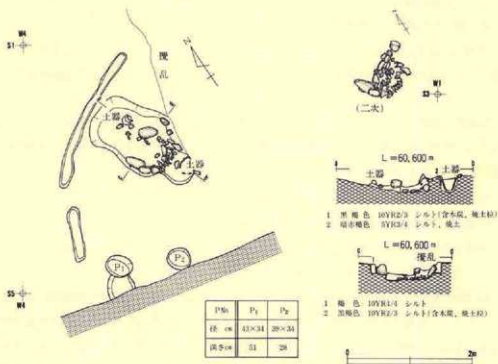
柱穴は2個検出されているが、全体の形状は不明である。

炉は長軸を南南東から北北西方向にもつ複式炉で、土器埋設炉+石組炉+前庭部から構成されている。土器埋設炉は、南東半が攪乱を受けているため壁で囲まれていたかどうかは不明である。土器は口縁部・底部を欠いており、床面から約22cmの深さまで埋設されている。また、土器の周囲の土は加熱により暗赤褐色に変色している。石組炉は床面から約20cmの深さまで掘り込まれてつくられており、底部から土器埋設部まで礫が敷き積み上げられている。石組内には焼土層は形成されておらず、木炭や焼土粒が少量混じる黒褐色シルトが4～8cm堆積していた。前庭部は住居跡の周縁に向かって幾分上昇しながら延び、幅約90cm、長さ約90cm、床面からの深さは石組部との境界付近で14cmである。

### 出土遺物 (第110・111図、写真図版83・84)

炉内及び周溝埋土から土器・石器が出土している。

土器 352は炉の埋設土器で口縁部と底部は欠損している。胴部下半に2本の平行沈線による波頭状の区画文が走り、上部文襟帯と区画している。上部文襟帯は欠損のため不明であるが、2本の平行沈線に区画された曲線の縄文帯が展開すると思われる。沈線区画内には単節縄文が充填されるが、胴下半には綾絡文が見られる。353は隆帯区画による曲線文が展開する胴～底部片である。354は胴下部に最大径を持ち、頸部にかけてすばまり口縁部に向かって直立する壺形の土器であり、器面内外に丹塗りが施されている。頸部付近に隆帯が走り、口縁部無文帯と区画している。頸部から胴下半にかけては、隆帯区画による逆C字状の縄文充填帯が表と裏(図)に展開し、左右には頸部から垂下する2本の隆帯を頸部と肩部で繋ぐように把手が2つずつ付けられている。また、この逆C字状の隆帯と垂下する2本の隆帯は、胴下部で連結している。355は沈線区画による曲線文が展開する口縁部片で、356は隆帯区画内に刺突文が充填される胴



第20図 I D-2住居跡

部片である。357は沈線による「∩」状文、358は隆帯区画による曲線文、359は隆沈線による曲線文や渦巻文が展開する土器片である。

石器 台石が2点(360・361)出土している。

時期 炉埋設土器などは大木10式の特徴を示しており、縄文時代中期末葉に属する。

### I D-3住居跡

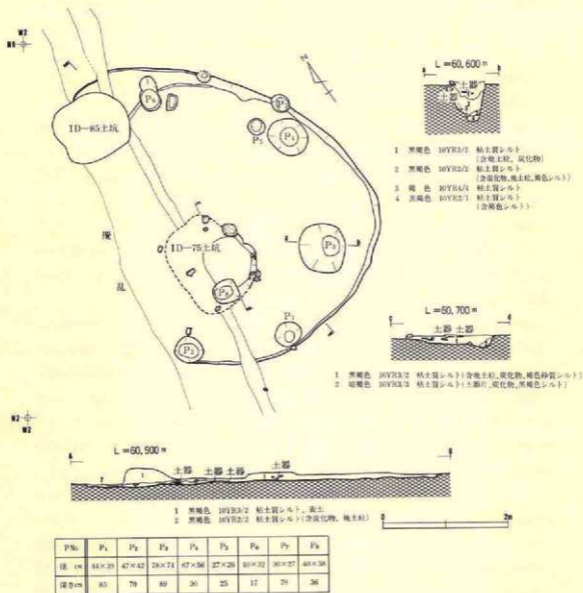
遺構 (第21回、写真図版13)

本遺構は調査区南西側東寄りに位置し、南西約6mにI D-2住居跡がある。北側でI D-5住居跡・I D-85土坑と重複する。北壁をI D-85土坑に切られており本遺構の方が古い、I D-5住居跡との新旧関係は不明である。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は、西側が攪乱を受けているため全体の形状は不明であるが、検出された壁の状況から、南北方向に長軸をもつ楕円形状を呈していたと思われる。規模は、長軸方向で5.3mを測り、短軸方向は4.2m程度であったと思われる。

埋土は、後世の水田の区画整理等の削平により攪乱を受けた耕作土(黒褐色土)が床面まで





第21図 ID-3住居跡

堆積し、南側の下部に炭化物や焼土粒が多量に混じる黒褐色粘濁質シルトが部分的に堆積して  
いただけである。

壁は、西側が攪乱を受けているため明確ではないが、北壁の内側に壁が検出されており、  
後述する柱穴列とも考え合わせ、少なくとももう1棟存在(重複)する可能性がある。壁高は  
18~5cmで西側ほど低く、やや急に立ち上がる。

床面はⅢ層を掘り込んでつくられており、攪乱による凸凹がみられる。また、遺構のほぼ中央部を南北方向に溝状の攪乱を受けている。床面全体に黒褐色粘土質シルトによる貼床が施され、ⅠD-75土坑部分は黒褐色粘土質シルトがブロックで混じる黄褐色土が貼られている。

柱穴は8個検出され、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>を伴う柱穴列とP<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>を伴う柱穴列などが考えられ、前者を本遺構の柱穴列と考えると当初想定したプランよりやや小さくなると思われる。

明確な形での炉は検出されていないが、ⅠD-75土坑上に検出された一辺1.5×1.2m、床面からの深さ約25cmの隅丸形状の掘り込みは周囲に礫が出土し、黒褐色粘土質シルトの埋土中には多量の土器とともに炭化物や焼土粒が混入しており、炉跡であった可能性がある。

#### 出土遺物（第111～120図、写真図版84～90）

炉跡?・床面・柱穴及び埋土から土器・石器等が出土している。

土器 本住居跡出土の土器は、沈線や隆帯区画による曲線的な縄文帯や無文帯が展開する大木10式に属するものが多いが、小破片のため大木9式と判別し難いものもある。また、隆・沈線による直・曲線文が展開する大木8b式と思われる土器も少量含まれている。

362・363はキャリパー形の器形をもつと思われる口縁部片で、隆帯区画によるC字状(362)・「∩」状(363)の縄文帯が展開している。364は沈線区画による曲線文が展開し、365～378は隆帯区画による曲線文が展開している。365～357・371・374はJ字状の無文帯(磨消縄文帯)が展開する土器群で、371のJ字文上部には隆帯による渦巻文が施文されている。368～370は破片のため全体の文様は不明であるが、曲線的な縄文帯や無文帯が展開すると思われる。これらの土器の中には胴部下半に波状の隆帯(368)や沈線(371)を巡らし、上部文様帯と下部文様帯を明瞭に区画しているものもある。372は橋状の把手が付く土器片で、373は隆帯によるU字・「∩」状文が縦方向に展開する底部片である。375～378は胴部中央付近に最大径を持ち、やや内反気味に上がって口縁部が緩やかに外反する器形の土器で、375は頸部付近が「く」の字状にくびれている。文様は全体の構成は不明であるが、隆帯によって区画された曲線的縄文充填帯が縦横に展開している。379～381は沈線区画による曲線文が展開する土器で、379は胴中央付近に波状沈線が走り、下部縄文帯と上部文様帯(横楕円文)を区画している。383は粗製の口～胴部片で、口縁部に磨消しによる窄の狭い無文帯が作られている。384～388・390～398は隆帯による曲線文や曲線的区画文が展開する土器で、387・394～398には棒状工具による刺突文(387・395)や竹管による円形刺突文(394・396～398)が隆帯区画内や隆帯に沿って施文されている。399～413は沈線による曲線文や曲線的区画文が展開する土器で、402～406は「∩」状文や蔽手文(406)が縦方向に展開し、399～411・407～413はJ字状の無文帯や曲線的な縄文帯が展開すると思われる。414は隆帯、415は沈線による曲線文が施文される口縁部片である。416～420は地文(縄文)の上に粘土紐を貼り付けた隆・沈線による直・曲線文が展開する土器で、416には溝

巻文が施文されている。421～423は口縁部付近に磨消しによる無文帯がつくられた粗製の土器片で、421は沈線区画されている。

石器 424～428は無茎の石錐で、424・425には基部に抉りが入っている。428は錐の可能性もある。429は削器で、片面の縁辺に剥離調整がなされており、石匙の破損品の可能性もある。430～432は石錐で、430・431は両面からの剥離調整により頭部と錐部との区別が明瞭である。433は縦形の石匙で、片面縁辺及び両面からの2次剥離調整により刃部やつまみ部が作られている。434は削器で、両面の縁辺から先端にかけて細かな剥離調整による刃部が作られている。435・436は剥片である。437は使用によると思われる剥離痕が鋭角的な縁辺に見られる剥片である。438～442は曲線的な縁辺（438・440）、直線的及び湾曲する縁辺（439・441・442）に片面（438）・両面からの剥離調整によって刃部を作り出しており、掘器・削器としての機能を有するものである。443・445・446は擦石で両面や片面に擦痕が認められる。444は敲石でほぼ全面に敲打痕と思われる凹みが見られる。447・449は台石で、いずれも欠損している。448は石皿で上面が幾分内湾している。表面に縦に走る擦痕が見られ、砥石として使用した可能性がある。

その他に、棒状石製品（450）1点、円盤状石製品（451）1点が出土している。

時期 炉跡・床面及び柱穴からは大木8b～大木10式土器が出土しているが、大木10式の特徴を示す土器が主体であり、縄文時代中期末葉に属すると思われる。

## I D-5 住居跡

### 遺 構（第22図、写真図版14・15）

本遺構は調査区南南西側北端に位置し、南側でI D-3住居跡・I D-85土坑と重複する。I D-85土坑に南壁を切られ本遺構の方が古い、I D-3住居跡との新旧関係は、切り合い状況からは把握できなかった。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形・規模は、北側が調査区外に延び、西側が後世の削平による擾乱を受けているため不明である。

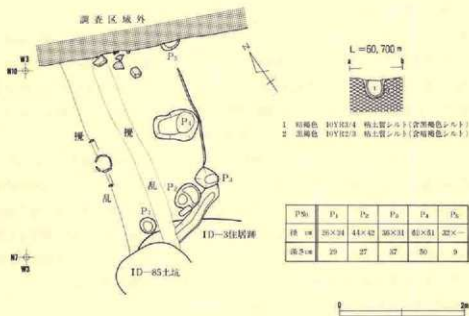
埋土は、擾乱を受けた耕作土を除去した段階でほぼ床面が検出されたため確認できなかった。壁は東壁が一部残存するだけで、壁高は2～3cmである。

床面はIII層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅くしまっている。また、床面中央を南北に切られる形で溝状の擾乱を受けている。

周溝は南側に一部検出されただけであり、幅約20cm、床面からの深さ約20cmである。

柱穴は5個検出されているが、全体の配置は不明である。

西側擾乱部分に接する床面ほぼ中央に土器が埋設されている。土器は口縁部・底部を欠いた状態で埋設されており、床面から約28cmの深さまで埋め込まれている。



第22図 ID-5住居跡

炉は検出されていない。

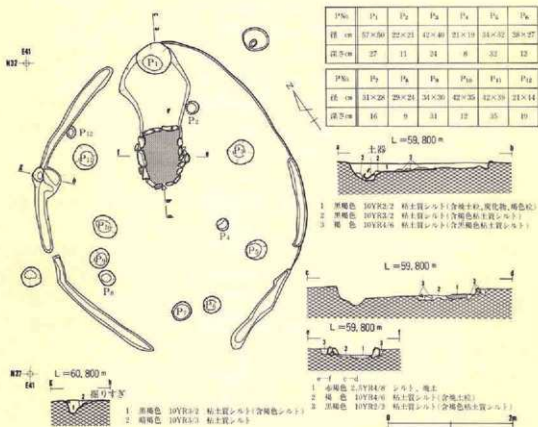
出土遺物 (第121・122図、写真図版91・92)

床面・柱穴埋土及び埋土から土器・石器が出土している。

土器 452は埋設土器で、沈線区画された「 $\square$ 」字文が胴部上半に横方向に展開し、胴下半は「 $\square$ 」状文が縦方向に展開している。453～456は沈線区画された曲線文が展開する土器片で、457は刺突文が充填されている。458・459は隆帯による曲線文が展開する口縁部片で、口縁部付近は磨消しによる無文帯となっている。

石器 460・461は無茎の石錐で、462は石錐と思われる。463は縁辺に剝離調整が見られる削器で、タールが付着している。464は縦長剥片の縁辺を片側から調整しており、削器の欠損品と思われる。465・466は擦石で、両面に擦痕が見られる。465はほぼ全面に敲打痕があり、466は台石として使われた可能性がある。467・468は台石でいずれも欠損している。469は熔岩塊製の有溝砥石で、表に2つ・裏に1つ溝状の凹みがある。

時期 埋設土器は大木9式であり、縄文時代中期後葉に属する。



第23図 IIE-1住居跡

## IIE-1住居跡

### 遺構 (第23図、写真図版14・15)

本遺構は調査区南南東側に位置し、北約1mにIIE-2住居跡、東約2mにIIE-51土坑がある。検出面は基本層序第III層上面であるが、後世の水田の区画整理等による削平を受けており、ほぼ床面で検出され、壁もほとんど残っていない。

平面形は北北東から南南西方向に長い楕円形状であるが、周溝の状況から七角形状を呈しているようにも観察される。規模は、炉の長軸方向で5m、短軸方向で4.3mを測る。

床面はIII層を僅かに掘り込んでつくられており、平坦で堅くしまっている。

周溝は北東側及び南南西側で途切れているものの、ほぼ全周を巡っていたと考えられる。幅は約20cmで、床面からの深さは4～12cmである。

柱穴は12個検出され、 $P_3-P_8-P_7-P_9-P_{11}$ の5本柱が主柱穴を構成すると考えられる。このうち $P_3-P_{11}$ 、 $P_3-P_9$ は炉の長軸方向を中心に対称をなしている。

炉は、南南西から北北西方向に長軸をもつ複式炉で、石組炉+前庭部から構成されている。石組炉は床面から約10cm掘り込んでつくられており、長さ約1m、幅約70cmの逆「U」字状を呈し、前庭部との境は棒状の亜角礫を直線的に一列に並べ区画している。前庭部は、住居跡の周縁に向かって紡錘形状に掘り込まれ、長さ約1.3m、最大幅1.1m、床面からの深さ約14cmである。また、壁との境界部分には径55cm前後の小土坑( $P_1$ )が掘り込まれており、小型の深鉢が口縁部を石組部に向ける形で斜位に埋設されていた。

#### 出土遺物 (第123図、写真図版92)

炉跡及び床面から土器が少量出土しているが、小破片がほとんどで摩耗が著しいため、2点のみの掲載である。

470は炉跡前庭部の壁際にある小土坑( $P_1$ )に埋設されていた小型の土器である。胴下半にふくらみもち、頸部が幾分くびれ、口縁部にかけて緩やかに外反する。2個の波状口縁を呈し、口縁に沿って2つの平行沈線が走り、沈線による「U」字・「 $\cap$ 」字・楕円文が器面全体に縦方向に施文されている。172は口縁に沿って刺突文が走る口縁部片であるが、文様等は摩耗が著しく不明である。

時期 埋設土器は大木9式の特徴を示しており、縄文時代中期後葉に属する。

## Ⅱ E-2 住居跡

### 遺構 (第24図、写真図版16)

本遺構は調査区南南東側北端に位置し、南約1mにⅡ E-1住居跡がある。東側でⅡ E-68・69・70土坑、北西側でⅡ E-72土坑と重複する。切り合い状況からⅡ E-68・72土坑の方が本遺構より新しいが、Ⅱ E-69・70土坑との新旧関係は不明である。検出面は基本層序第Ⅲ層上面である。

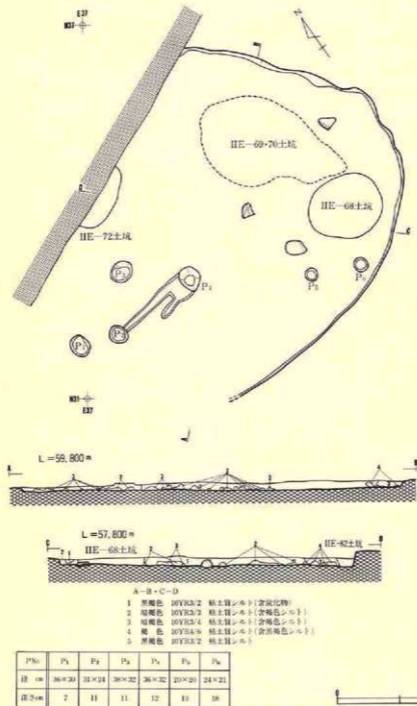
平面形・規模は、全体的に後世の削平等により西側壁が消失し、北西側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、径6.2×5m前後の楕円形状を呈していたと考えられる。

埋土は2層に大別され、上層は炭化物が少量混じる黒褐色粘土質シルト、下層は褐色シルトがブロックで混じる暗褐色粘土質シルトであるが、下層部分は掘り過ぎの可能性がある。

壁は削平のため残存状況が良くないが、壁高は7~10cmでやや急に立ち上がる。

床面はⅢ層を僅かに掘り込んでつくられ、平坦で堅くしまっている。

本遺構に伴う周溝は検出されていないが、床面中央やや南西寄りの位置に東西方向に長さ1.2m、幅約17cmの周溝状の溝が検出されており、他の住居跡が最低1棟存在(重複)する可能性



第24図 II E-2住居跡

がある。

柱穴は6個検出されているが、支柱穴を構成すると考えられるものはない。

炉は検出されていない。

**出土遺物** (第123図、写真図版92)

床面及び埋土から土器・石器が少量出土しているが、土器は小破片だけで摩耗も著しいため、2点のみの掲載である。472は口縁部下に円形竹管による刺突文が巡る口縁部片で、473は粗製の土器片である。他に台石が1点(474)出土している。

**時期** 出土土器が少ないため不明であるが、II E-1住居跡とほぼ同じ時期(縄文時代中期後葉)に属すると思われる。



## 2. 平安時代の竪穴住居跡

古代の竪穴住居跡は、調査区南東～南西側のやや高い平坦面及び西南西側低地面に続く緩やかな傾斜面から4棟、北東側丘陵地に続く緩斜面から2棟検出されている。これらの住居跡のうち3棟は焼失住居である。また、北東側緩斜面から検出された2棟は、東南東方向から北上川に流れる小沢に向かって延びる溝を伴っている。これらの住居跡は出土遺物から全て平安時代に属すると思われる。なお、平安時代の住居跡から出土した縄文時代の遺物は遺構外遺物として扱い、ここでは掲載していない。

### IC-8住居跡

#### 遺構 (第25図、写真図版17)

本遺構は調査区南西端に位置し、北東約2mにIC-4住居跡、東南東約2mにIC-5住居跡がある。北東壁でIC-78土坑と重複しており、切り合い状況から本遺構の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は遺構の大半が調査区外に延びるため不明であるが、検出された壁の状況から正方形か長方形を呈していたと考えられる。規模は不明である。

埋土は、表土(1層)を除いた黒褐色粘土質シルト層(2層)が主体である。

壁はやや急に立ち上がっており、壁高は北東壁が28cm、北西壁が23cmである。

床面は、IV層を掘り込んでつくられており、全体的に幾分凸凹がみられる。IC-78土坑部分は床面から深さ14cm程の掘り方をもち、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで塞いでつくられている。この掘り方部分は幾分凹んでおりやや柔らかく、他の部分は堅くしまっている。

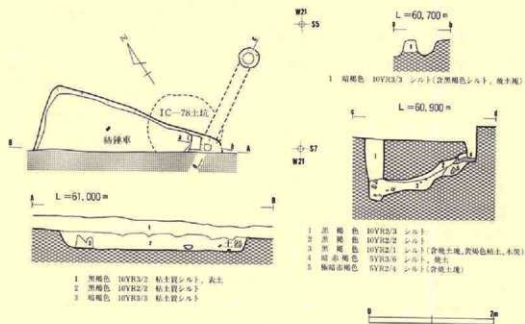
柱穴は検出されていない。

カマドは北東壁に設けられており、煙道はくりぬき式である。袖部は左袖しか検出されていないが、煙道部・煙出口とも残存状況は良い。左袖は暗褐色シルトを固めてつくられている。燃焼部は調査区外に接するため規模等は不明であるが、残存する使用面は火熱により焼土化し、厚さは約6cmである。煙道は壁際から緩やかに下降して煙出口下部につながる。煙道は径16～24cm、長さ154cmである。煙出口は径31cm、深さ98cmで底部からほぼ垂直に立ち上がっている。

本住居跡の主軸方位は、N-55°-Eである。

#### 出土遺物 (第124図、写真図版93)

カマド燃焼部付近の埋土から土師器甕形土器(475)1点、床面から鉄製紡垂車2点(476～478)が出土している。甕形土器はロクロ使用で口縁部が「く」の字状に外反する口～胴部片である。鉄製紡垂車は2点並んで検出され、476は紡垂車の紡莖であると思われる。



第25図 I C-8住居跡

### I C-11住居跡

#### 遺 構 (第26図、写真図版18)

本遺構は調査区西南西側に位置し、北約6mにI C-6住居跡状遺構、南西約5mにI C-7住居跡、南約5mにI C-10住居跡がある。検出面は基本層序第三層上面である。

平面形・規模は、西側の大半が削平を受け消失しているため全体の形状は不明であるが、残存する壁の状況から辺2.4m前後の方形状を呈していたと考えられる。

埋土は黒褐色粘土質シルトの単層である。

壁は北壁・南壁の一部と東壁が残存するだけで、壁高は3～4cmである。

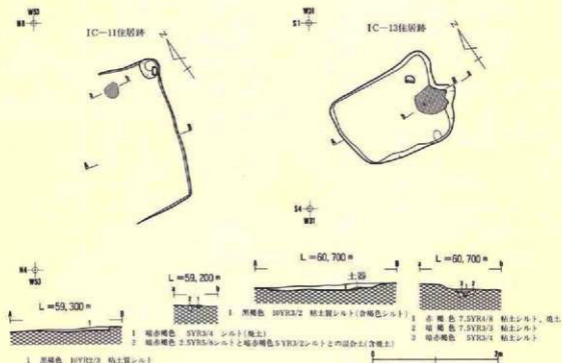
床面はIII層を僅かに掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴は北東隅に1個検出されているだけで、口径33×30cm、底径16×16cm、深さ17cmである。

カマドは北壁の東寄りに設けられているが、燃焼部の一部が検出されているだけで残存状態は悪い。残存する燃焼部は径23×22cmの円形状に焼土が形成されており、厚さは最大で約10cmである。

本住居跡の主軸方位はN-19.5'-Eである。

出土遺物はない。



第26図 IC-11・13住居跡

### IC-13住居跡

遺構 (第26図、写真図版19)

本遺構は調査区南西側に位置し、北約6mにIC-1住居跡、南東約2mにIC-4住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は東西方向に長い不整な隅丸長方形形状を呈しており、規模は東西方向で1.7m、南北方向で1.3mを測る。

埋土は、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト層である。

壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は北壁が2~4cm、東壁が5cm、南壁が10cm、西壁が3~6cmである。

床面はIII層を掘り込んでつくられており、幾分凸凹があり、堅くしまっている。

柱穴は検出されていない。

カマドは東壁のほぼ中央に設けられており、燃焼部を残すだけで残存状態は悪い。燃焼部は径50×44cmの範囲で火熱により焼土化しており、厚さは最大で13cmである。

本住居跡の主軸方位はS-80°-Eである。

#### 出土遺物（第124図、写真図版93）

床面及び床面直上から土師器甕形土器と須恵器環形土器が出土している。

土師器 甕形土器が1点(481)出土している。ロクロ使用で、ロクロからの切り離しは回転糸切り無調整である。口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部が上下にのびる形態である。

須恵器 環形土器が2点出土している。479のロクロからの切り離しは回転糸切り無調整で、480は口縁部が外反している。

#### ID-1住居跡

##### 遺構（第27図、写真図版20）

本遺構は調査区南西側に位置し、北約2mにIC-2住居跡、西約3mにIC-5住居跡がある。西側でID-61土坑、南側でID-60土坑、南壁でID-59・77土坑と重複し、切り合い状況からこれらの土坑より本遺構の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

本住居跡は、北壁東半から南壁東半にかけて焼土を伴う炭化材が多量に出土しており、焼失住居跡である。なお、鑑定によると、これらの炭化材・炭化物のほとんどはクリ材で、一部スキとなっている。

平面形は隅丸方形状を呈し、規模は南北方向で3.7m、東西方向で4.1mを測る。

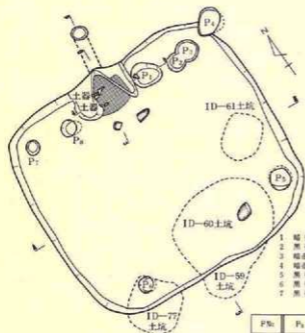
埋土は4層に細分され、1層は褐色シルトがブロックで少量混じる黒褐色粘土質シルト、2層は褐色粘土質シルトがブロックで多量に混じり、炭化物・焼土粒が少量混じる黒褐色粘土質シルトである。3層は炭化物・焼土粒が多量に混じる黒褐色粘土質シルト、4層は混入物のない黒褐色粘土質シルトである。2層は、人為的埋め戻しによる形成と思われるが、壓根等の崩壊による可能性もある。

壁はやや急に立ち上がっており、壁高は東壁が19~23cm、西壁が20~24cm、南壁が15~21cm、北壁が20~23cmである。

床面はIV層まで掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅くしまっている。また、南半側に掘り方をもち、その埋土は暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトである。柱穴状土坑は8個検出されている。P<sub>3</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>-P<sub>4</sub>の4本柱が主柱穴を構成すると考えられ、東壁に寄った配置となっている。P<sub>1</sub>はカマドの右袖脇に掘り込まれており、貯蔵穴のような機能をもっていたと思われる。

カマドは北壁中央部に設けられており、煙道はくりぬき式である。袖部は河原石に明黄褐色シルトがブロックで混じるにふい黄褐色粘土質シルトを河原石にまいてつくられている。燃焼部使用面は浅皿状をなし、火熱により焼土化している。焼土の規模は径61×44cm、厚さは最大

W15  
W16



- 1 褐色 10YR4/4 シルト(含焼土粒、木炭)
- 2 褐色 10YR4/6 シルト(含焼土)
- 3 灰褐色 10YR5/4 シルト(含明黄褐色土)
- 4 暗赤褐色 5YR3/6 シルト、焼土
- 5 黒褐色 10YR3/2 シルト
- 6 褐色 10YR4/4 シルト(含焼土)
- 7 灰褐色 10YR5/4 シルト(含明黄褐色土、焼土粒)



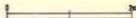
- 1 暗褐色 10YR3/3 シルト
- 2 黒褐色 10YR2/3 シルト(含焼土粒)
- 3 暗赤褐色 5YR3/3 シルト、焼土
- 4 暗赤褐色 5YR3/6 シルト、焼土
- 5 黒褐色 10YR2/3 シルト(含焼土粒)
- 6 黒褐色 10YR2/2 シルト
- 7 黒褐色 10YR2/3 シルト(含焼土粒)
- 8 黒褐色 10YR2/3 シルト
- 9 黒褐色 10YR2/3 シルト
- 10 黒褐色 10YR2/3 シルト

PNo.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
径 (cm)	45×38	80×30	38×30	50×33	36×34	27×24	24×21	28×25
深さ (cm)	19	8	8	25	26	28	6	44

W15  
W16



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト、燧)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト、炭化物、焼土)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含炭化物、焼土粒、褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト



第27図 ID-1住居跡

で8cmである。煙道は壁際から緩やかに下降して煙出口につながる。煙道は径10~22cm、長さ74cmである。煙出口は径22cm、深さ40cmで、底部からほぼ直立気味に立ち上がる。カマドの規模は最大幅1.02m、全長1.25mである。

本住居跡の主軸方位は、N-1°-Eである。

#### 出土遺物（第124～126図、写真図版93・94）

床面・カマド・小土坑・埋土から土師器の坏・甕形土器、須恵器の坏・甕・壺形土器や鉄・土製品が出土している。

土師器 環形土器（482～485）が4点出土している。ロクロ使用のもの（482～484）と不使用のもの（485）がある。482～484はロクロからの切り離しは回転糸りで、切り離した後、胴部下端から底部にかけて手持ヘラケズリによる再調整が、一部（482）及び全面（483・484）におこなわれている。これらは内面をヘラミガキ後、黒色処理されている。495は内外面をヘラミガキした後、外面をヘラナデ・ヘラケズリ調整している。また、内面に黒色処理を施したと思われる痕跡があり、焼失した可能性が高い。甕形土器は4点（489～492）出土している。全てロクロ使用で、ロクロからの切り離しは回転糸り切りである。

須恵器 環形土器は2点（486・487）出土しており、486は回転糸り無調整である。壺形土器は4点（493～495・498）出土している。ほとんどが上半を中心にロクロ調整し、その後一部ヘラケズリで調整している。下半部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整されているもの（498）もある。口縁部は外反し、口唇部が上下にのびている。甕形土器は5点出土（496・497・499～501）している。496は上半内外面にカキ目調整がなされ、その後外面の口縁部下から櫛描波状文が施されている。497・499～501は内外面に平行の叩き目痕・当て具痕をもつもので、497・500・501は内面の当て具痕が弧状をなし、499はヘラナデ調整が見られる。

土製品・鉄製品 502～504は管状の土垂で、503・504は中央がふくらむ形状をなしている。505・506は器種不明の鉄製品である。

#### IVC-1住居跡

##### 遺構（第28図、写真図版21・22）

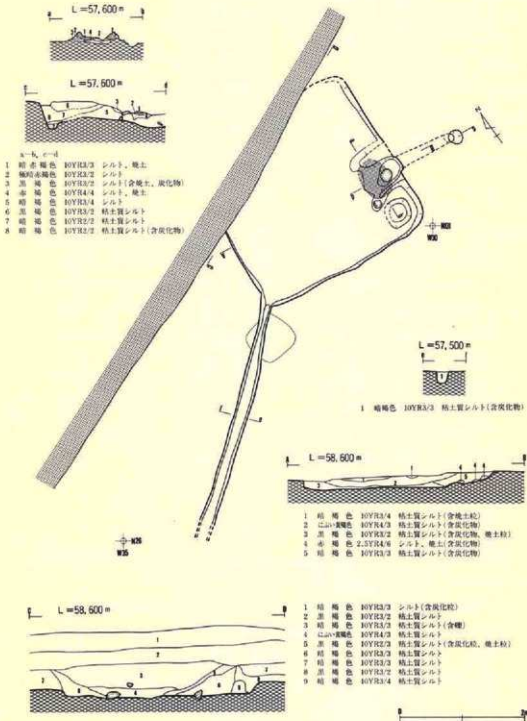
本遺構は調査区北東側西端に位置し、東南東約17mにIVD-1住居跡がある。検出面は基本層序第IV層下部で炭化粒・焼土粒の広がりから住居跡と判明した。

本住居跡は、床面全体にわたって炭化物や焼土が広がっており、焼失住居跡である。

平面形・規模は、南西側が調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、検出された壁の状況から1辺3m前後の方形状を呈していたと考えられる。

埋土は5層に細別され、上層から暗褐色粘土質シルト層、にぶい黄褐色粘土質シルト層、黒褐色粘土質シルト層（1～3層）がレンズ状に堆積している。各層とも焼土粒や炭化物を包含しており、特に3層が多い。また、調査区外に面した土層断面の観察から、本住居跡はIII層上面から掘り込まれていることが確認されている。

壁は直立気味に立ち上がっており、壁高は東壁で21～24cm、西壁で12～16cm、南壁で15～18



第28図 IV C-1 住居跡

cmである。

床面は、V層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅くしまっているが、西側に向かって幾分傾斜している。

溝は幅14～22cm、深さ19～22cm、長さ約3.6mで、住居跡の南東隅から南東方向へ沢に向かって直線的に伸びている。この溝は床面より1～2cm低くなっており、本住居跡が北東側丘陵地に続く緩斜面上に立地し、雨天時には多量の水や湧水が沢に向かって流れること等から、排水用につくられた可能性がある。

柱穴は検出されていないが、カマドの右袖脇に径42cm、床面からの深さ9cmの浅皿状の小土坑が掘り込まれており、貯蔵穴のような機能をもっていたと思われる。

カマドは東壁のやや南寄りに設けられており、煙道はくりぬき式である。袖部は暗褐色～黒褐色粘土質シルトを固めてつくられており、火熱により赤変している菌所もある。燃焼部使用面は浅皿状をなし火熱により焼土化している。焼土は径64×46cmの楕円状に形成され、厚さは最大で12cmである。また、燃焼部使用面中央の東壁寄りの位置に、径20cmの偏平な礫が埋置されており、支脚のような機能をもっていたと思われる。煙道は壁際から緩やかに下降して煙出口につながる。煙道は径10～18cm、長さ70cmである。煙出口は径20cm、深さ42cmで底部からやや急に立ち上がっている。カマドの規模は最大幅0.94m、全長1.8mである。

本住居跡の主軸方位は、S-86°-Eである。

#### 出土遺物 (第127図、写真図版95)

埋土中から土師器環形土器が1点(507)出土しており、ロクロ使用である。ロクロからの回転永切り後、胴部下端から底部全面に手持ちヘラケズリで再調整している。

### IV D-1 住居跡

#### 遺構 (第29図、写真図版23・24)

本遺構は調査区北東側に位置し、西北西約17mにIV C-1住居跡がある。検出面は基本層序第V層上面である。

本住居跡は、床面全体にわたって炭化物や焼土が広がっており、焼失住居跡である。

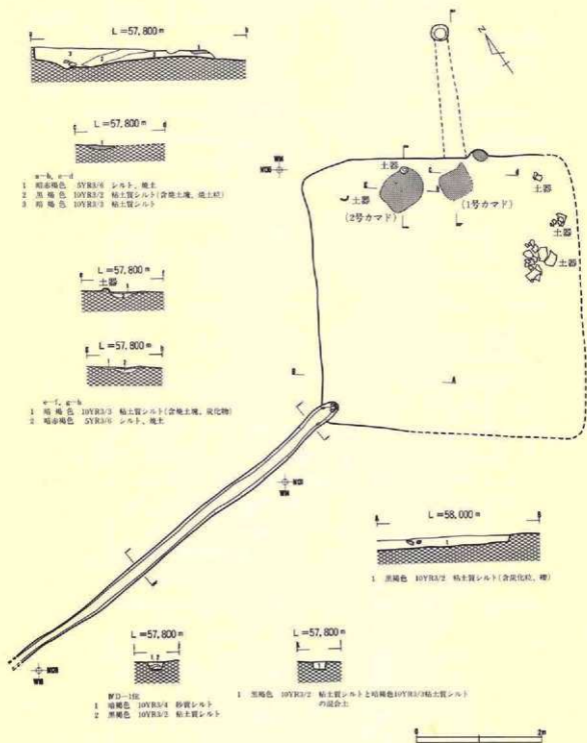
平面形・規模は、北東壁の一部及び北西壁しか確認できなかったため全体の形状は不明であるが、焼土・炭化物の広がりから、1辺4.2m前後の方形状を呈していたと考えられる。

埋土は、ほぼ床面で検出されたため明確ではないが、床面直上は黒褐色粘土質シルトが堆積していた。

床面はV層を掘り込んでつくられており、平坦で堅くしまっている。

溝は南西隅から東方向へ沢に向かって直線的に伸びており、幅14～28cm、深さ5～20cm、長さ





第29図 IV D-1 住居跡

6.3mである。住居跡と重複する部分は床面より12~14cm深く掘り込んでおり、IVC-1住居跡同様排水用につくられた可能性がある。

柱穴は検出されていない。

カマドは北東壁に2基検出されている（カマドは検出順に1号・2号カマドとする）。1号カマドは北東壁中央部に設けられており、燃焼部の一部と煙道の3分の2程度が検出されている。燃焼部使用面は火熱により焼土化しており、残存する焼土の規模は径49×45cm、厚さは最大で7cmである。煙道はくりぬき式で、壁際から緩やかに下降し煙出口につながる。煙道は径19~30cm、長さ2.09mである。煙出口は径27cm、検出面からの深さ34cmで底部から直立気味に立ち上がる。2号カマドは北東壁やや北西寄りに設けられており、燃焼部のみ残存している。燃焼部使用面は火熱により径68×58cm、厚さ9cmの規模で赤変している。また、燃焼部の北東隅に土師器壺型土器の底部が伏せた状態で埋置しており、支脚として使われた可能性がある。1号カマドと2号カマドの新旧関係は不明であるが、2号カマドに比べ1号カマドの方が残存状況が比較的良く、土器片も多く伴っていることから1号カマドの方が新しいと思われる。

本住居跡の主軸方位は、N-33°-Eである。

出土遺物（第127・128図、写真図版95・96）

床面・埋土等から土師器の坏・壺形土器、須恵器の坏・壺・壺形土器が出土している。

土師器 環形土器は1点（508）の出土で、ロクロ使用である。ロクロからの切り離しは回転糸切り無調整である。内面はヘラミガキ調整の後、黒色処理している。壺形土器は7点掲載（514~520）している。全てロクロ使用で、底部が復元されたものは517以外全て回転糸切り痕をもっている。517は上半を中心にロクロ調整し、その後、外面は中位から下をヘラケズリ調整をし、内面は上半が横方向、下半には縦方向の刷毛目調整が見られる。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部が上下または上方のみにのびる形態となっている。

須恵器 環形土器は5点（509~513）出土している。底面が復元されたものは全て回転糸切り無調整である。壺形土器は2点（521・522）出土しており、521は長頸壺と思われる。522は胴下半の叩き目・当て具痕の上に、ヘラケズリ（外面）・ヘラナデ（内面）調整がされている。

### 3. 土坑

本遺跡から検出された土坑は104基で、縄文時代の住居跡が集中して検出された調査区南南東～南西側のやや高い平坦面及び西南西側低地面（0 B～II E区）にかけて101基、調査区北東側緩斜面（IV C～V D区）から2基、IV E区から1基検出されている。土坑の大半は縄文時代に属すると考えられるが、時期不明の土坑も含めてこの項で扱うこととする。

（I C-51土坑は欠番）

#### I C-52土坑

遺構（第30図、写真図版25）

本土坑は調査区南西側に位置し、東約1mにI C-1住居跡があり、南約1mにI C-53土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形は浅い逆台形状を呈する。規模は開口部径90×86cm、底部径72×72cmで、深さは22cmである。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。埋土は2層に細分され、上層が黒褐色粘土質シルト、下層が黒褐色シルト・黄褐色シルトが混じる暗褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。

#### I C-53土坑

遺構（第30図、写真図版25）

本土坑は調査区南西側に位置し、北約1mにI C-52土坑、北東約1.5mにI C-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

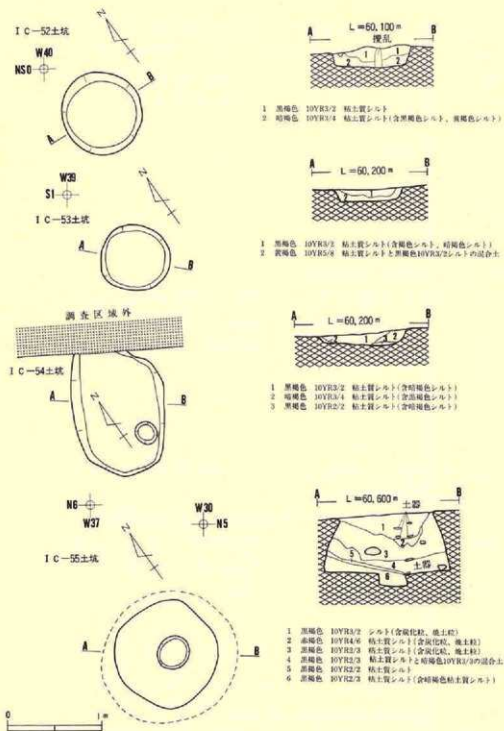
平面形は開口部・底部共に円形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径74×68cm、底部径63×60cmで、深さは12cmである。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。埋土は2層に細分され、上層が褐色・暗褐色シルトが混じる黒褐色粘土質シルト、下層が黄褐色粘土質シルトと黒褐色粘土質シルトの混合土である。出土遺物はない。

#### I C-54土坑

遺構（第30図、写真図版25）

本土坑は調査区南西側北端に位置し、南東約1.5mにI C-61土坑、南西約1mにI C-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は北側の一部が調査区外に延びるが、開口部・底部共にやや不整な隅丸長方形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径130×100cm、底部径122×80cmで、深さは12cmである。



第30図 I C-52・53・54・55土坑

底部南東隅に副穴を1個もち、規模は開口部径25×22cm、底部径18×16cmで、深さは12cmである。底面はやや凸凹があり堅くしまっている。埋土は暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体で、壁際に崩壊土と思われる黒褐色シルト混じりの暗褐色粘土質シルトがみられる。出土遺物はない。

#### I C-55土坑

##### 遺構 (第30図、写真図版25)

本土坑は調査区南西側に位置し、北にI C-57土坑が隣接し、西約1mにI C-58土坑、南西約1mにI C-56土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部がやや不整な円形で、底部は円形である。断面形はフラスコ状を呈す。規模は開口部径114×110cm、底部径144×140cmで、深さは62cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径37×32cm、底部径30×26cmで、深さは12cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体であるが、色調や混合物により6層に細分される。全体的に焼土粒・炭化物や土器片が混じり、暗褐色粘土質シルトがブロックで混じることから、人為的埋め戻しの様相を呈する。

##### 出土遺物 (第129図、写真図版97)

土器 523～526の4点出土している。523～525は沈線区画と磨消技法による曲線文が展開する土器で、523は口縁下に隆帯による曲線文が施文され、524は「 $\cap$ 」状文が施文されている。526は粗製の土器片で口縁部に地文の磨り消しによる無文帯が作られている。

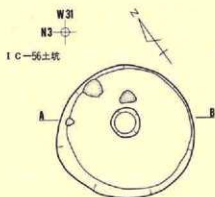
石器 2点出土している。527は無茎釜で抉りが入っている。528は石錐で丁寧な二次調整により錐部と頭部の区別が明瞭である。

#### I C-56土坑

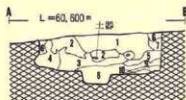
##### 遺構 (第31図、写真図版26)

本土坑は調査区南西側に位置し、東約1mにI C-92土坑、北西約0.4mにI C-58土坑が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

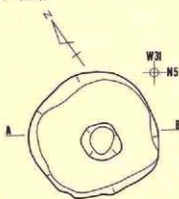
平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径147×141cm、底部径130×126cmで、深さは40cmである。底部ほぼ中央に副穴を1個もち、規模は開口部径31×30cm、底部直径22cmで、深さは13cmである。底面は壁際がやや上がり、全体に中央部が低くなっている。また、底面から長径14～20cmの礫が2個出土している。埋土は10層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体であるが、全体的に褐色～暗褐色粘土質シルトがブロック状に混入し、炭化物や焼土粒が混じることから、人為的埋め戻しの様相を呈する。



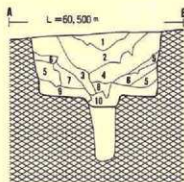
I C-56土坑



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルトと暗褐色10YR3/4粘土質シルトの混合土  
(含炭化物、焼土粒)
- 3 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト、炭化粒、焼土粒)
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト、炭化粒、焼土粒)
- 5 黒色 10YR2/1 粘土質シルト
- 6 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 7 暗褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 8 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 9 黒色 10YR2/1 粘土質シルト
- 10 褐色 10YR4/6

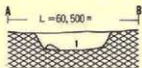
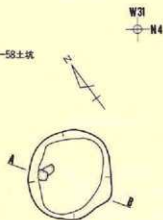


I C-57土坑



- 1 黒褐色 10YR3/2 混合土
- 2 暗褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 暗褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 黒色 10YR2/1 粘土質シルト
- 5 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 6 黒色 10YR2/1 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルトと暗褐色10YR3/4の混合土
- 8 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 9 暗褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 10 黒色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

I C-58土坑



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



第31図 I C-56・57・58土坑

#### 出土遺物 (第129図、写真図版97)

土器 529は深鉢の高台部片と思われる。530～533は隆帯区画による曲線文が展開する土器片で、534は粗製の土器片である。

石器 2点 (536・537) の出土である。いずれも無茎の石鏃で、簡単な調整のみで作りが雑である。他に、円盤状土製品 (538) が1点出土している。

#### IC-57土坑

##### 遺構 (第31図、写真図版26)

本土坑は調査区南西側に位置し、東約1.5mにIC-1住居跡、南西約1mにIC-58土坑、南約0.5mにIC-55土坑が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に不整な円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径132×130cm、底部径122×106cmで、深さは64cmである。底部ほぼ中央に副穴を1個もち、規模は開口部径44×39cm、底部径28×24cmで、深さは68cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は10層に細分され、上層から黒褐色粘土質シルト、黒色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト等が堆積している。1～2層は黒色シルトや暗褐色シルトがブロック状に混じり、人為的埋め戻しの様相を呈する。

##### 出土遺物 (第130図、写真図版97)

土器 埋土1層から沈線区画による曲線文が展開する口縁部片が1点 (538) 出土している。

#### IC-58土坑

##### 遺構 (第31図、写真図版25)

本土坑は調査区南西側に位置し、東約1mにIC-55土坑、南東約0.5mにIC-56土坑、北東約1mにIC-57土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共にほぼ円形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径96×88cm、底部径86×66cmで、深さは18cmである。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。また、底面北西隅から長径13～18cmの礫が2個出土している。埋土は暗褐色シルトが少量混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。

##### 出土遺物 (第130図、写真図版97)

土器 539・540が出土しており、隆帯による曲線区画文が展開する土器片である。

石器 振器1点 (541) の出土で、剥片の片面からの周縁への剝離調整による刃部が形成されており、先端部は急角度になっている。

### IC-59土坑

#### 遺構 (第32図、写真図版26)

本土坑は調査区南西側に位置し、北に約0.5mにIC-1住居跡が隣接し、東約1mにIC-58土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共にほぼ円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径122×108cm、底部径90×76cmで、深さは70cmである。底部中央やや北寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径21×17cm、底部径12×7cmで、深さは58cmである。底面は中央が全体的にやや低く、堅くしまっている。埋土は6層に細分され、黒色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルトが主体で、壁際に崩壊土と思われる黒褐色シルト混じりの褐色砂質シルトがみられる。出土遺物はない。

### IC-60土坑

#### 遺構 (第32図、写真図版27)

本土坑は調査区南西側に位置し、北東約1.2mにIC-61土坑がある。また、IC-1住居跡の東壁部分と重複し、切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径96×92cm、底部径74×69cmで、深さは28cmである。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。また、底部南壁際に長径14cmの隙が1個出土している。埋土は2層に細分され、1層が暗褐色シルト粒・炭化物や黒色シルトが混じる黒褐色粘土質シルトで、2層が黒褐色シルトと褐色シルトの混合土である。

#### 出土遺物 (第130図、写真図版98)

土器 542が出土しており、隆帯による曲線文が施文されている。

### IC-61土坑

#### 遺構 (第32図、写真図版27)

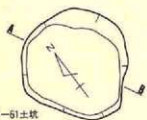
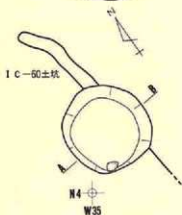
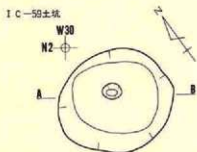
本土坑は調査区南西側北端に位置し、北西約1.2mにIC-54土坑、南西約1mにIC-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に不整な円形である。規模は開口部径120×120cm、底部径108×94cmで、深さは14cmである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。埋土は暗褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体で、壁際に褐色粘土質シルトの崩壊土がみられる。

#### 出土遺物 (第130図、写真図版98)

土器 543が出土しており、隆帯による曲線文が施文されている。



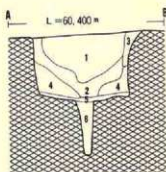


I C-61土坑

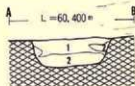
N6  
W35

I C-62土坑

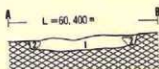
W20  
S4



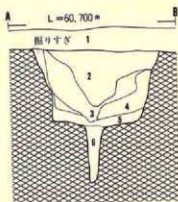
- 1 黒色 10YR2/2 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 褐色 10YR4/6 砂質シルト(含暗褐色シルト)
- 5 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 6 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含黒色土、暗褐色シルト、炭化灰)
- 2 黒褐色 10YR2/2 シルトと褐色10YR4/6 シルトの混合物



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色10YR3/4粘土質シルト)
- 2 褐色 10YR4/6 粘土質シルト



- 1 黒褐色 10YR3/2 黄土
- 2 暗褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 暗褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 暗褐色 10YR2/2 粘土質シルトと暗褐色粘土質シルトの混合物
- 5 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 6 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

第32図 I C-59・60・61・62土坑

### IC-62土坑

#### 遺構 (第32図、写真図版27)

本土坑は調査区南西側に位置し、東約2mにIC-4住居跡、北約1.2mにIC-13住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に不整形な円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径108×132cm、底部径90×82cmで、深さは80cmである。底面中央に副穴を2個もち、規模は開口部径18×14cm・底部径12×6cm・深さ11cm、開口部径23×20cm・底部径7×6cm・深さ60cmである。底面はほぼ平坦でしまっている。埋土は表土(1層)を除く5層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体であるが、全体に褐色シルトや暗褐色シルトがブロックで混じり、人為的埋め戻しの可能性がある。出土遺物はない。

### IC-63土坑

#### 遺構 (第33図、写真図版28)

本土坑は調査区西南西側に位置し、東約1.5mにIC-77土坑、南約2mにIC-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

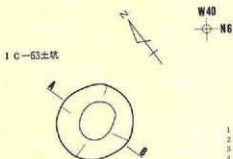
平面形は開口部が円形、底部がやや楕円形で、断面形は『U』字状を呈す。規模は開口部径82×76cm、底部径43×35cmで深さは40cmである。底面は幾分凸凹がある。埋土は4層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体であるが、全体に暗褐色粘土質シルトがブロックで混じり、人為的埋め戻しの可能性が強い。出土遺物はない。

### IC-64土坑

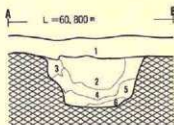
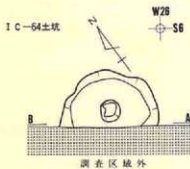
#### 遺構 (第33図、写真図版28)

本土坑は調査区南西端に位置し、東約1mにIC-8住居跡、北約2mにIC-62土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

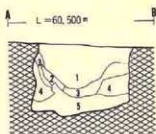
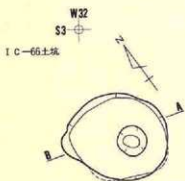
平面形は南西側が調査区外に続くため不明であるが、ほぼ円形を呈すると思われる。規模は開口部が直径103cm、底部が直径82cmで、深さが52cmである。底面に副穴を1個もち、規模は開口部径23×20cm、底部径14×10cmで、深さは30cmである。底面は凸凹があり、副穴のある中央部がやや低くなっており、壁は底面から外傾気味に立ち上がる。埋土は表土(1層)を除く5層に細分され、黒色粘土質シルト・暗褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルトが堆積している。これらの層にはそれぞれ黒褐色粘土質シルト・黒色粘土質シルト・暗褐色粘土質シルトがブロックで幾分混じっている。5層の暗褐色粘土質シルト層は中央部付近に黒褐色シルトが多量に混入し壁の崩壊土と思われる。出土遺物はない。



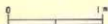
- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含黒褐色10YR2/2暗褐色粘土質シルト)



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト 表土
- 2 黒色 10YR2/1 粘土質シルト(含黒褐色粘土質シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト(含黒色粘土質シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 5 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト(含黒褐色粘土質シルト)
- 6 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト



- 1 黒色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 4 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 5 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



第33図 I C-63・64・66土坑

### IC-65土坑は欠番

### IC-66土坑

#### 遺構 (第33図、写真図版28)

本土坑は調査区南西側に位置し、南西にIC-67土坑が隣接し、東約1.5mにIC-13住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径112×92cm、底部径106×92cmで、深さは74cmである。底面中央やや南東寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径31×30cm、底部径18×13cmで、深さは70cmである。底面は平坦で壁際がやや立ち上がっている。埋土は5層に細分され、上層の暗褐色シルトが小ブロックで混じる黒色粘土質シルトがほぼ半分を占めている。以下、黒褐色粘土質シルト等が堆積し、自然堆積の様相を呈する。出土遺物はない。

### IC-67土坑

#### 遺構 (第34図、写真図版29)

本土坑は調査区南西側に位置し、北東にIC-66土坑が隣接し、東約2mにIC-62土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に不整な円形を呈する。規模は開口部径190×174cm、底部径162×131cmで、深さは53cmである。底面中央やや南西寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径69×52cm、底部径52×37cmで、深さは53cmである。底面は凸凹があり、壁は北半側がほぼ直立気味に立ち上がり、南半側が開口部に向かって外傾する。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体で5～10cmの小円礫が少量混入している。

#### 出土遺物 (第130図、写真図版98)

土器 544・545の2点出土している。

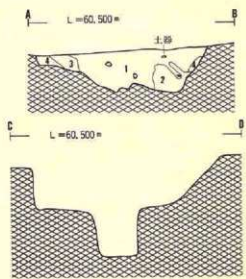
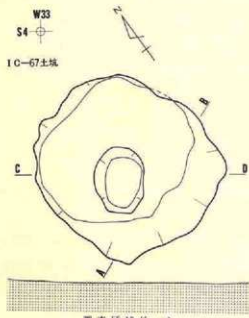
石器 凹石1点(546)と擦石1点(547)が出土している。

### IC-68土坑

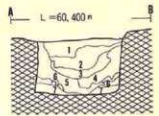
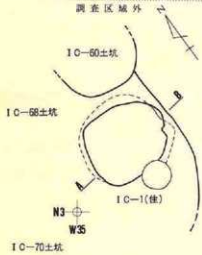
#### 遺構 (第34図、写真図版29)

本土坑は調査区南西側に位置し、北にIC-60土坑、南西にIC103土坑が隣接する。また、IC-1住居跡の東側部分と重複するが、IC-住居跡との新旧関係は不明である。検出面は基本層序第III層上面である。

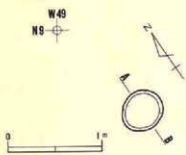
平面形は開口部・底部共にやや不整な円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 黒褐色 7.5YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR2/3 シルト(含褐色シルト)
- 2 黒色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト、黒褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 5 黄褐色 10YR2/3 粘土質シルトと暗褐色10YR3/4の混合土
- 6 褐色 10Y1/4/6 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)

第34図 IC-67・68・70土坑

径94×78cm、底部径93×90cmで、深さは59cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は7層に細分され、上層から黒褐色シルト・黒色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルト・褐色粘土質シルト等が堆積する。全体的に褐色～暗褐色シルトが小ブロックで混じり、黒褐色粘土質シルトと暗褐色粘土質シルトの混合土（5層）が不規則に入ることから、人為的埋め戻しの様相を呈している。出土遺物はない。

### I C-69土坑

#### 遺構（第35図、写真図版29）

本土坑は調査区西側北東端に位置し、北約4.5mにI C-6住居跡、南西約3mにI C-11住居跡がある。検出面は基本層序第Ⅲ層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径110×97cm、底部径86×86cmで、深さは49cmである。底面中央に副穴を1個もち、規模は開口部径27×20cm、底部径16×13cmで、深さは31cmである。底面は平坦である。埋土は9層に細分されるが、大半が黒褐色粘土質シルトで占められ、自然堆積の様相を呈する。出土遺物はない。

### I C-70土坑

#### 遺構（第34図、写真図版30）

本土坑は調査区西側東端に位置し、南約1.5mにI C-100土坑、北約3mにI C-69土坑がある。検出面は基本層序第Ⅲ層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形は浅い逆台形状を呈する。規模は開口部径47×42cm、底部径39×35cmで、深さは12cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は2層に細分され、黒褐色粘土質シルト・暗褐色粘土質シルトが堆積する。

#### 出土遺物（第130図、写真図版98）

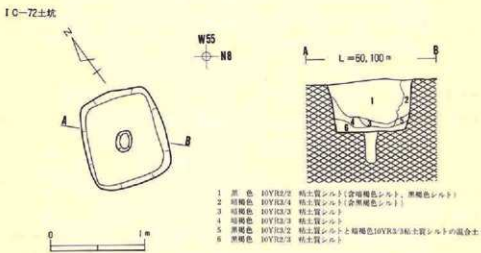
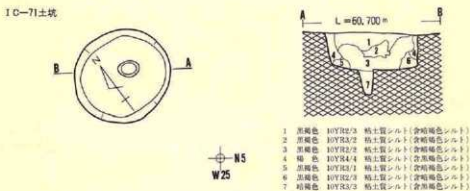
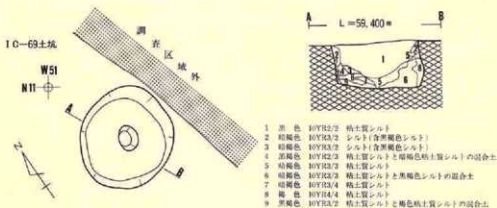
土器 548が出土しており、口縁部は沈線に区画された無文帯になっている。

### I C-71土坑

#### 遺構（第35図、写真図版30）

本土坑は調査区南西側に位置し、北北西約2.5mにI C-76土坑、西約2mにI C-91土坑がある。検出面は基本層序第Ⅲ層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径104×98cm、底部径90×97cmで、深さは40cmである。底面中央やや東寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径22×17cm、底部径16×12cmで、深さは25cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は



第35図 I C-69・71・72土坑

7層に細分され、暗褐色シルトが小ブロックで混じるやや色調の異なる黒褐色粘土質シルトが主体である。また、壁際に黒褐色シルトがブロックで混じる褐色粘土質シルトがみられる。出土遺物はない。

#### IC-72土坑

##### 遺構 (第35図、写真図版30)

本土坑は調査区西端に位置し、北東約4mにIC-6住居跡、南東約3mにIC-11住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に隅丸長方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径102×88cm、底部径87×73cmで、深さは54cmである。底面中央に副穴を1個もち、規模は開口部径22×16cm、底部径16×10cmで、深さは34cmである。底面は平坦でしまっている。埋土は6層に細分され、大半が暗褐色シルト・黒褐色シルトが小ブロックで混じる黒色粘土質シルトである。出土遺物はない。

#### IC-73土坑

##### 遺構 (第36図、写真図版30)

本土坑は調査区南西側北東端に位置し、南東約2mにIC-54土坑、南約2mにIC-1住居跡がある。西側でIC-77土坑と重複するが新旧関係は不明である。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形・規模は北東側が調査区外に続くため不明であるが、直径86cm前後の円形状を呈していたと思われる。断面形はピーカー状を呈し、深さは63cmである。底面は平坦であるが幾分凸凹がある。埋土は4層に細分され、黒褐色粘土質シルト・黒褐色シルトと褐色シルトの混合土・黄褐色粘土質シルトが不規則に堆積し、人為的埋め戻しの様相を呈する。

##### 出土遺物 (第130・131図、写真図版98)

土器 549～554が出土おり、小破片のみである。549は口縁部下の隆帯にそって刺突文が巡り、551・552は沈線による「U」・「∩」状文が展開している。

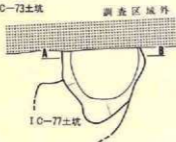
#### IC-74土坑

##### 遺構 (第36図、写真図版31)

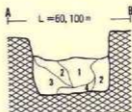
本土坑は調査区南西側に位置し、東北東約IC-82土坑、西約1mにIC-93土坑がある。本土坑はIC-4住居跡の北西側周溝部分と重複し、切り合い関係から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。



IC-73土坑

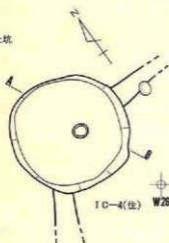


N6  
W40

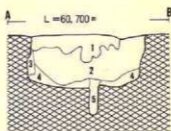


- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト、炭化物)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルトと褐色10YR4/4シルトの混合土
- 4 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト

IC-74土坑

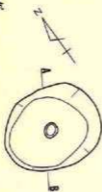


NS0  
W26

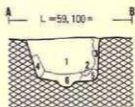


- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR1/1 粘土質シルト
- 3 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 5 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト)

IC-75土坑



W52  
S6



- 1 黒色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト、黄褐色塊)
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルトと褐色10YR4/4シルトの混合土
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルトと暗褐色10YR3/3粘土質シルトの混合土
- 5 黒褐色 10YR1/1 粘土質シルト
- 6 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト



第36図 IC-73・74・75土坑

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はビーカー状を呈する。規模は開口部径132×124cm、底部径116×112cmで、深さは56cmである。底面中央やや東寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径17×15cm、底部径13×11cmで、深さは33cmである。底面はやや凸凹があり、壁際が幾分上がる。埋土は5層に細分され、暗褐色シルトが小ブロックで混じる黒褐色粘土質シルト(1層)、黒褐色粘土質シルト(2層)が大半を占める。

**出土遺物**(第131図、写真図版98)

土器 555が出土しており、沈線区画による曲線文が展開する土器片である。

**I C-75土坑**

**遺構**(第36図、写真図版31)

本土坑は調査区西側に位置し、北側にI C-7住居跡が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共にほぼ円形で、断面形はビーカー状を呈する。規模は開口部径105×87cm、底部径85×73cmで、深さは46cmである。底面中央に副穴を1個もち、規模は開口部径17×14cm、底部径12×9cmで、深さは29cmである。底面は平坦である。埋土は6層に細分され、暗褐色シルトが小ブロックで混じる黒色粘土質シルトが大半を占める。出土遺物はない。

**I C-76土坑**

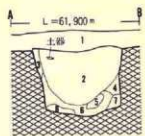
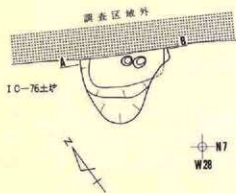
**遺構**(第37図、写真図版32)

本土坑は調査区南西側北東端に位置し、南南東約3mにI C-71土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

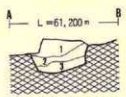
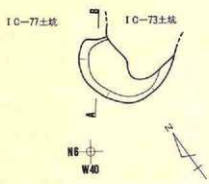
平面形・規模は北東側が調査区外に続くため不明であるが、直径90cm前後・深さ68cmの隅丸長方形状を呈していたと思われる。断面形はビーカー状を呈する。底面中央やや東寄りに副穴を2個もち、規模は開口部径14×11cm・底部径10×6cm・深さ10cm、開口部径12×10cm・底部径7×6cm・深さ13cmである。底面は中央付近が幾分低くなっている。埋土は表土(1層)を除く7層に細分され、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが大半を占める。

**出土遺物**(第131図、写真図版98)

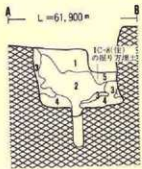
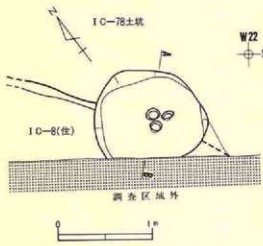
土器 556～563が出土している。沈線区画による縦方向の曲線文が展開するもの(556・558・560)、隆帯区画による曲線文が展開するもの(559・561・563)、地文だけのものなどがある。



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(表土)
- 2 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 4 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 5 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 6 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色粘土質シルト)
- 7 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 8 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含黄褐色シルト)
- 2 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルトと黄褐色10YR2/3粘土質シルトの混合
- 3 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



- 1 灰色 10YR 7/1 粘土質シルト
- 2 黒色 10YR1.7/1 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 3 褐色 10YR 4/4 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR 2/2 粘土質シルト
- 5 黄褐色 10YR 3/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)

第37図 IC-76・77・78土坑

### IC-77土坑

#### 遺構 (第37図、写真図版31)

本土坑は調査区南西側北東端に位置し、南東約2mにIC-54土坑、南約2mにIC-1住居跡がある。IC-73土坑精査中に検出され、本土坑との新旧関係は不明である。

平面形・規模は不明であるが、直径76cm・深さ21cmの円形状を呈していたと思われる。底面は壁際がやや上がり、壁は幾分外傾気味に立ち上がる。埋土は3層に分けられ、上層から黄褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト、黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土、暗褐色粘土質シルトが小ブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが堆積し、人為的埋め戻しの様相を呈する。出土遺物はない。

### IC-78土坑

#### 遺構 (第37図、写真図版32)

本土坑は調査区南西端に位置し、北西約3mにIC-64土坑、北東約2mにIC-4住居跡がある。IC-8住居跡の北東壁と重複し、IC-8住居跡のカマド跡に切られていることから本土坑の方が古い。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は、南西側の一部が調査区外に続くものの開口部・底部共に隅丸方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径120×(110)cm、底部径106×(90)cmで、深さは68cmである。底面中央やや東寄りに副穴を3個もち、規模は開口部径15×12cm・底部径10×8cm・深さ42cm、開口部径12×10cm・底部径10×9cm・深さ34cm、開口部径14×8cm・底部径10×6cm・深さ30cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は5層に細分され、黒色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルトが主体である。5層の褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトはIC-8住居跡の掘り方埋土である。

#### 出土遺物 (第131図、写真図版98)

土器 564・565が出土しており、沈線区画による曲線文が展開している。

(IC-79~81土坑は欠番)

### IC-82土坑

#### 遺構 (第38図、写真図版32)

本土坑は調査区南西側に位置し、南にIC-4住居跡が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が円形・底部が不整形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径148×132cm、底部径126×102cmで、深さは70cmである。底面中央に副穴を4個もち、規模は開口部径12×12cm・底部径11×11cm・深さ26cm、開口部径10×10cm・底部径11×10cm・深さ14cm、開口部径10×10cm・底部径8×7cm・深さ37cm、開口部径8×8cm・底部径4×4cm・深さ15cmである。底面は平坦である。埋土は8層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体で下層ほど暗褐色シルトがブロックで混入する。出土遺物はない。

### IC-83土坑

#### 遺構 (第38図、写真図版33)

本土坑は調査区南西側に位置し、IC-12住居跡と重複する。IC-12住居跡の床面精査中に検出され、P<sub>2</sub>に切られており本土坑の方が古い。

平面形は開口部・底部共に隅丸長方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径120×96cm、底部径は103×66cmで、深さは56cmである。底面中央に副穴を1個もち、規模は開口部径33×29cm、底部径23×18cmで、深さは31cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は7層に細分され、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが大半を占める。また、埋土中(3層)に黄褐色の火山灰の堆積が認められる。出土遺物はない。

### IC-84土坑

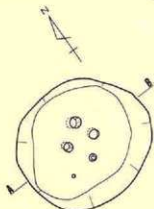
#### 遺構 (第38図、写真図版32)

本土坑は調査区南西側北寄りに位置し、西約3mにIC-71土坑がある。IC-3住居跡の西壁部分と重複するが、IC-3住居跡との新旧関係は把握できなかった。検出面は基本層序第III層上面である。

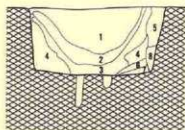
平面形は開口部・底部共に円形である。規模は開口部径124×115cm、底部径117×103cmで、深さは18cmである。底面中央東寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径17×16cm、底部径10×8cmで、深さは8cmである。底面は平坦で堅くしまり、壁はやや急に立ち上がる。埋土は2層に分けられ、暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体であるが、IC-3住居跡の埋土と明確に区別することはできない。

IC-82土坑

W25  
S4

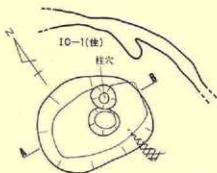


A L=60,800m B

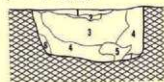


- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルトと暗褐色10YR3/3粘土質シルトの混合土
- 5 暗褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 6 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト
- 8 暗褐色 10YR4/4 粘土質シルト

IC-83土坑



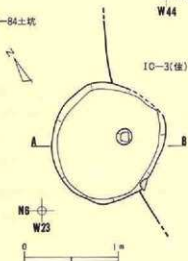
A L=59,500m B



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 2 灰色(灰褐色) 10YR5/4 火山灰
- 3 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 5 黒褐色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 6 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルトと暗褐色10YR3/3粘土質シルトの混合土
- 7 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト

IC-84土坑

W44  
N1



A L=60,800m B  
検丸



- 1 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

第38図 IC-82・83・84土坑

#### 出土遺物（第131・132図、写真図版98・99）

土器 566～569が出土しており、沈線区画による「 $\cap$ 」状文の一部と思われる沈線が垂下する土器片のみで、566は底部片である。

石器 3点出土している。570は無茎の石楯で、571は剝片の繋がる二線辺を両面から調整して刃部を作った削器、572は磨製石斧である。

（IC-85土坑は欠番）

#### IC-86土坑

##### 遺構（第39図、写真図版33）

本土坑は調査区南西側に位置し、北東約2mにIC-74土坑、南西約2mにIC-62土坑がある。IC-4住居跡の西壁部分と重複し、切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が不整形で底部は楕円形である。規模は開口部径160×134cm、底部径133×103cmで、深さは39cmである。底面ほぼ中央及び東壁際に副穴を2個もち、規模は開口部径18×12cm・底部径7×5cm・深さ11cm、開口部径19×17cm・底部径7×6cm・深さ30cmである。底面はほぼ平坦で堅くしまり、壁はやや湾曲しながら立ち上がる。埋土は3層に分けられ、暗褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

#### IC-87土坑

##### 遺構（第39図、写真図版33）

本土坑は調査区西南西側北西端に位置し、IC-6住居跡内にある。切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層である。

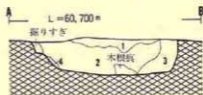
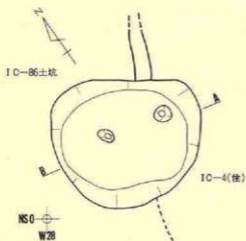
平面形は開口部が円形で、底部は楕円形である。規模は開口部径69×56cm、底部径49×34cmで、深さは57cmである。底面は平坦で堅くしまっている。壁は底面から幾分丸みを帯びながらやや急に立ち上がっている。埋土は2層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体である。

##### 出土遺物（第132図、写真図版99）

土器 573～575が出土しており、隆帯（573・575）や沈線（574）区画による曲線文が展開している。

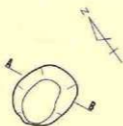
石器 擦石が1点（576）出土している。

（IC-88土坑は欠番）

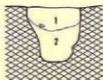


- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

IC-87土坑

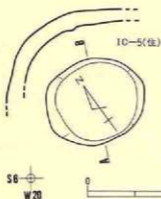


A L=58,900m B



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト

IC-89土坑



A L=60,800m B



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト

第39回 IC-86・87・89土坑



### IC-89土坑

遺構 (第39図、写真図版34)

本土坑は調査区南西端に位置し、IC-5住居跡内にある。切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径107×88cm、底部径85×80cmで、深さは57cmである。底面は凸凹があり、壁際が幾分上がっている。埋土は4層に細分され、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。

出土遺物 (第132図、写真図版99)

土器 577～579が出土しており、沈線区画による曲線文が展開するもの(577・579)と、隆帯貼付による曲線文が施文されるもの(578)がある。

(IC-90土坑は欠番)

### IC-91土坑

遺構 (第40図、写真図版34)

本土坑は調査区南西側に位置し、西約1mにIC-55土坑、南南西約1.5mにIC-92土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径78×62cm、底部径66×53cmで、深さは27cmである。底面は幾分凹凸がある。埋土は3層に細分され、暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。

出土遺物 (第132図、写真図版99)

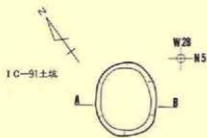
土器 粗製の土器片(580)と沈線区画による磨消縄文帯が垂下する胴部片(581)が出土している。

### IC-92土坑

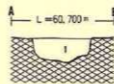
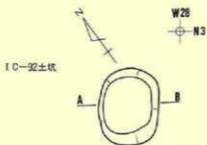
遺構 (第40図、写真図版34)

本土坑は調査区南西側に位置し、西約1mにIC-56土坑、北北東約1.5mにIC-91土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

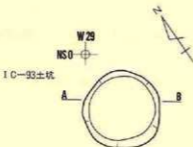
平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径82×63cm、底部径62×51cmで、深さは25cmである。底面は凹凸がある。埋土は暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。



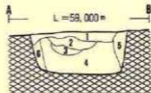
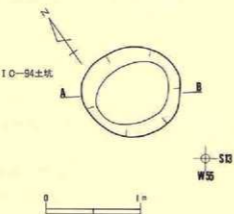
- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 赤褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 黒色 10YR4/6 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



- 1 赤褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト、炭化物、炭化粒)
- 2 赤褐色 10YR3/2 粘土質シルトと暗褐色シルトの混合土
- 3 赤褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含赤褐色粘土質シルト)



- 1 赤褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含粘土粒、褐色シルト)
- 2 赤褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 赤褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 4 赤褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 5 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 6 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含褐色シルト)

第40図 I C-91・92・93・94土坑

### IC-93土坑

#### 遺構 (第40図、写真図版34)

本土坑は調査区南西側に位置し、南東約1mにIC-4住居跡、南西約0.5mにIC-13住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径84×82cm、底部径70×68cmで、深さ30cmである。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。埋土は4層に細分され、炭化物・炭化粒を含み、暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

### IC-94土坑

#### 遺構 (第40図、写真図版34)

本土坑は調査区西南西側に位置し、南西約1mにIC-1号・2号配石遺構がある。基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が円形、底部が楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径104×96cm、底部径81×62cmで、深さ44cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は6層に細分され、上層が焼土粒を少量含み、褐色シルトが小ブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで、下層が黒褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。

### IC-95土坑

#### 遺構 (第41図)

本土坑は調査区西南西側に位置し、IC-9住居跡内にある。切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層である。

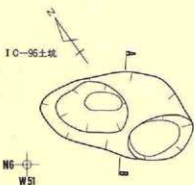
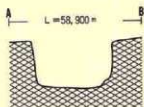
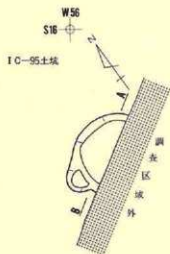
平面形・規模は南東側半分が調査区外に延びるため不明であるが、開口部が径89cm、底部が径72cm前後の円形状を呈すと思われる。断面形はピーカー状を呈し、深さは49cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト、下層が黒色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

### IC-96土坑

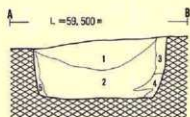
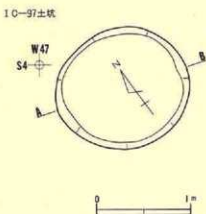
#### 遺構 (第41図、写真図版35)

本土坑は調査区西南西側に位置し、北西0.5mにIC-7住居跡が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は不整な長楕円形を呈し、底部に長径76～72cmの楕円状の窪みをもつ。規模は開口部



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 3 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 4 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含黒褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 2 黒色 10YR2/1 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 4 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

第41図 IC-95・96・97土坑

径163×88cmで、深さは窪みの最深部で40～45cmである。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。埋土は4層に細分され、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトがブロックで混じる褐色～暗褐色粘土質シルトが主体で人為的埋め戻しの様相を呈する。

**出土遺物** (第132・133図、写真図版99)

土器 582・583が出土している。いずれも沈線による区画で、582は「∩」状文である。

石器 擦石が2点(584・585)、凹石(586)が1点出土している。

### IC-97土坑

**遺構** (第41図、写真図版35)

本土坑は調査区西南西側に位置し、北東約1mにIC-10住居跡、南東約2mにIC-98土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径144×128cm、底部径123×116cmで、深さ61cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は4層に細分され、上層が黒褐色シルトで、下層が褐色シルトがブロックで混じる黒色粘土質シルトである。出土遺物はない。

### IC-98土坑

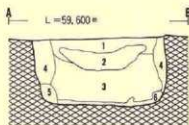
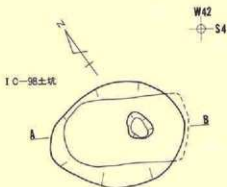
**遺構** (第42図、写真図版35)

本土坑は調査区西南西側に位置し、北西約2mにIC-97土坑、北約2.5mにIC-10住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

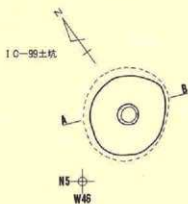
平面形は開口部が楕円形、底部が隅丸長方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径144×112cm、底部径132×69cmで、深さは71cmである。底部はほぼ中央に副穴を1個もち、開口部径30×24cm、底部径22×24cmで、深さは28cmである。底面は平坦である。埋土は6層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体であるが、1層下部にふい黄褐色の火山灰(2層)が堆積している。

**出土遺物** (第133図、写真図版100)

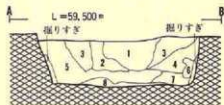
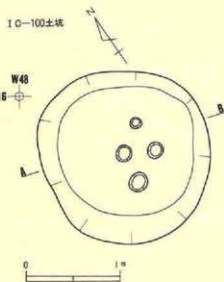
土器 587が埋土上部から出土しており、沈線区画による「U」・「∩」状文が施文され、沈線区画内に刺突文が充填されている。



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 2 濃い黄褐色 10YR5/2 シルト、火山灰
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 5 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 6 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 3 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)
- 5 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含炭化物)
- 6 褐色 10YR4/4 粘土質シルト



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 4 黒褐色 7.5YR2/3 粘土質シルト
- 5 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 6 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト
- 8 黒褐色 7.5YR3/1 粘土質シルト(含褐色シルト)

第42図 I C-98・99・100土坑

### IC-99土坑

#### 遺構 (第42図、写真図版36)

本土坑は調査区西南西側に位置し、西にIC-100土坑が隣接し、南西約3mにIC-12住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径87×78cm、底部径100×88cmで、深さは40cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径22×22cm、底部径17×16cmで、深さは28cmである。底面は平坦で中央部はやや掘り過ぎである。埋土は6層に細分され、褐色粘土質シルトが全体に粒状に混じり、焼土を少量含む黒褐色粘土質シルトが主体である。また、下部壁際に炭化物の混入がみられる。

#### 出土遺物 (第133図、写真図版100)

土器 588・589が出土しており、沈線区画による曲線文が展開する土器片である。

### IC-100土坑

#### 遺構 (第42図、写真図版36)

本土坑は調査区西南西側に位置し、東にIC-99土坑が隣接し、南約3mにIC-12住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径190×185cm、底部径150×140cmで、深さは53cmである。底部に副穴を4個もち、規模は開口部径22×19cm・底部径16×13cm・深さ52cm、開口部径18×16cm・底部径14×12cm・深さ44cm、開口部径18×16cm・底部径12×11cm・深さ51cm、開口部径12×12cm・底部径9×8cm・深さ22cmである。底面は平坦である。埋土は8層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

### IC-101土坑

#### 遺構 (第43図、写真図版36)

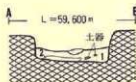
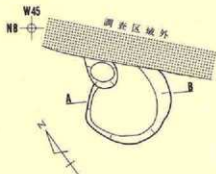
本土坑は調査区西南西側北東端に位置し、西約1mにIC-99土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は北東側の一部が調査区外に接するため不明であるが、開口部・底部共にほぼ円形であったと思われる。断面形は浅いピーカー状を呈する。規模は開口部径が94cm前後、底部径が74cm前後であったと思われる。深さは32cmである。底面は平坦である。埋土は2層に細分され、黒褐色粘土質シルトと褐色粘土質シルトとの混合土が主体で、円礫が数個含まれる。

#### 出土遺物 (第133図、写真図版100)

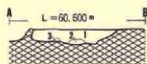
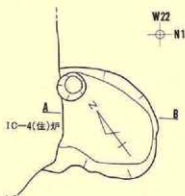
土器 590～593が出土している。590は沈線による曲線文、591は口縁部に平行沈線が巡り外面

IC-101土坑



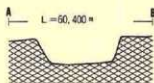
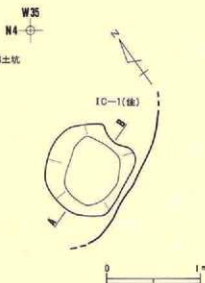
- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルトと褐色10YR4/46土質シルトの混合土
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト

IC-102土坑



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルトと暗褐色10YR3/46土質シルトの混合土
- 3 褐色 10YR4/4 粘土質シルト

IC-103土坑



第43図 IC-101・102・103土坑



に丹塗りが施されている。592は隆帯による曲線文が施文され、593は粗製の土器片である。

### IC-102土坑

#### 遺構 (第43図、写真図版37)

本土坑は調査区南西側に位置し、IC-4住居跡内にある。本土坑はIC-4住居跡精査中に検出されたもので、北西側を炉跡に切られており炉跡よりは古いが、IC-4住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は北西から南東方向に長い楕円形を呈していたと思われ、断面形は浅皿状を呈する。規模は短軸方向で104cmを測り、長軸方向で140cm前後であったと思われる。深さは16cmで、底面はほぼ平坦である。埋土は褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

### IC-103土坑

#### 遺構 (第43図、写真図版37)

本土坑は西南西側に位置し、IC-1住居跡東隅にある。切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に不整円形で、断面形は浅い逆台形状を呈する。規模は開口部径88×86cm、底部径65×54cmで、深さは29cmである。底面は平坦で堅くしまっている。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

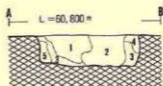
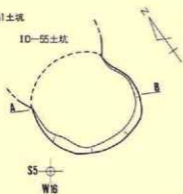
### ID-51土坑

#### 遺構 (第44図、写真図版37)

本土坑は調査区南西側に位置し、東にID-1住居跡が隣接し、西約1mにIC-5住居跡がある。ID-55土坑と重複しており、検出状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

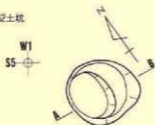
平面形は、精査中に北側をIC-55土坑部分まで掘ったため不明であるが、開口部・底部共に円形を呈すると思われる。規模は推定で開口部径114cm、底部径108cmである。断面形は浅いピーカー状を呈し、深さは33cmである。底面はやや凹凸がある。埋土は5層に細分され、暗褐色土と褐色土の混合土(1層)や褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトなどが不規則に堆積することから人為的埋め戻しの様相を呈する。出土遺物はない。

1D-51土坑



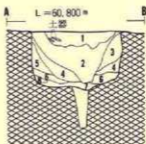
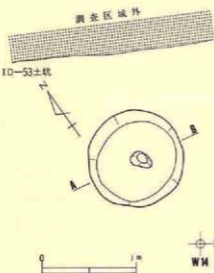
- 1 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルトと褐色10YR4/3粘土質シルトの混合土
- 2 黒褐色 10YR2/3 シルト(含暗褐色シルト、炭化物)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 4 暗褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

1D-52土坑



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含粘土粒、炭化物)
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト、炭化物)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト

1D-53土坑



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含粘土粒、炭化物)
- 2 黒色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 黒色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 暗褐色 10YR2/3 粘土質シルトと暗褐色10YR3/3粘土質シルトの混合土
- 5 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 6 暗褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 7 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含褐色シルト)

第44図 1D-51・52・53土坑

### ID-52土坑

遺構 (第44図、写真図版38)

本土坑は調査区南西端に位置し、北約1mにID-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が円形で、底部が楕円形である。規模は開口部径78×69cm、底部径50×35cmで、深さは54cmである。底面は平坦である。壁は西側がほぼ垂直に立ち上がり、東側は段を持っている。埋土は4層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体であるが、埋土上半には焼土粒や炭化物が含まれる。

出土遺物 (第133図、写真図版100)

土器 594・595が出土しており、沈線区画による曲線文が展開し、595は「□」状文が施文されている。

### ID-53土坑

遺構 (第44図、写真図版38)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、西約2mにIC-3住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径103×100cm、底部径86×78cmで、深さは58cmである。底部はほぼ中央に副穴を1個もち、規模は開口部径23×14cm、底部径12×9cmで、深さは43cmである。底面はほぼ平坦で壁際が幾分上がっている。埋土は8層に細分され、黒褐色～黒色粘土質シルトが主体で自然堆積の様相を呈する。

出土遺物 (第133・134図、写真図版100・101)

土器 596～599が出土している。596は口縁部下に磨消による幅の狭い無文帯を有する口縁部片、597は隆帯による曲線区画に刺突文が充填され、599は沈線区画によるJ字形無文帯が展開している。598は底部片である。

石器 600～609の10点が出土している。600～602は石剣で、600には浅い抉りが入り、601は円基に近く、602は基部が欠損しているが細長い形状を呈している。603は剥片の縁辺に両面からの剝離調整によって刃部を作った削器である。604～609は尖頭器で604は石匙の欠損品の可能性もある。これらは全て先端部や基部が欠損しているが、両面からの剝離調整が施されており、柳葉状を呈していたと思われる。これらの石器はいずれも埋土上位の壁際から出土しており、埋まった後の窪みに、まとめて廃棄されたか流れ込んだものと考えられる。

ID-54土坑



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含炭化物)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

ID-55土坑

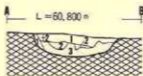


ID-51土坑



- 1 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含黄褐色シルト)
- 3 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルトと黒褐色10YR2/3粘土質シルトの混合土
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト

ID-56土坑



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/2 粘土質シルト



第45図 ID-54・55・56土坑

### ID-54土坑

#### 遺構 (第45図、写真図版38)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、東にID-64土坑が隣接し、西約4mにIC-2住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形は浅いビーカー状を呈する。規模は開口部径107×107cm、底部径92×91cmで、深さは27cmである。底面は平坦である。埋土は炭化物が少量混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

### ID-55土坑

#### 遺構 (第45図、写真図版37)

本土坑は調査区南西端に位置し、東にID-1住居跡が隣接し、西約1mにIC-5住居跡がある。ID-51土坑精査中に検出されたもので本土坑の方が古い。

平面形は開口部・底部共にほぼ円形であるが、北東～南西方向がやや長い。断面形はビーカー状を呈する。規模は開口部径117×94cm、底部径100×87cmで、深さは56cmである。底面は平坦である。また、西壁寄りの底面より約10cm上位に長径30cm程の川原石が出土している。埋土は4層に細分され、上層から黄褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト層、黒褐色土と黄褐色土との混合土層が堆積する。出土遺物はない。

### ID-56土坑

#### 遺構 (第45図、写真図版39)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、北西約2mにID-53土坑、南約1mにID-65土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

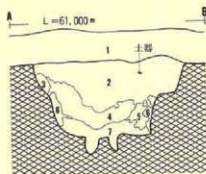
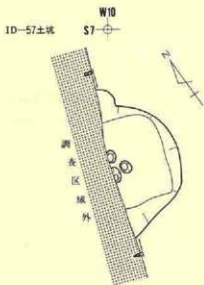
平面形は開口部・底部共にほぼ円形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径102×92cm、底部径80×64cmで、深さは23cmである。底面は凹凸がある。埋土は3層に細分され、上層が暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで、下層が暗褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。

### ID-57土坑

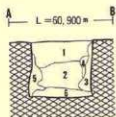
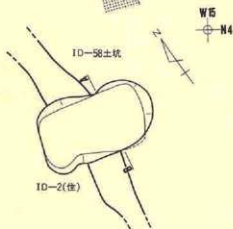
#### 遺構 (第46図、写真図版39)

本土坑は調査区南西端に位置し、北約3mにID-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

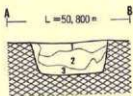
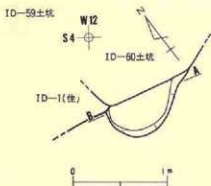
平面形は西半部分が調査区外に延びるため不明であるが、検出された底部の状況から方形状



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(表土)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 5 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 6 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 5 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 6 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト、炭化粒、焼土粒)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト、炭化粒、焼土粒)
- 3 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含暗褐色シルト)

第46図 1D-57・58・59土坑

を呈していたと思われる。規模は北北東～南南西方向で、開口部が160cm、底部が93cmを測り、深さは82cmである。底面中央に副穴が3個検出されており、規模は開口部径14×11cm・底部径8×6cm・深さ10cm、開口部径16×-cm・底部径6×-cm・深さ20cm、開口部径14×-cm・底部径9×-cm・深さ16cmである。底面はほぼ平坦である。壁は幾分外傾しながら立ち上がり、北北東側に段をもっている。埋土は表土（1層）を除く6層に細分され、褐色～暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが堆積する。出土遺物はない。

#### I D-58土坑

遺構（第46図、写真図版39）

本土坑は調査区南西側に位置し、I C-2住居跡の東側部分と重複する。切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に東西方向に長い隅丸長方形状で、断面形はピーカー状を呈する。規模は、開口部が長軸方向で124cm、短軸方向で69cm、底部が長軸方向で113cm、短軸方向で60cmを測り、深さは59cmである。底面は平坦である。埋土は6層に細分され、暗褐色～褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが堆積する。出土遺物はない。

#### I D-59土坑

遺構（第46図、写真図版39）

本土坑は調査区南西側に位置し、I D-1住居跡の南壁部分と重複する。I D-1住居跡精査中に検出されたもので、切り合い状況から本土坑の方が古い。

平面形・規模は北東側の大半がI D-1住居跡に切られているため不明であるが、残存する壁の高さは34cmである。埋土は3層に細分され、上層から炭化粒・焼土粒を含み褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトがブロックで混じる褐色粘土質シルトが堆積する。出土遺物はない。

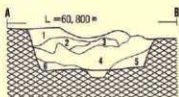
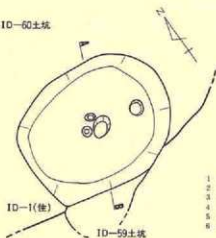
#### I D-60土坑

遺構（第47図、写真図版40）

本土坑は調査区南西側に位置し、I D-1住居跡内南壁側にある。I D-1住居跡の掘り方精査中に検出されたもので本土坑の方が古い。

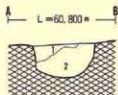
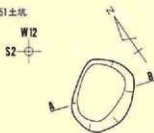
平面形は開口部・底部共に東西方向に長い楕円形である。規模は開口部径166×132cm、底部径138×106cmで、深さは40cmである。底部中央と東壁側に副穴を4個もち、規模は開口部径24×17cm・底部径18×13cm・深さ7cm、開口部径16×14cm・底部径12×12cm・深さ26cm、開口部径

1D-60土坑



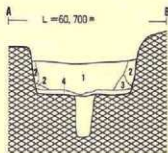
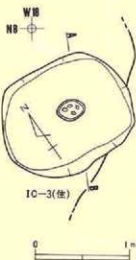
- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルトと褐色10YR4/6粘土質シルトの混合土(炭灰化跡)
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト
- 6 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含褐色シルト)

1D-61土坑



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルトと褐色10YR4/6粘土質シルトの混合土
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)

1D-62土坑



- 1 黒褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 3 黒褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト

第47図 1D-60・61・62土坑



11×10cm・底部径5×4cm・深さ11cm、開口部径10×8cm・底部径6×4cm・深さ14cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。埋土は6層に細分される。1層はID-1住居跡の掘り方の埋土であり、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト(2~3層)、下位に褐色シルトが帯状に含まれる黒褐色粘土質シルト(4層)が堆積する。出土遺物はない。

#### ID-61土坑

##### 遺構(第47図、写真図版43)

本土坑は調査区南西側に位置し、ID-1住居跡内東壁側にある。ID-1住居跡の床面積中に検出されたもので本土坑の方が古い。

平面形は開口部・底部共に北東~南西方向に長い楕円形で、断面形は椀状を呈する。規模は開口部径77×60cm、底部径61×44cmで、深さは35cmである。埋土は2層に細分され、1層はID-1住居跡の掘り方埋土であり、2層は褐色シルトが小ブロックで混じる黒褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。

#### ID-62土坑

##### 遺構(第47図、写真図版40)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、IC-3住居跡の南東壁部分と重複する。切り合い状況から本土坑の方が新しい。

平面形は開口部・底部共に東西方向に長い楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径143×114cm、底部径132×97cmで、深さは52cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径30×23cm、底部径26×18cmで、深さは44cmである。底面は平坦である。埋土は4層に細分され、黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

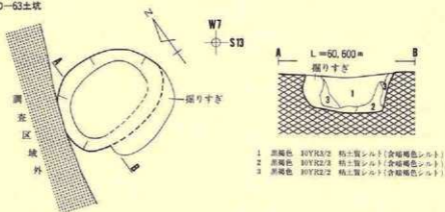
#### ID-63土坑

##### 遺構(第48図、写真図版40)

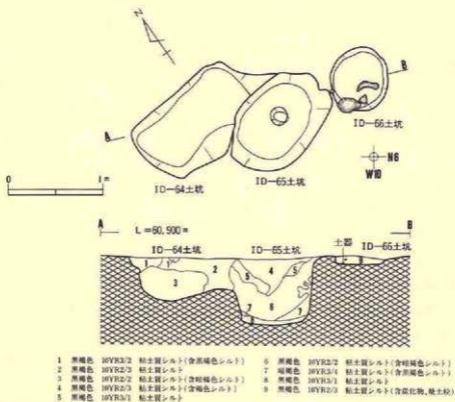
本土坑は調査区南西端に位置し、北約4mにID-57土坑、南東約3mにID-152陥し穴状遺構がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に東西方向に長い楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。南壁側が掘り過ぎており、規模は推定で開口部径120×92cm、底部径88×62cmで、深さは39cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は3層に細分され、暗褐色シルトが粒状に混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

1D-63土坑



1D-64-65-66土坑



第48図 1D-63・64・65・66土坑

### I D-64土坑

#### 遺構 (第48図、写真図版41)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、西にI D-54土坑が隣接し、北東約1mにI D-56土坑がある。南東隅の一部がI D-65土坑と重複しており、切り合い状況から本土坑の方が古い。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に東西方向に長軸方向をもつ長方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部が長軸方向で136cm・短軸方向で84cm、底部が長軸方向で122cm・短軸方向で49cmを測り、深さは46cmである。底面は西側がやや低くなっている。埋土は3層に細分され、上層が黒褐色粘土質シルト、下層が暗褐色粘土質シルトがブロックで少量混じる黒褐色粘土質シルトである。出土遺物はない。

### I D-65土坑

#### 遺構 (第48図、写真図版41)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、東にI D-66土坑が隣接する。北西側がI D-64土坑と重複しており、本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に東西方向に長い楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径120×68cm、底部径87×61cmで、深さは68cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径20×18cm、底部径16×10cmで、深さは46cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は5層に細分され、上層が下半部に褐色土が粒状に多く混じる黒褐色粘土質シルト、下層が暗褐色シルトがブロックで少量混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

### I D-66土坑

#### 遺構 (第48図、写真図版41)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、西にI D-65土坑が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径68×62cm、底部径58×53cmで、深さは8cmである。底面はほぼ平坦で、長径20～60cmの礫が3個出土している。埋土は炭化物・焼土粒が混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。

#### 出土遺物 (第134・135図、写真図版101)

土器 610～615が出土している。610～612は隆帯区画による曲線文が展開する土器で、611・612は同一個体と思われる。613は折り返し口縁を有し、614は口縁部下に隆帯が巡り、615は底部片である。

石器 616が1点出土している。大半は欠損しているが片面の一縁辺に調整痕が見られる。

(ID-67土坑は欠番)


#### ID-68土坑

##### 遺構 (第49図)

本土坑は調査区南西側に位置し、西にID-1住居跡が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に南北方向に長い隅丸長方形である。規模は東壁・西壁に掘り過ぎがあり、推定で開口部が長軸方向が100cm・短軸方向が66cm、底部が長軸方向が78cm・短軸方向が30cmで、深さが28cmである。底部南側及び北西側に副穴を2個もち、規模は開口部径22×20cm・底部径16×14cm・深さ20cm、開口部径25×20cm・底部径15×8cm・深さ15cmである。底面はやや凸凹があり、壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位付近から内湾気味に開口部に向かって開く。埋土は3層に細分され、上層が炭化物が少量混じる黒褐色粘土質シルト、下層が黒褐色粘土質シルトと褐色粘土質シルトとの混合土である。

##### 出土遺物 (第135図、写真図版101・102)

土器・土製品 617は口縁部下に磨消による無文帯をもつ土器片で、618は「」状区画の一部と思われる沈線が垂下する土器片である。619は円盤状土製品である。

(ID-69土坑は欠番)

#### ID-70土坑

##### 遺構 (第49図)

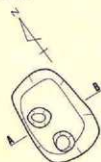
本土坑は調査区南西側に位置し、ID-1住居跡の東南東2～3m付近にある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形・規模は平面図がなく不明であるが、断面図から開口部径約120cm、底部径約80cmで、深さ29cmの不整形をなしていたと推定される。底面は凹凸があり摺鉢状を呈する。壁は幾分内湾しながら開口部に向かって立ち上がる。埋土は人為的埋め戻しの様相を呈し、暗褐色シルトがブロックで混じり、炭化物・焼土粒を含む黒褐色粘土質シルト等で構成される。

##### 出土遺物 (第135図、写真図版102)

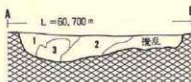
石器 台石が1点(620)出土している。

ID-68土坑



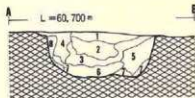
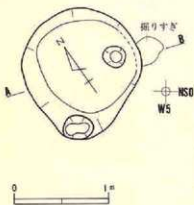
- 1 黒褐色 IOYK2/2 粘土質シルト(含炭化物)
- 2 褐色 IOYR4/6 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 3 黒褐色 IOYH2/3 粘土質シルトと褐色IOYR4/6粘土質シルトの混合土

ID-70土坑



- 1 黒褐色 IOYR3/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 2 黒褐色 IOYR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト、炭化物、粘土粒)
- 3 褐色 IOYR4/6 粘土質シルトと黒褐色IOYR2/3粘土質シルトの混合土

ID-72土坑



- 1 黒褐色 IOYR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 IOYR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト、褐色シルト)
- 3 黒褐色 IOYR3/1 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 黄褐色 IOYR5/6 粘土質シルト(含黒褐色シルト、暗褐色シルト)
- 5 黒褐色 IOYR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 6 黒褐色 IOYR2/2 粘土質シルト
- 7 暗褐色 IOYR3/3 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)

第49図 ID-68・70・72土坑

(I D-71土坑は欠番)

I D-72土坑

遺構 (第49図、写真図版41)

本土坑は調査区南西側に位置し、西約5mにI D-1住居跡があり、南約3mにI D-2住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共にやや不整な円形で、規模は開口部径140×126cm、底部径108×94cmで、深さは48cmである。底部東側に副穴を1個もち、規模は開口部径24×22cm、底部径13×12cmで、深さは14cmである。底面は凹凸があり、壁は底面から緩く内湾しながら立ち上がる。埋土は7層に細分され、褐色～暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

(I D-73土坑は欠番)

I D-74土坑

遺構 (第50図、写真図版42)

本土坑は調査区南西側北東寄りに位置し、北西約3mにI D-65土坑、南約4mにI D-71土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が不整な円形で、底部が東西方向に長軸をもつ楕円形である。断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径122×110cm、底部径96×70cmで、深さは65cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径20×19cm、底部径16×12cmで、深さは32cmである。底面は平坦である。埋土は6層に細分され、褐色シルトが粒状に散在する黒褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで構成される。

出土遺物 (第135図、写真図版102)

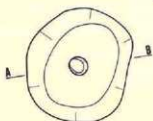
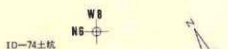
土器 621は隆帯区画による曲線文をもつ土器片である。

I D-75土坑

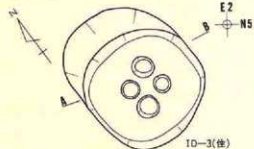
遺構 (第50図、写真図版42)

本土坑は調査区南西側東寄りに位置し、I D-3住居跡の床面中央南側にある。I D-3住居跡の床面精査中に検出されたもので、本土坑の方が古い。

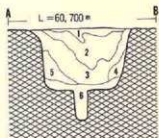
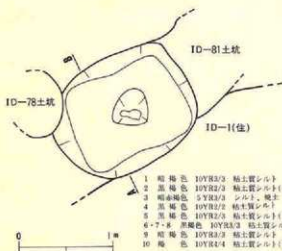
平面形は開口部・底部共に隅丸方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部が一辺122cm、底部が辺110×102cmで、深さは69cmである。底部中央に副穴を4個もち、規模は開口部直径24



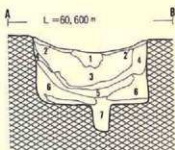
10-75土坑



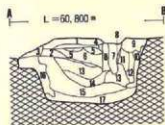
10-76土坑



- 1 黑褐色 10YR3/2 粘土質シルト、機土
- 2 黑褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 3 黑褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト粒)
- 4 黑褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含黑褐色粘土質シルト)
- 6 黄褐色 10YR3/1 粘土質シルト



- 1 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト(含黑褐色シルト)
- 2 黑褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含機土粒)
- 3 黑褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 5 黑褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 6 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト
- 7 黑褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)



第50図 I D-74・75・76土坑

cm・底部径19×18cm・深さ30cm、開口部径24×22cm・底部径18×14cm・深さ30cm、開口部径20cm・底部直径15cm・深さ28cm、開口部直径19cm・底部直径14cm・深さ30cmである。底面は平坦である。埋土は7層に細分され、上位に黒褐色シルトがブロックで混じる黄褐色粘土質シルトが貼つてある。褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体で、両壁側は崩壊土で三角状に埋まっている。出土遺物はない。尚、1・2層の上面の凹みに多量の土器・石器が出土しているが、I D-3住居跡の炉跡であった可能性があり、住居跡出土遺物として記載している。

#### I D-76土坑

##### 遺構 (第50図、写真図版42)

本土坑は調査区南西側に位置し、南側でI D-1住居跡、北西側でI D-78土坑、東側でI D-81土坑と重複する。切り合い状況から、I D-1住居跡・I D-78土坑より古い、I D-81土坑との新旧関係は不明である。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に東西方向に長軸をもつ隅丸長方形で、断面形はビーカー状を呈する。規模は開口部が辺152×120cm、底部が辺120×86cmで、深さが61cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径40×36cm、底部径20×8cmで、深さは27cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は17層に細分され、暗褐色～黒褐色粘土質シルトで構成されるが、1～8層はI D-1住居跡のカマド煙道～煙出し部分の埋土状況に対応する。出土遺物はない。

#### I D-77土坑

##### 遺構 (第51図、写真図版43)

本土坑は調査区南西側に位置し、I D-1住居跡の南西壁部分と重複する。切り合い状況から本土坑の方が古い。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部・底部共に隅丸方形で、断面形はビーカー状を呈する。規模は開口部が辺86cm、底部が辺76×64cmで、深さは61cmである。底面は平坦である。出土遺物はない。

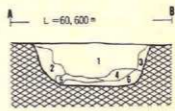
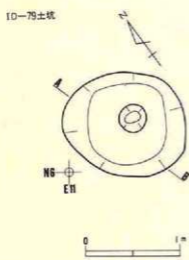
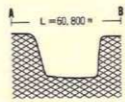
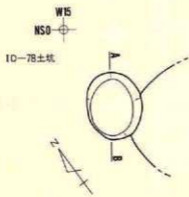
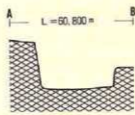
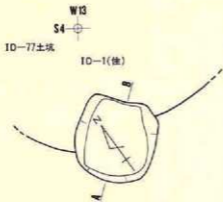
#### I D-78土坑

##### 遺構 (第51図、写真図版42)

本土坑は調査区南西側に位置し、南約1mにI D-1住居跡がある。南東側でI D-76土坑と重複し、切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部・底部共に北東～南西方向に長軸をもつ楕円形で、断面形はビーカー状を呈する。規模は開口部径72×58cm、底部径60×44cmで、深さは44cmである。底面は平坦である。出土遺物はない。





- 1 赤褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 2 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 3 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 4 灰暗褐色 7.5YR2/3 粘土質シルト
- 5 褐色 7.5YR4/4 粘土質シルト
- 6 赤褐色 7.5YR3/2 粘土質シルト

第51図 ID-77・78・79土坑

### I D-79土坑

#### 遺構 (第51図、写真図版43)

本土坑は調査区南南西側中央に位置し、南西約4mにI D-80土坑、西約8mにI D-3住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共にやや不整な円形である。規模は開口部径130×110cm、底部径86×82cmで、深さは46cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部直径30cm、底部径17×10cmで、深さは14cmである。底面は平坦で、壁は底面から内湾気味に立ち上がる。埋土は自然堆積の椋相を呈し、黒褐色粘土質シルトを主体に構成される。出土遺物はない。

### I D-80土坑

#### 遺構 (第52図、写真図版43)

本土坑は調査区南南西端に位置し、北東約4mにI D-79土坑があり、北西約8mにI D-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径110×106cm、底部径90×88cmで、深さは60cmである。底面は周囲がやや上がっている。埋土は4層に細分され、暗褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

### I D-81土坑

#### 遺構 (第52図、写真図版42)

本土坑は調査区南西側に位置し、南側がI D-1住居跡の北東隅に接する。西側でI D-76土坑と重複するが新旧関係は不明である。検出面は基本層序第III層である。

平面形は西側をI D-76土坑精査の際切られているため不明であるが、残存部から開口部径90cm、深さ53cmの円形が隅丸方形をなしていたと推定される。底面は凹凸があり、壁は底面から外傾気味に立ち上がる。埋土は3層に細分され、暗褐色シルト・黒色シルトが小ブロックで全体に多く混じる黒褐色粘土質シルトが主体で、下層に暗褐色粘土質シルトが薄く堆積する。

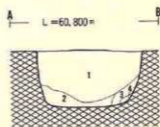
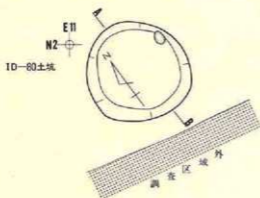
#### 出土遺物 (第135図、写真図版102)

土器 622は刺突文、623は縦位柵糸文が施文されている土器片である。

### I D-82土坑

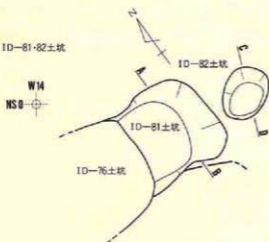
#### 遺構 (第52図、写真図版42)

本土坑は調査区南西側に位置し、南西側にI D-1住居跡、西にI D-81土坑が隣接する。検出面は基本層序第III層上面である。

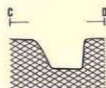


- 1 赤褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 3 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト

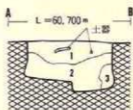
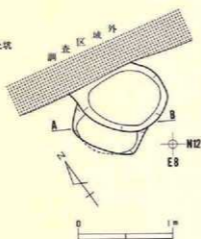
10-81・82土坑



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト、黒色シルト)
- 2 粘褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 3 赤褐色 10YR2/3 粘土質シルト



10-83土坑



- 1 赤褐色 7.5YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト、炭化物)
- 2 赤褐色 7.5YR3/2 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)
- 3 赤褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)

第52図 10-80・81・82・83土坑

平面形は東西方向に長軸をもつ楕円形で、規模は開口部径60×45cm、底部径42×32cmで、深さは34cmである。底面は平坦である。壁は南側は底面からほぼ垂直に立ち上がり、北東側は外傾する。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

#### I D-83土坑

遺構 (第52図、写真図版44)

本土坑は調査区南南西側北東端に位置し、南約6mにI D-79土坑、西南西約7mにI D-3住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形・規模は北側が調査区外に延びるため不明であるが、残存部から開口部径90~100cm、深さ54cmの不整な円形あるいは隅丸方形をなしていたと推定される。底面は凹凸があり、南西側が1段高くなっている。埋土は3層に細分され、上層が上部に炭化物が混じる黒褐色粘土質シルト、下層が上部に褐色粘土質シルトが小ブロックで少量混じる黒褐色粘土質シルトで構成される。

出土遺物 (第135・136図、写真図版102)

土器 624~630が出土している。624は沈線、625は隆帯による「∩」状文や楕円文が展開する土器片で、626は粗製の胴部片、627は底部片、628は高台部片である。

石器 擦石が2点 (629・630) 出土しており、ほぼ全面に擦痕がみられる。

(I D-84土坑は欠番)

#### I D-85土坑

遺構 (第53図、写真図版44)

本土坑は南西側東寄りに位置する。I D-3住居跡の北壁部分と重複し、切り合い状況から本土坑の方が新しい。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が不整な円形、底部が東西方向に長軸をもつ楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径114×104cm、底部径102×83cmで、深さは78cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径32×30cm、底部径21×18cmで、深さは27cmである。底面は平坦である。埋土は7層に細分され、上層から黄褐色シルト粒が全体に混じる黒褐色粘土質シルト、混じりけのない黒褐色粘土質シルト、褐色シルトを少量含む黒褐色粘土質シルトで構成される。

出土遺物 (第136図、写真図版102)

土器 631は沈線区画による磨消縄文帯が垂下する土器片で、623は粗製の土器片である。

石器 633が1点出土している。縦長剥片の一縁辺から先端にかけて、片面からの剝離調整に

よる急角度の刃部をもつ掘器である。

### I E-51土坑

遺構 (第53図、写真図版44)

本土坑は調査区南端に位置し、東約7mにII E-66土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が北東～北西方向に長い楕円形、底部が同方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は開口部径139×126cm、底部が辺104×75cmで、深さは78cmである。底部北東側に副穴を3個もち、規模は開口部径17×12cm・底部径8×6cm・深さ16cm、開口部径16×12cm・底部直径5cm・深さ16cm、開口部径15×12cm・底部径6×5cm・深さ16cmである。底面はやや凹凸があり、壁は底面から内湾気味に立ち上がる。埋土は4層に細分され、黒褐色粘土質シルトで構成されるが、上位(2層)に汚れた火山灰が堆積している。出土遺物はない。

### II E-51土坑

遺構 (第53図、写真図版45)

本土坑は調査区南南東側中央に位置し、西約2mにII E-1住居跡、南西約1.5mにII E-61土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

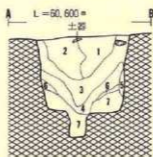
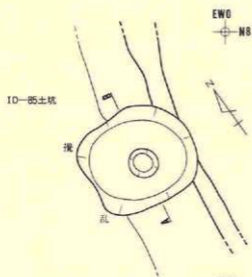
平面形は開口部が不整形、底部が北西～南東方向にやや長い隅丸方形である。規模は開口部径176×146cm、底部辺128×110cmで、深さは74cmである。底部中央南東寄りに副穴を4個もち、規模は開口部径22×18cm・底部径18×13cm・深さ25cm、開口部径19×16cm・底部径14×12cm・深さ25cm、開口部直径16cm・部径14×12cm・深さ23cm、開口部直径14cm・底部直径11cm・深さ25cmである。底面は平坦である。壁は北西～南西側が床面から垂直に立ち上がり、南東～北東側が外傾して立ち上がる。埋土は9層に細分され、主に黒色～黒褐色粘土質シルトで構成される。また、埋土上位から中位(2層)にかけてにぶい黄褐色火山灰が堆積する。出土遺物はない。

(II E-52土坑は欠番)

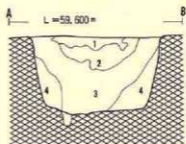
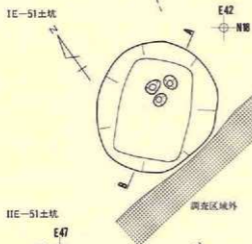
### II E-53土坑

遺構 (第54図、写真図版45)

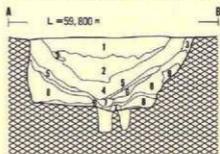
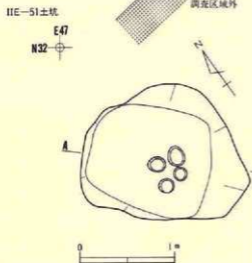
本土坑は調査区南南東側中央に位置し、北約2mにII E-51土坑があり、西にII E-61土坑が隣接する。検出面は基本層序第III層である。



- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含黄褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含黄褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト
- 6 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含黄褐色シルト)
- 7 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 2 褐色 10YR4/6 粘土質シルト、火山灰
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黄褐色シルト)



- 1 黒色 10YR-2/1 シルト(含炭化物、粘土)
- 2 以上(黄褐色) 10YR 6/3 シルト、火山灰
- 3 黒褐色 10YR 2/3 粘土質シルト
- 4 黒色 10YR1.7/1 粘土質シルト(含暗褐色粘土質シルト、黄褐色シルト、炭化物)
- 5 褐色 10YR 4/6 粘土質シルト
- 6 黒褐色 10YR1.7/1 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR 2/3 粘土質シルト
- 8 褐色 10YR 4/4 粘土質シルト
- 9 褐色 10YR 4/4 粘土質シルト(含黄褐色シルト)

第53図 1D-85・1E-51・11E-51土坑

平面形は不整な円形で、規模は開口部径90cm、底部径76×74cmで、深さは25cmである。底部南西側に副穴を1個もち、規模は開口部径27×19cm、底部径15×11cmで、深さは21cmである。底面は摺鉢状を呈し、壁は床面から緩く内湾しながら立ち上がる。埋土は4層に細分され、主に褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

## II E-54土坑

### 遺構 (第54図、写真図版45)

本土坑は調査区南南東側東寄りに位置し、西約1.5mにII E-65土坑、東南東約3mにII E-58土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形は浅いピーカー状を呈する。規模は開口部径104×94cm、底部径90×86cmで、深さは34cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径36×30cm、底部径19×10cmで、深さは64cmである。底面は副穴付近が窪んでいる。埋土は4層に細分され、暗褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

## II E-55土坑

### 遺構 (第54図、写真図版46)

本土坑は調査区南南東側東寄りに位置し、北約1.5mにII E-65土坑、西約2.5mにII E-63土坑がある。北東側でII E-60土坑と重複し、切り合い状況から本土坑の方が古い。検出面は基本層序第III層である。

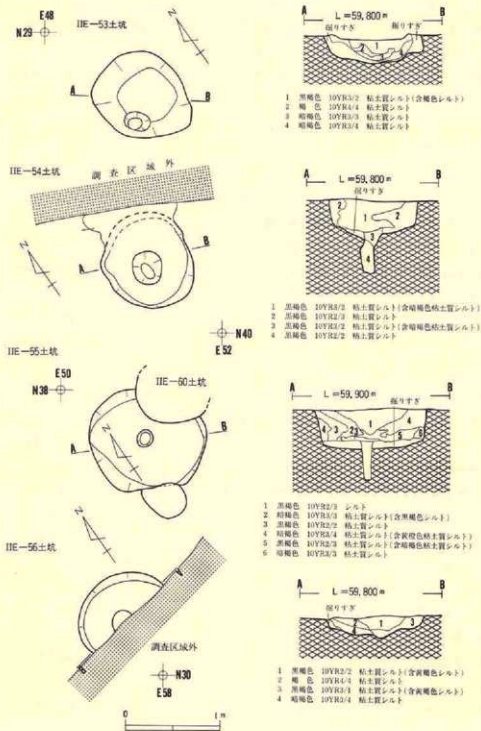
平面形は開口部・底部共に不整な円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径123×107cm、底部径121×93cmで、深さは31cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径19×17cm、底部径14×10cmで、深さは40cmである。底面は平坦である。埋土は6層に細分され、主に黒褐色粘土質シルトや暗褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

## II E-56土坑

### 遺構 (第54図、写真図版51)

本土坑は調査区南南東側東寄りに位置し、西約1mにII E-57土坑、北約1mにII E-59土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形・規模は南側半分が調査区外に延びるため不明であるが、残存部から開口部径104cmの円形をなすと推定される。断面形は浅皿状を呈する。深さは24cmである。底面は凹凸があり、中央付近が幾分窪んでいる。埋土は4層に細分され、黄褐色シルトが粒状やブロックで混じる黒



第54図 IIE-53・54・55・56土坑



褐色粘土質シルトや暗褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

## II E-57土坑

遺構 (第55図、写真図版46)

本土坑は調査区南南東端東寄りに位置し、東約1mにII E-56土坑、北東約1.5mにII E-59土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に隅丸方形で、断面形は浅いピーカー状を呈するが、ややオーバーハングする原型を一部残している。規模は開口部辺144×138cm、底部辺132×115cmで、深さは36cmである。底部に副穴を2個もち、規模は開口部径30×24cm・底部径23×12cm・深さ20cm、開口部径21×16cm・底部径15×11cm・深さ11cmである。底面は平坦である。埋土は6層に細分され、主に褐色シルトが粒状に混じる黒褐色粘土質シルトや黒褐色シルトが帯状・ブロック状に混じる褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

## II E-58土坑

遺構 (第55図、写真図版46)

本土坑は調査区南南東側東端に位置し、西北西約3mにII E-54土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に隅丸方形で、断面形は浅いピーカー状を呈する。規模は開口部辺102×99cm、底部辺97×85cmで、深さは30cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径36×28cm、底部径26×21cmで、深さは9cmである。底面は平坦である。埋土は5層に細分され、主に黒褐色粘土質シルトや暗褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

## II E-59土坑

遺構 (第55図、写真図版47)

本土坑は調査区南南東端東側に位置し、南約1mにII E-56土坑、南西約1.5mにII E-57土坑がある。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径120×102cm、底部径101×96cmで、深さは50cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径40×32cm、底部径22×16cmで、深さ20cmである。副穴の底部北東隅に開口部直径14cm・底部径7×6cm・深さ28cmの柱状土坑があるが、柱あたりかどうかは不明である。底面はやや凹凸がある。埋土は11層に細分され、上層は黒褐色粘土質シルトが主体で、4層から下位は人為的埋め戻しの様相を呈する。出土遺物はない。

II E—57 土坑

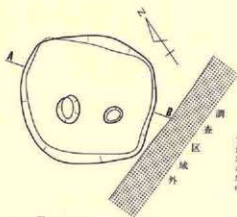
N 29  
E 54

II E—58 土坑

N 40  
E 54

II E—59 土坑

E 55  
N 32



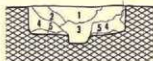
A L = 59, 900 m B



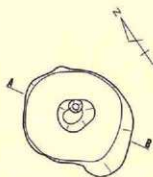
- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 2 暗褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含黒褐色粘土質シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/7 粘土質シルト
- 4 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 6 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト



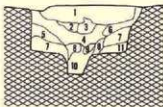
A L = 59, 800 m B



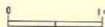
- 1 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 3 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 4 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 5 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト



A L = 59, 800 m B



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト、暗褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 3 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 4 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト
- 6 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)
- 8 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 9 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 10 暗褐色 10YR4/3 粘土質シルト
- 11 褐色 10YR4/6 粘土質シルト



第55図 II E—57・58・59土坑

## Ⅱ E-60土坑

### 遺構 (第56図、写真図版47)

本土坑は調査区南南東側東寄りに位置し、北約1.5mにⅡ E-65土坑、西約2.5mにⅡ E-63土坑がある。西側でⅡ E-55土坑と重複し、切り合い状況から本土坑の方が新しい。

平面形は開口部・底部共に隅丸方形で、規模は開口部辺80×77cm、底部径73×67cmで、深さは41cmである。底面はやや凹凸がある。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、一部内傾気味に立ち上がる。埋土は4層に細分され、暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

## Ⅱ E-61土坑

### 遺構 (第56図、写真図版47)

本土坑は調査区南南東側中央に位置し、東にⅡ E-53土坑が隣接し、西約2mにⅡ E-1住居跡がある。検出面は基本層序Ⅲ第層上面である。

平面形は開口部が不整な円形、西北西～東南東方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は開口部径140×120cm、底部径辺117×91cmで、深さは72cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径40×32cm、底部径25×22cmで、深さは29cmである。底面は平坦である。壁は底面から内傾気味に立ち上がり、北～東側にかけて掘り過ぎがみられる。埋土は11層に細分され、褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト、壁の崩壊土である褐色粘土質シルトや黄褐色砂質シルト等で構成される。また、埋土上位ににおい黄褐色の火山灰が堆積している。出土遺物はない。

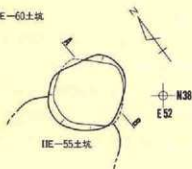
## Ⅱ E-62土坑

### 遺構 (第56図、写真図版48)

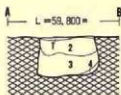
本土坑は調査区南南東側中央に位置し、北約1mにⅡ E-63土坑、南西約1.5mにⅡ E-51土坑がある。検出面は基本層序Ⅲ第層上面である。

平面形は開口部・底部共に隅丸方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部辺115×102cm、底部辺102×94cmで、深さは49cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部直径21cm、底部径13×11cmで、深さは27cmである。底面は平坦である。埋土は7層に細分され、主に焼土粒が混じる黒褐色粘土質シルトや暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

II E-60 土坑

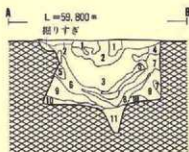


II E-55 土坑



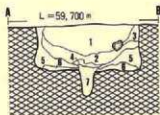
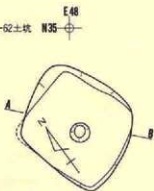
- 1 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト, 褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト

II E-61 土坑

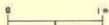


- 1 土中不明色 10YR5/4 砂質シルト、火山灰
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含炭化物, 黄土粒, 褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 6 暗褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)
- 7 褐色 10YR4/6 粘土質シルト
- 8 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 9 黒褐色 10YR5/6 砂質シルト
- 10 黒褐色 10YR2/1 粘土質シルト
- 11 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト

II E-62 土坑



- 1 赤褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含黄土粒, 黄土塊)
- 2 赤褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含黄土粒, 褐色シルト)
- 3 褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 6 赤褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 7 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト



第56図 II E-60・61・62土坑

## II E-63土坑

### 遺構 (第57図、写真図版48)

本土坑は調査区南南東側中央に位置し、南約1mにII E-62土坑、北約1mにII E-64土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が円形、底部が西北西～東南東方向に長軸をもつ隅丸長方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径115×107cm、底部辺90×66cmで、深さは72cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径18×16cm、底部直径9cmで、深さは31cmである。底面は平坦である。埋土は9層に細分され、焼土粒が混じる黒褐色粘土質シルトや黒褐色シルトがブロックで混じる暗褐色粘土質シルト等で構成される。また、埋土上位(2層)にふい黄褐色の火山灰が堆積している。出土遺物はない。

## II E-64土坑

### 遺構 (第57図、写真図版48)

本土坑は調査区南南東側中央に位置し、東約1mにII E-65土坑、南約1mにII E-63土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が円形、底部が西北西～東南東方向に長軸をもつ隅丸長方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径133×122cm、底部辺118×92cmで、深さは72cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径48×39cm、底部径30×26cmで、深さは31cmである。底面は平坦である。埋土は10層に細分され、焼土粒・褐色シルトが混じる黒褐色粘土質シルトや黒褐色シルトと褐色シルトの混合土等で構成される。また、埋土上位(2層)にふい黄褐色の火山灰が堆積する。

### 出土遺物 (第136図、写真図版103)

石器 横形石匙が1点(634)出土している。

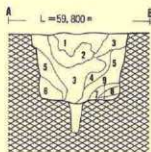
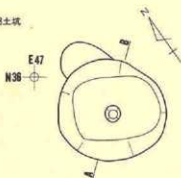
## II E-65土坑

### 遺構 (第57図、写真図版49)

本土坑は調査区南南東側東寄りに位置し、西約1mにII E-64土坑、東約1.5mにII E-54土坑がある。検出面は基本層序第III層上面である。

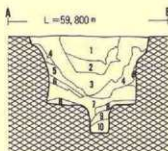
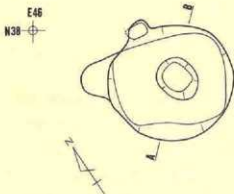
平面形は、開口部・底部共に西北西～東南東方向に長軸をもつ楕円形である。規模は開口部径161×123cm、底部径152×114cmで、深さは9cmである。底部中央南寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径28×22cm、底部径18×16cmで、深さは27cmである。底面は平坦である。埋土は褐色～暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。

II E-63土坑



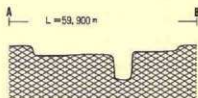
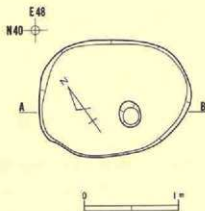
- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 2 白・黄褐色 10YR5/4 砂質シルト、火山灰
- 3 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含地土粒)
- 4 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト(含黒褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルト)
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 6 褐色 10YR4/6 粘土質シルトと暗褐色10YR3/4粘土質シルトの混合土
- 7 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
- 8 白・黄褐色 10YR6/4 粘土質シルト
- 9 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト(含黒褐色シルト)

II E-64土坑



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 2 白・黄褐色 10YR5/4 砂質シルト、火山灰
- 3 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含地土粒、褐色シルト)
- 4 暗褐色 10YR3/3 砂質シルト(含黒褐色シルト)
- 5 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含炭化粒、地土粒、黒褐色粘土質シルト)
- 6 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 7 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルトと褐色10YR4/6粘土質シルトの混合土
- 8 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 9 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 10 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)

II E-65土坑



第57図 II E-63・64・65土坑

## II E-66土坑

### 遺構 (第58図、写真図版49)

本土坑は調査区南南東側南寄りに位置し、西約1mにII E-67土坑、北約4mにII E-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部が円形、底部が北西～南東方向に長軸をもつ隅丸長方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部直径98cm、底部辺95×68cmで、深さは44cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径20×18cm、底部径14×12cmで、深さは26cmである。底面は平坦である。埋土は4層に細分され、上層が黒褐色粘土質シルト、下層が黒褐色粘土質シルトがブロックで混じる褐色粘土質シルトや暗褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

## II E-67土坑

### 遺構 (第58図、写真図版49)

本土坑は調査区南南東側南寄りに位置し、東約1mにII E-66土坑、北約4mにII E-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は開口部・底部共に隅丸方形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部辺110×100cm、底部径93×91cmで、深さは57cmである。底部中央に副穴を1個もち、規模は開口部径48×37cm、底部径24×21cmで、深さは39cmである。底面は平坦である。埋土は11層に細分され、主に褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトがブロックで混じる褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトで構成される。また、埋土上位(1層)にぶい黄橙色の火山灰が堆積する。出土遺物はない。

## II E-68土坑

### 遺構 (第58図、写真図版50)

本土坑は調査区南南東側北寄りに位置し、II E-2住居跡内にある。II E-2住居跡精査中に検出されたものであるが、切り合い状況から本土坑の方が新しい。

平面形は開口部・底部共に円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径120×103cm、底部径90×84cmで、深さは66cmである。底面は平坦である。埋土は7層に細分され、暗褐色シルト粒が全体に、炭化物が少量混じる黒褐色粘土質シルトが主体で、下位に褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが堆積する。

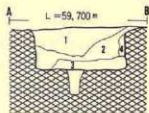
### 出土遺物 (第137図、写真図版103)

土器 粗製の土器片(635)が出土している。

II E-66土坑

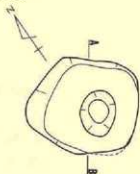


E 47  
N 24

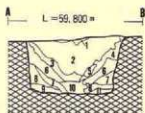


- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 2 褐色 10YR4/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 4 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト

II E-67土坑

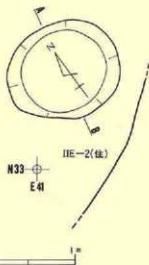


E 48  
N 25



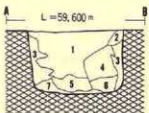
- 1 江戸層褐色 10YR5/4 砂質シルト、火山灰
- 2 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含暗褐色シルト)
- 4 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 5 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 6 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含黒褐色粘土質シルト)
- 7 褐色 10YR4/6 粘土質シルト(含黒褐色粘土質シルト)
- 8 褐色 10YR4/6 砂質シルト
- 9 暗褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 10 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 11 褐色 10YR4/6 粘土質シルト

II E-68土坑



N 33  
E 41

II E-2(柱)



- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含炭化物、暗褐色シルト)
- 2 褐色 10YR4/4 粘土質シルト
- 3 褐色 10YR4/6 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 5-6 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色粘土質シルト)
- 7 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト

第58図 II E-66・67・68土坑



## ⅡE-69土坑

### 遺構 (第59図、写真図版50)

本土坑は調査区南南東側北寄りに位置し、ⅡE-2住居跡内にある。ⅡE-2住居跡精査中に検出されたものであるが、本土坑との新旧関係は不明である。

平面形は開口部・底部共に円形である。規模は開口部径157×144cm、底部径96×95cmで、深さは88cmである。底部中央南西寄りに副穴を1個もち、規模は開口部径24×22cm、底部径12×11cmで、深さは36cmである。底面は平坦である。壁は底面から外傾気味に立ち上がる。埋土は8層に細分され、上層が炭化物・焼土が少量混じる黒褐色粘土質シルト、中～下層が褐色粘土質シルトや黒褐色粘土質シルトで構成される。

### 出土遺物 (第137図、写真図版103)

埋土上部から浅鉢が1点(636)出土している。口縁部が強く内湾し、粘土貼付けによる4個の渦巻文が施され、それと連結して4単位の文様区画がなされ、中に横楕円状に縄文原体瓦痕文が施文されている。胴部にも縄文原体瓦痕文が直・曲線的に展開し、一部は末端が渦巻をなしている。

## ⅡE-70土坑

### 遺構 (第59図、写真図版50)

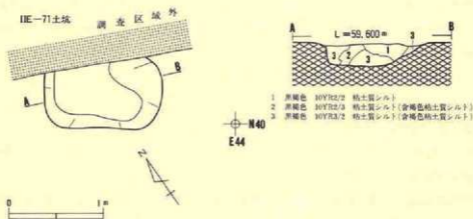
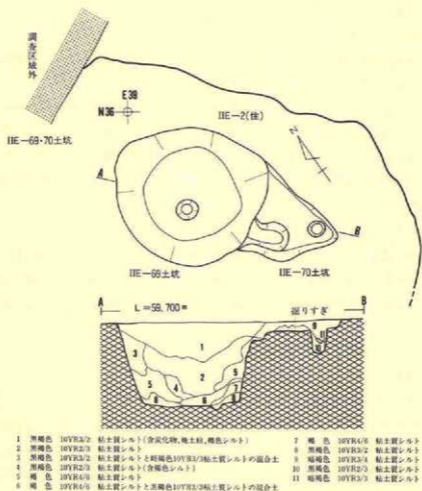
本土坑は調査区南南東側北寄りに位置し、ⅡE-2住居跡内にある。ⅡE-2住居跡精査中に検出されたもので、北西側でⅡE-69土坑と重複し、切り合い状況から本土坑の方が古い。平面形は北西～南東方向に不整に広がっているが、ⅡE-69土坑に北西側を切られているため、全体の状況は不明である。残存部での規模は東西方向で90cmを測り、深さは10cmである。底部南東側に副穴を1個もち、規模は開口部径19×15cm、底部径12×11cmで、深さは25cmである。底面は凹凸があり、壁は底面から外傾気味に立ち上がる。埋土は暗褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

## ⅡE-71土坑

### 遺構 (第59図、写真図版50)

本土坑は調査区南南東側北北東端に位置し、南西約4.5mにⅡE-2住居跡がある。検出面は基本層序第Ⅲ層上面である。

平面形・規模は北側が農道に延びるため不明であるが、長軸方向125cm程の隅丸方形か楕円形をなしていたと思われる。深さは23cmである。底面は撻鉢状を呈し、北西側が幾分低くなっている。壁は東側が底面から丸みを帯びて緩やかに立ち上がり、西側は外傾気味に立ち上がる。埋



第59図 II E-69・70・71土坑

土は3層に細分され、褐色粘土質シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトが主体である。出土遺物はない。

#### II E-72土坑

##### 遺構 (第60図)

本土坑は調査区南南東側北北西端に位置し、II E-2住居跡内にある。II E-2住居跡精査中に検出されたもので、切り合い状況から本土坑の方が新しい。

平面形は遺構の大半が調査区外に延びるため不明であるが、直径120cm程の円形をなしていたと思われる。断面形は椀状を呈し、深さは残存する底面最深部で45cmを測る。

##### 出土遺物 (第137図、写真図版103)

土器 粗製の土器片 (637) が出土している。

#### II E-73土坑

##### 遺構 (第60図、写真図版51)

本土坑は調査区南南東側北北東端に位置し、南西約3mにII E-2住居跡がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形・規模は北東側が調査区外に延びるため不明であるが、開口部径86×60cm、深さ28cmの楕円形をなしていたと思われる。底面は東側の窪みに向かって傾斜しており、窪みの最深部は土坑の検出面から44cmを測る。埋土は上層が黒褐色粘土質シルトで、下層が褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトで構成される。出土遺物はない。

#### IV E-51土坑

##### 遺構 (第60図)

本土坑は調査区東北東に位置する。検出面は褐色土層上面である。

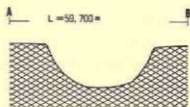
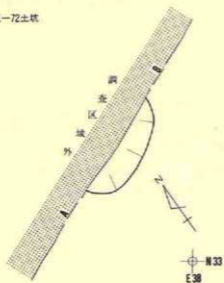
平面形・規模は北側半分が調査区外に延びるため不明であるが、開口部直径120cm程の円形をなしていたと思われる。深さは44cmである。底面は丸底状をなし、壁は底面から丸味を帯びて立ち上がる。また、底面中央が幾分窪んでおり底面からの深さは12cmである。埋土は4層に細分され、黒褐色粘土質シルトを主体に構成される。出土遺物はない。

#### IV C-51土坑

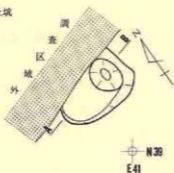
##### 遺構 (第61図、写真図版51)

本土坑は調査区北北東側に位置し、西約9mにIV C-1住居跡、東約4.5mにVD-51土坑が

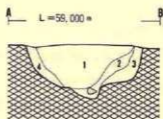
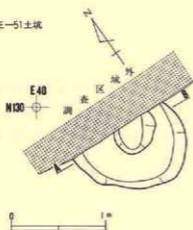
III E-72土坑



III E-73土坑



IV E-51土坑



- 1 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 3 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 4 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト

第60図 III E-72・73・IV E-51土坑

ある。検出面は基本層序第V層上面である。

平面形は東西方向に長い不整形をなし、規模は東西方向で250cm、南北方向130cmで、深さは最深部で50cmを測る。底面は凹凸があり、東側が25cm・西側が12cm底面最深部より高くなっている。埋土は3層に細分され、炭化物を少量含む暗褐色粘土質シルトが主体である。

出土遺物（第137図、写真図版103）

土器 隆帯による曲線文が施文される口縁部片（638）が出土している。

石器 無茎の石鏃が1点（639）出土している。

#### VD-51土坑

遺構（第61図、写真図版51）

本土坑は調査区北北東側に位置し、西約4.5mにIVC-51土坑、南約7.5mにIVD-1住居跡がある。検出面は基本層序第V層上面である。

平面形は開口部・底部共に南北方向に長軸をもつ楕円形である。規模は開口部径97×63cm、底部径66×55cmで、深さは24cmである。底面は弧状をなし、壁は底面から外傾して立ち上がる。埋土は炭化物・焼土粒を少量含む黒褐色粘土質シルトが主体である。

出土遺物（第137図、写真図版103）

石器 無茎の石鏃が1点（640）出土している。

#### OB-51土坑

遺構（第62図、写真図版52）

本土坑は調査区西南西側に位置する。検出面は基本層序第V層上面である。

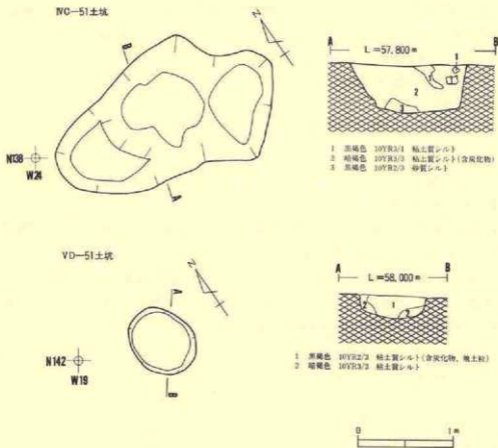
平面形・規模は南東側が調査区外に延びるため不明であるが、残存部から開口部径90cm以上、底部径32cm以上の楕円形をなしていたと思われる。深さは埋土断面図から35cm程であったと推定される。底面は摺鉢状をなし、壁は底面から外傾して立ち上がる。埋土は自然堆積の様相を呈し、黒褐色粘土質シルトを主体に構成される。出土遺物はない。

#### IB-51土坑

遺構（第62図、写真図版52）

本土坑は調査区西南西側北端に位置する。検出面は基本層序第IV層上面である。

平面形・規模は南東側が調査区外に延びるため不明であるが、残存部から開口部径120cm以上、底部径32cmの円形をなしていたと思われる。深さは埋土断面図から90cm以上であったと推定される。底面は幾分凹凸があり、壁は底面から外傾して立ち上がる。埋土は2層に細分され、褐



第61図 NC-51・VD-51土坑

色～暗褐色シルトがブロックで多く混じり人為的埋め戻しの様相を呈する。

出土遺物 (第137図、写真図版103)

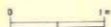
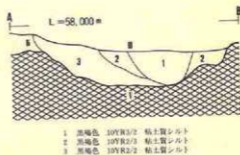
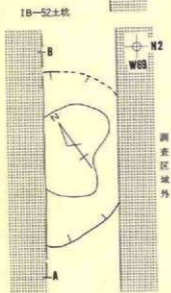
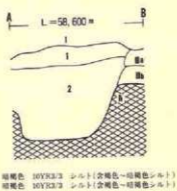
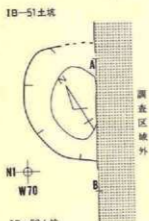
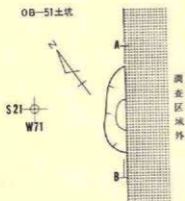
土器 641が出土している。沈線文が施文されているが、摩耗が著しく詳細は不明である。

#### IB-52土坑

遺構 (第62図、写真図版52)

本土坑は調査区西南西側北端に位置する。検出面は基本層序第V層上面である。

平面形・規模は北西側が調査区外に延びるため不明であるが、残存部から開口部径183cm程の円形をなしていたと思われる。深さは36cmである。底面は凹凸があり、壁は底面から緩やかに



第62図 OB-51・IB-51・52土坑

外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積の様相を呈し、黒褐色粘土質シルトを主体に構成される。

出土遺物（第137図、写真図版103）

土器 642・643が出土している。642は口縁部下に隆帯が巡り、643は地文の縄文だけである。

#### 4. 陥し穴状遺構

I D-151陥し穴状遺構

遺構（第63図、写真図版54）

本遺構は調査区南西端東側に位置し、西約3.5mにI D-63土坑、南約4mにI D-152陥し穴状遺構がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は西北西～東南東方向に細長い溝状で、断面形はU字状を呈する。長軸方向の東南東側は調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、残存部での規模は開口部166×40cm、底部159×17cmで、深さは54cmである。埋土は7層に細分され、褐色～暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトを主体に構成される。長軸方向はN-62°-Wを示す。出土遺物はない。

I D-152陥し穴状遺構

遺構（第63図、写真図版54）

本遺構は調査区南西端東側に位置し、北西約3mにI D-63土坑、北約4mにI D-152陥し穴状遺構がある。検出面は基本層序第III層上面である。

平面形は西北西～東南東方向に細長い溝状であるが、長軸方向の東南東側の大半が調査区外に延びるため全体の形状は不明である。断面形はU字状を呈する。残存部での規模は開口部61×31cm、底部53×15cmで、深さは59cmである。埋土は5層に細分され、黒褐色粘土質シルトを主体に構成される。長軸方向はN-54°-Wを示す。出土遺物はない。

#### 5. 配石遺構

配石遺構は調査区西南西側に位置し、I C-9住居跡の北東側に隣接して2基並んで検出された。検出面は基本層序第III層上面である。

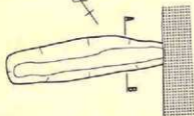
I C-1号配石遺構

遺構（第64図、写真図版53）

長径5～30cmの礫が南北方向に長軸をもつ楕円形に配置され、開口部径93×74cm・底部径80×



ID-151陥し穴状遺構

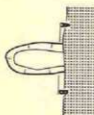


A L=59,600 B



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 4 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 5 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 6 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
- 7 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト

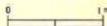
ID-152陥し穴状遺構



A L=59,600 B



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 5 暗褐色 10YR3/1 粘土質シルト



第63図 ID-151・152陥し穴状遺構

64cm・深さ22cmの土坑を伴っている。礫は土坑中位まで2〜3段に埋置されている。埋土は暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。出土物はない。

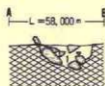
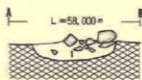
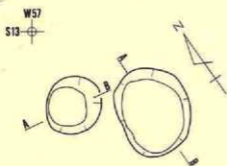
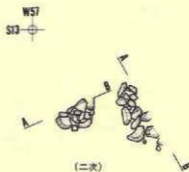
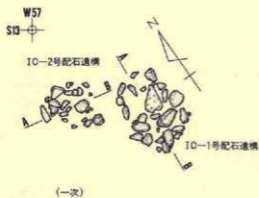
### IC-2号配石遺構

遺構 (第64図、写真図版53)

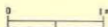
長径5〜30cmの礫を円形に配置し、開口部径64×59cm・底部径44×42cm・深さ23cmの円形の土坑を伴っている。礫は土坑の埋土下部まで埋置されている。埋土はIC-1号配石遺構同様、暗褐色シルトがブロックで混じる黒褐色粘土質シルトの単層である。

出土物 (第137・138図、写真図版103・104)

石器 埋置された礫に混じて644〜646が出土している。644は礫の側縁に調整による剝離痕、645は扁平な円い礫の側縁のほぼ全周に敲打痕が認められる。646は擦石でほぼ全面に敲打痕も



1 黒燐石 10YR2/2 粘土質シルト(含暗褐色シルト)



第64図 IC-1・2号配石遺構

見られる。

## 6. カマド状遺構・焼土遺構

カマド状遺構・焼土遺構は調査区北北東傾斜面から計16基検出された。検出面は基本層序第II～V層上面までである。カマド跡と判明されたものはカマド状遺構とし、その他は焼土遺構とした。

### IVC-1号カマド状遺構

遺 構 (第65図、写真図版55)

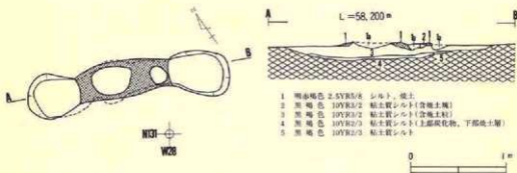
本遺構は調査区北北東側に位置し、西約1mにIVC-1住居跡、南東約2mにIVC-203焼土遺構がある。検出面は基本層序第II層である。

焚口部・燃焼部・煙出し部によって構成され、焚口部から煙出し部まで幅30～40cm、長さ約2m、深さ20cmの不整な長楕円状に掘り込んでつくられている。燃焼部・煙出し部は、掘り込み底部側面から粘土をへっつい状に固めてつくられたと思われる、平面形0.4×1m、厚さ約2cmの堅い焼土層が掘り込み最深部まで約20cmにわたって形成されている。また、焼土層上部には径42×22cm、20×16cmの大小2つの穴が並んでおり、それぞれ燃焼部・煙出し部に対応する。中は黒褐色粘土質シルト(2層)が入り込んでおり空洞になっていたと思われる。底面は薄い焼土層が形成され、上に1cm程の炭化物が堆積している。出土遺物はない。

### IVC-201焼土遺構

遺 構 (第66図、写真図版55)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北東約4mにIVC-51土坑、南東約3mにIVD-202焼土遺構がある。検出面は基本層序第II層である。焼土は38×29cm、厚さ4cmの規模をもち、不整楕円形を呈している。出土遺物はない。



第65図 IVC-1号カマド状遺構

#### IVC-202焼土遺構

遺 構 (第66図、写真図版55)

本遺構は調査区北北東側に位置し、東にIVC-51土坑が隣接する。検出面は基本層序第II層である。焼土は41×31cm、厚さ4cmの規模をもち、不整楕円形を呈している。出土遺物はない。

#### IVC-203焼土遺構

遺 構 (第66図、写真図版56)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北西約2mにIVC-1号カマド状遺構、北西約4mにIVC-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層で、焼土粒の広がりから遺構と判明したものである。

本遺構は0.6×1.3m、深さ20cmの楕円状の掘り込みをもち、底面は北側から南側に向かって緩やかに上昇する。底部中央に土師器の甕が押し潰された形で倒立に設置されていた。埋土は6層に細分され、炭化物・焼土粒が混じる暗褐色粘土質シルトや黒褐色粘土質シルトで構成される。土師器の北側にあたる4層は加熱を受けている。

本遺構は出土した土師器などの様子から平安時代のカマドの可能性がある。

出土遺物 (第138図、写真図版104)

土器 土師器の甕が1点(647)出土している。ロクロ使用后、胴部下半をヘラケズリ(外面)調整や刷毛目(内面)調整をしている。

#### IVC-204焼土遺構

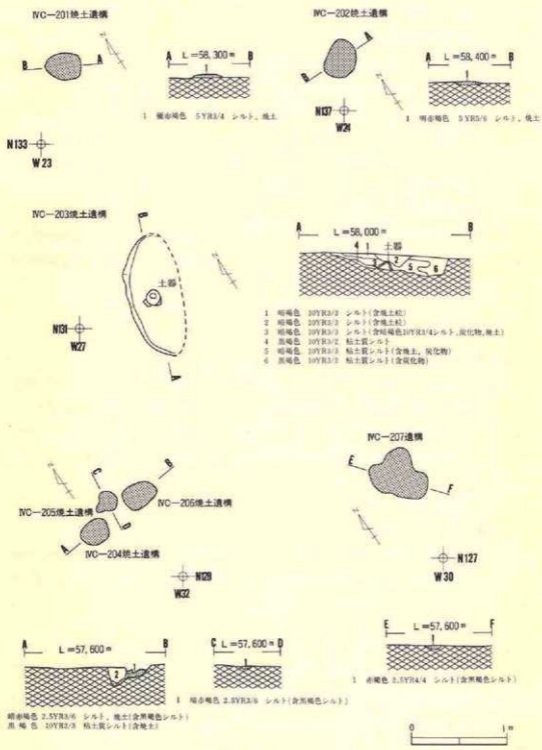
遺 構 (第66図、写真図版56)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北東約1mにIVC-1住居跡があり、IVC-205・206焼土遺構が隣接する。検出面は基本層序第III層である。焼土は31×25cmの楕円状に薄く堆積しており、明確な焼土層は形成されていない。出土遺物はない。

#### IVC-205焼土遺構

遺 構 (第66図、写真図版56)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北東約1mにIVC-1住居跡があり、IVC-204・206焼土遺構が隣接する。検出面は基本層序第III層である。焼土は25×23cmの不整形に広がり、厚さは3cmである。出土遺物はない。



第66図 IV C-201・202・203・204・205・206・207焼土遺構

#### IV C-206焼土遺構

##### 遺 構 (第66図、写真図版56)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北東約1mにIV C-1住居跡があり、IV C-204・205焼土遺構が隣接する。検出面は基本層序第III層である。焼土は37×25cmの不整形円状に広がり、厚さは最大で9cmである。また、西側の焼土直上には少量含む黒褐色粘土質シルトが堆積している。出土遺物はない。

#### IV C-207焼土遺構

##### 遺 構 (第66図、写真図版56)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北約2.5mにIV C-1住居跡がある。検出面は基本層序第III層である。焼土は64×52cmの不整形に薄く広がり、厚さは最大で5cmである。出土遺物はない。

#### IV C-208焼土遺構

##### 遺 構 (第67図、写真図版57)

本遺構は調査区北北東側に位置する。北東側にIV C-1住居跡が隣接し、IV C-1住居跡の溝と重複する。切り合い状況から本遺構の方が新しい。検出面は基本層序第V層上面である。焼土は70×65cmの隅丸方形状に広がり、厚さは最大で14cmである。北西側焼土下部の炭化物が混じる黒褐色粘土質シルトはVIC-1住居跡の溝の埋土を構成する。出土遺物はない。

#### IV C-209焼土遺構

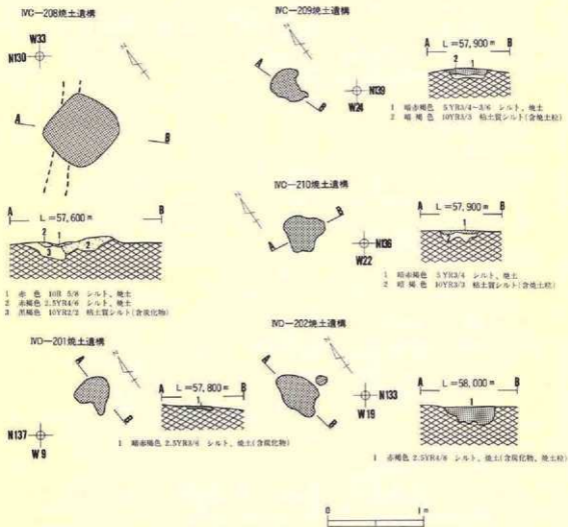
##### 遺 構 (第67図、写真図版57)

本遺構は調査区北北東側に位置し、東にIV C-51土坑が隣接する。検出面は基本層序第IV層上面である。焼土は42×35cmの不整形に広がっており、厚さは最大で8cmである。出土遺物はない。

#### IV C-210焼土遺構

##### 遺 構 (第67図、写真図版57)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北東約1.5mにIV C-51土坑がある。検出面は基本層序第V層上面である。焼土は51×41cmの不整形に広がっており、厚さは最大で4cmである。出土遺物はない。



第67図 IV C-208・209・210・IV D-201・202焼土遺構

#### IV D-201焼土遺構

遺構 (第67図、写真図版57)

本遺構は調査区北北東側に位置し、西約1.5mにIV D-1住居跡がある。検出面は基本層序第VI層である。焼土は41×36cmの不整形に広がっており、厚さは最大で4cmである。出土遺物はない。

#### IV D-202焼土遺構

遺 構 (第67図、写真図版58)

本遺構は調査区北北東側に位置し、東南東約6.5mにIV D-1住居跡、北約5.5mにIV C-51土坑がある。検出面は基本層序第VI層である。焼土は54×35cm、12×10cmの不整形に広がっており、厚さは最大で20cmであるが比較的やわらかい。出土遺物はない。

#### IV D-203焼土遺構

遺 構 (第68図、写真図版58)

本遺構は調査区北北東側に位置し、北約2.5mにV D-51土坑、南約4.5mにIV D-1住居跡がある。検出面は基本層序第IV層である。焼土は29×28cmの不整形に広がっており、厚さ5～10cmで、南側から北側に向かって斜めに堆積し、その上に焼土粒が混じる黒褐色粘土質シルトが堆積している。出土遺物はない。

#### VC-201焼土遺構

遺 構 (第68図、写真図版58)

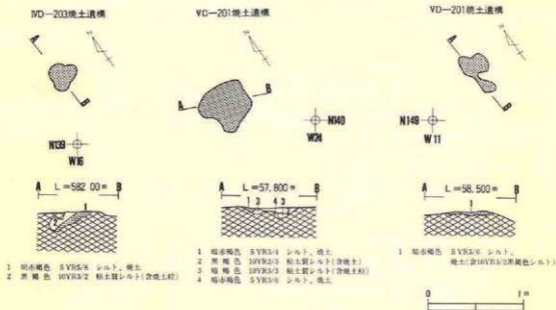
本遺構は調査区北北東側に位置し、南約2mにV D-51土坑がある。検出面は基本層序第IV層である。焼土は57×54cmの不整形に広がっており、焼土を多く含む黒褐色粘土質シルトが東側に堆積する。出土遺物はない。

#### VD-201焼土遺構

遺 構 (第68図、写真図版58)

本遺構は調査区北北東側に位置し、南西約8mにIV D-1住居跡、東約8mにV D-51土坑がある。検出面は基本層序第IV層である。焼土は50×28cmの不整形に広がっており、厚さは最大で4cmである。出土遺物はない。





第68図 IV D-203・VC-201・VD-201 焼土遺構

## 7. 柱穴群

調査区西南西側 (0 B 区)、南西側 (1 C・1 D 区)、南南東側 (11 E 区)、北北東側 (1 V C 区) から柱穴状土坑が検出されている。以下、各地区毎にその概観を記載する。

### 0 B 区柱穴状土坑 (第69図)

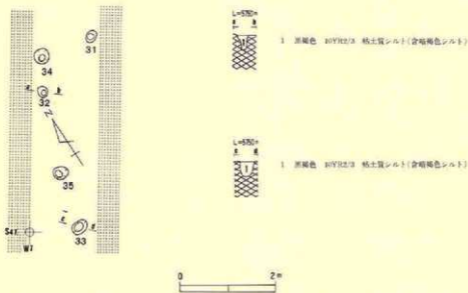
5基検出されており、検出面は暗褐色粘土質シルト層上面である。規模は径30~40cm、深さ20~40cmである。直線的に並ぶようにも観察されるが、調査範囲が幅1.2mのトレンチ状に限定されており、全体の形状は不明である。

出土遺物 (第138図、写真図版104)

P<sub>33</sub>から648が出土している。礫石状の石製品で、ほぼ全面がよく磨かれている。

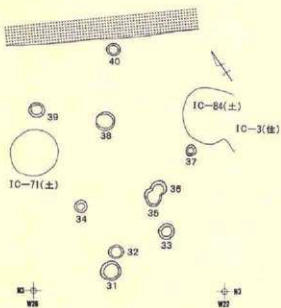
### 1 C・1 D 区柱穴群 (第70図)

1 C - 3 住居跡の西側及び 1 C - 2 住居跡の東側付近から20基検出されている。径20~50cm、深さ10~50cmの規模である。堀立柱建物跡を構成するようなまとまった柱穴配置は見つけられなかった。出土遺物はない。

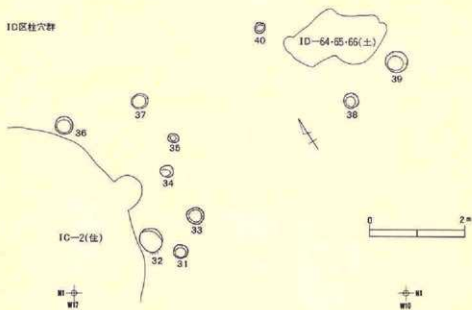


第69図 0 B 区柱穴状土坑

IC区柱穴群



ID区柱穴群

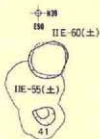


第70图 IC·ID区柱穴群

L = 59,900 m



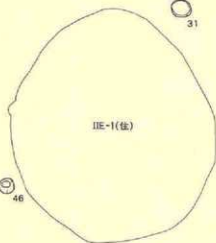
- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含黒土粒、炭化物、褐色シルト)
- 2 黒色 10YR4/0 粘土質シルト(含黒褐色シルト)
- 3 暗褐色 10YR3/4 シルト(含黒褐色シルト)



L = 59,900 m



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含黒土粒、炭化物、褐色シルト)
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含炭化物、褐色シルト)
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト(含褐色シルト)



- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト(含褐色シルト、黒土粒、炭化物)
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト(含褐色シルト)
- 3 褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含黒褐色シルト)

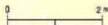
L = 59,900 m



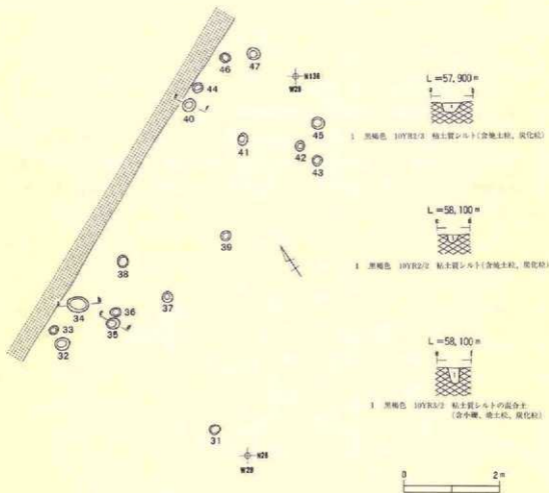
L = 59,800 m



- 1 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト(含暗褐色シルト)
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト(含褐色10YR4/6粘土質シルト)
- 3 褐色 10YR4/4 粘土質シルト(含黄褐色シルト)
- 4 灰褐色 10YR2/3 粘土質シルト(褐色シルト)



第71図 II E区柱穴群



第72図 IV C区柱穴群

### II E区柱穴群 (第71図)

II E-1住居跡の周辺から20基検出されている。径20~60cm、深さ10~50cmの規模である。掘立柱建物跡を構成するようなまとまった配列は認められない。

#### 出土遺物 (第138図、写真図版104)

P<sub>31</sub>から沈線が垂下する縄文土器片が1点(649)、P<sub>34</sub>から石鏝が1点(650)出土している。

### IV C区柱穴群 (第72図)

17基検出されている。径20~45cm、深さ10~40cmの規模である。直線的に並ぶように観察さ

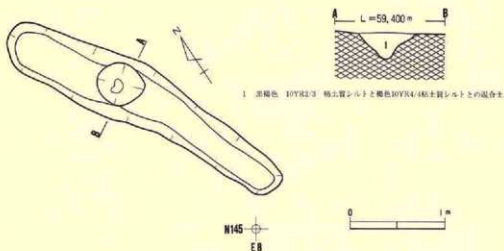
れるものもあるが、掘立柱建物跡を構成するようなまとまった配列は認められない。出土遺物はない。

## 8. 溝状遺構

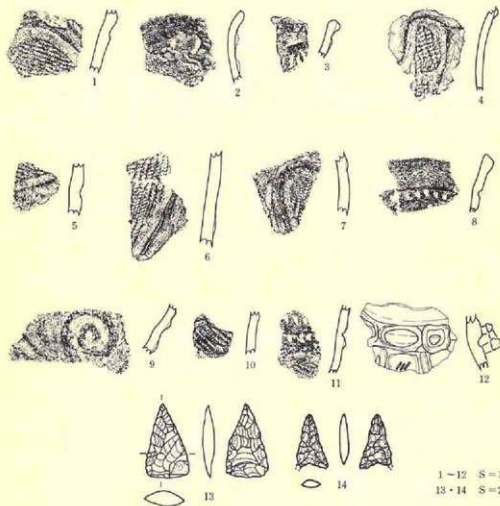
### VD-101溝状遺構（第73図、写真図版54）

調査区北東側に位置する。検出面は基本層序第V層である。

平面形は北北西から南南東に長い溝状で、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部326×60cm、底部308×47cmで、深さは5～10cmである。底面中央北北西寄りに深さ10cm程の窪みをもつ。埋土は黒褐色粘土質シルトと褐色粘土質シルトとの混合土で、人為的埋め戻しの様相を呈している。出土遺物はない。



第73図 VD-101溝状遺構

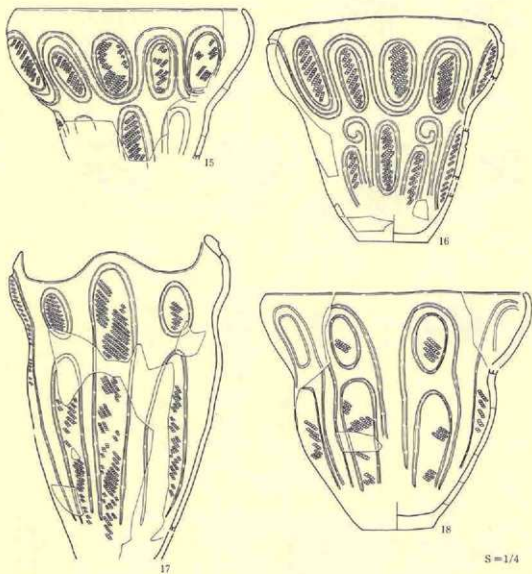


1-12 S=1/3  
13-14 S=2/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特色・形状・その他	分 類	写数図
1	IC-1(佐) 伊1直上	漆鉢	胴部	沈線による曲線文, 単節縄文(L,R)	II群3類	59
2	IC-1(佐) 伊直上	漆鉢	口縁部	波状口縁, 沈線による曲線文, 単節縄文(L,R)	II群3類	59
3	IC-1(佐) 伊埋土	漆鉢	口縁部	波状口縁, 沈線区画内刻文文光型	II群一	59
4	IC-1(佐) 伊埋土	漆鉢	胴部	隆帯による「〇」状文, 波面縄文(L,R,L)	II群3類	59
5	IC-1(佐) 伊1直上	漆鉢	胴部	沈線文, 単節縄文(L,R)	II群3類	59
6	IC-1(佐) 伊埋土	漆鉢	胴部	隆帯による曲線, 単節縄文(R,L)	II群3類	59
7	IC-1(佐) 塚	漆鉢	胴部	隆帯による「〇」状文?, 単節縄文(L,R)	II群3類	59
8	IC-1(佐) 塚	漆鉢	口縁部	波状口縁, 沈線, 平歯竹管透刺刻文	II群一	59
9	IC-1(佐) 塚	漆鉢	胴部	隆帯による波色文	II群3類	59
10	IC-1(佐) P <sub>2</sub> 埋土	漆鉢	胴部	隆帯による文様, 単節縄文(L,R)	II群3類	59
11	IC-1(佐)	漆鉢	胴部	平行する隆帯間に平歯竹管透刺刻文, 単節縄文(R,L)	II群3類	59
12	IC-1(佐) P <sub>2</sub> 埋土	壺?	胴~頸部	隆帯, 輪状把手, 単節縄文(R,L), 器内外丹色?	II群3類4	59

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	写数図
13	IC-1(佐) 伊埋土	石匙	3.0	1.7	0.6	2.5	硬質灰岩	奥山山塊 中新統		59
14	IC-1(佐) 埋土	石匙	3.1	1.2	0.3	0.70	硬質灰岩	奥山山塊 中新統	駒形欠角	59

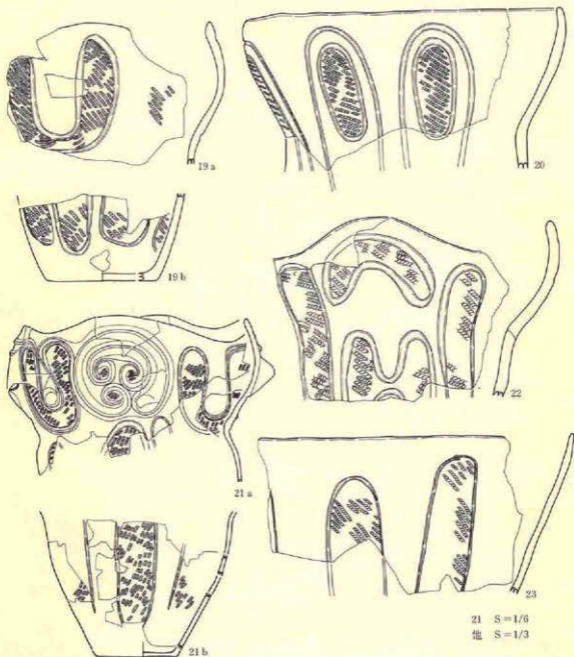
第74図 IC-1住居跡出土遺物



No.	出土地点・層位	素材	部位	文様の特徴・属性・その他	数量	写真
15	1C-2(住) 中直上	漆鉢	口~胴部	キ+リ+シ+... 流紋沈線、縦格円・「凸」状沈線文、早稲縄文(直上)	1	59
16	1C-2(住) 埋土下部	漆鉢	底部	キ+リ+シ+... 流紋沈線、縦格円・「凸」状・流巻沈線文、早稲縄文(直上)	1	59
17	1C-2(住) 埋土下部	漆鉢	口~胴部	キ+リ+シ+... 流紋沈線、縦格円・「凸」状沈線文、早稲縄文(直上)	1	60
18	1C-2(住) 埋土下部	漆鉢	底部	キ+リ+シ+... 縦格円・「凸」状沈線文、早稲縄文(直上)	1	60

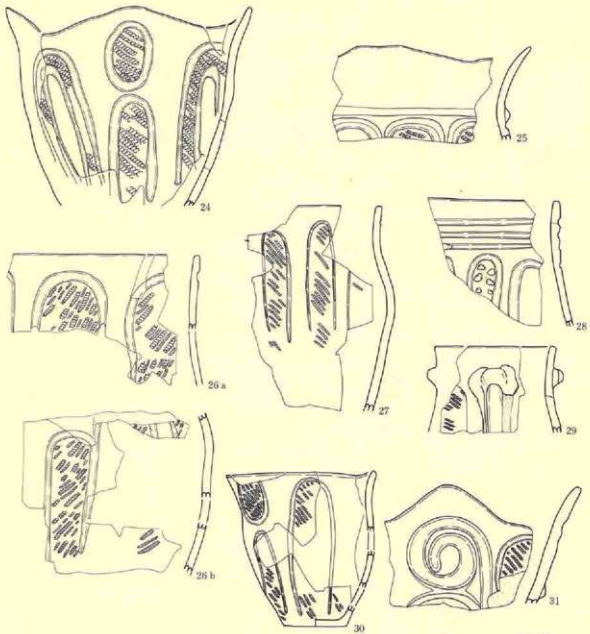
第75図 1C-2住居跡出土遺物(1)





No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・筆跡・その他	分類	図版
19	I C-2(住) 単直土	深鉢	口～底部	キマリハシ、U字・縦横同沈線文、早期縄文(L,R)	旧群3期f	60
20	I C-2(住) 埴土下部	深鉢	口～底部	キマリハシ、「U」状・縦横同沈線文、早期縄文(L,R)	旧群3期b	60
21	I C-2(住) 埴土下部	深鉢	口～底部	キマリハシ、波状口縁、U字文、帯帯渦巻文、「U」状沈線文、早期縄文(B,L)	旧群3期f	60
22	I C-2(住) 埴土下部	深鉢	口～底部	キマリハシ、波状口縁、「U」状・H状沈線文、早期縄文(L,R)	旧群3期f	60
23	I C-2(住) 埴土	深鉢	口～底部	「U」状沈線文、早期縄文(L,R)	旧群3期b	60

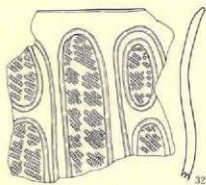
第76図 I C-2住居跡出土遺物(2)



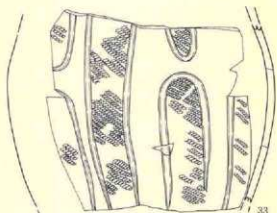
S=1/3

No	出土地点・層位	形種	部位	文様の特徴・原体・その他	分類	図版
24	IC-2(住) 砂面上	深鉢	口一胴部	流紋口縁、規矩閃「白」状比線文、単節縄文(L.R)	群3類f	61
25	IC-2(住) 砂面上	深鉢	口一胴部	流紋口縁、陸帯、「白」状文?、単節縄文(L.R)	群3類e	62
26	IC-2(住) 埋土	深鉢	口一胴部	「白」状流線文、太きの黒なま単節縄文(R.L)	群3類b	61
27	IC-2(住) 埋土	深鉢	口一胴部	「白」状流線文、単節縄文(L.R)	群3類b	61
28	IC-2(住) 砂	深鉢	口一胴部	平行流線、「白」状比線文、刺突文	群3類d	61
29	IC-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	陸帯に2本「白」状文、把手状陸帯(貫通孔?)、単節縄文(L.R)	群3類d	61
30	IC-2(住) 埋土	深鉢	先部	流紋口縁、「白」状流線文、単節縄文(L.R)	群3類b	61
31	IC-2(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	流紋口縁、「白」状?・流帯流線文、「白」状流線文、単節縄文(L.R)	群3類b	61

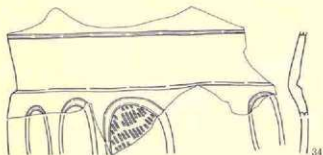
第77図 IC-2住居跡出土遺物(3)



32



33



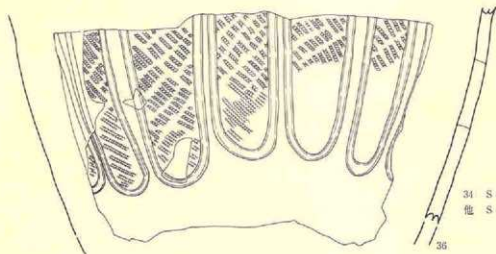
34



35 a



35 b



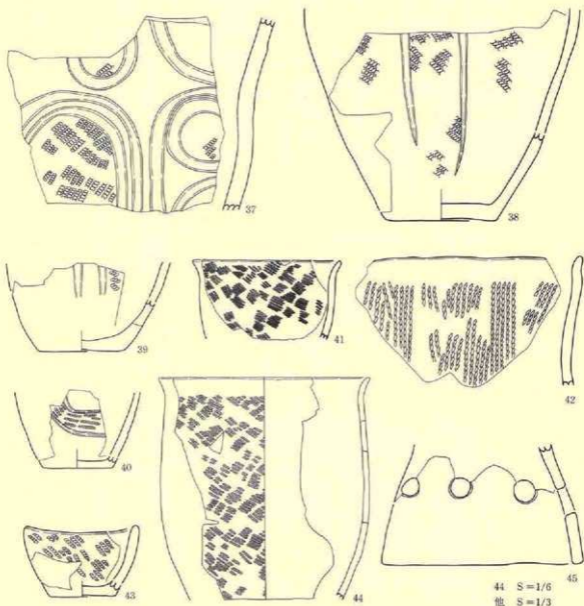
34 S=1/4

他 S=1/3

36

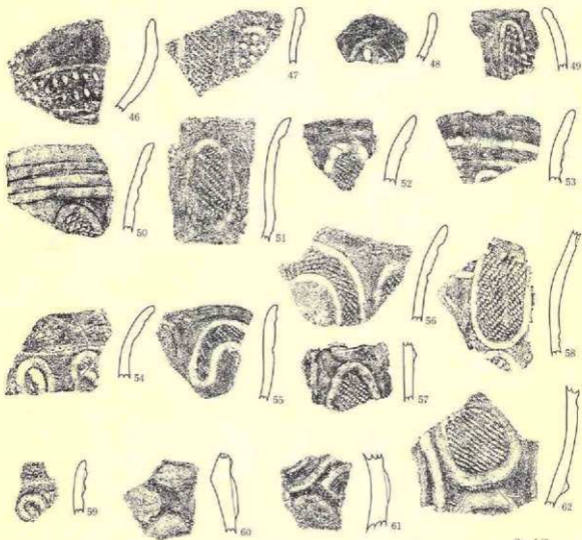
No.	出土地点・層位	形種	部位	文様の特徴・単位・その数	分類	図録No.
32	1 C-2 (住) 埋土	深鉢	口・肩部	「∩」状・縦横同尺様文、単節織文、単節織文(L,R)	目野3類5	61
33	1 C-2 (住) 埋土	深鉢	胴部	縦「∩」状・横同尺様文、単節織文(L,R)	目野3類5	61
34	1 C-2 (住) 埋土	深鉢	胴部	縦横「∩」状・横同尺様文、単節織文(L,R)	目野3類5	62
35	1 C-2 (住) 埋土下部	深鉢	胴部	縦節斜目文、「∩」状様文、単節織文(L,R)	目野3類c	62
36	1 C-2 (住) 埋土	深鉢	胴部	縦横同尺様文、単節織文(L,R)	目野3類	62

第78図 1 C-2住居跡出土遺物(4)



No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	図版
37	ⅠC-2(住)	甕	底	「〇」状?・楕円状線文, 半節縄文(Ⅰ,Ⅱ)	Ⅱ群3類b	42
38	ⅠC-2(住)	甕	胴	「〇」状線文, 半節縄文(Ⅰ,Ⅱ)	Ⅱ群3類	42
39	ⅠC-2(住)	甕	底	「〇」状線文, 半節縄文(Ⅰ,Ⅱ)	Ⅱ群3類	42
40	ⅠC-2(住)	甕	口	比較的よる線文, 半節縄文(Ⅰ,Ⅱ)	Ⅱ群4類a	43
41	ⅠC-2(住)	甕	口	半節縄文(Ⅰ,Ⅱ)	Ⅱ群3類g	43
42	ⅠC-2(住)	甕	口	節縄文	Ⅱ群3類g	43
43	ⅠC-2(住)	甕	口	半節縄文(Ⅰ,Ⅱ)	Ⅱ群3類g	43
44	ⅠC-2(住)	甕	口	半節縄文(Ⅰ,Ⅱ)	Ⅱ群3類g	43
45	ⅠC-2(住)	甕	口	円孔	Ⅱ群3類	43

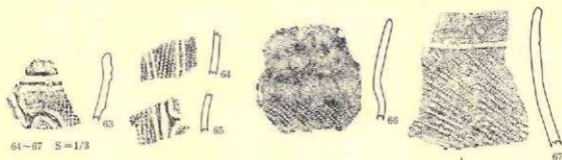
第79図 ⅠC-2住居跡出土遺物(5)



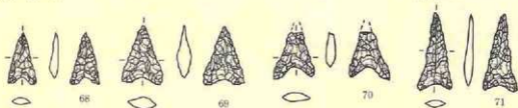
S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単体・その他	分類	図録
46	I C-2(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	キマリノマ、波状口縁、波帯面線文、刺突文	耳飾3類	63
47	I C-2(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	キマリノマ、波状口縁、「白」底・格内沈線文、刺突文、単面線文(L,R)	耳飾3類	63
48	I C-2(住) 灰層土	深鉢	口縁部	キマリノマ、波状口縁、格内沈線文、刺突文	耳飾3類	63
49	I C-2(住) 伊勢土	深鉢	口縁部	キマリノマ、「白」底沈線文、単面線文(L,R)	耳飾3類	63
50	I C-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁、平行沈線(3条)、「白」底沈線文、幾何線文(R,L,R)	耳飾3類	63
51	I C-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	格内沈線文、単面線文(L,R)	耳飾3類	63
52	I C-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	「白」底沈線文、単面線文(L,R)	耳飾3類	63
53	I C-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁、平行沈線、「白」底沈線文?	耳飾3類	63
54	I C-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	沈線、面線沈線文	耳飾3類	63
55	I C-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁、「白」底沈線文、単面線文(L,R)	耳飾3類	63
56	I C-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁、「白」底沈線文、単面線文(L,R)	耳飾3類	64
57	I C-2(住) 伊勢土	深鉢	胴部	幾何による「白」底文、単面線文(L,R)	耳飾3類	64
58	I C-2(住) 埋土	深鉢	胴部	格内沈線文、単面線文(L,R)	耳飾3類	64
59	I C-2(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	幾何による波帯文	耳飾2類	64
60	I C-2(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	波状口縁、幾何による面線文	耳飾3類	64
61	I C-2(住) 埋土	深鉢	胴部	幾何による面線文	耳飾2類	64
62	I C-2(住) 埋土	深鉢	胴部	幾何による格内文、単面線文(R,L)	耳飾3類	64

第80図 I C-2住居跡出土遺物(6)



64-67 S=1/3

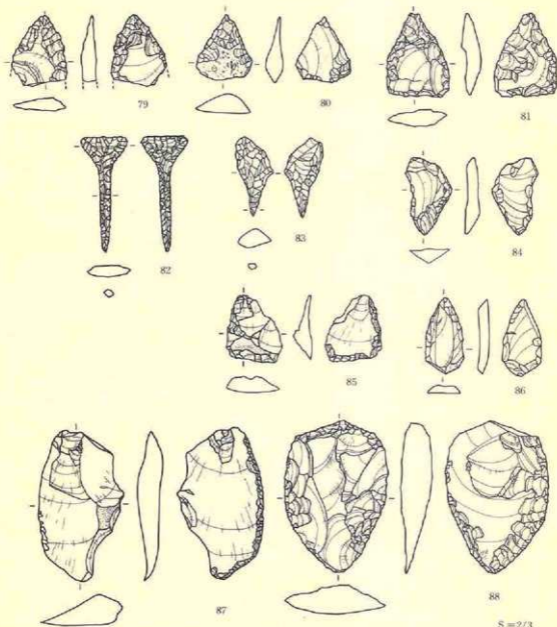


68-78 S=2/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図録誌
63	IC-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	キャリバー、降沈線による直・曲線文、複面網文(下見)	目録2類b	64
64	IC-2(住) 埋土	深鉢	側部	降沈線による直線文(右下)、放射網文(下見)	目録2類b	64
65	IC-2(住) 埋土下部	深鉢	側部	降沈線による直・曲線文、放射網文(下見)	目録2類b	64
66	IC-2(住) P <sub>10</sub> 埋土	深鉢	口縁部	放射網文(下見)	目録2類g	64
67	IC-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	放射網・放射網文(下見)	目録2類g	64

No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石質	埋土・年代	備考	図録誌
68	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.1	1.1	0.3	0.4	チャート	北上山地 古生界		64
69	IC-2(住) 埋土下部	石鏃	2.4	1.0	0.6	1.10	柱状閃石	奥羽山地 中新統		64
70	IC-2(住) 埋土	石鏃	1.9	1.0	0.4	0.7	硬質閃石	奥羽山地 中新統	一部欠損	64
71	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.65	放射閃石	奥羽山地 中新統		64
72	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.2	0.8	0.3	0.3	硬質閃石	奥羽山地 中新統	一部欠損	64
73	IC-2(住) 埋土	石鏃	1.6	1.4	0.2	0.65	硬質閃石	奥羽山地 中新統		64
74	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.2	1.3	0.3	0.55	放射閃石と細粒閃石	奥羽山地 中新統		64
75	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.2	1.3	0.6	1.3	チャート	北上山地 古生界		64
76	IC-2(住) 埋土	石鏃	1.8	1.0	0.4	0.8	放射閃石	奥羽山地 中新統		64
77	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.2	1.5	0.5	1.2	チャート	北上山地 古生界	未成品	64
78	IC-2(住) 埋土下部	石鏃	2.8	1.8	0.5	2.4	柱状閃石	奥羽山地 中新統		64

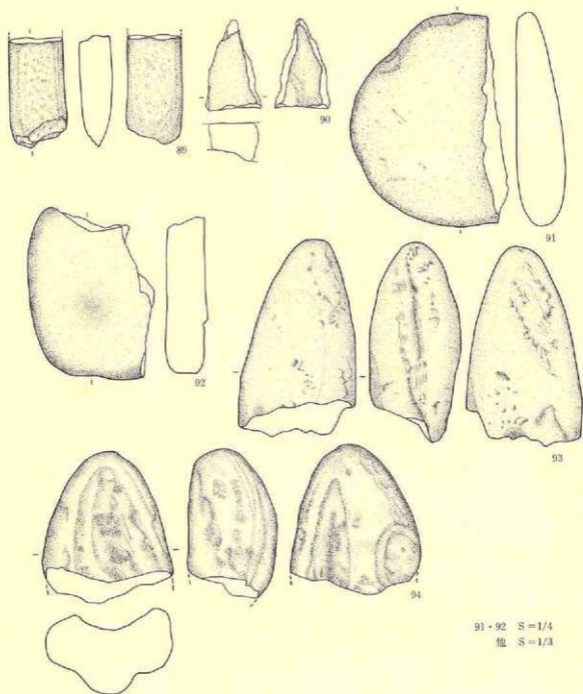
第81図 IC-2住居跡出土遺物(7)



S=2/3

No.	出土地点・层位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石	質	産地・生成年代	備考	図録頁
79	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.9	2.2	0.6	3.15	硬質灰岩	奥羽山地	中新統	欠損	64
80	IC-2(住) 埋土	石鏃	2.7	2.2	0.7	3.25	粘板岩	北上山地	古生界		64
81	IC-2(住) 埋土	尖頭器?	3.4	2.5	0.8	5.25	硬質灰岩	奥羽山地	中新統		65
82	IC-2(住) 埋土	石鏃	4.7	1.9	0.5	1.80	柱貫流石	奥羽山地	中新統		65
83	IC-2(住) 埋土	石鏃	3.2	1.6	0.5	2.5	千一	北上山地	古生界	一部欠損	65
84	IC-2(住) 埋土	棒-魚形器	3.1	1.9	0.6	3.25	柱貫流石	奥羽山地	中新統		65
85	IC-2(住) 埋土下部	棒-魚形器	2.5	2.2	0.7	2.7	流紋岩	奥羽山地	中新統		65
86	IC-2(住) 埋土下部	棒-魚形器	3.0	1.5	0.3	2.4	粘板岩	北上山地	古生界		65
87	IC-2(住) 埋土下部	棒-魚形器	6.0	3.4	1.2	17.75	柱貫流石	奥羽山地	中新統		65
88	IC-2(住) 埋土下部	棒-魚形器	6.1	3.7	1.3	34.50	硬質灰岩	奥羽山地	中新統		65

第82图 IC-2住层跡出土遺物(8)



91・92 S=1/4  
他 S=1/3

No.	出土地帯・層位	石種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	図録
89	1 C-2(住) 埋土上	磨製石斧	8.8	4.4	2.6	190	ホルンフェルス	北土 古生界	基部・刃部欠損	65
90	1 C-2(住) 埋土	石錐	(7.2)	(4.6)	3.1	70	流紋岩(龍崎林内燧岩)	龍崎山塊 中新統	欠損	65
91	1 C-2(住) 埋土下	台石	22.8	16.8	5.1	2,630	洞窟石灰山岩		欠損	65
92	1 C-2(住) 埋土下	台石	18.5	13.5	4.5	1,680	洞窟石灰山岩		欠損	65
93	1 C-2(住) 埋土上		15.8	9.2	7.2	720	洞窟石灰山岩(赤岩塊)	新第三系(?)		65
94	1 C-2(住) 埋土上(石蔵)		12.0	10.4	9.1	430	洞窟石灰山岩(赤岩塊)	新第三系(?)		65

第83図 1 C-2住居跡出土遺物(9)

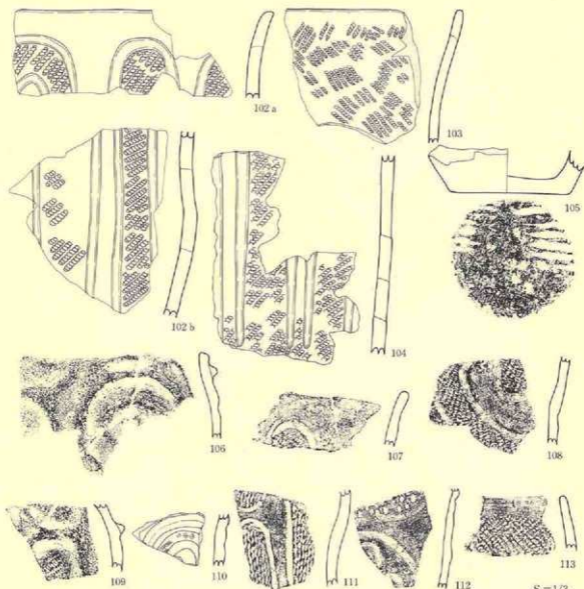




S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図28
95	IC-3(住) P+ 雑土	深鉢	胴-底部	ひす形・'白'、散点線文、半筋線文(L.R.)	日野3類I	66
96	IC-3(住) 雑土	深鉢	口-胴部	渦状口縁、渦巻・楕円・'白'、散点線文、渦巻文	日野3類II	66
97	IC-3(住) 雑土	深鉢	口縁部	片巻による渦巻文・'白'、伏文、半筋線文(R.L.)	日野3類II	66
98	IC-3(住) 雑土	深鉢	胴部	片巻による渦巻文・'白'、伏文、刺突文、半筋線文(R.L.)	日野3類II	66
99	IC-3(住) 雑土	深鉢	胴部	片巻による渦巻文、刺突文	日野3類II	66
100	IC-3(住) 雑土	深鉢	胴部	片巻による渦巻文・'白'、伏文、刺突文、半筋線文(R.L.)	日野3類II	66
101	IC-3(住) 雑土	深鉢	胴部	片巻による渦巻文・'白'、伏文、刺突文、半筋線文(R.L.)	日野3類II	66

第84図 IC-3住居跡出土遺物(1)



S=1/3

No.	出土地点・層位	部種	部位	文様の特徴・単位・その数	分類	SASB
102	IC-3(住)	深鉢	口一部	「〇」状点線文、早期縄文(R.L.)	II群3類f	66
103	IC-3(住)	深鉢	口縁部	早期縄文(L.R.)	II群3類g	67
104	IC-2(住)	深鉢	胴部	「〇」状点線文、早期縄文(R.L.)	II群3類b	67
105	IC-3(住)	深鉢	底部	底部竹肌状	II群3類	67
106	IC-3(住)	深鉢	口縁部	点状口縁、陸帯による褐色文	II群3類b	67
107	IC-3(住)	深鉢	口縁部	「〇」状点線文、早期縄文(L.R.)	II群3類	67
108	IC-3(住)	深鉢	胴部	沈線区画による褐色文、早期縄文(R.L.)	II群3類	67
109	IC-3(住)	深鉢	胴部	陸帯による褐色文、「〇」状文、早期縄文(R.L.)	II群3類b	67
110	IC-3(住)	深鉢	胴部	陸帯による褐色文、早期縄文(R.L.)	II群3類	67
111	IC-3(住)	深鉢	胴部	「〇」状点線文、褐色文	II群3類	67
112	IC-3(住)	深鉢	胴部	沈線による褐色文、刺突文	II群3類	67
113	IC-3(住)	深鉢	口縁部	早期縄文(L.R.早期縄文)	II群3類g	67

第85図 IC-3住居跡出土遺物(2)

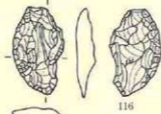
IC-3 住居跡(3)



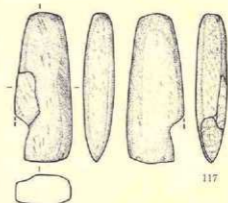
114



115

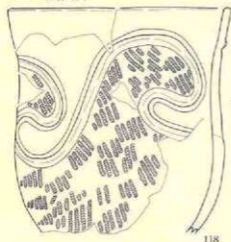


116

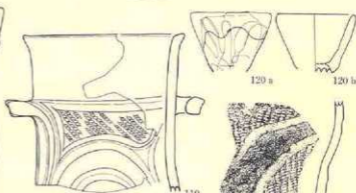


117

IC-4 住居跡(1)



118



119



120 a



120 b



121



122



123



124



125



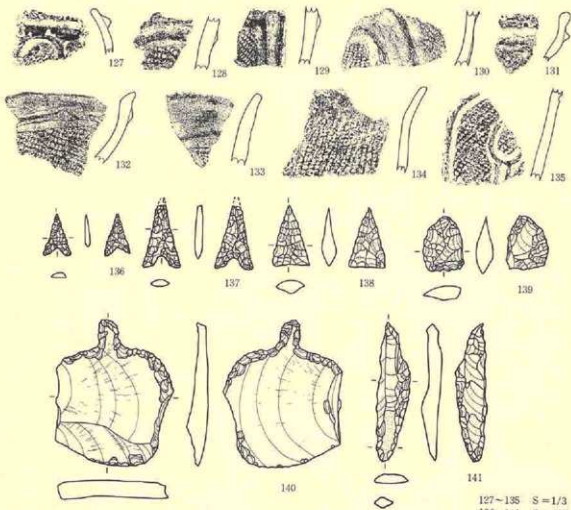
126

114-115 S=2/3, 他 S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石質	産地・生成年代	備考	図録
114	IC-3(住) 埋土下部	石器	1.2	1.3	0.3	0.25	粘板岩	式上山地 古生界	先端部欠損	67
115	IC-3(住) 埋土	石器	2.6	1.7	0.5	1.05	流紋岩	式上山地 中群統		67
116	IC-3(住) 埋土	漆・削跡地	3.5	2.1	0.7	4.2	凝灰岩	式上山地 中群統		67
117	IC-3(住) 床	磨製打棒	12.0	4.6	2.4	230	凝灰質砂岩	式上山地 中群統	欠損	67

No.	出土地点・層位	器種	器種	文様の特徴・器体・その他	分類	図録
118	IC-4(住) 埋土	漆跡	11-彫部	側中央部に流紋岩片埋着, 華飾縄文(LI)	目跡4類a	68
119	IC-4(住) P <sub>2</sub> 埋土7層	漆跡?	11-彫部	把手・隆部にによる曲線文, 華飾縄文(LI)	目跡4類b	68
120	IC-4(住) P <sub>2</sub> 埋土下部	漆跡?	11-彫部	細い流線による曲線・連続するU字状文	目跡4類b	68
121	IC-4(住) 砂埋土	漆跡	彫部	沈線による曲線文, 華飾縄文(LI)	目跡4類	68
122	IC-4(住) 砂埋土	漆跡	彫部	沈線による曲線文, 0系多色	目跡4類	68
123	IC-4(住) 埋土	漆跡	11-彫部	斜交文, 竹管文	目跡4類	68
124	IC-4(住) P <sub>2</sub> 埋土	漆跡	11-彫部	「U」状沈線文, 華飾縄文(LI)	目跡3類b	68
125	IC-4(住) 埋土	漆跡	彫部	沈線による「U」状文・斜線文, 華飾縄文(LI)	目跡3類b	68
126	IC-4(住) P <sub>2</sub> 埋土	漆跡	彫部	沈線による「U」状文・斜線文, 華飾縄文(LI)	目跡3類b	68

第86図 IC-3(3)・4住居跡出土遺物(1)

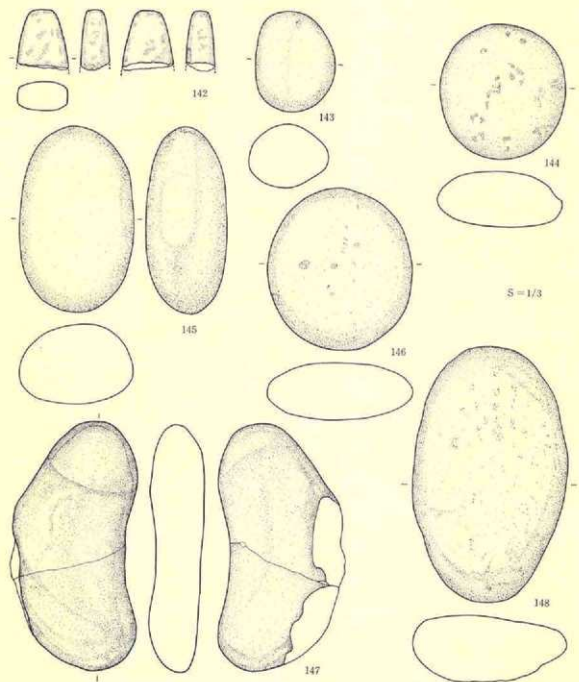


127~135 S=1/3  
136~141 S=2/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図版
127	IC-4(住) P <sub>14</sub> 埋土	漆鉢	口縁部	縁帯による「U」状文か渦巻文。半面縄文?	日野一	68
128	IC-4(住) 埋土	漆鉢	胴部	縁帯による曲線文。半面縄文(L,R)	日野一	68
129	IC-4(住) P <sub>15</sub> 埋土	漆鉢	胴部	縁帯による「U」状文。半面縄文(L,R)	日野3類	68
130	IC-4(住) 伊理土	漆鉢	胴部	縁帯による曲線文。半面縄文(L,R)	日野3類	68
131	IC-4(住) P <sub>2</sub> 埋土	漆鉢	口縁部	口縁帯による縁部	日野一	68
132	IC-4(住) 柱穴	漆鉢	口縁部	流気口縁。発帯。半面縄文(L,R)	日野一	68
133	IC-4(住) 埋土	漆鉢	口縁部	流気口縁。半面縄文(L,R)	日野一	68
134	IC-4(住) P <sub>16</sub> 埋土	漆鉢	口縁部	流気口縁(L,R)	日野一	68
135	IC-4(住) P <sub>17</sub> 埋土	漆鉢	胴部	流気口縁による直・曲線文。半面縄文(L,R)	日野2類	68

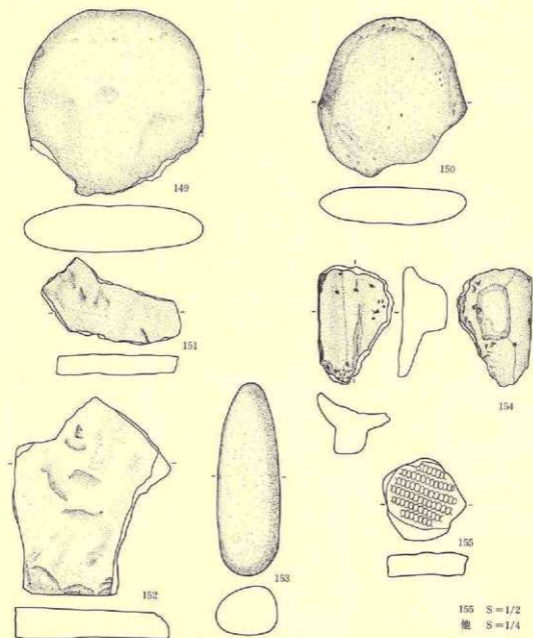
No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	産地・年代	備考	図版
136	IC-4(住) 埋土	石鏃	1.7	1.1	0.2	0.25	粘板岩	北上山地 古生界		68
137	IC-4(住) 埋土	石鏃	2.5	1.5	0.3	0.65	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	発掘部欠損	68
138	IC-4(住) 埋土	石鏃	2.4	1.5	0.6	1.30	硬質泥岩	奥羽山地 中新統		68
139	IC-4(住) P <sub>2</sub> 埋土	石鏃	2.2	1.7	0.7	2.35	硬質泥岩	奥羽山地 中新統		68
140	IC-4(住) 埋土	石匙	5.9	4.8	0.9	21.35	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	欠損	68
141	IC-4(住) P <sub>15</sub> 埋土	矢鏃部?	5.5	1.3	0.4	4.35	硬質泥岩	奥羽山地 中新統	片断欠損	68

第87図 IC-4住居跡出土遺物(2)



No.	出土地点・層位	器种	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	互照図
142	I C-4 (住) 床面	磨製石斧	14.8	4.1	2.3	70	凝灰質砂岩	奥山山地 中新統	刃物欠損	69
143	I C-4 (住) 床面	押石	8.1	6.4	5.2	300	花崗閃綠岩	北上山地 中生帯		69
144	I C-4 (住) 床面	押石	10.8	10.0	4.4	720	高輝石安山岩			69
145	I C-4 (住) 床面	押石	15.0	9.2	6.5	1,240	高輝石安山岩			69
146	I C-4 (住) 壁面上	押石	12.9	11.0	4.7	980	高輝石安山岩			69
147	I C-4 (住) 床面	甲槌或槌	19.0	8.9	4.6	1,160	石質凝灰岩	奥山山地 中新三系-中新統	欠損, 加熱痕	69
148	I C-4 (住) 基礎部埋土		20.5	12.2	5.4	1,020	高輝石安山岩(赤岩塊)	新第三系(?)		69

第88図 I C-4住居跡出土遺物(3)

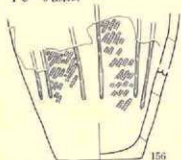


155 S=1/2  
他 S=1/4

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	写真
149	I C-4 (住) 床面	台石	19.7	19.0	5.1	2,860	岡輝石安山岩		欠損	69
150	I C-4 (住) 床直	台石	16.9	15.9	4.1	1,530	岡輝石安山岩		欠損	69
151	I C-4 (住) 壁埋土	台石	8.2	5.4	4.2	175	粘板岩	北上山地 古生界	欠損	69
152	I C-4 (住) 壁構成礎	壁構成礎	21.1	16.6	3.7	1,800	岡輝石安山岩		欠損、台石能用?	69
153	I C-4 (住) 壁構成礎	壁構成礎	30.6	6.8	5.3	1,160	岡輝石安山岩		礎石能用?	70
154	I C-4 (住) 埋土	石蓋	12.7	8.0	5.4	290	流紋岩質斑状角閃岩	黒川山地 中新統	欠損	70
155	I C-4 (住) 埋土	片断土製品	4.5	4.4	2.3	21.25			早期繩文(耳土)	70

第89図 I C-4住居跡出土遺物(4)

I C-5 住居跡



156

I C-6 住居跡



157



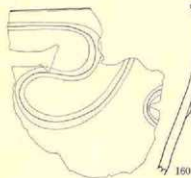
158



159



162



160



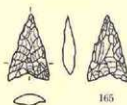
161



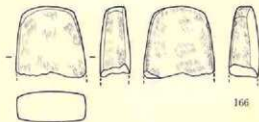
163



164



165



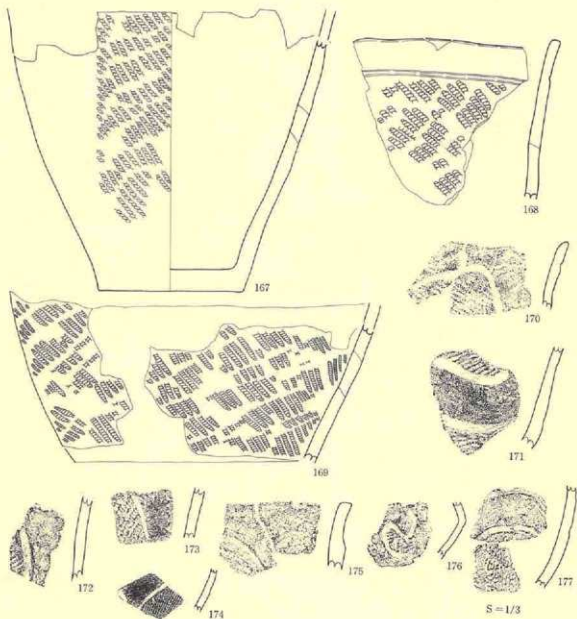
166

165 S=2/3  
他 S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器体・その他	分類	図録
156	I C-5 (住) 床面	漆跡	胴・底面	「白」法文様文、華蓋模文(L.R.)	目録3類b	70
157	I C-6 (住) 埋土	漆跡	口縁部	隆帯による曲線区画文、華蓋模文(L.R.)	目録4類	70
158	I C-6 (住) 埋土下部	漆跡	口縁部	洗滌区画内刺交文変型	目録4類d	70
159	I C-6 (住) 埋土	漆跡	口縁部	洗滌口縁、洗滌区画内刺交文変型	目録4類d	70
160	I C-6 (住) 埋土	漆跡	口縁・胴部	隆帯による曲線区画文	目録4類a	70
161	I C-6 (住) 埋土下部	漆跡	口縁部	洗滌、華蓋模文(L.R.)	目録一	70
162	I C-6 (住) 埋土下部	漆跡	胴部	隆帯による曲線区画文、華蓋模文(L.R.)	目録4類	70
163	I C-6 (住) 埋土下部	漆跡	胴部	隆帯による曲線区画文、華蓋模文(L.R.)	目録4類	70
164	I C-6 (住) 埋	漆跡	胴部	隆帯による刺交文	目録4類	70

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石	質	産地・生成年代	備考	図録
165	I C-6 (住) 埋土	石製	2.7	1.6	0.5	1.00	洗滌口縁部刺交文	磨石山田	中朝統		71
166	I C-6 (住) F. 埋土	磨製石片	5.7	3.6	2.5	140	洗滌口縁部刺交文	北上山田	古生類	文様	71

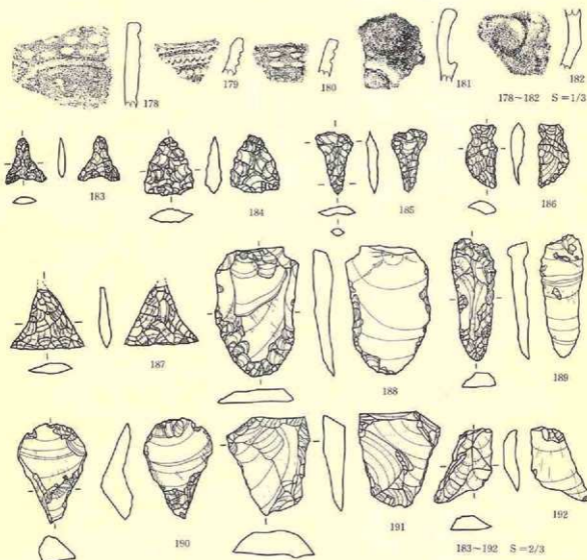
第90図 I C-5・6住居跡出土遺物



No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	図版
167	1C-7(住) 中央埋設	深鉢	胴-底部	半筋縄文(L.R)	豆群4類b	71
168	1C-7(住) 和厚鉢	深鉢	口縁部	沈線、半筋縄文(L.R)	豆群4類b	71
169	1C-7(住) 和厚鉢	深鉢	胴部	半筋縄文(L.R)	豆群4類b	71
170	1C-7(住) 和厚土	深鉢	口縁部	沈線による曲線区画文、半筋縄文(L.R)	豆群4類	71
171	1C-7(住) 和厚土	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文、半筋縄文(?)	豆群4類	71
172	1C-7(住) 灰	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文、半筋縄文(L.R)	豆群—	71
173	1C-7(住) 灰土下部	深鉢	胴部	沈線による曲線文、半筋縄文(L.R)	豆群—	71
174	1C-7(住) 灰	深鉢	胴部	沈線による曲線文、半筋縄文(L.R)	豆群—	71
175	1C-7(住) 灰	深鉢	口縁部	沈線による曲線文	豆群—	71
176	1C-7(住) 灰土	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文、半筋縄文(L.R)	豆群4類	71
177	1C-7(住) 灰	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文、半筋縄文(L.R)	豆群4類	71

第91図 1C-7住居跡出土遺物(1)

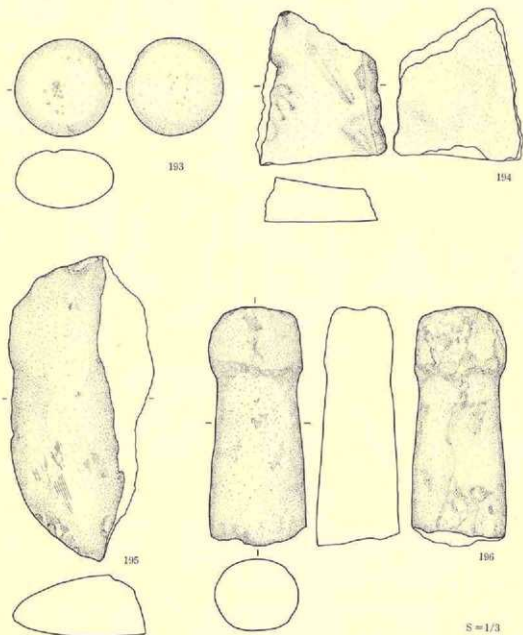




No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	写取図
178	I C-7(住) 床	漆鉢	口縁部	流紋口縁、比類による角線区画文、刺突文	日群4類d	71
179	I C-7(住) 礎土下部	漆鉢	口縁部	帯体側面圧痕(L・R)、交互刺突文、内面刺突文	日群1類c	71
180	I C-7(住) 床	漆鉢	口縁部	刺突文	日群4類d	71
181	I C-7(住) 床	漆鉢	口縁部	隆帯による曲線文	日群一	71
182	I C-7(住) 礎土下部	漆鉢	底部	隆帯に2も曲線文	日群4類	71

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生産年代	備考	写取図
183	I C-7(住) 床	石錫	1.8	1.6	0.3	0.5	成粒岩	美濃山地 中新統		72
184	I C-7(住) 礎	石錫	2.3	2.0	0.6	2.25	硬質泥岩	美濃山地 中新統		72
185	I C-7(住) 礎	石錫	2.5	1.5	0.5	1.0	硬質泥岩	美濃山地 中新統		72
186	I C-7(住) 砂埋土	石錫	2.6	1.2	0.5	1.55	チャート	北上山地 古生帯		72
187	I C-7(住) 砂埋土	嘴状石錫	2.7	2.8	0.3	2.1	硬質泥岩	美濃山地 中新統	先端部3.5mm×0.5mm	72
188	I C-7(住) 礎	器・瓶部他	5.2	3.4	0.8	15.03	注質泥岩	美濃山地 中新統		72
189	I C-7(住) 礎土下部	器・瓶部他	5.0	1.8	0.8	5.5	チャート質輝綠閃石岩	北上山地 古生帯	先端部急角状の刃部	72
190	I C-7(住) 礎土	器・瓶部他	4.0	2.8	1.3	7.75	粘板岩	北上山地 古生帯	使用痕	72
191	I C-7(住) 礎	器・瓶部他	3.9	2.3	1.0	12.75	柱状閃石	美濃山地 中新統	1縁部調整痕	72
192	I C-7(住) 礎	製作	2.5	1.7	0.5	2.9	チャート	北上山地 古生帯		72

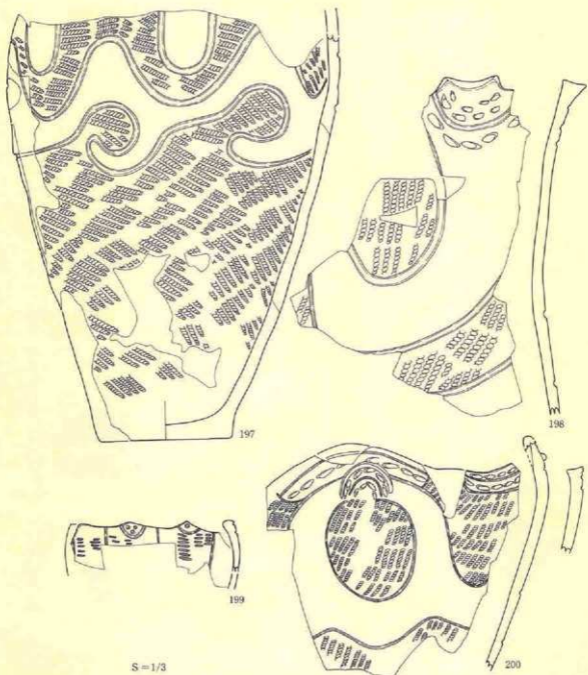
第92図 I C-7住居跡出土遺物(2)



S = 1/3

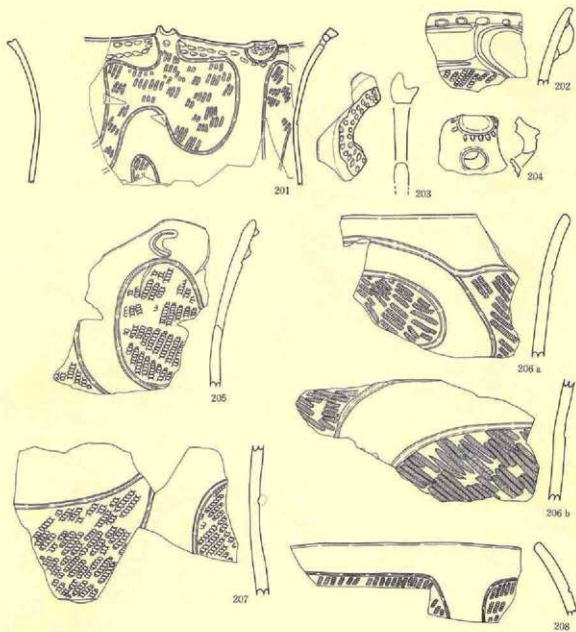
No	出土地点・層位	石材	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	%図例
193	I C - 7 (住) 埋土下部	凝石	7.8	7.8	4.6	440	奥州石炭山岩			72
194	I C - 7 (住) 床	台石	12.2	12.2	3.5	690	奥州石炭山岩		欠部	72
195	I C - 7 (住) 床	台石	24.4	11.2	4.7	1,700	奥州石炭山岩		欠部	72
196	I C - 7 (住) 床	石佛	19.2	7.5	5.6	1,280	石炭山岩	奥州山麓 中野統	欠部	72

第93図 I C - 7住居跡出土遺物(3)



No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図版
197	I C-9 (住) 伊原荘	深鉢	胴-底部	沈線による曲線区画文、流線状沈線文、半扉織文(L R)	日群4類a	73
198	I C-9 (住) 伊原荘	深鉢	口縁-胴部	〔流線状口縁〕、沈線による直線区画文(ノ字文)、斜交文、半扉織文(R L)	日群4類d	73
199	I C-9 (住) 伊原荘	深鉢	口縁部	流線状口縁、沈線区画内斜交文、沈線文、半扉織文(L R)	日群4類d	73
200	I C-9 (住) 伊原荘	深鉢	口-胴部	流線状口縁、沈線区画文、沈線、縞状沈線、斜交文、半扉織文(R L)	日群4類d	73

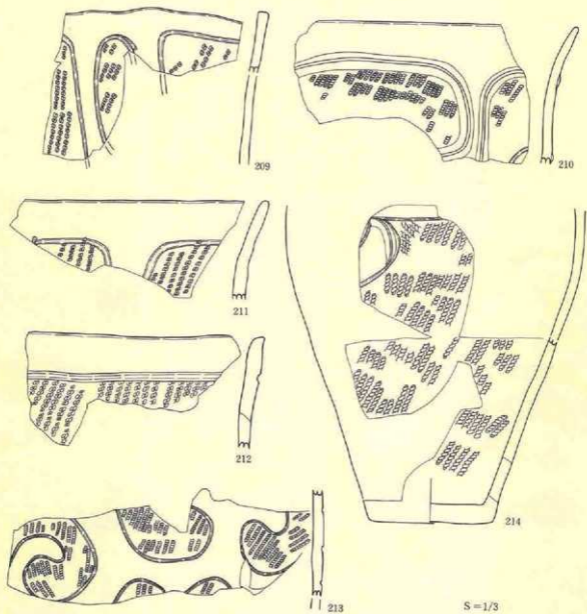
第94図 I C-9住居跡出土遺物(1)



201 S=1/6 他 S=1/3

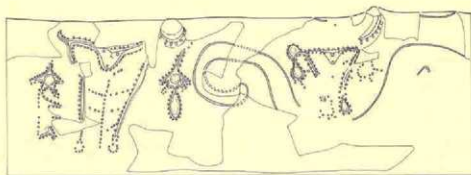
No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	
				分類	図版
201	IC-9(住) 床敷	深鉢	口~胴部	流状口縁、沈線によるヨ字形無文帯、刺突文、貫通孔、単節縄文(B.L)	目録4類d 73
202	IC-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	沈線による区画文、横状貼付文、刺突文、単節縄文(B.L)	目録4類d 73
203	IC-9(住) 埋土	深鉢	口縁突起?	刺突文	目録4類 73
204	IC-9(住) 埋土	深鉢	口縁突起?	刺突文、貫通孔	目録4類 73
205	IC-9(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	流状口縁、沈線によるヨ字形無文帯、横状突起、単節縄文(B.L)	目録4類d 74
206	IC-9(住) 伊埋土	深鉢	口~胴部	沈線による曲線区画文、ヨ字形条(1.5)	目録4類 74
207	IC-9(住) 埋土下部	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文、単節縄文(B.L)	目録4類 74
208	IC-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	沈線による曲線区画文、単節縄文(B.L)	目録4類 74

第95図 IC-9住居跡出土遺物(2)

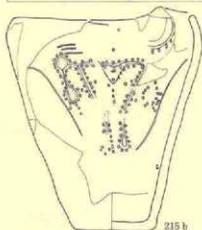


No	発土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・系統・その他	分類	図録頁
209	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流線による曲線区画文、浅部織文(L R L)	Ⅱ群4類	74
210	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	隆帯による曲線区画文、半部織文(R L)	Ⅱ群4類	74
211	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流線による曲線区画文、浅部織文(R L R)	Ⅱ群4類	74
212	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	平行比較、浅部織文(R L R)	Ⅱ群4類	75
213	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	流線による曲線区画文、半部織文(R L)	Ⅱ群4類a	75
214	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	流線による曲線区画文、瓣状突起、半部織文(R L)	Ⅱ群4類b	75

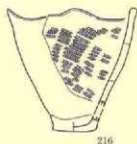
第96図 I C-9住居跡出土遺物(3)



215 a (模式図)



215 b



216



217



218



219



220



221



222



223



224



225



226

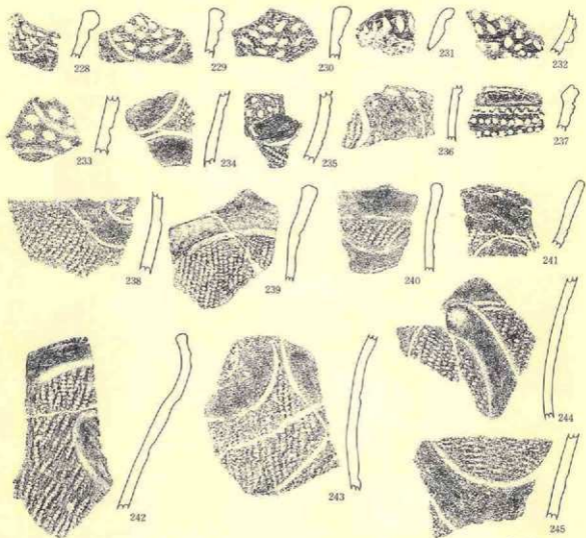


227

(251 a S=不定) S=1/3

No.	出土地点・層位	種類	部位	文様の特徴・単位・単位・その他	寸法	写真
215	I C-9(住) 埋土	深鉢	(完形)	縦帯・列突による人・動物のモチーフ、沈線文、縁紋変形、単節織文(L, R?)	直径4部c	75
216	I C-9(住) 埋土	1=チャフ	口一裏面	流紋口縁、単節織文(L, R)	直径4部b	75
217	I C-9(住) 埋土	鉢?	裏内面		直径4部h	75
218	I C-9(住) 埋土	深鉢	裏部底	流紋本裏面	直径4部i	75
219	I C-9(住) 埋土上面	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線による節線区画文、単節織文(L, R)	直径4部j	75
220	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線による節線区画文(J字文)、刺突文、単節織文(R, L)	直径4部d	75
221	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線区画内刺突文	直径4部d	75
222	I C-9(住) 砂埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線による節線区画文	直径4部d	75
223	I C-9(住) 砂埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線による節線区画文、単節織文(R, L)	直径4部j	75
224	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線区画内刺突文	直径4部d	75
225	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線による節線区画文、刺突文	直径4部d	75
226	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線区画内刺突文	直径4部d	75
227	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線区画内刺突文、単節織文(L, R)	直径4部d	75

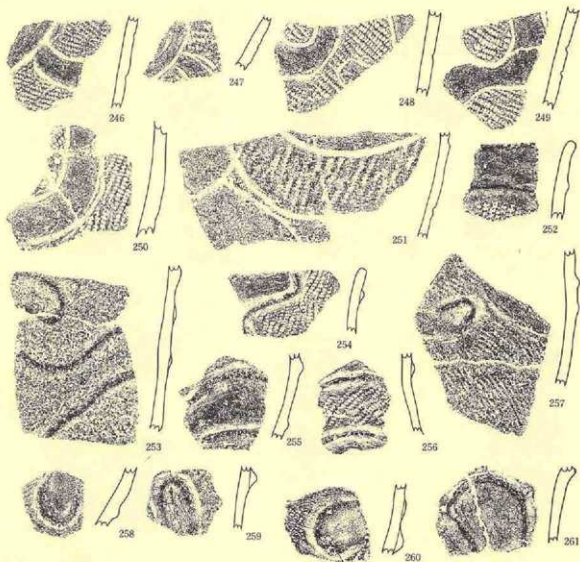
第97図 I C-9住居跡出土遺物(4)



S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	出所
228	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈滞区内刺突文	群器4類a	76
229	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈滞区内刺突文	群器4類a	76
230	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、刺突文	群器4類a	76
231	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、刺突文	群器4類a	76
232	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	刺突文	群器4類a	76
233	I C-9(住) 埋土下部	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、刺突文	群器4類a	76
234	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、半筋織文(R.L)	群器4類a	76
235	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、刺突文、半筋織文(R.L)	群器4類a	76
236	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、刺突文、半筋織文(L.R)	群器4類a	76
237	I C-9(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	断面厚体圧痕、交互刺突文、円形刺突文	群器4類a	76
238	I C-9(住) 埋土下部	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、刺突文、横筋織文(R.L.B)	群器4類a	76
239	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈滞による曲線区画文、横筋織文(L.R.L)	群器4類a	76
240	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈滞による曲線区画文、半筋織文(R.L)	群器4類a	76
241	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈滞による曲線区画文、半筋織文(R.L)	群器4類a	76
242	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋による曲線区画文、半筋織文(R.L)	群器4類a	76
243	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、刺突文、半筋織文(R.L)	群器4類a	76
244	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、横筋織文、半筋織文(R.L)	群器4類a	76
245	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈滞による曲線区画文、形状?	群器4類a	76

第98図 I C-9住居跡出土遺物(5)

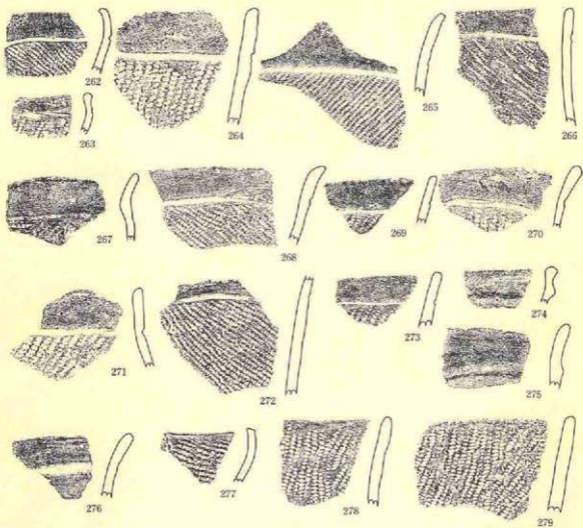


S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	数量
246	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈線による曲線区陶文、単節陶文(L.R)	図群4類d	76
247	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈線による曲線区陶文、単節陶文(R.L)	図群4類d	76
248	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈線による曲線区陶文、単節陶文(L.R)	図群4類	77
249	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈線による曲線区陶文、単節陶文(L.R)	図群4類	77
250	I C-9(住) 埋土上部	深鉢	胴部	沈線による曲線区陶文、単節陶文(R.L)	図群4類d	77
251	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈線による曲線区陶文、単節陶文(R.L)	図群4類	77
252	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	陸帯による曲線区陶文、複節陶文(?)	図群4類	77
253	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	陸帯による曲線区陶文、単節陶文(?)	図群4類c	77
254	I C-9(住) 埋土	深鉢	口縁部	陸帯による曲線区陶文、複節陶文(R.L.R)	図群4類	77
255	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	陸帯による曲線区陶文	図群4類	77
256	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	陸帯による曲線区陶文、単節陶文(R.L)	図群4類	77
257	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	沈線による曲線区陶文、陸帯付文、単節陶文(?)	図群4類d	77
258	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	陸帯付文	図群4類d	77
259	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	陸帯付文	図群4類d	77
260	I C-9(住) 埋土下部	深鉢	胴部	陸帯付文、単節陶文(R.L)	図群4類d	77
261	I C-9(住) 埋土	深鉢	胴部	陸帯による曲線区陶文	図群4類	77

第99図 I C-9住居跡出土遺物(6)

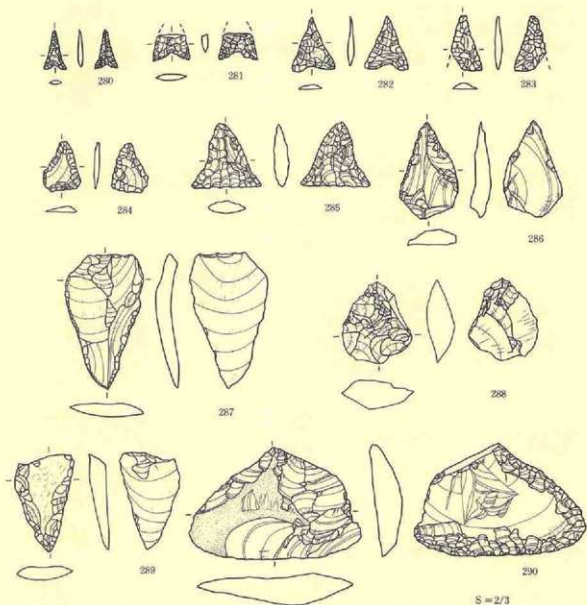




S = 1/3

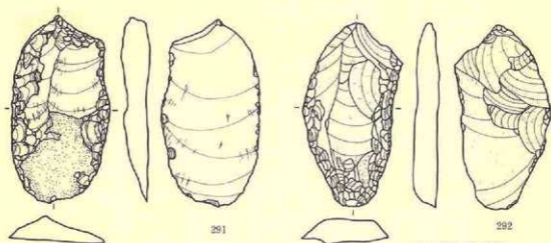
No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図版
262	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(R.L.)	II群4類	77
263	1C-9(位) 埋土	鉢	口縁部	沈線、早期縄文(L.R.)	II群4類	77
264	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(R.L.)	II群4類	77
265	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁、沈線、早期縄文(R.L.)	II群4類	77
266	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(?)	II群4類	77
267	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線、形状不明	II群4類	77
268	1C-9(位) 埋土下部	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(L.R.)	II群4類	77
269	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(R.L.)	II群4類	77
270	1C-9(位) 埋土下部	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(R.L.)	II群4類	77
271	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(R.L.)	II群4類	77
272	1C-9(位) 埋土上部	深鉢	口縁部	沈線、早期縄文(L.R.)	II群4類	78
273	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	平行沈線、早期縄文(R.L.)	II群4類	78
274	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	隆帯	II群4類	78
275	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	隆帯	II群4類	78
276	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線	II群4類	78
277	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁、0段多条(L.R.)	II群4類	78
278	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	沈線文	II群4類	78
279	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	早期縄文(R.L.)	II群4類h	78
279	1C-9(位) 埋土	深鉢	口縁部	早期縄文(R.L.)	II群4類h	78

第100図 IC-9住居跡出土遺物(7)

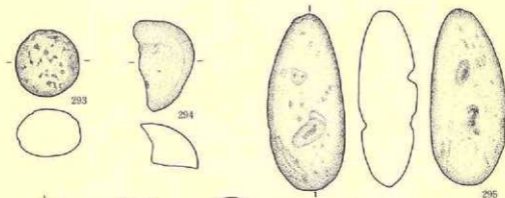


No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	写真図版	
280	I C-9(住)	埋土	石錐	1.5	0.9	0.2	0.2	チャート質輝綠礫灰岩	北上山地 古生界	78	
281	I C-9(住)	埋土	石錐	1.1	1.5	0.25	0.4	チャート	北上山地 古生界	先端部欠損	78
282	I C-9(住)	埋土	石錐	2.2	1.7	0.2	0.6	チャート	北上山地 古生界		78
283	I C-9(住)	埋土	石錐	2.3	1.3	0.2	0.65	粘板岩	北上山地 古生界	基部欠損	78
284	I C-9(住)	埋土	石錐	2.0	1.5	0.3	0.7	硬質泥岩	養羽山地 中新統		78
285	I C-9(住)	敷竹	棒・削形地	2.6	2.8	0.6	2.25	硬質泥岩	養羽山地 中新統	基部1-2片欠損	78
286	I C-9(住)	埋土	棒・削形地	3.9	2.3	0.9	4.65	注質泥岩	養羽山地 中新統		78
287	I C-9(住)	埋土	棒・削形地	5.4	3.15	0.5	8.85	注質泥岩	養羽山地 中新統		78
288	I C-9(住)	埋土	棒・削形地	2.7	2.8	1.0	8.85	チャート	養羽山地 古生界		78
289	I C-9(住)	埋土	棒・削形地	3.9	2.4	0.5	5.25	硬質泥岩	養羽山地 中新統		79
290	I C-9(住)	埋土	棒・削形地	4.3	6.8	1.2	33.75	流紋岩質輝綠礫灰岩	養羽山地 中新統		79

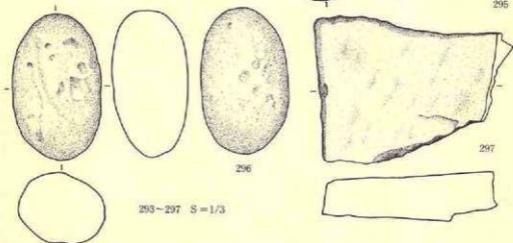
第101図 I C-9住居跡出土遺物(8)



291 · 292 S = 2/3

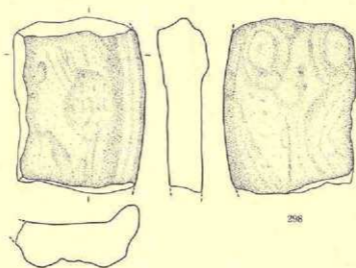


293 - 297 S = 1/3

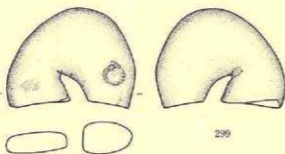


No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	写真
291	I C - 9 (住)	漆・酒器	7.55	4.0	1.0	30.7	煤質泥岩	廣田山地 中新統		79
292	I C - 9 (住)	漆・酒器	7.4	3.9	1.0	33.95	煤質泥岩	廣田山地 中新統		79
293	I C - 9 (住)	煤石	5.3	5.1	3.6	130.00	煤紋的質煤灰角礫岩	廣田山地 中新統		79
294	I C - 9 (住)	煤石	7.2	4.8	(3.6)	70.00	兩輝石安山岩(赤岩塊)	廣田山地 中新統		79
295	I C - 9 (住)	煤石	14.1	6.1	4.7	300.00	兩輝石安山岩(赤岩塊)	廣田山地 中新統		79
296	I C - 9 (住)	煤石	11.7	7.1	6.0	500.00	兩輝石安山岩(赤岩塊)	廣田山地 中新統		79
297	I C - 9 (住)	煤石	11.7	15.7	3.7	1,000.00	兩輝石安山岩	廣田山地 中新統		79

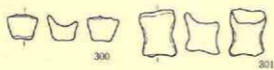
第102圖 I C - 9住居跡出土遺物(9)



298

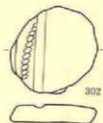


299



300

301



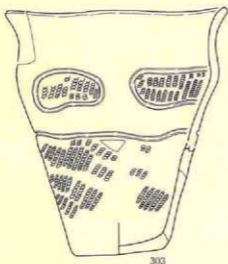
302

298 S=1/3

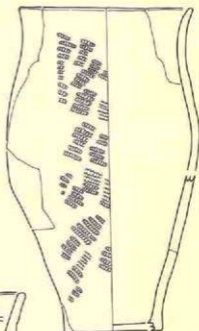
他 S=1/2

No.	出土地点・層位	形種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	出典
298	I C-9(住) 階土下部	打石	14.1	10.0	4.8	440.00	磨崖石(安山岩)(青約集)	奈良三石(1)	欠損	79
299	I C-9(住) 階土	有孔の製品	5.88	6.7	1.7	59.95	細粒凝灰岩	美濃山産 中新統	欠損	79
300	I C-9(住) 階土	耳飾	1.3	1.6	1.7	1.96	—	—	—	79
301	I C-9(住) 階土下部	耳飾	2.4	1.6	1.6	3.50	—	—	—	79
302	I C-9(住) 階土	内装用土製品	4.6	4.6	1.0	18.75	—	—	沈殿、磨石(文)(上)	79

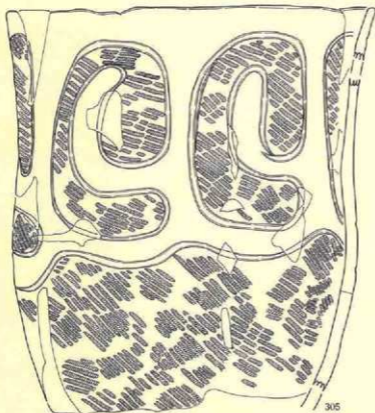
第103図 I C-9住居跡出土遺物(四)



303



304

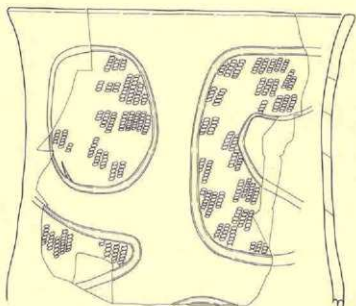


305

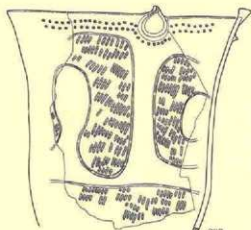
S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・原体・その他	分類	写取図
303	I C-10(住) 紗織部(右)	厚紙	(完整)	波線区画による横格印文、政殿、半島織文(L,R)	目録4類b	90
304	I C-10(住) 紗織部(左)	厚紙	(完整)	半島織文(L,R)	目録4類b	90
305	I C-10(住) 床敷	厚紙	口-胴部	波線区画によるC字文、扇状波線、C段多形(L,R)	目録4類b	90

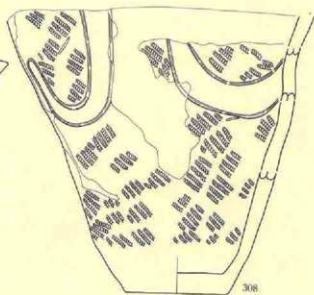
第104図 I C-10住居跡出土遺物(1)



306



307

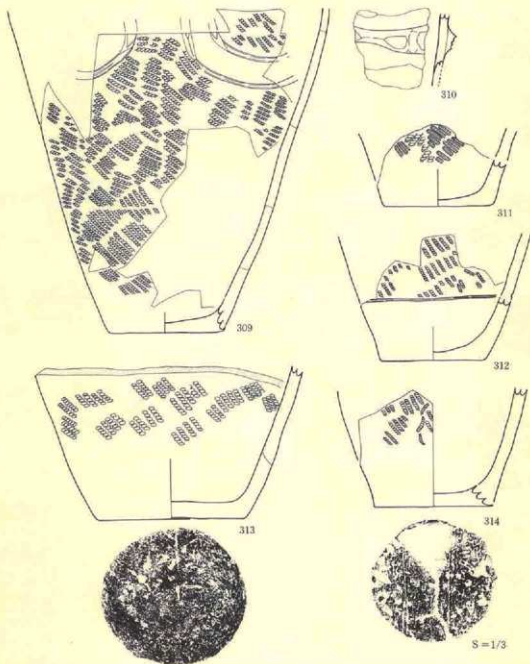


308

S=1/3

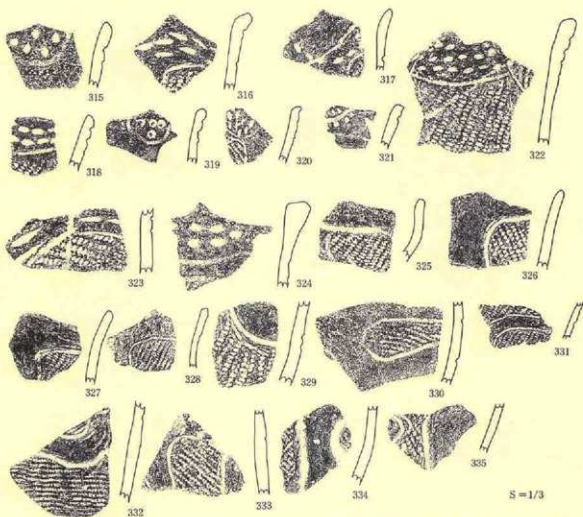
No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	図録
306	I C-10(住) 埴土	深鉢	口-胴部	沈線区画による横列文・C字文、流線沈線、単節横文(L.L.)	目録4類b	80
307	I C-10(住) 埴土	深鉢	口-胴部	沈線区画による「口」状文・C字文、沈線、単節横文(L.L.)	目録4類b	80
308	I C-10(住) 埴土	深鉢	胴-流部	沈線区画による「J」字文(無文)、単節横文(L.L.)	目録4類c	80

第105図 I C-10住居跡出土遺物(2)



No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・基体・その他	分類	図録
309	I C-10(住) 埋土	深鉢	胴-底部	沈線区画による「J」字・「O」字文(舞文)、横状貼付文、卑胎縄文(L.R)	江戸4類d	80
310	I C-10(住) 埋土下部	深鉢	胴部	陸帯	江戸4類	80
311	I C-10(住) 埋土	深鉢	底部	6段多高(目L)、卑胎縄文(目L)	江戸4類	80
312	I C-10(住) 埋土	深鉢	底部	卑胎縄文(L.R)、沈線	江戸4類	80
313	I C-10(住) 埋土	深鉢	底部	卑胎縄文(L.R)、表面木葉文	江戸4類	80
314	I C-10(住) 埋土	深鉢	底部	卑胎縄文(L.R)、横線文、波面状の垂状刺	江戸4類	80

第106図 I C-10住居跡出土遺物(3)

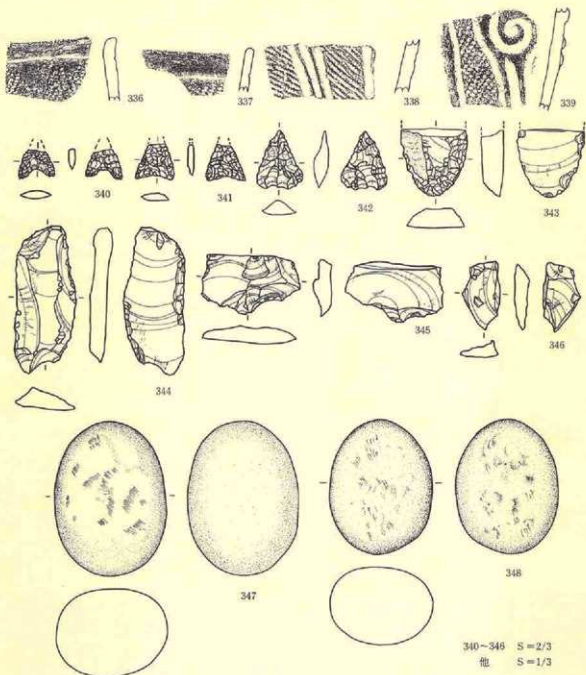


S = 1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	写数
315	I C-10(住) 埋土下部	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
316	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文、単節縄文(R L)	Ⅱ群4類d	81
317	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文、単節縄文(?)	Ⅱ群4類d	81
318	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文、単節縄文(R L)	Ⅱ群4類d	81
319	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文(円形)	Ⅱ群4類d	81
320	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文、単節縄文(R L)	Ⅱ群4類d	81
321	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
322	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文、単節縄文(R L)	Ⅱ群4類d	81
323	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文、単節縄文(R L)	Ⅱ群4類d	81
324	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
325	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
326	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
327	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
328	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
329	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
330	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
331	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
332	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
333	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
334	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81
335	I C-10(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈層による曲線区画文、刺突文	Ⅱ群4類d	81

第107図 I C-10住居跡出土遺物(4)

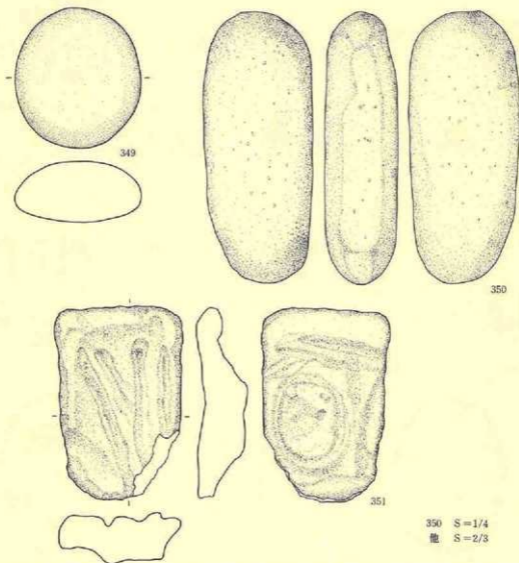




340-346 S=2/3  
他 S=1/3

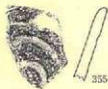
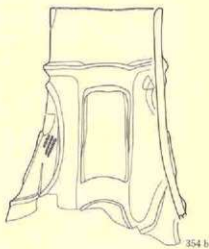
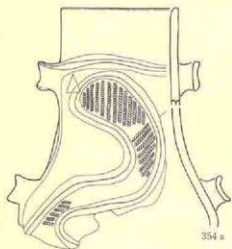
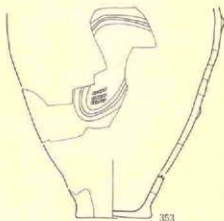
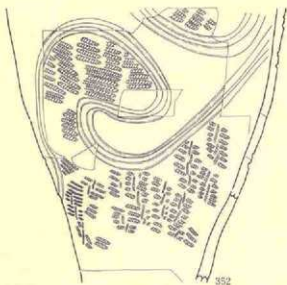
図	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・原体・その他	分類	%ADP
336	I C-10(住)	漆土	胴体	沈線、半筋縄文(R.L.)	II群4類b	81
337	I C-10(住)	漆土	胴体	沈線、菱形縄文(R.L.R.)	II群4類b	81
338	I C-10(住)	漆土	胴体	垂下する沈線、半筋縄文(R.L.)	II群2類b	81
339	I C-10(住)	漆土	胴体	陸沈線による渦巻文・直線文、半筋縄文(R.L.)	II群2類b	81

第108図 I C-10住居跡出土遺物(5)



No	出土地点・層位	器物	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量[g]	材質	産地・生成年代	備考	図録掲載
340	I C-10(住) 埋土	石鏃	1.2	1.5	0.25	0.3	キヤート	北上山塊 古生界	先端部欠損	82
341	I C-10(住) 埋土	石鏃	1.5	1.6	0.3	0.3	粘板岩	北上山塊 古生界	先端部欠損	82
342	I C-10(住) 埋土	石鏃	2.3	1.9	0.6	1.7	粘板岩	北上山塊 古生界		82
343	I C-10(住) 埋土	採・削器	2.7	2.7	0.9	7.66	花崗閃岩	奥羽山塊 中新統	欠損・急角度の刃部	82
344	I C-10(住) 埋土	採・削器	6.0	2.5	0.9	11.55	珪質泥岩	奥羽山塊 中新統		82
345	I C-10(住) 埋土	刮片	4.0	2.3	0.8	6.65	硬質泥岩	奥羽山塊 中新統		82
346	I C-10(住) 埋土	刮片	2.8	1.5	0.6	2.35	キヤート	北上山塊 古生界		82
347	I C-10(住) 埋土	標石	12.5	9.0	7.3	1,190	凝灰質砂岩			82
348	I C-10(住) 埋土	標石	10.6	8.2	6.3	800	崗輝石安山岩			82
349	I C-10(住) 積穴埋土	標石	11.3	10.0	5.0	800	崗輝石安山岩			82
350	I C-10(住) 床面	標石	29.1	11.6	7.8	3,690	崗輝石安山岩			82
351	I C-10(住) 埋土	有溝砥石	15.6	19.3	4.5	500	高輝石安山岩(流紋岩)	新第三系?	一部欠損	82

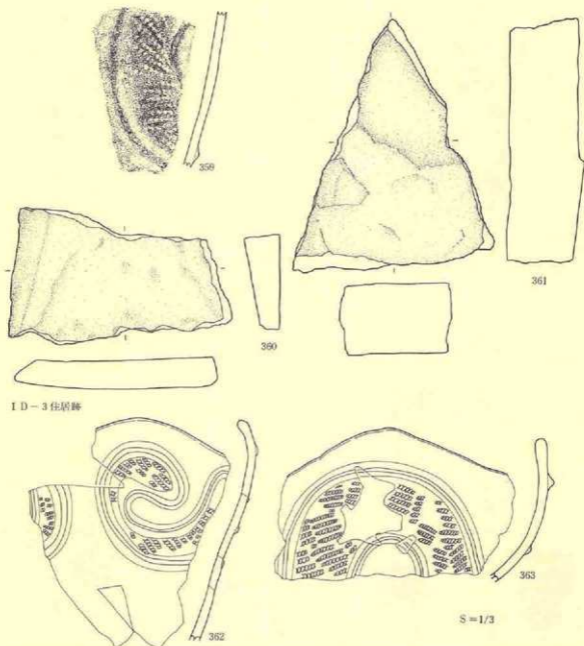
第109図 I C-10住居跡出土遺物(6)



S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図録
352	I D-2 (住)	平腹器	胴部	2本の北周区画による魚鱗文・流線状文、早期織文(L.S.)、斜線文	Ⅱ群4類a	83
353	I D-2 (住)	平腹土	胴部	段帯による前周区画文、早期織文(L.S.)	Ⅱ群4類a	83
354	I D-2 (住)	平腹土	口・胴部	段帯、流線による前周区画文、把手、早期織文(L.S.)、丹塗り	Ⅱ群4類a	83
355	I D-2 (住)	平腹土	口縁部	流線状縁、流線による前周区画文、早期織文(L.S.)	Ⅱ群4類	83
356	I D-2 (住)	平腹土	胴部	段帯による前周区画文、斜線文	Ⅱ群4類	83
357	I D-2 (住)	平腹土	胴部	流線による口・胴文、早期織文(L.S.)	Ⅱ群3類b	83
358	I D-2 (住)	平腹土	胴部	段帯による前周文・流線文、早期織文(L.S.)	Ⅱ群2類b	83

第110図 I D-2住居跡出土遺物(1)

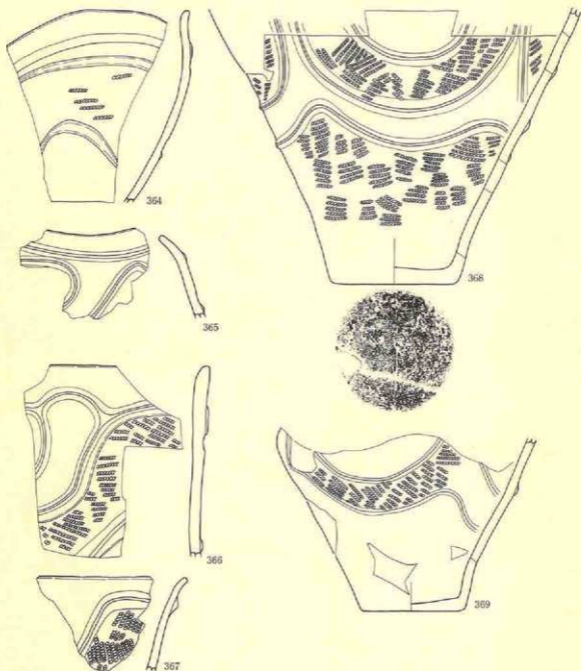


1D-3住居跡

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・主体・その他	分類	図版
359	1D-2(住) 砂埋土	漆器	胴部	胴部による曲線(点文、無層構造)(目L)	目群4類	83
362	1D-2(住) 床面	漆器	口縁部	キ+9r(一)、波状口縁、胴部に2.6C字文、半距網文(L,R)	目群4類a	84
363	1D-2(住) 床面	漆器	口縁部	キ+9r(一)?波状口縁、胴部に2.6C字文、半距網文(L,R)	目群4類a	84

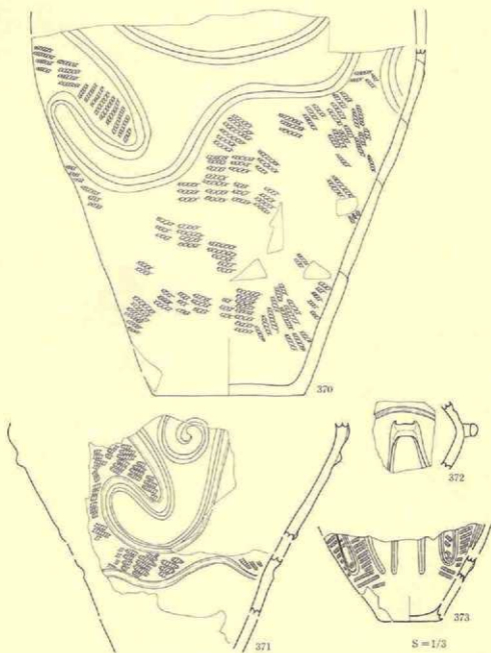
No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石	質	産地・生成年代	備考	図版
360	1D-2(住) 砂埋土	古石	16.8	17.6	2.7	700	両輝石	安山岩		矢田	84
361	1D-2(住) 砂埋土	古石	20.1	16.0	6.2	2,270	両輝石	安山岩		矢田	84

第111図 1D-2(2)・3住居跡出土遺物(1)



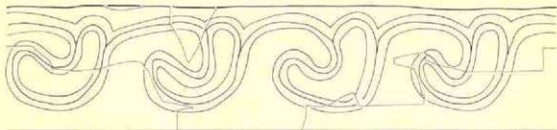
No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	所属図
364	I D-3(住) 様土	深鉢	口縁部	波状口縁、波縁による曲線区画文、単節織文(L.R)	日野4型	84
365	I D-3(住) 様土	深鉢	口縁部	波帯による曲線区画文	日野4型c	84
366	I D-3(住) 様土	深鉢	口一側部	波帯による曲線区画文、単節織文(L.R)	日野4型c	84
367	I D-3(住) 様土	深鉢	口縁部	波帯による曲線区画文、単節織文(R.L)	日野4型c	84
368	I D-3(住) 様土	深鉢	側一底部	波帯による曲線区画文、波状波帯、単節織文(L.R)、後面木葉状	日野4型a	84
369	I D-3(住) P <sub>2</sub> 様土	深鉢	底部	波帯による曲線区画文、単節織文(L.R)	日野4型c	84

第112図 I D-3住居跡出土遺物(2)

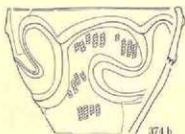


No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器種・その他	分類	図版
370	I D-3(住) 砂層土	深鉢	胴・底部	蹄形による曲線区画文、早期縄文(L,R)	日野4期 a	85
371	I D-3(住) 砂層土	深鉢	胴部	蹄形による曲線区画文・流巻文、流紋流線、早期縄文(L,R)	日野4期 a	85
372	I D-3(住) 砂層土	土	胴部	流線、流紋流線	日野4期 c	85
373	I D-3(住) 灰面	深鉢	胴部	蹄形による「リ」・「白」区文、早期縄文(L,R)	日野4期 a	85

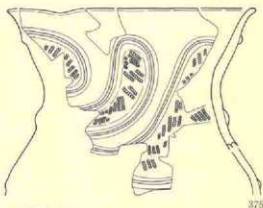
第113図 I D-3住居跡出土遺物(3)



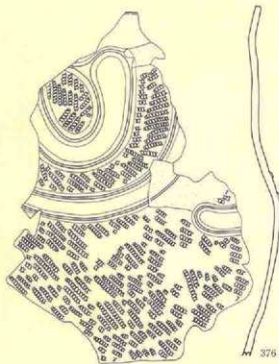
374 a (展開図)



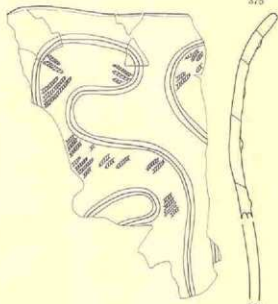
374 b



375



376



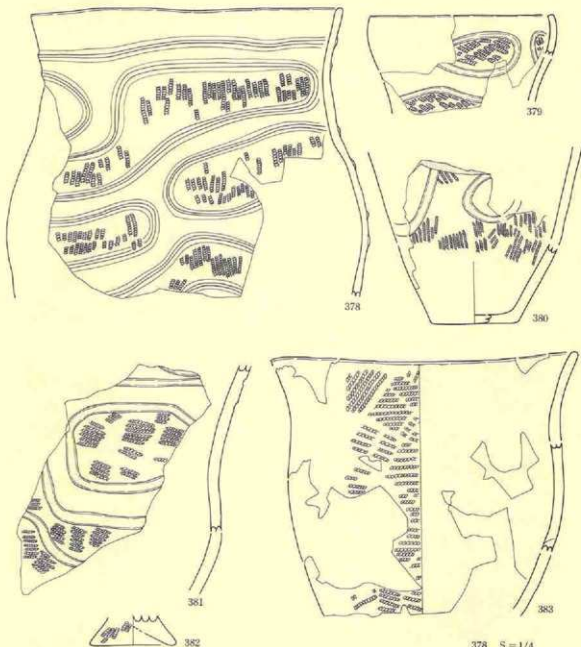
377

376 S=1/4

他 S=1/3

No	出土地点・層位	図種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	図録
374	1 D-3 (住) 5 <sup>1</sup> 埋土	跡	13~14部	段帯区画によるJ字文(無文帯)、早期縄文(ⅡL)	日野4期c	85
375	1 D-3 (住) 床面	床跡	13~14部	段帯による曲線区画文、早期縄文(ⅡL)	日野4期c	85
376	1 D-3 (住) 床面	床跡	11~14部	段帯による曲線区画文、早期縄文(ⅡL)	日野4期c	86
377	1 D-3 (住) 5 <sup>1</sup> 埋土	床跡	13~14部	段帯による曲線区画文、早期縄文(ⅡL)	日野4期c	86

第114図 1 D-3住居跡出土遺物(4)



378 S=1/4

他 S=1/3

No	出土地点・層位	図種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図表
378	I D-3 (住) 床面	浮線	II-別部	階帯による曲線区画文、単品縄文(L上)	II群4類c	86
379	I D-3 (住) 砂+埋土	浮線	II-別部	沈線区画による縦横内文、流紋沈線、単品縄文(L上)	II群4類b	86
380	I D-3 (住) P、埋土	浮線	別一次部	沈線による曲線区画文、単品縄文(L上)	II群4類	86
381	I D-3 (住) 床面	浮線	別部	沈線による曲線区画文、単品縄文(L上)	II群4類	86
382	I D-3 (住) 床面	点+?	高台	単品縄文(L上)	II群4類b	87
383	I D-3 (住) 床面	浮線	II-別部	単品縄文(L上)	II群4類b	87

第115図 I D-3住居跡出土遺物(5)

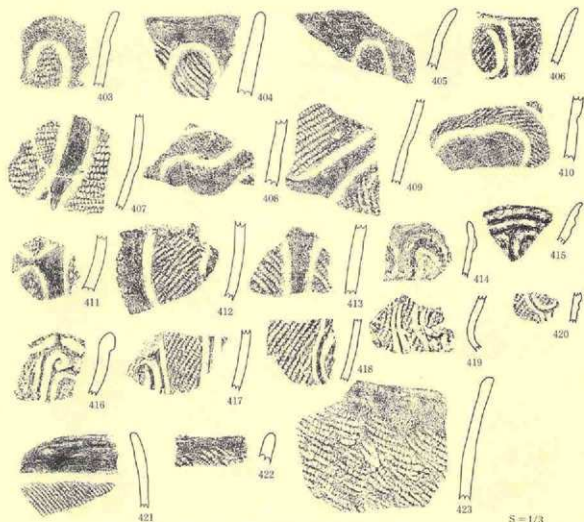




S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図版
384	1 D-3(住) 灰面	深鉢	口縁部	流紋口縁、隆帯による曲線文、O形多角(L.R)	日野4類	87
385	1 D-3(住) 砂? 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、隆帯による曲線文、単節縄文	日野4類	87
386	1 D-3(住) 灰面	深鉢	口縁部	流紋口縁、隆帯による曲線文	日野一	87
387	1 D-3(住) 砂? 埋土	深鉢	口縁部	隆帯による曲線文、刺突文	日野4類	87
388	1 D-3(住) 砂? 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線区画文、単節縄文(L.R)	日野一	87
389	1 D-3(住) 砂? 埋土	深鉢	口縁部	流紋による曲線文、単節縄文(L.R)	日野4類	87
390	1 D-3(住) 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線文、単節縄文(L.R)	日野4類	87
391	1 D-3(住) 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線区画文、単節縄文(L.R)	日野一	87
392	1 D-3(住) 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線区画文、単節縄文(L.R)	日野4類	87
393	1 D-3(住) 灰面	深鉢	口縁部	流紋口縁、隆帯による「U」状文、単節縄文(L.R)	日野3類	87
394	1 D-3(住) 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線文、円形刺突文	日野4類	87
395	1 D-3(住) 灰面	深鉢	口縁部	流紋口縁、刺突文	日野一	87
396	1 D-3(住) P <sub>2</sub> 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線区画文、円形刺突文、単節縄文(L.R)	日野4類	87
397	1 D-3(住) 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線文、円形刺突文	日野4類	87
398	1 D-3(住) P <sub>2</sub> 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線文、円形刺突文	日野4類	87
399	1 D-3(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋口縁、流紋による曲線区画文、単節縄文(L.R)	日野一	87
400	1 D-3(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋による曲線文	日野一	87
401	1 D-3(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋による曲線区画文、単節縄文(L.R)	日野一	87
402	1 D-3(住) 埋土	深鉢	口縁部	流紋による「U」状文、単節縄文(L.R)	日野3類	87

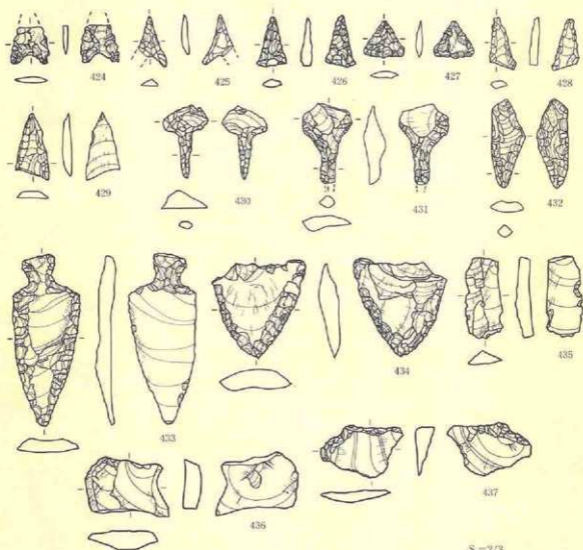
第116図 1 D-3住居跡出土遺物(6)



S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・厚さ・その他	分類	図版
403	ID-3(住)	埴土	口縁部	波状口縁、沈線によるシ字文?、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群-1	87
404	ID-3(住)	埴土	口縁部	沈線区画による「白」状文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群3類	87
405	ID-3(住)	朽木	口縁部	沈線区画による「白」状文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群3類	88
406	ID-3(住)	埴土	口縁部	波状口縁、沈線による波巻文(素手)、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群3類	88
407	ID-3(住)	朱漆	胴部	沈線による曲線区画文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群4類	88
408	ID-3(住)	埴土	胴部	沈線による曲線区画文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群4類	88
409	ID-3(住)	埴土	胴部	沈線による曲線区画文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群4類	88
410	ID-3(住)	青漆	胴部	沈線による曲線区画文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群4類	88
411	ID-3(住)	P <sub>1</sub> 埴土	胴部	沈線による曲線区画文	Ⅱ群4類	88
412	ID-3(住)	埴土	胴部	沈線による曲線区画文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群-	88
413	ID-3(住)	埴土	胴部	沈線による曲線区画文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群3類	88
414	ID-3(住)	埴土	口縁部	波状口縁、沈線による波巻文	Ⅱ群-	88
415	ID-3(住)	朽?埴土	口縁部	波状口縁、沈線による波巻文	Ⅱ群-	88
416	ID-3(住)	赭灰埴土	口縁部	波状口縁、段沈線による波巻文・直・曲線文	Ⅱ群2類b	88
417	ID-3(住)	P <sub>1</sub> 埴土	胴部	段沈線による直・曲線文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群2類b	88
418	ID-3(住)	P <sub>1</sub> 埴土	胴部	段沈線による直線文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群2類b	88
419	ID-3(住)	埴土	胴部	段沈線による直・曲線文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群2類b	88
420	ID-3(住)	埴土	胴部	段沈線による直・曲線文、早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群2類b	88
421	ID-3(住)	埴土	口縁部	波状口縁、沈線	Ⅱ群-	88
422	ID-3(住)	埴土	口縁部	早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群-	88
423	ID-3(住)	埴土	口縁部	早期縄文(ⅠⅡ)	Ⅱ群-	88

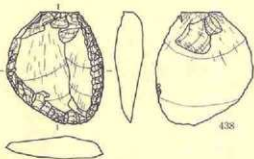
第117図 ID-3住居跡出土遺物(7)



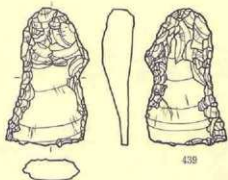
S=2/3

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	写真図
424	I D-3 (位) 埋土	石楯	1.5	1.5	0.2	0.65	硬質頁岩	豊前山地 中新統	先端部欠損	89
425	I D-3 (位) 砂?埋土	石楯	2.0	1.3	0.2	0.4	硬質頁岩	豊前山地 中新統	側部欠損	89
426	I D-3 (位) 埋土	石楯	2.1	1.2	0.5	0.85	軟質頁岩	北上山地 古生帯		89
427	I D-3 (位) 埋土	石楯	1.5	1.6	0.25	0.55	ナッパ	北上山地 古生帯	基部欠損?	89
428	I D-3 (位) 埋土	石楯(兼*)	2.1	1.1	0.4	0.85	軟質頁岩	北上山地 古生帯	欠損	89
429	I D-3 (位) 埋土	鏃・箭鏃地	2.7	1.4	0.3	1.2	硬質頁岩	豊前山地 中新統	欠損	89
430	I D-3 (位) 砂?埋土	石楯	2.9	1.8	0.3	1.4	硬質頁岩	豊前山地 中新統		89
431	I D-3 (位) 埋土	石楯	3.2	2.0	0.9	3.1	硬質頁岩	豊前山地 中新統	側面基部欠損	89
432	I D-3 (位) 結核埋土	石楯	3.6	1.35	0.5	2.9	鉄石英	不詳		89
433	I D-3 (位) 埋土	石楯	6.9	2.7	0.6	9.4	流紋岩	豊前山地 中新統		89
434	I D-3 (位) 砂?埋土	鏃・箭鏃地	3.7	2.5	0.7	11.25	流紋岩	豊前山地 中新統	先端部の欠損?	89
435	I D-3 (位) 埋土	刮片	3.3	1.5	0.7	2.44	軟質頁岩	北上山地 古生帯		89
436	I D-3 (位) 埋土	刮片	2.5	2.3	0.6	5.52	硬質頁岩	豊前山地 新第三系		89
437	I D-3 (位) 埋土	鏃・箭鏃地	2.1	2.3	0.8	5.36	片頁岩	豊前山地 新第三系		89

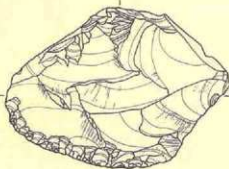
第118図 I D-3住居跡出土遺物(8)



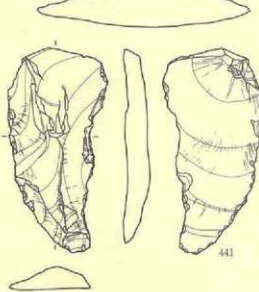
438



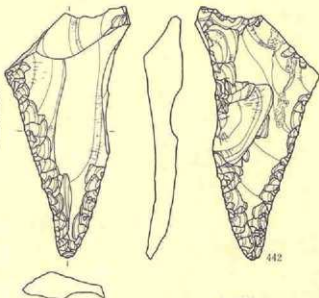
439



440



441

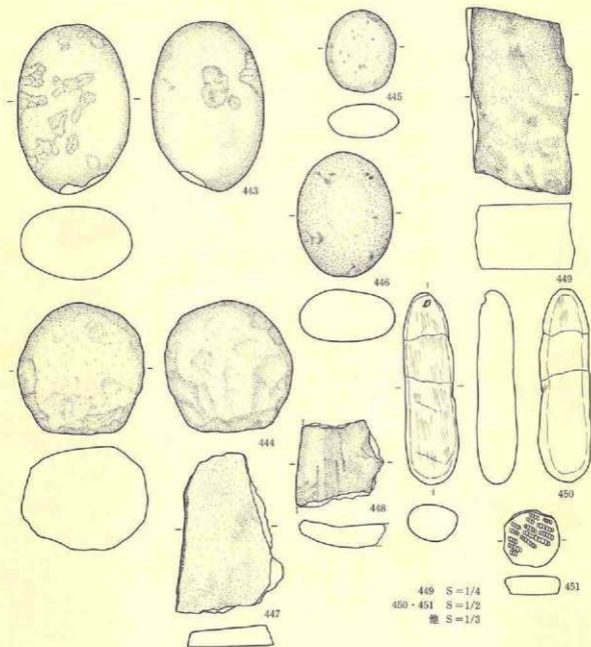


442

S = 2/3

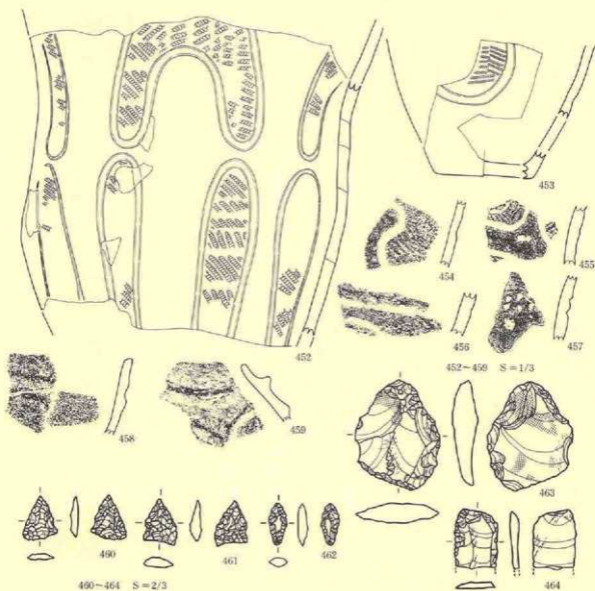
No.	出土地点・層位	形制	最大径(cm)	最大径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	学館附
438	I D-3(住) 壤土	碟-碗形器	4.5	3.9	1.1	90.85	硬質灰岩	黄山山地 中群統		89
439	I D-3(住) 壤土	碟-碗形器	5.6	3.3	1.2	18.2	硬質灰岩	黄山山地 群第三系		89
440	I D-3(住) 灰岩	碟-碗形器	6.4	9.0	1.7	80.0	地層砂粒質燧石	黄山山地 群第三系		89
441	I D-3(住) 壤土	碟-碗形器	8.3	4.0	1.1	29.92	地層砂粒質燧石	黄山山地 群第三系		89
442	I D-3(住) 壤土	碟-碗形器	10.1	8.0	1.5	48.85	硬質灰岩	黄山山地 中群統		90

第119图 I D-3住居跡出土遺物(9)



No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	当館蔵
443	1 D-3 (位) 礫土下部	礫石	13.5	8.9	6.0	1,049	花崗閃長岩	北上山地 中生界		90
444	1 D-3 (位) 礫土	礫石	10.6	10.1	8.5	1,270	両輝石安山岩			90
445	1 D-3 (位) 礫土	礫石	6.6	3.5	2.6	119.36	両輝石安山岩			90
446	1 D-3 (位) 礫土下部	礫石	10.0	7.6	4.1	460	両輝石安山岩			90
447	1 D-3 (位) 礫土	台石	12.6	8.3	1.7	240	両輝石安山岩			90
448	1 D-3 (位) P。礫土	石片	6.9	7.1	1.9	89.6	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系	礫石として使用?	90
449	1 D-3 (位) 礫土下部	台石	18.5	11.0	6.8	3,130	両輝石安山岩			90
450	1 D-3 (位) 礫土	棒状石製品	2.8	10.2	2.1	33.5	流紋岩質輝石安山岩	奥羽山地 中新統		90
451	1 D-3 (位) 礫土	円盤状土製品	3.1	4.6	1.0	18.75	—	—	早期縄文(B.L.)	90

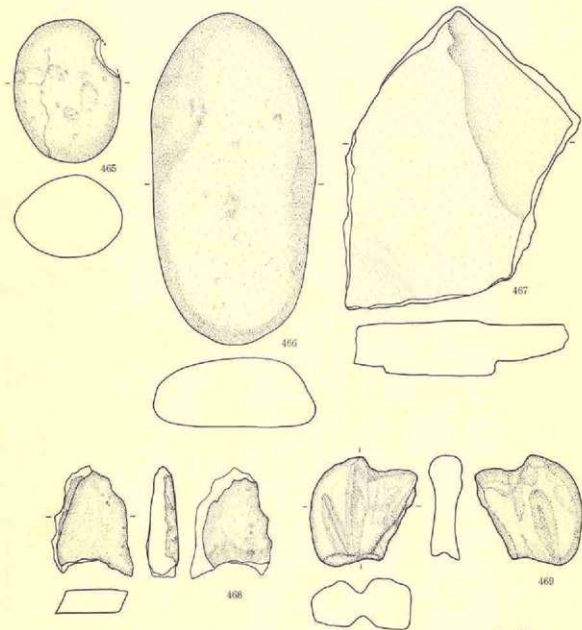
第120図 1 D-3住居跡出土遺物(1)



No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・単位・その他	分類	年相
452	I D-5(住) 埋設土器	漆器	胴部	沈積区画による「白」状文、半節筒文(L,R)	目録3類1	91
453	I D-5(住) 床面	漆器	胴・胴部	沈積区画による「白」状文、半節筒文(L,R)	目録4類	91
454	I D-5(住) 床面	漆器	胴部	沈積区画による「白」状文、半節筒文(L,R)	目録4類	91
455	I D-5(住) P <sub>1</sub> 埋土	漆器	胴部	沈積区画による「白」状文、半節筒文(L,R)	目録4類	91
456	I D-5(住) P <sub>2</sub> 埋土	漆器	胴部	沈積区画による「白」状文、半節筒文(L,R)	目録4類	91
457	I D-5(住) 床面	漆器	胴部	刺突文	目録—	91
458	I D-5(住) 埋土	漆器	口縁部	跡布	目録—	91
459	I D-5(住) 埋土	漆器	口縁部	跡布による刺突文、半節筒文(L,R)	目録—	91

No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石質	産地・生成年代	備考	年相
460	I D-5(住) 埋土	石鏡	1.6	1.4	0.3	0.5	ヤマト	志上山地 古生界		91
461	I D-5(住) 埋土	石鏡	1.6	1.3	0.5	0.65	硬質頁岩	奥羽山地 中新統		91
462	I D-5(住) 埋土	石鏡	1.7	0.7	0.3	0.4	硬質頁岩	奥羽山地 中新統		91
463	I D-5(住) P <sub>2</sub> 埋土	棒・筒器	4.4	3.4	1.0	12.07	硬質頁岩	奥羽山地 新第三系	欠陥、パール付蓋	91
464	I D-5(住) 埋土	棒・筒器	3.4	1.7	0.4	1.6	硬質頁岩	奥羽山地 新第三系		91

第121図 I D-5住居跡出土遺物(1)

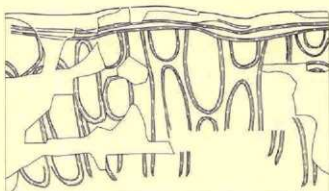


No.	出土地点・層位	部種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石質	産地・形成年代	備考	図録
465	I D-5 (住) 灰面	礫石	11.4	8.5	6.6	880	岡輝石安山岩		敲打痕	91
466	I D-5 (住) 灰面	礫石	26.6	13.1	7.1	2,840	岡輝石安山岩		右石として使用?	91
467	I D-5 (住) 灰面	白石	23.5	17.5	4.4	3,360	岡輝石安山岩		欠損	92
468	I D-5 (住) 埋土	白石	7.7	5.8	1.9	163.6	岡輝石安山岩	表裏面地 新第三系	欠損	92
469	I D-5 (住) F <sub>1</sub> 埋土	右溝礫石	8.8	8.6	4.9	140	岡輝石安山岩(砂岩塊)	新第三系?	通(表1,表2)	92

第122図 I D-5住居跡出土遺物(2)



470 a



470 b (展開図)

## II E - 2 住居跡



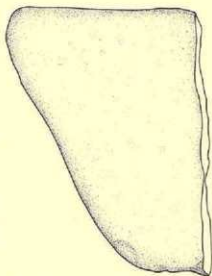
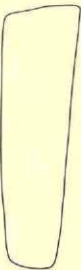
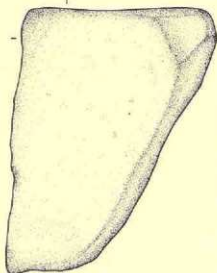
471



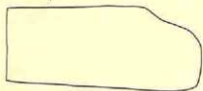
472



473



474



S=1/3

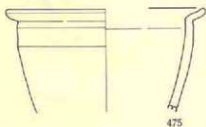
No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・原体・その他	分類	図録
470	目野-1(住) P, 埋設	深鉢	(完形)	流状口縁, 平行波線, 波線による「U」, 「V」状文	目野3群a	90
471	目野-1(住) 前庭部埋土	深鉢	口縁部	斜交文	目野3群	92
472	目野-2(住) 埋土	深鉢	口縁部	同形斜交文	目野3群	92
473	目野-2(住) 前庭埋土	深鉢	口縁部	単純縄文(直L)	目野-	92

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石	質	産地・生成年代	備考	図録
474	目野-2(住) 床面	台石	21.4	16.7	6.5	3,329		角礫石(安山岩)		欠損	92

第123図 II E - 1・2 住居跡出土遺物



I C-8 住居跡



475



476



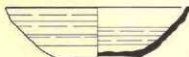
477



478



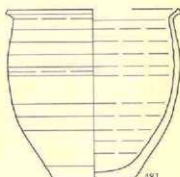
I C-13



479



480



481

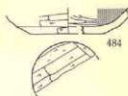
I D-1 住居跡(1)



482



483



484

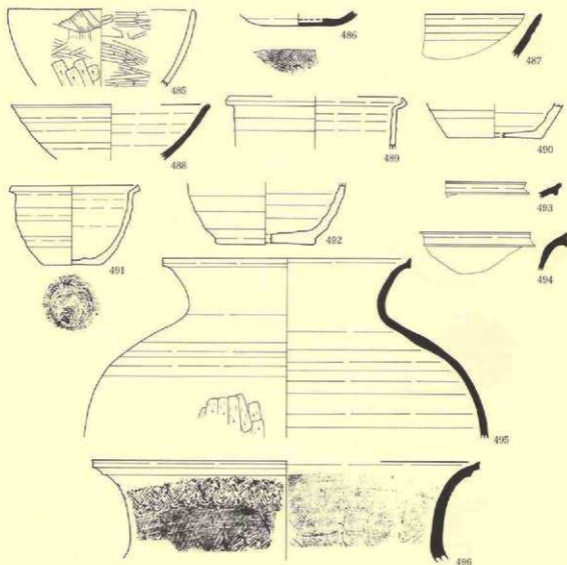


S=1/3

No.	出土地点・層位	種類・器種	成物	外面調整			内面調整			流量 (cm)			分類	備考	写真図
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	容積	残存			
475	I C-8 (住) ケツノ土	土師器 罎	ロクツロ	ロクツロ	ロクツロ	---	ロクツロ	ロクツロ	---	[10.1]	---	---			93
479	I C-13 (住) 黒黒土	土師器 罎	ロクツロ	ロクツロ	ロクツロ	口縁部切	ロクツロ	ロクツロ	---	14.8	4.1	16.6			93
480	I C-13 (住) 黒黒土	土師器 罎	ロクツロ	ロクツロ	---	---	ロクツロ	---	---	[10.0]	---	---			93
481	I C-13 (住) 黒土	土師器 罎	ロクツロ	ロクツロ	ロクツロ	内面調整	ロクツロ	ロクツロ	---	13.9	13.6	6.6			93
482	I D-1 (住) 黒土	土師器 罎	ロクツロ	---	ロクツロ	内調整	---	ロクツロ	---	[ 2.4]	7.2	---	坏目-B	褐色処理	93
483	I D-1 (住) 黒土下層	土師器 罎	ロクツロ	---	ロクツロ	内調整	---	ロクツロ	---	[ 1.5]	( 5.6)	---	坏目-B	褐色処理	93
484	I D-1 (住) 黒土下層	土師器 罎	ロクツロ	---	---	内調整	---	ロクツロ	---	[ 1.5]	( 5.8)	---	坏目-B	褐色処理	93

No.	出土地点・層位	器種	最大径 (cm)	胎土厚 (cm)	胎輪径 (cm)	胎輪厚 (cm)	重量 (g)	備考	写真図
476	I C-8 (住) 灰面	土製粘壺	[13.1]	0.95	---	---	9.14		93
477	I C-8 (住) 灰面	土製粘壺	[10.4]	1.4	5.5×5.5	0.9	37.51		93
478	I C-8 (住) 灰面	土製粘壺	[11.35]	1.0	5.3×5.2	0.8	35.60		93

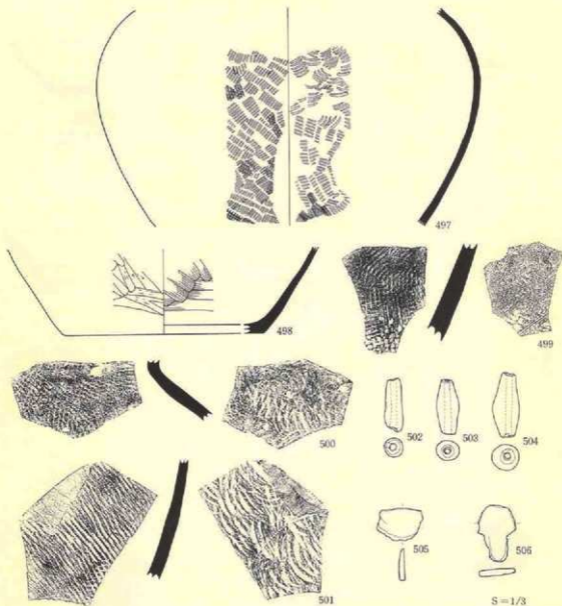
第124図 I C-8・I D-1 住居跡出土遺物(1)



S=1/3

No	出土地点・層位	種類・器種	成彩	外面調査			内面調査			法量 (cm)		分組	備考	写真	
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高				底径
485	1B-1(白) オマツ赤地帯	土師器 杯	黒クワロ	ハナナナ	ミガキ	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	—	—	1C-1	黒色処理?	93	
486	1D-1(紅) 埋土	須恵器 杯	ロクワロ	—	—	回転赤斑	—	ロクワロ	—	—	(6.6)	—	—	92	
487	1D-1(紅) 埋土	須恵器 杯	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	(12.2)	—	—	93	
488	1D-1(紅) 埋土	須恵器 杯	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	(13.5)	—	—	93	
489	1D-1(紅) 埋土	須恵器 杯	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	(15.0)	—	—	93	
490	1D-1(紅) 埋土	土師器 壺	ロクワロ	—	ロクワロ	回転赤斑	—	ロクワロ	—	—	(7.8)	—	—	93	
491	1B-1(白) 赤地オマツ	土師器 壺	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	10.0	6.5	4.6	—	93
492	1D-1(白) 埋土	土師器 壺	ロクワロ	—	ロクワロ	回転赤斑	—	ロクワロ	—	—	(5.3)	(9.0)	—	93	
493	1D-1(白) 埋土	須恵器 壺	ロクワロ	—	ロクワロ	—	ロクワロ	—	—	—	(20.2)	—	—	93	
494	1D-1(白) オマツ	須恵器 壺	ロクワロ	—	ロクワロ	—	ロクワロ	—	—	—	(17.2)	—	—	93	
495	1D-1(紅) オマツ	須恵器 壺	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	ロクワロ	ロクワロ	ロクワロ	—	(19.4)	(14.3)	—	94	
496	1D-1(紅) 埋土	須恵器 壺	ロクワロ	ロクワロ	オキ目	—	オキ目	—	—	—	(11.0)	—	—	94	

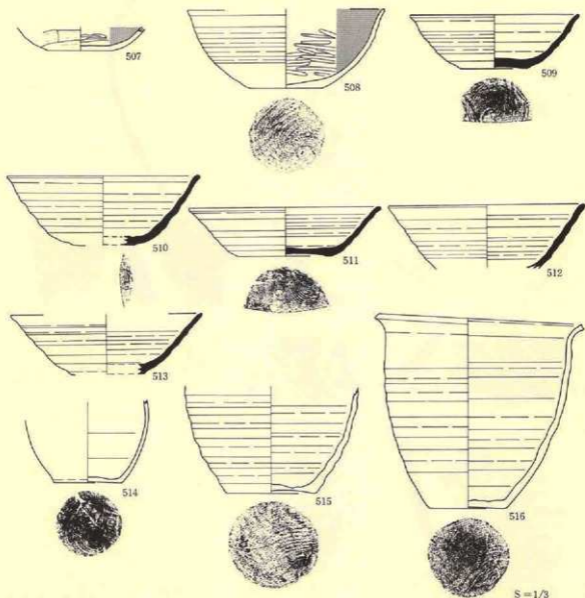
第125図 1D-1住居跡出土遺物(2)



No	出土地点・層位	種別・器種	形状	外面調査			内面調査			寸法 (cm)			分類	備考	写真	
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	器径				
497	1 D-1 (住)	埴器部 甕	—	—	叩き目 ×	—	—	当て貝痕	—	—	—	—	—	—	—	94
498	1 D-1 (住)	埴土	甕	—	—	へらナギ	—	—	へらナギ	—	—	—	—	—	—	94
499	1 D-1 (住)	埴土 ×	甕器部 甕	—	—	叩き目	—	—	へらナギ	—	—	—	—	—	—	94
500	1 D-1 (住)	埴土	甕器部 甕	—	—	叩き目	—	—	当て貝痕	—	—	—	—	—	—	94
501	1 D-1 (住)	埴土	甕器部 甕	—	—	叩き目	—	—	当て貝痕	—	—	—	—	—	—	94

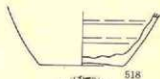
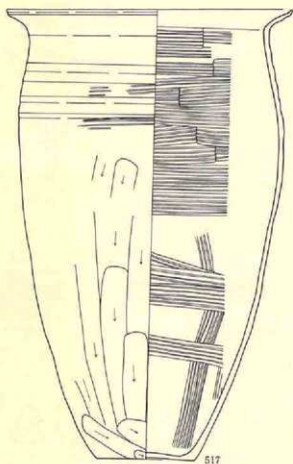
No	出土地点・層位	器種	寸法 (cm)			重量 (g)	備考	分類	写真
			最大長	最大幅	最大厚				
502	1 D-1 (住)	埴土	4.5	1.8	内径0.8	7.18	—	—	94
503	1 D-1 (住)	埴土	4.4	1.5	内径0.4	10.72	—	—	94
504	1 D-1 (住)	埴土	5.3	2.3	内径0.5	19.05	—	—	94
505	1 D-1 (住)	埴土	2.6	3.65	0.5	4.21	—	—	94
506	1 D-1 (住)	埴土	4.5	3.1	0.7	11.1	—	—	94

第126図 ID-1住居跡出土遺物(2)



No.	出土地点・層位	種類・器種	産科	外面調整			内面調整			法量 (cm)		分類	備考	写真図		
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	器高				底径	
507	N C-1 (住) 塚土	土師器 杯	ロツロ	—	ヘラツギ	再調整	—	上ツギ	上ツギ	—	—	5.1	環目-B	黒色粘土	95	
508	N D-1 (住) 塚面	土師器 杯	ロツロ	ロツロ	ロツロ	刷毛未施	—	上ツギ	上ツギ	(15.8)	6.3	6.0	環目-A	No.3	95	
509	N D-1 (住) 中ツツ	須恵器 杯	ロツロ	ロツロ	ロツロ	刷毛未施	ロツロ	ロツロ	ロツロ	(13.6)	4.3	5.4	—	—	95	
510	N D-1 (住) 中ツツ	須恵器 杯	ロツロ	ロツロ	ロツロ	刷毛未施	ロツロ	ロツロ	ロツロ	(15.5)	5.5	—	—	—	95	
511	N D-1 (住) 中ツツ	須恵器 杯	ロツロ	ロツロ	ロツロ	刷毛未施	ロツロ	ロツロ	ロツロ	(15.4)	3.9	(7.4)	—	—	95	
512	N D-1 (住) 中ツツ	須恵器 杯	ロツロ	ロツロ	ロツロ	刷毛未施	ロツロ	ロツロ	ロツロ	(15.8)	(5.1)	—	—	—	95	
513	N D-1 (住) 中ツツ	須恵器 杯	ロツロ	ロツロ	ロツロ	刷毛未施	—	ロツロ	ロツロ	(14.4)	(4.8)	—	—	—	95	
514	N D-1 (住) 塚土	土師器 壺	ロツロ	—	ロツロ	刷毛未施	—	ロツロ	ロツロ	(6.6)	5.4	—	—	—	95	
515	N D-1 (住) 塚面	土師器 壺	ロツロ	—	ロツロ	刷毛未施	—	ロツロ	ロツロ	(8.6)	7.2	—	—	—	No.5	95
516	N D-1 (住) 塚面	土師器 壺	ロツロ	ロツロ	ロツロ	刷毛未施	ロツロ	ロツロ	ロツロ	16.3	15.5	6.0	—	—	No.2	96

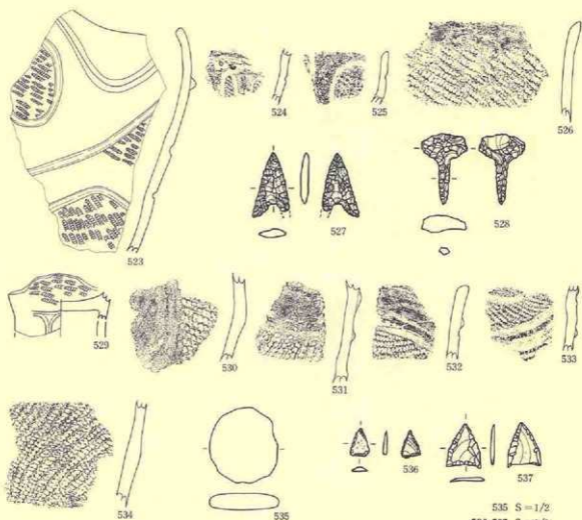
第127図 N C-1・N D-1 住居跡出土遺物(1)



S = 1/3

No.	出土地点・層位	種類・器種	成形	外面調整			内面調整			法量 (cm)			分類	備考	写真		
				口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口径	器高	口径					
517	IV D-1 (他) 床面	土師器 甕	ロクロ	ロクロ底	ヘラツキ	—	ロクロ底	ロクロ底	ロクロ底	ロクロ底	23.1	30.5	8.0	No. 1	90		
518	■D-1(他) 2層土師器	土師器 甕	ロクロ	—	ロクロ底	刷毛目切	—	ロクロ底	—	—	—	(4.2)	6.8	—	支脚 1 No. 4	90	
519	IV D-1 (他) キツク土師器	土師器 甕	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ロクロ底	—	—	(11.8)	(5.8)	—	—	96		
520	IV D-1 (他) キツク土師器	土師器 甕	ロクロ	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ロクロ底	—	—	(16.8)	—	—	—	96		
521	IV D-1 (他) 埋土	須恵器 甕	ロクロ	—	ロクロ底	—	—	ロクロ底	—	—	—	—	—	—	96		
522	IV D-1 (他) 床面	須恵器 甕	ロクロ	—	ヘラツキ	—	ヘラツキ	—	—	—	—	—	(8.4)	—	90		

第128図 IV D-1 住居跡出土遺物(2)

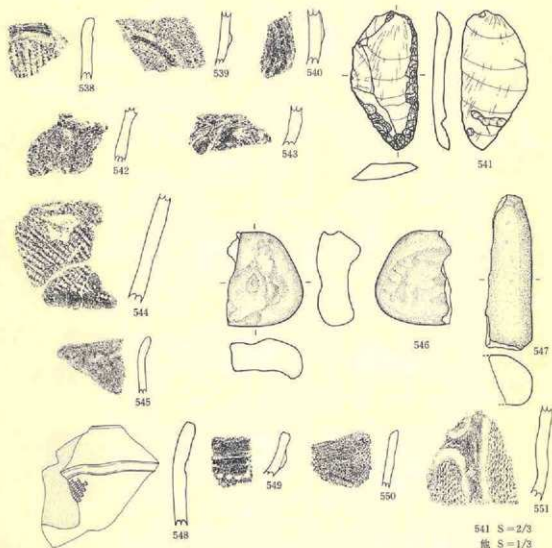


535 S=1/2  
536-537 S=2/3  
他 S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図版
523	I C-55(土) 埋土4層	漆鉢	口一側部	流状口縁。隆帯・沈殿による曲線区画文。半筋縄文(右L)	II群4類	97
524	I C-55(土) 埋土3層	漆鉢	胴部	沈殿による「白」紋文。半筋縄文(L,R)	II群3類	97
525	I C-55(土) 埋土	漆鉢	口縁部	沈殿による曲線区画文。半筋縄文(L,R)	II群3類	97
526	I C-55(土) 埋土	漆鉢	口縁部	半筋縄文(L,R)	II群 一	97
527	I C-56(土) 埋土	漆鉢	高台部?	半筋縄文(L,R)。隆帯	II群 一	97
528	I C-56(土) 埋土	漆鉢	胴部	隆帯による曲線区画文。後筋縄文(右L,R)	同一類	97
529	I C-56(土) 埋土	漆鉢	胴部	隆帯による曲線区画文。後筋縄文(右L,R)	II群4類	97
530	I C-56(土) 埋土	漆鉢	口縁部	隆帯による曲線区画文。半筋縄文(L,R)	II群4類	97
531	I C-56(土) 埋土	漆鉢	胴部	隆帯による曲線区画文。半筋縄文(L,R)	II群4類	97
532	I C-56(土) 埋土	漆鉢	胴部	隆帯による曲線区画文。半筋縄文(L,R)	II群4類	97
533	I C-56(土) 埋土	漆鉢	胴部	隆帯による曲線区画文。半筋縄文(L,R)	II群4類	97
534	I C-56(土) 埋土	漆鉢	胴部	半筋縄文(R,L)	II群4類	97

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石	質	産地・生成年代	備考	図版
527	I C-55(土) 埋土	石鏡	2.5	1.4	0.3	0.80	瑠璃泥岩	——	善利山池 中新統	胴部欠損	97
528	I C-55(土) 埋土	石鏡	2.9	1.8	0.6	1.55	瑠璃泥岩	——	善利山池 中新統	——	97
529	I C-56(土) 埋土	円筒土製品	4.0	3.7	0.9	9.49	——	——	——	——	97
536	I C-56(土) 埋土	石鏡	1.1	0.1	0.6	0.20	チャーム	——	北上山地 古生界	——	97
537	I C-56(土) 埋土	石鏡	1.8	1.4	0.2	0.45	瑠璃泥岩	——	善利山池 中新統	——	97

第129図 I C-55-56土坑出土遺物

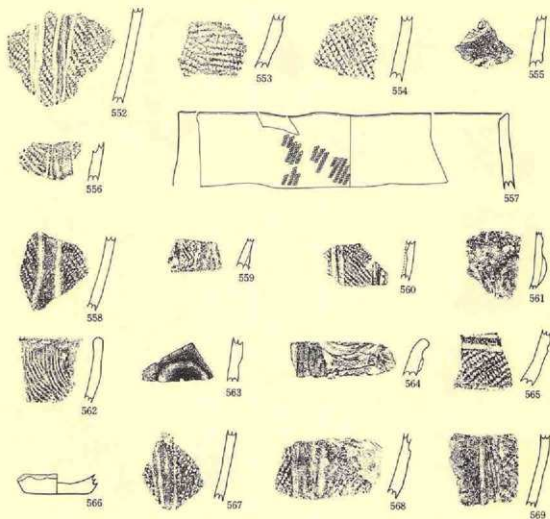


541 S=2/3  
他 S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図録
538	I C-57(土) 埋土1層	深鉢	口縁部	流線, 単面縄文(右L)	II群 -	97
539	I C-58(土) 埋土	深鉢	胴部	底部による曲線区画文	II群 -	97
540	I C-58(土) 埋土1層	深鉢	胴部	隆帯による曲線区画文	II群 -	97
542	I C-60(土) 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線文	II群 -	98
543	I C-61(土) 埋土	深鉢	胴部	隆帯による曲線文	II群 -	98
544	I C-67(土) 埋土	深鉢	胴部	単面縄文(右L)	II群 -	98
545	I C-67(土) 埋土	深鉢	口縁部		II群 -	98
546	I C-70(土) 埋土	深鉢	口縁部	流線, 単面縄文(右L)	II群 -	98
549	I C-73(土) 埋土	深鉢	口縁部	隆帯, 刺突文	II群 -	98
550	I C-73(土) 埋土	深鉢	口縁部	流状口縁	II群 -	98
551	I C-73(土) 埋土	深鉢	胴部	沈線による「U」, 弦文, 刺突文	II群(類)	98

No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石質	産地・生成年代	備考	図録
541	I C-58(土) 埋土下部	鏃・鏃形鏃	5.6	2.6	0.6	11.40	埴貫頁岩	奥羽山地 中新統		97
545	I C-67(土) 埋土	鏃石	7.3	5.9	2.1	191.57	流紋岩質凝灰角礫岩	奥羽山地 中新統	欠損	98
547	I C-67(土) 埋土	鏃石	12.0	3.8	4.4	266.62	流紋岩質凝灰角礫岩	奥羽山地 中新統	欠損	98

第130図 I C-57・58・60・61・67・70・73(土)土坑出土遺物

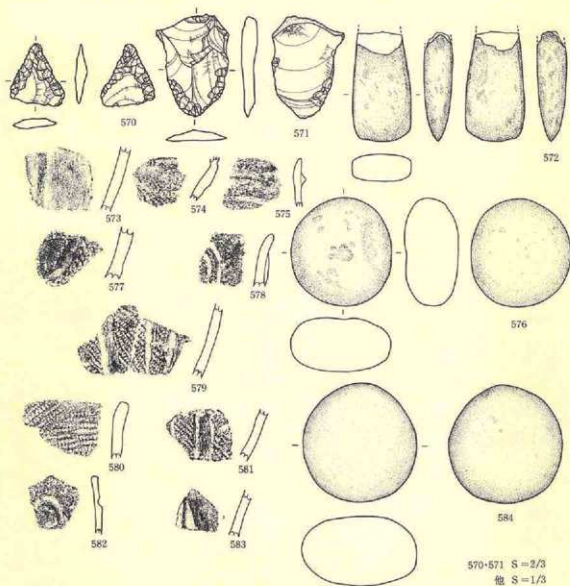


S=1/3

No	発土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	5A28B
552	I C-73(土)	深鉢	胴部	垂下する沈線。半筋縄文(L,R)	II群3類	96
553	I C-73(土)	深鉢	胴部	半筋縄文(R,L)	II群1	96
554	I C-73(土)	深鉢	胴部	半筋縄文(L,R)	II群1	96
555	I C-74(土)	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文。半筋縄文	II群4類	96
556	I C-76(土)	深鉢	胴部	沈線。半筋縄文(L,R)	II群3類	96
557	I C-76(土)	深鉢	胴部	幾筋縄文(R,L)	II群1	96
558	I C-76(土)	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文。半筋縄文(L,R)	II群3類	96
559	I C-76(土)	深鉢	胴部	隆帯による区画文。半筋縄文(L,R)	II群3類	96
560	I C-76(土)	深鉢	胴部	沈線。半筋縄文(L,R)	II群3類	96
561	I C-76(土)	深鉢	口縁部	隆帯による曲線区画文	II群1	96
562	I C-76(土)	深鉢	口縁部	西米文	II群1	96
563	I C-76(土)	深鉢	胴部	沈線による曲線文	II群1	96
564	I C-78(土)	深鉢	胴部	沈線による曲線区画文	II群1	96
565	I C-78(土)	深鉢	胴部	沈線。半筋縄文(L,R)	II群3類	96
566	I C-84(土)	深鉢	底部	沈線	II群1	96
567	I C-84(土)	深鉢	胴部	沈線。幾筋縄文?	II群3類	96
568	I C-84(土)	深鉢	胴部	沈線。半筋縄文(L,R)	II群3類	96
569	I C-84(土)	深鉢	胴部	沈線。半筋縄文(L,R)	II群3類	99

第131図 I C-73(2)-74-76-78-84(1)土坑出土遺物





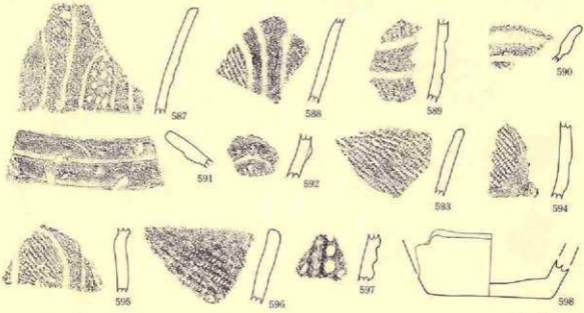
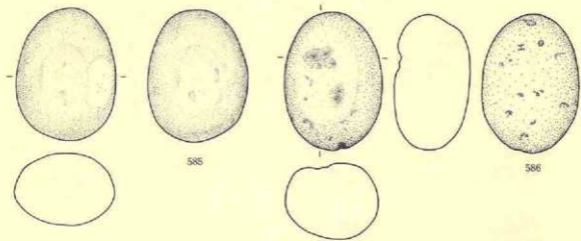
570-571 S=2/3  
他 S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の科属・単位・その他	分類	写真図
573	I C-87(土)	埴土下部	埴鉢 胴部	沈帯	Ⅱ群3類	99
574	I C-87(土)	埴土	埴鉢 胴部	沈帯による曲線区画文、半面縄文、半面縄文(L.S.)	Ⅱ群—	99
575	I C-87(土)	埴土下部	埴鉢 口縁部	沈帯	Ⅱ群—	99
577	I C-89(土)	埴土	埴鉢 胴部	沈帯による曲線区画文、半面縄文(L.S.)	Ⅱ群4類	99
578	I C-89(土)	埴土	埴鉢 口縁部	沈帯による曲線文、半面縄文(L.S.)	Ⅱ群3類	99
579	I C-89(土)	埴土	埴鉢 胴部	沈帯、半面縄文(L.S.)	Ⅱ群3類	99
580	I C-91(土)	埴土	埴鉢 口縁部	半面縄文(L.S.)	Ⅱ群—	99
581	I C-91(土)	埴土	埴鉢 胴部	沈帯、半面縄文(L.S.)	Ⅱ群3類	99
582	I C-96(土)	埴土2層	埴鉢 口縁部	沈帯による「冂」状文、半面縄文(?)	Ⅱ群3類	99
583	I C-96(土)	埴土2層	埴鉢 胴部	沈帯	Ⅱ群3類	99

No.	出土地点・層位	器種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	産地・生産年代	備考	写真図
570	I C-84(土)	埴土	2.5	2.2	0.5	1.94	灰砂岩	美原山地 中新統		99
571	I C-84(土)	埴土	4.1	2.9	0.7	6.44	硬質灰岩	美原山地 中新統		99
572	I C-84(土)	埴土	6.7	4.7	2.2	1.80	緑色緑輝燧石質	美原山地 中新統	基部欠損	99
576	I C-87(土)	埴土下部	8.7	8.1	4.3	4.49	黄輝石雲母岩			99
583	I C-96(土)	埴土1層	9.3	9.1	5.8	6.49	黄輝石雲母岩			99

第132図 I C-84(2)・87・89・91・96(1)土坑出土遺物

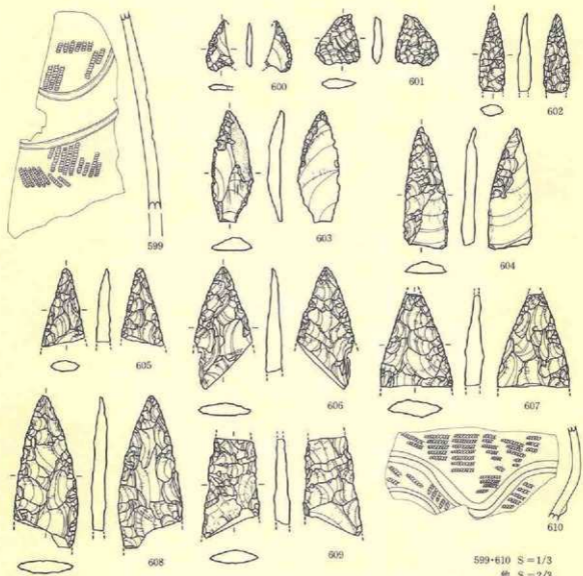


S = 1/3

No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石質	産地・生産年代	備考	写取図
585	I C - 96(土)	埋土	10.7	8.0	5.9	720	陶器(家山岩)			99
586	I C - 96(土)	埋土1層	11.0	7.8	6.1	820	陶器(家山岩)			99

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・厚体・その他	分類	写取図
587	I C - 98(土)	埋土	口縁部	沈積区画による「U」/「V」状文、斜交文、単曲線文(↑)	目群3類b	100
588	I C - 99(土)	埋土	胴部	沈積による曲線区画文、単曲線文(B L)	目群3類b	100
589	I C - 99(土)	埋土	胴部	沈積による曲線区画文、単曲線文	目群4類	100
590	I C - 101(土)	埋土	口縁部	沈積口縁、沈積による曲線区画文	目群一	100
591	I C - 101(土)	埋土	口縁部	沈積、外面円形	目群一	100
592	I C - 101(土)	埋土	胴部	除帯による曲線文	目群一	100
593	I C - 101(土)	埋土	口縁部	単曲線文(L R)	目群一	100
594	I D - 52(土)	埋土	胴部	沈積による曲線区画文、単曲線文(L R)	目群一	100
595	I D - 52(土)	埋土	胴部	沈積区画による「U」/「V」状文、単曲線文(R L)	目群3類	100
596	I D - 53(土)	埋土	口縁部	単曲線文(L R)	目群一	100
597	I D - 53(土)	埋土	胴部	除帯による曲線区画文、斜交文	目群一	100
598	I D - 53(土)	埋土	胴部		目群一	100

第133図 I C - 96(2)・98・99・101・I D - 52・53(1)土坑出土遺物

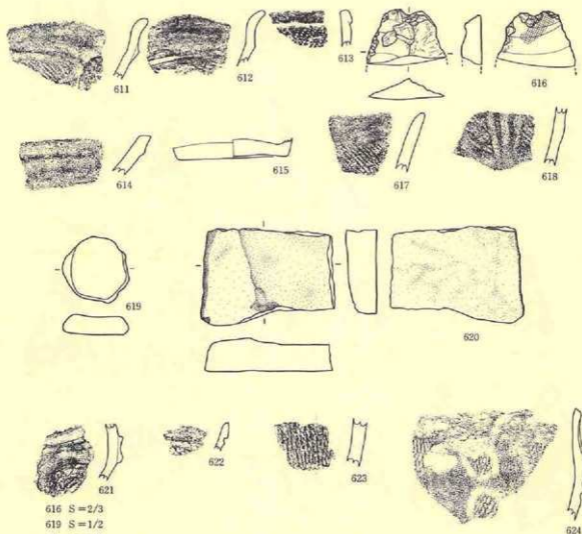


599・610 S=1/3  
他 S=2/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	写尺図
599	I D-53(土)	埴土	断面	沈澱による垂線状文、単位確定(井上)	目録4類	100
610	I D-66(土)	埴土	断面	帯状による垂線状文、単位確定(井上)	目録4類	101

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	遺地・生成年代	備考	写尺図
600	I D-53(土)	埴土上部	2.1	1.1	0.2	0.40	流紋岩	藤原山地 中新統	右側欠損	100
601	I D-53(土)	埴土上部	2.1	1.8	0.4	1.30	流紋岩質凝結凝灰岩	藤原山地 中新統		100
602	I D-53(土)	埴土上部	3.7	1.7	0.5	1.55	燧石	藤原山地 中新統	基部欠損	100
603	I D-53(土)	埴土上部	4.5	1.7	0.6	3.15	燧石	藤原山地 中新統		100
604	I D-53(土)	埴土上部	4.9	1.8	0.6	4.50	燧石	藤原山地 中新統	欠損 右側の石	100
605	I D-53(土)	埴土上部	3.1	1.7	0.4	2.10	流紋岩質凝結凝灰岩	藤原山地 中新統	欠損	101
606	I D-53(土)	埴土上部	4.9	2.3	0.7	6.35	燧石	藤原山地 中新統	欠損	101
607	I D-53(土)	埴土上部	3.8	2.5	0.8	7.15	燧石	藤原山地 中新統	欠損	101
608	I D-53(土)	埴土上部	6.1	2.6	0.6	8.50	燧石	藤原山地 中新統	欠損	101
609	I D-53(土)	埴土上部	4.0	2.2	0.7	9.25	燧石	藤原山地 中新統	欠損	101

第134図 I D-53(2)・66(1)土坑出土遺物



616 S=2/3

619 S=1/2

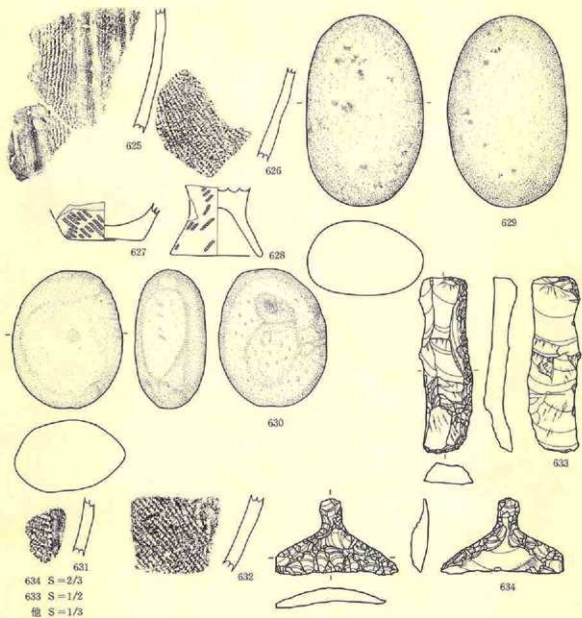
他 S=1/3

No	出土地点・層位	形状	部位	文様の特徴・器体・その他		分類	図録No
				文様の特徴	器体・その他		
611	I D-66(土)	深鉢	口縁部	流紋口縁、隆帯による曲線区画文、雲文	同一器体	II群-1	101
612	I D-66(土)	深鉢	口縁部	流紋口縁、隆帯による曲線区画文、雲文		II群-1	104
613	I D-66(土)	深鉢	口縁部	斜り点し口縁、単線織文(L.R)		II群-1	104
614	I D-66(土)	深鉢	口縁部	隆帯		II群-1	104
615	I D-66(土)	深鉢	底部			II群-1	104
617	I D-68(土)	深鉢	口縁部	単線織文(L.R)		II群-1	104
618	I D-68(土)	深鉢	胴部	流紋口縁、沈線、刺突文		II群-1	101
621	I D-74(土)	深鉢	胴部	隆帯による曲線区画文、単線織文(L.R)		II群-1	102
622	I D-81(土)	深鉢	口縁部	流紋口縁、沈線、刺突文		II群-1	102
623	I D-81(土)	深鉢	胴部	雲文		II群-1	102
624	I D-83(土)	深鉢	口縁部	沈線区画による <sup>7)</sup> 口縁文・雲文		II群-3期	102

2.4											
No	出土地点・層位	形状	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石	質	産地・生成年代	備考	図録No
616	I D-66(土)	深鉢	9.3	3.2	0.9	4.74	硬質瓦管		奥羽山塊 中前期	欠損、アール付着	101
619	I D-68(土)	深鉢	9.6	3.5	1.2	12.01					102
624	I D-70(土)	深鉢	7.6	10.0	2.4	360	陶質石室山岩			欠損	102

第135図 I D-66(2)・68・70・74・81・83(1)土坑出土遺物

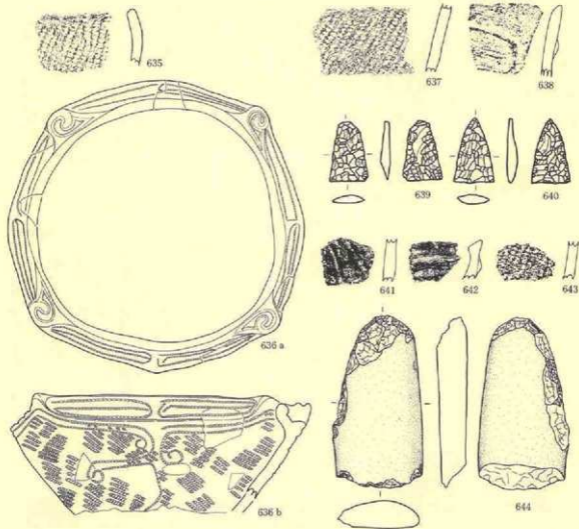


634 S = 2/3  
633 S = 1/2  
他 S = 1/3

No	出土地点	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	年代
625	I D-83(P)	埴土	浮鉢 胴部	降帯区画による「刀」状文、帯南文	目録Ⅱ類	102
626	I D-83(P)	埴土	深鉢 胴部	単節縄文(L,R)	目録Ⅰ	102
627	I D-83(P)	埴土	深鉢 底部	単節縄文(L,R)	目録Ⅰ	102
628	I D-83(P)	埴土	深鉢 高直部	単節縄文(L,R)	目録Ⅰ	102
631	I D-85(P)	埴土	深鉢 胴部	単節区画、単節縄文(L,R)	目録Ⅰ	102
632	I D-85(P)	埴土	深鉢 胴部	単節縄文(L,R)	目録Ⅰ	102

No	出土地点・層位	器種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	年代	
629	I D-85(P)	埴土	15.3	9.4	0.0	1300	両輝石安山岩			102	
630	I D-85(P)	埴土	11.0	8.7	5.8	830	両輝石安山岩			102	
633	I D-85(P)	1層 鉢・胴部地	9.3	2.9	1.8	33.0	細粒砂片質凝灰岩	美濃山塊	中野統	102	
634	目録-64(P)	埴土中位	石巻	3.1	4.9	0.8	5.45	硬質陶質	美濃山塊	中野統	102

第136図 I D-83(2)-85・II E-64土坑出土遺物



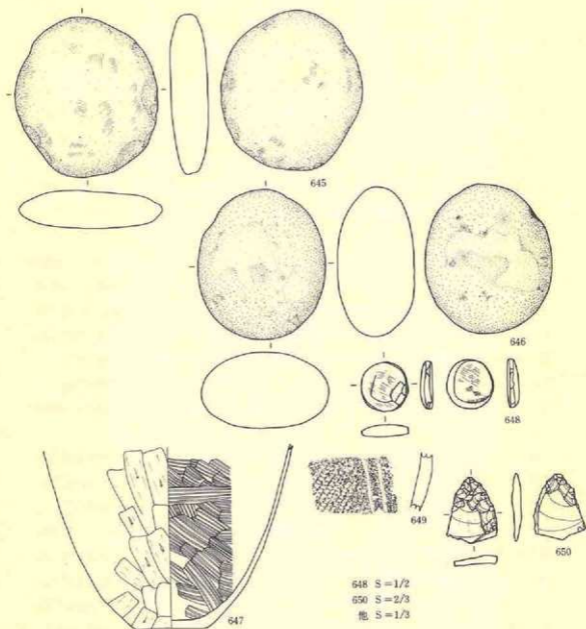
639-640 S=2/3  
他 S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器体・その他	分類	図録
635	II E-68(土) 埋土	深鉢	口縁部	単節縄文(Ⅱ土)	耳飾	103
636	II E-69(土) 埋土	深鉢	口・胴部	口縁に粘土貼付けによる渦巻状文(4個)、縄文単線正伝、単節縄文(Ⅱ土)	耳飾	103 a
637	II E-72(土) 埋土	深鉢	胴部	複節縄文(Ⅱ土Ⅲ)	耳飾	103
638	Ⅲ C-51(土) 埋土	深鉢	口縁部	渦巻による曲線文	耳飾	103
641	I B-51(土) 埋土	深鉢	胴部	沈彫	耳飾	103
642	I B-52(土) 埋土	深鉢	口縁部	渦巻	耳飾	103
643	I B-52(土) 埋土	深鉢	胴部	単節縄文	耳飾	103

No	出土地点・層位	器種	縦大長(cm)	縦大短(cm)	縦大厚(cm)	重さ(g)	石	質	産地・生成年代	備考
639	Ⅲ C-51(土) 埋土	石鏃	2.4	1.5	0.4	1.25	硬質灰岩	舞岡山地	新第三系	103
640	Ⅲ D-51(土) 埋土	石鏃	2.6	1.6	0.4	1.56	硬質灰岩	舞岡山地	新第三系	103
644	I C-2号配石	磨石?	13.7	7.1	2.3	309	扇状質千枚岩	志上山地	古生界	欠図

第137図 II E-68・69・72・Ⅲ C-51・Ⅴ D-51・52土坑・I C-2号配石(1)出土遺物



648 S=1/2  
 650 S=2/3  
 他 S=1/3

No	出土地点・層位	器種	最大径(cm)	最小径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	写真図
645	I C-2号配石	敲石?	12.9	11.4	3.1	690	ホルンフェルス	北上山頂 古生帯		104
646	I C-2号配石	擦石	12.0	10.1	6.1	1,400	燐灰岩	燐灰岩		104
648	O B-33(柱)	焼土	2.8	2.4	0.6	6.5	珪質灰岩	河内川南岸の西部中新統		104
650	目玉-34(柱)	焼土	2.7	2.0	0.4	1.8	硬質灰岩	赤岩山麓 中新統	欠損・未成器	104

No	出土地点・層位	種類・器種	口径	外面調整			内面調整			法量 (mm)			分類	備考	写真図	
				口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	底径				
647	IV C-203	焼土	土師器 鉢	口径	—	ヘラツクリ	—	—	—	—	—	(14.5)	6.0			104

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・取柄・その他	分類	写真図
649	目玉-34(柱)	漆鉢	胴部	沈澱による区画文、華蓋網文(見上)	目釘3型	106

第138図 I C-2号配石(2)・IV C-203焼土・O B-33・II E-31・34柱穴状土坑出土遺物

## V. 遺構外出土遺物

平成元年度～3年度の調査で遺構外から出土した遺物は、コンテナ（41×31×19cm）で約20箱である。遺物には土器・土製品・石器・石製品・鉄器・鉄製品・陶磁器などがある。大半は土器で、石器がこれに次、他は少量である。地区別の出土量では、縄文時代中期の集落跡と共に多くの土坑が検出された調査区南東～西南西側（0B～II E区）が最も多く、次に平成2年度に調査した調査区北東側（IVC～VD区）が多くなっている。記載にあたっては、出土量の少なかった現代に属する陶磁器や古銭以外の鉄製品は割愛している。

### 1. 土器

遺構外出土の土器は、縄文土器（早期～晩期）、弥生土器、後北式土器、平安時代の土師器、須志器などが出土している。この中で、本遺跡の中心である縄文時代中期後～末葉の土器及び平安時代の土器は竪穴住居跡出土のものが主体であり、時期・土器形式ともに遺構内出土土器に内包されるものである。したがって、遺構外出土土器は縄文時代早期～弥生土器・後北式土器に至るまで広範囲の土器が出土した平成2年度の調査区出土土器（調査区北東側、IVC～VD区）を中心に、平成元年度・3年度出土土器（0B～II E区）を若干加味して説明することとし、縄文時代中期後～末葉の土器は実測図のみの掲載とし、平安時代の土器は細片で少量のため除外している。

調査区北東側は、基本層序（IVC～VD区）第II～VI層に遺物を包含するが、北東側丘陵地に続く緩い斜面に立地し、北東側斜面からの流れ込みや北上川の氾濫による再堆積を繰り返しており、遺物の層位的把握は困難である。そのため、土器の文様を中心とした形式的分類にならざるを得なかった。分類にあたっては、縄文時代早～前期の土器を第I群土器とし、以下中期～第II群、後期～第III群、晩期～第IV群、弥生・後北式土器を第V群とし、木葉痕や網代痕などがみられる底部片を第VI群とした。これらの中での小分類は概ね時期別に1類・2類…、として記載している。また、型式名が不明な前期の土器群の一部については胎土・文様の特徴から任意に分類している。更に、まとめて遺構内にあわせて触れるが、分類上、遺構内のみ出土しているものもここで幾分扱っている。尚、遺構外出土の土器は小破片がほとんどのため、器形の不明な土器片は深鉢形土器として扱っている。

#### 第I群土器（第139図651～661、写真図版105）

縄文時代早～前期に属する土器群で、早期の土器を1類とし、以下前期の土器を胎土・文様等から2～7類に分類している。

I群1類 1点(651)のみの出土である。鐮状工具による平行沈線と貝殻腹縁圧痕による幾



何学的文様が描かれる土器片である。波状口縁を呈し、口唇部に沈線が走り、口唇部内面には貝殻敷縁文による刻み目が施されている。口縁部文様は、2条の平行沈線による直線・曲線が描かれ、波状口縁の頂部下にあたる箇所には半円形の曲線文が展開し、中央にボタン状の粘土貼り付けがなされ、棒状工具による小円形刺突文が施されている。2条の平行沈線間には貝殻敷縁文による刻み目が施され、半円形の沈線の両側には貝殻敷縁文による三角形の文様が左右対称に配されている。色調は内外面ともに黒色を基調とし、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は良く、比較的硬質である。

I群2類 羽状縄文が器面に展開する土器(652)である。平縁を呈する口縁部片で、口唇部は篋状工具により平坦に整形され、内面はやや丸みを持っている。施文方法は0段多条によるR・L・Rの2本の異原体を用いて交互に施文し、羽状縄文にしている。653は胴部片のため全体の形状は不明であるが、単節縄文R・L・Rを交互に施文し羽状縄文にしている。胎土にはいずれも植物性繊維が含まれている。

I群3類 縄文原体側面圧痕と刻みにより幾何学的文様を構成する土器(654・655)である。654は摩耗が著しいが、平縁で口縁部上端に刻みを施文し、口縁部には直・曲線的な縄文側面圧痕と側面圧痕内の刻みによる文様が展開しているが、原体は摩耗のため不明である。胴部には羽状縄文が施されている。655も同様の文様が展開すると思われる平縁を呈する口縁部片で、R1段の撚糸の側面圧痕を施文し、側面圧痕内に上下からの刺突による刻みが2列配されている。いずれも胎土には砂粒と植物性繊維が含まれている。

I群4類 1点(656)だけの出土である。頸部付近が強く内反し、口縁部に撚糸文がやや斜め方向に展開し、胴部に結束の羽状縄文が施される土器片である。胎土には粗砂や石英粒が含まれるが、繊維は含まれていない。

I群5類 1点(657)だけの出土である。破片のため全体の器形等は不明であるが、胎土に粗砂や植物性繊維を含み、器面に円形竹管文が数条施文されている。

I群6類 658・659が出土している。破片のため全体の器形等は不明であるが、胴部に木目状撚糸文が施される土器で、胎土に粗砂を少量含んでいる。

I群7類 破片のため全体の器形や文様の詳細は不明であるが、平行する沈線や鋸歯状の沈線が施される土器である。660は粘土紐貼付けによる隆帯区画内に平行する沈線や鋸歯状沈線が施され、661は平行沈線が施されている胴部片である。

## 第II群土器(第139・140図662~675、写真図版105・106)

縄文時代中期に属する土器群である。本群に属する土器は初葉・前葉、中葉、後葉、末葉の4類に分けられる。この中で5・6類(後・末葉)の土器については、前述した通り、実測図

のみの掲載と分類だけとし、まとめて遺構内土器とあわせて述べることにする。

II群1類 中期初頭～前葉に属する土器で文様構成などにより、a～cに細分される。

1類a 662～666で胴部片だけのため口縁部文様は不明であるが、胴部に縦綾紋が施文される土器で、665・666の地文は単節斜縄文である。

1類b 口縁部に粘土紐貼付けによる文様が施文される土器で、1点(667)だけの出土である。口縁部に円孔を持ち、それを囲むように粘土紐が波状に貼付けられている。口唇部と粘土紐には刻みのようなものが施文されているが、工具によるものかどうかは摩耗が著しいため不明である。胎土には粗砂や石英粒が多く含まれている。

1類c 口縁部に沿って上から順に原体側面瓦痕、交互刺突文、円形刺突文が施文される土器で、IC-7・9住居跡から1点ずつ(179・237)出土している。

II群2類 中期中葉に属する土器群である。a・bに細分される。

2類a IIE-69土坑から浅鉢が1点(636)出土している。口縁部が強く内湾し、4個の渦巻文が貼り付けられ、それと連結するかたちで4区画の口縁部文様帯がつくられる。区画内には縄文原体瓦痕文が横楕円形状に展開し、胴部にも縄文原体瓦痕文が直・曲線的に展開し、末端の一部は渦巻状をなしている。地文は単節斜縄文である。

2類b 地文の縄文の上に細い粘土紐を貼付けた隆沈線や沈線によって渦巻文や直・曲線文が施文される土器(668～670)である。

II群3類 中期後葉(大木9式)に属する土器群である。IC-2住居跡を中心に多量に出土しており、沈線や隆帯で区画された楕円文・渦巻文・「∩」状文などが組み合せて縦方向に文様が流れる土器が主体であり、文様等の特徴からa～gに細分される。


3類a 口縁部付近に2条の平行沈線が巡り、その下に、沈線による懸垂文・縦楕円文・逆「U」状文などが展開するが、磨消技法や充填縄文などがみられず、大木9式の中でも古い時期と思われるもの。



3類b 沈線や隆帯による楕円文・渦巻文・「∩」状文などが口縁部から胴部下半まで縦方向に流れる土器である。671は沈線区画による縦楕円文と「∩」状文の組み合わせ、672は沈線区画された楕円形・「∩」字形の縄文帯を更に「∩」字形の沈線文が覆っている。器形はいずれも頸部付近が幾分くびれ口縁部が外反している。

3類c 頸部付近に隆帯や沈線を巡らし、口縁部無文帯とを区画し、胴部に「∩」状文や縦楕円文が施文されるもの。

3類d 胴部中央部から下半に最大径をもち、頸部・口縁部にかけてすぼまる壺形や壺形に近い器形で、頸部付近に粘土貼付けによる橋状の把手や釣手がつくもの。

3類e 胴部文様帯と口縁部文様帯の分離が見られ、口縁部中央付近に大きな波状沈線が巡り、


その波状沈線に沿って上下に楕円文を施した口縁部文様帯を構成し、胴部は縦方向に流れる「」状文が展開するもの。

3類f 縦方向に流れる楕円文や「」状文を残しながらも、口縁部付近に沈線区画されたU字形や「」状の縄文帯が横方向に流れる展開が見られるもの。

3類g a～fに伴うと思われる粗製や無文の土器、ミニチュア土器など。

II群4類 中期末葉（大木10式）に属する土器群である。沈線や隆帯で区画された曲線的な縄文帯や無文帯が器面に展開する土器で、IC-9・10住居跡、ID-3住居跡を中心に多量に出土している。文様等の特徴により、a～hに細分される。

4類a 胴部中央付近を波頭状・波状の沈線や隆帯で区画し、胴部上半に沈線や隆帯で区画された曲線的な縄文帯が横方向に展開する土器。

4類b 胴部中付近を緩やかな波状沈線で区画し、胴部上半を沈線区画によるC字形・楕円形・「」字形などの縄文帯が横方向に展開する土器。

4類c 主に隆帯区画による文様展開を主体とするもので、口縁部に横位の隆帯区画による無文帯をもち、隆帯区画によるJ字形の無文帯や横S字状の縄文帯が展開する土器。

4類d J字形・O字形の無文帯が横方向に展開し、無文帯の末端や口縁部付近に鋸状の隆帯が貼付けられたり、口縁部付近の沈線区画内などに刺突文が充填される土器。

4類e 胴部下半に最大径をもち、頸部から口縁部にかけてすばまる壺形に近い土器で、肩部や頸部付近に橋状の把手をもつ土器。

4類f 口縁部にひねったような橋状把手をもち、把手部分や口縁部付近の微隆帯上などに刺突文が施される土器で、673が出土している。

4類g 人体・動物モチーフ付き土器。

4類h a～gに伴うと思われる粗製・無文・ミニチュア土器などである。674は小形の浅鉢で、口縁部が内湾している。単節縄文（RL）を口縁部は横回転、胴部は縦回転で施文している。675は無文のミニチュア土器である。

### 第III群土器

縄文時代後期に属する土器群である。本群に属する土器は、初頭～前葉、中葉、後葉の3類に分けることができる。

III群1類（第140～142図676～711、写真図版106・107）

後期初頭～前葉に属する土器を一括した。小破片が多く出土量も少ないため、主に文様の特徴などからa～gに細分される。

1類a 頸部付近の隆帯や連鎖状隆帯により口縁部無文帯と胴部文様帯とが区画される土器

(676~680)で、すべて波状口縁を呈している。676・677は隆帯による区画で幅2~4cm程の口縁部無文帯で、677は口縁頂部が「ノ」字状に区画されている。678は連鎖状隆帯による区画で幅4cm程の口縁部無文帯となっている。679・680はラッパ状の突起部分(679)や波状口縁の頂部(680)から連鎖状隆帯が垂下し、頭部付近の連鎖状隆帯と連結し、連結部分にはボタン状貼付文が施文されている。胴部文様は沈線文で区画された磨消手法が主体で、676・677が左右対称をなす弧状沈線文、679はボタン状貼付文を起点とした数条の沈線文が垂下している。

1類b 波状口縁頂部付近のボタン状貼付文や1個あるいは数個の小円形刺突文を起点にして文様が展開する土器(681~693)である。681は口縁頂部のボタン状貼付文から連鎖状隆帯が垂下する口縁部片で、頂部に刻みが2個施文された小突起をもっている。682は頂部付近のボタン状貼付文を起点に平行沈線によって区画された幅1cm位の磨消縄文帯が左右に広がるように垂下し、その内部に刺突文や弧状沈線が施文されている。683~685は同一個体と思われる口縁部片で、波状口縁頂部の口唇部には2つの刻みが施文されている。ボタン状貼付文からは隆帯による文様が展開し、口縁部に沿って巡る隆帯には短沈線が連続して施文されている。686は波状口縁頂部付近に2個の円形刺突文が配され、それを中心にして幅の広い沈線による文様が展開している。地文は網目状総糸文で沈線間は磨消されている。687は1個の円形刺突文を起点に沈線区画された逆「の」字状の磨消縄文などが展開している小形の深鉢形土器である。688~693は1類bに付属すると思われる小破片であるが、1類aに属する可能性もある。地文の上に沈線による曲線文が展開する土器(688)、左右対称の弧状沈線に区画された磨消縄文が施文される土器(689~691)、S字状沈線文(692)や連続S字沈線文(ジグザグ文)が垂下する土器(693)などがある。692は波状口縁頂部に刻みが2個施文された小突起をもっている。

1類c 多条の沈線による同心円的文様が展開する土器で、694が出土している。

1類d 沈線区画による幾何学的・曲線的な文様が展開する土器(695~699)である。沈線区画内には単節縄文が充填され、無文帯は丁寧に研磨されている。695・696は鉢形を呈すると思われる土器で、口縁部は幅の狭い無文帯となっている。697~699も同様の文様が展開する胴部片である。焼成も良く、胎土も堅固で、a~dが粗砂を含み表面がザラザラしているものとは対照的である。

1類e 数条の平行沈線と磨消縄文手法による帯縄文が直線的・曲線的に展開する土器である(700~705)。700・701は波状を呈する口縁部片で、外反する。波状口縁に沿って3条の平行沈線を巡らして帯縄文を構成し、胴部上半にも平行沈線を巡らして文様が展開しており、700の胴部帯縄文内には口縁部帯縄文とを結ぶように刺突文が連続して充填されている。702・703も同様の文様である。704は数条の平行沈線の他に弧状沈線文が施される波状口縁部片で、波状口縁の頂部裏面にも弧状沈線が施されている。705は片口土器と思われる土器で、平行沈線間に弧状

沈線が施されている。

1類f a～eに伴うと思われる粗製の土器などであり、口縁部が磨消手法による無文帯となっているのが特徴的である。706～708は胴部に網目状燃糸文が施文される土器である。口縁部は無文帯となっており、707・708は頸部に沈線を巡らし、口縁部無文帯と区画している。709は口唇部に刺突文が巡り、地文に縦位燃糸文が施文される土器である。710・711は頸部に地文（LR単節縄文）と同じ縄文原体圧痕文を1条巡らし、胴部縄文帯と口縁部無文帯を区画している土器で、口縁部無文帯にも数箇所縦方向に縄文原体圧痕文を2条ずつ施文している。

### III群 2類（第142～144図712～745、写真図版107・108）

後期中葉に属する土器を一括した。文様の特徴などから、a～cに細分される。

2類a 平行線化した磨消縄文帯を持つ土器（712～727）である。地文に数条の平行沈線を施文した後、右向き・左向きの弧状沈線を交互に加えて長楕円文をつくるもの（722-a<sub>1</sub>）、S字状・波状の沈線文を施文し長楕円文をつくるもの（720・721・723・724-a<sub>2</sub>）などがある。また、口縁部に大形の突起をもつもの（723）もある。地文は単節斜縄文（LR）が多く、722のように無文の地文に長楕円沈線文を施しているものもある。725・726は地文に幅の広い平行沈線が施されるだけで、口唇部にも地文の単節縄文が磨消されずに残っているが、本類に属する土器と思われる。727も本類に属すると思われる大形の口縁部突起で、偏平な耳状を呈し、表裏面の縁辺に沿って幅広の沈線が1条施されている。

2類b 直線的・曲線的な磨消縄文が器面に展開する土器（728～737）である。728は平行沈線による直線的な磨消縄文帯が展開する土器で、波状口縁頂部に突起をもっている。729～731・736・737は平行沈線による幅の広い磨消縄文帯が巡り、732～735は沈線で曲線区画された磨消縄文帯が展開している。また、深鉢形土器や浅鉢形の他に壺形土器（735・737）も見られる。

2類c 曲線的な磨消縄文を構成する沈線に沿って連続刺突文を施している土器（738～745）である。刺突文は三日月形が多く、沈線の内側の磨消縄文の中に施文され、縄文は粒の細かい単節斜縄文（LR）が施文されている（738～742）。742は波状口縁頂部に小突起を持ち、口唇部が肥厚している。743～745は口縁部突起で、743は口唇部に沿って1条の沈線が巡り、柱状突起の口唇部で左右から続く沈線がそれぞれ上下に反転している。突起下部には2条の平行沈線が巡り、その下に三日月状の連続刺突文が施文されている。744は円錐状の大形突起で中空になっている。円孔を持ち、連続する弧状沈線で囲まれている。745も円錐状突起の破片と思われる。

### III群 3類（第144図746～748、写真図版109）

後期後葉～末葉に属する土器で、746～748が出土している。文様等の特徴からa・bに細分される。

3類a いわゆる貼瘤土器(746・747)である。いずれも注口土器の注口部片で、注口部を巡る沈線間に瘤が貼付けられている。また、胴部との剝離面にタールが付着している。

3類b 黒色を呈し、よく研磨された器面に浮彫りの文様がみられる胴部片で、注口土器と思われる。1点(748)だけの出土であり、晩器初頭に属する可能性もある。

#### 第Ⅳ群土器(第144図749～760、写真図版109)

縄文時代晩期に属すると思われる土器である。細片が多く弥生時代初頭の土器と判別が難しいが、変形工字文を特徴とするもの(a)と、口縁部付近に数条の平行沈線が巡るもの(b)がある。全体の器形等は不明であるが、浅鉢や鉢で占められるようである。

a 沈線による変形工字文が施文される土器である。749～751が出土しており、749には粘土粒が付けられている。749・750は口縁部に小突起を持ち、749には突起頂部に刻みが1つある。また、これらの土器の口縁部内面には沈線が1条巡っている。

b 口縁部に数条の平行沈線が巡る土器である。752～760が出土しており、754～758には口縁部内面に沈線が1条巡っている。また、759・760の胴部地文は単節斜縄文(LR)である。

#### 第Ⅴ群土器(第145・146図761～782、写真図版109・110)

弥生時代の土器及び後北式土器を一括した。弥生土器は文様等の特徴から1～3類に分類し、後北式土器を4類とした。

V群1類 沈線文を主体とした土器で、a・bに細分される。

1類a 平行沈線を主体とした土器で、761～766が出土している。761～764は浅鉢である。761・762は口縁部が強く内湾している。口縁に沿って平行沈線が3条巡っており、口縁部内面にも沈線が1条巡っている。763・764は胴部片で、764には3条の平行沈線が巡っている。地文はいずれも単節斜縄文である。765・766は高杯の脚部で円筒状を呈し、下端に2条の平行沈線が施文されている。

1類b 沈線文を主体とするが1類aより沈線が細くっており、767・768の2点出土している。767は壺の肩部付近と思われ、地文の単節縄文に平行沈線が4条施文され、沈線間は磨消されている。768は浅鉢で、波状口縁を呈している。口縁に沿って山形沈線文が施文され、口縁部は磨消されている。地文は単節縄文である。

V群2類 無文の壺で、769・770が出土している。外面を丁寧に研磨しているもの(769-a)と内外面を粗雑なナデ・ケズリ調整しているもの(770-b)に分けられる。769は壺の可能性もある。

V群3類 地文のみの粗製の壺で、施文方法等でa・bに細分される。

3類a 無節縄文が横走するもので771が出土している。

3類b 縦走する撚糸文などが施文されるもので772～782が出土している。撚糸文が縦横に走るもの(772・773)、縦走するもの(774・775)、羽状になるもの(777)、末端が交差するもの(779)などがある。また、778～780の原体は一度RL(0段多条)の撚りをかけた後、一方の撚紐を軸として、他方を巻いた、所謂縄巻縄と考えられる。

V群4類 後北式土器で2点(781・782)出土しており、摘まみ上げたような微隆帯と連続する縦長の細い刻目が特徴的である。781は注口土器と思われる口縁部片で、口縁部に沿って1条の微隆帯が回り、上に連続する刻目が施文されている。胴部は微隆帯に区画された曲線文が展開し、区画内には0段多条(RL)が充填され、無文帯はよく研磨されている。782は口縁部片で、口縁部下に3条の微隆帯が回り、その上に刻目が施文されている。また、口唇部にも刻目が巡っている。2点とも黒色を呈し、胎土には粗砂を含んでいるが、焼成は比較的良好。

#### 第VI群土器(第146図783～789、写真図版111)

木葉痕・網代痕のある底部片を一括した。783・784が木葉痕、785～789が網代痕を有している。いずれも残存部の側面は無文である。大半は縄文時代に属すると思われるが、出土地点・層位等から所属時期を特定することはできない。

#### 2. 土製品(第147図790～803、写真図版112)

土偶3点、耳飾り1点、円盤状土製品9点、土垂1点が出土している。

土偶 土偶はすべて破損しており、体部・脚部・腕部それぞれ1点ずつ出土している。790は妊婦の土偶で、胴上部・両脚が欠損している。腹部が膨らみ、正中線を刺突で表している。胴下部に沈線が1条走り、沈線下には粒の細かい単節斜縄文が施文されている。また、下腹部に波状、臀部上位に逆「V」字状の沈線文が施されている。791は脚部で、複節縄文が施文されている。792は刺突文が多数充填された右腕部で、下端に径1.1cmの浅皿状の凹みがあり、掌を表現していると思われる。790・792は縄文時代後期に属すると思われるが、791は出土地点から縄文時代中期後～末葉に属する可能性がある。

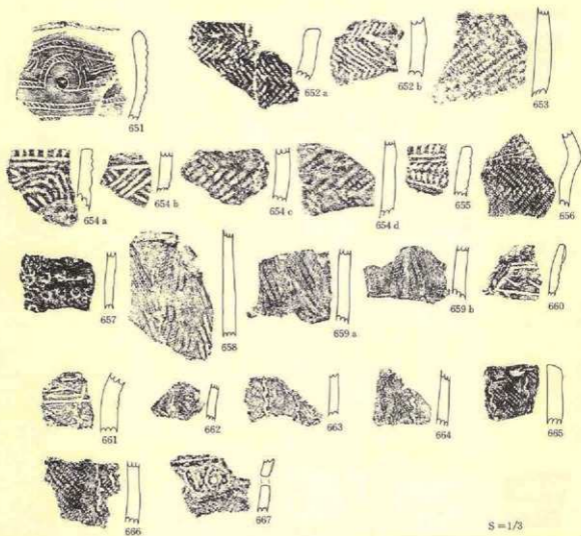
耳飾り 793が出土しており、全面に丹塗りが施されている。

円盤状土製品 794～802が出土している。いずれも深鉢等の土器片を利用し、周辺部を整形して作られており、概ね円形を呈している。無文のもの、地文だけのもの、文様がみられるものなどがある。794は沈線区画された磨消縄文が施文され大木9式、802は隆帯の端にボタン状の貼付文が施文され後期初頭のものと思われる。

土垂 803が出土しており、管状を呈する。1D-1住居跡出土の土垂と同様の形状で、出土

地点も近いことから、平安時代に属する。

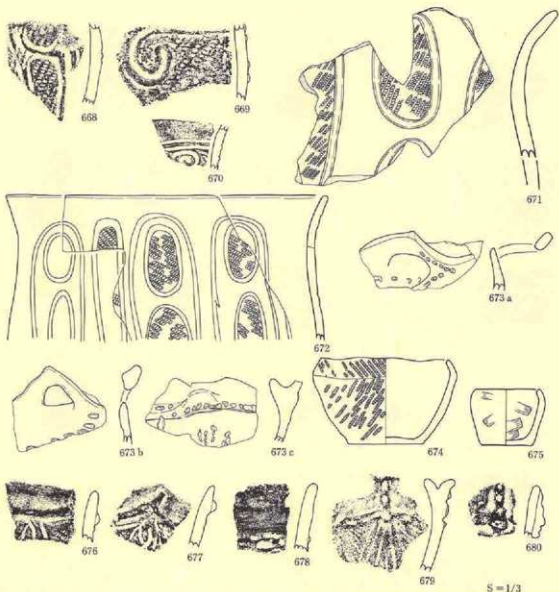




S=1/3

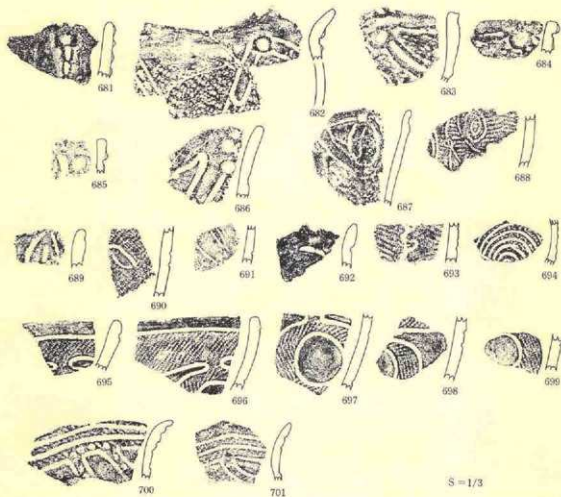
No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器体・その他	分類	年代
651	ⅤD-0-1a	Ⅱ層	口縁部	流紋口縁、平行波線・斜紋襷目状による幾何学的文様、小円形刺突文	1群1類	105
652	ⅤC区	Ⅲ-Ⅳ層	深鉢	口一帯部	1群2類	105
653	ⅤC9j	Ⅳ-Ⅴ層	深鉢	斜紋襷目(9段準直L・R.L.)、青線襷	1群2類	105
654	ⅤC9j	Ⅳ-Ⅴ層	深鉢	斜紋襷目(R.L・L.L.)、青線襷	1群2類	105
654a						
654b						
654c						
654d						
655						
656						
657						
658						
659a						
659b						
660						
661						
662						
663						
664						
665						
666						
667						

第139図 遺構外出土遺物：土器(1)



No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特色・形状・その他	分類	写数図
668	WC-7j Ⅱ層	深鉢	側部	隆起線による渦・渦線文、半筋縄文(R.L.)	群2類h	105
669	WC-7j Ⅱ層	深鉢	側部	隆起線による渦線文、半筋縄文(R.L.)	群2類h	105
670	VD-0b Ⅱ層	深鉢	側部	平行波線、渦線状線文、半筋縄文(L.S.)	群2類h	106
671	ID-8j Ⅱ層	深鉢	口縁部	波線区画による地付文・「〇」状文、半筋縄文(R.L.)	群3類h	105
672	ID-9j Ⅱ層	深鉢	口縁部	波線区画による地付文・「〇」状文、「〇」状波線文、半筋縄文(L.S.)	群3類h	105
673	WC-7h Ⅱ層下部	深鉢	口縁部	桶状把手、波線型、斜交文、半筋縄文(R.L.)	群4類f	106
674	OB-9h Ⅱ層	小形浅鉢	定形	半筋縄文(R.L.)	群4類h	106
675	OB-9h Ⅱ層下部	同上、71編	定形	無文	群4類h	106
676	YC区 Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁、隆起、桶状波線文、半筋縄文(L.S.)	群1類a	106
677	VD-0b Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁、隆起、桶状波線文、半筋縄文	群1類a	106
678	WC-8i Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁、波線状隆起	群1類a	106
679	WC-7h Ⅱ層下部	深鉢	口縁部	波状口縁、突起、波線状隆起、ボタン状結付文、半下波線、半筋縄文(R.L.)	群1類a	106
680	WD-7a Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁、ボタン状結付文、波線状隆起	群1類a	106

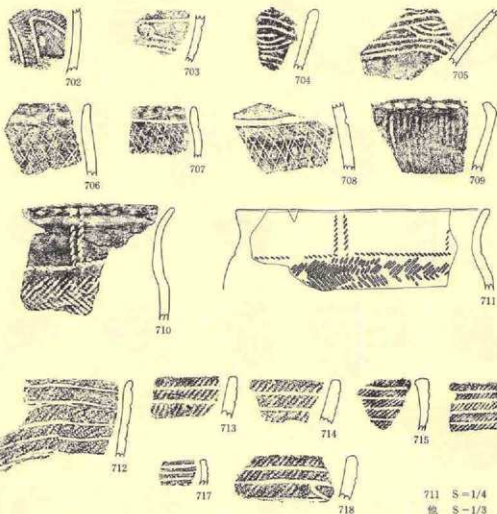
第140図 遺構外出土遺物：土器(2)



S = 1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形体・その他	分類	年表順
681	ⅡC-9a	耳壺	口縁部	波状口縁部部小突起(割み入)、ボタン状粘付文、連続波線帯	群群1類b	106
682	ⅡC-7b	皿蓋	口縁部	波状口縁、ボタン状粘付文、平行波線内弧状沈線・刺突文、磨滑織文(L,R)	群群1類b	106
683	ⅡC-71	皿蓋下部	口縁部	波状口縁部部小突起(割み入)、ボタン状粘付文、隆帯、磨滑織文(L,R)	群群1類b	106
684	ⅡC-71	皿蓋	口縁部	波状口縁部部小突起(割み入)、ボタン状粘付文、隆帯、磨滑織文(L,R)	群群1類b	106
685	ⅡC-71	皿蓋下部	口縁部	波状口縁部部小突起(割み入)、ボタン状粘付文、隆帯、磨滑織文(L,R)	群群1類b	106
686	ⅡC-91	耳壺	口縁部	波状口縁、内斜刺突文、沈線文、磨滑織文(周目状刺突文)	群群1類b	106
687	ⅡC-91	耳壺	口縁部	波状口縁、内斜刺突文、逆の「S」字状沈線文、磨滑織文(L,R)	群群1類b	106
688	ⅡC-91	耳壺	胴部	涌巻状沈線文、磨滑織文(L,R)	群群1類b	106
689	ⅡC-91	耳壺	口縁部	波状口縁、波状沈線文(左右対称)	群群1類b	106
690	ⅡC-7b	皿蓋	胴部	縦状沈線文、磨滑織文	群群1類b	106
691	ⅡC-81	皿蓋下部	口縁部	波状口縁、波状沈線文	群群1類b	106
692	ⅡC-71	皿蓋	口縁部	波状口縁部部小突起(割み入)、S字状沈線文	群群1類b	106
693	ⅡC-81	皿蓋	胴部	連続S字状沈線文(シダマダ文)、半磨滑織文(L,R)	群群1類b	106
694	ⅡD-2f	I蓋	胴部	同心円状沈線文	群群1類c	106
695	ⅡC-71	皿蓋	口縁部	沈線区画による曲線文、光順織文(L,R)	群群1類d	107
696	ⅡC-91	耳壺	口縁部	沈線区画による曲線文、光順織文(L,R)	群群1類d	107
697	ⅡC-81	皿蓋下部	胴部	沈線区画による曲線文、光順織文(L,R)	群群1類d	107
698	ⅡC-91	耳壺	胴部	沈線区画による曲線文、光順織文(L,R)	群群1類d	107
699	ⅡD-8a	皿蓋下部	胴部	沈線区画による曲線文、光順織文(L,R)	群群1類d	107
700	ⅡD-9a	皿蓋	口縁部	波状口縁、平行波線(帯線文)、刺突文、磨滑織文(L,R)	群群1類e	107
701	ⅡC-71	皿蓋	口縁部	波状口縁、平行波線(帯線文)、磨滑織文(L,R)	群群1類e	107

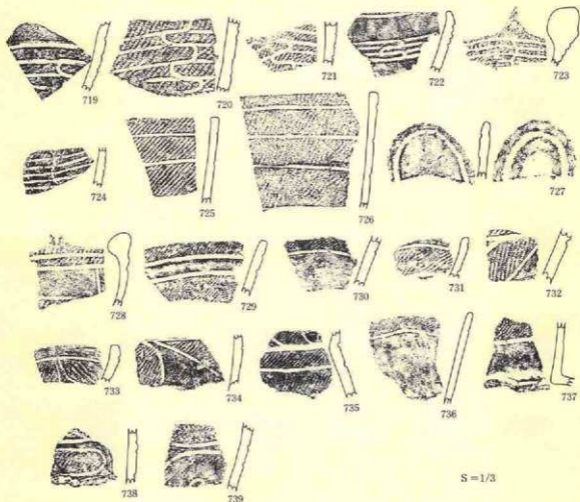
第141図 遺構外出土遺物：土器(3)



711 S=1/4  
他 S=1/3

No.	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・単位・その他	分類	図録
702	ⅡC-8h Ⅱ層	深鉢	胴部	平行沈線(帯脚文)、消消縄文(L.B)	群群1類c	197
703	ⅡC-7i Ⅱ層下部	深鉢	胴部	平行沈線(帯脚文)、消消縄文(L.B)	群群1類c	197
704	ⅡC-9j Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁、数本の平行・帯状沈線、底部裏面低伏沈線、消消縄文	群群1類c	197
705	ⅡC-9j Ⅱ層	深鉢	口縁附近	数本の平行・帯状沈線、消消縄文	群群1類c	197
706	ⅡC-8h Ⅱ層	深鉢	口縁部	口縁部加文書、斜目状器木文(R1段)	群群1類f	197
707	ⅡC-7i Ⅱ層	深鉢	口縁部	口縁部加文書、斜目状器木文	群群1類f	197
708	ⅡC-8i Ⅱ層下部	深鉢	胴部	口縁部加文書、斜目状器木文(R1段)	群群1類f	197
709	ⅡC-9j Ⅱ層	深鉢	口縁部	口縁部加文書、斜目状器木文(L1段)	群群1類f	197
710	ⅡC-7i Ⅱ層	深鉢	口縁部	口縁部加文書、網文帯面正板、半節縄文(L.B)	群群1類f	197
711	ⅡC-7c Ⅱ層下部	深鉢	口縁部	口縁部加文書、網文帯面正板、半節縄文(L.B)	群群1類f	197
712	ⅡC-8h Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、半節縄文(L.B)	群群2類a	197
713	ⅡC-8g Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、半節縄文(L.B)	群群2類a	197
714	ⅡC-7i Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、半節縄文(L.B)	群群2類a	197
715	ⅡC-7j Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、半節縄文(L.B)	群群2類a	197
716	ⅡC-7j Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、半節縄文(L.B)	群群2類a	197
717	ⅡC-7j Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、半節縄文(L.B)	群群2類a	197
718	ⅡC-8g Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、低伏沈線、半節縄文(L.B)	群群2類a	197

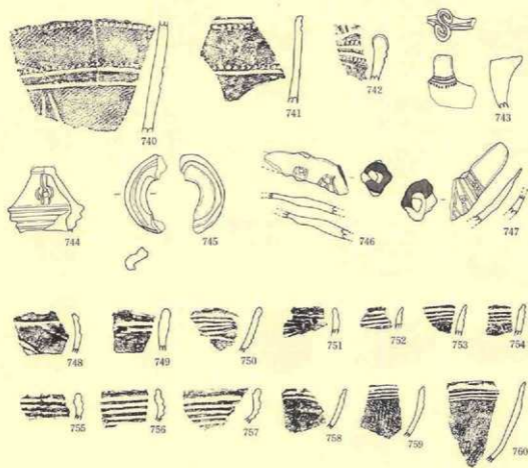
第142図 遺構外出土遺物：土器(4)



S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・その他	分類	図録No
719	WC-7b 日屋下部	深鉢	胴部	平行沈線、弧状沈線、半面縄文(L.R)	器群2類a	107
720	WC-8 日屋	深鉢	胴部	平行沈線、流状沈線、半面縄文(L.R)	器群2類a	108
721	WC-8g IV層	深鉢	胴部	平行沈線、流状沈線、半面縄文(L.R)	器群2類a	108
722	WC-8g 日一IV層	深鉢	口縁部	平行沈線、弧状沈線	器群2類a	108
723	WC-7b 日屋	深鉢	口縁部	突起、平行沈線、流状沈線、半面縄文(L.R)	器群2類a	108
724	WC-7b 日屋	深鉢	胴部	平行沈線、流状沈線、半面縄文	器群2類a	108
725	WC-9 日屋	深鉢	口縁部	平行沈線、半面縄文(L.R)	器群2類a	108
726	WC-8 日屋下部	深鉢	口縁部	平行沈線、半面縄文(L.R)	器群2類a	108
727	WC-8g IV層	深鉢		耳状突起(沈線)	器群2類a	108
728	WC- 日一IV層	深鉢	口縁部	弧状口縁、突起、平行沈線、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
729	WC-7 日屋	深鉢	口縁部	平行沈線、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
730	WC-7 日屋下部	深鉢	胴部	平行沈線、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
731	WC-7 日屋	浅鉢	口縁部	平行沈線、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
732	WC-9 日屋	浅鉢	胴部	沈線文、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
733	WC-7 日屋	浅鉢	口縁部	沈線文、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
734	WC-8g IV層	浅鉢	胴部	沈線文、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
735	WC-7b 日屋下部	浅鉢	胴部	沈線文、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
736	WC-8g IV層	浅鉢	口縁部	沈線文、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
737	WC-7b 日屋	浅鉢	胴部	平行沈線、垂流縄文(L.R)	器群2類b	108
738	VD-1a 日屋	浅鉢	胴部	沈線区画による垂線文、連続斜交文、垂流縄文(L.R)	器群2類c	108
739	VD-1a 日屋	浅鉢	胴部	沈線区画による垂線文、連続斜交文、垂流縄文(L.R)	器群2類c	108

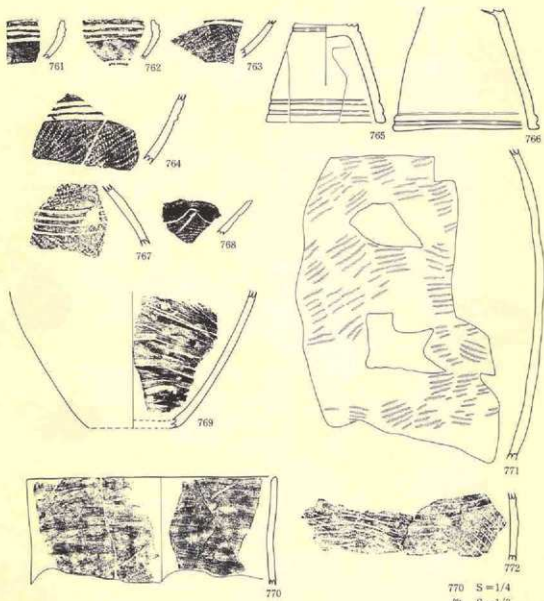
第143図 遺構外出土遺物：土器(5)



S = 1/3

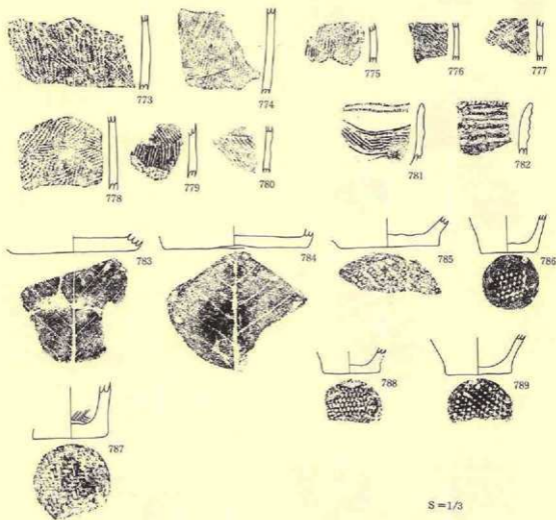
No	出土地・層位	器種	部位	文様の形態・形状・その他	分類	数量
740	WC-8g Ⅱ-N層	深鉢	胴部	沈線、連続刺突文、帯流縄文(L,R)	Ⅱ群2類c	108
741	WC-8g Ⅱ層	深鉢	口縁部	沈線、連続刺突文、帯流縄文(L,R)	Ⅱ群2類c	108
742	WC-8h Ⅱ層	深鉢	口縁部	高低口縁部(刻み)、連続刺突文、帯流縄文(L,R)	Ⅱ群2類c	108
743	VD-0c Ⅱ層	深鉢	口縁部	高低口縁、変形、口唇部沈線、連続刺突文	Ⅱ群2類c	108
744	WC-8g Ⅱ層	深鉢	突起部	突起部(中笠、円孔、沈線文)	Ⅱ群2類c	108
745	WC-7h Ⅱ層下部	深鉢	突起部	突起部(中笠)	Ⅱ群2類c	108
746	WC-9j Ⅱ層下部	深鉢口上部	深鉢口部	沈線、短髪、ターム付着	Ⅱ群3類a	109
747	WC-7h Ⅱ層	深鉢口上部	深鉢口部	沈線、短髪、ターム付着	Ⅱ群3類a	109
748	WD-9a Ⅱ層	深鉢口上部	胴部	浮彫りの文様	Ⅱ群3類b	109
749	WD-9c Ⅱ層	深鉢	口縁部	小突起、変形工字文(粘土粒付)、口唇部・口縁部内面沈線(各1条)	Ⅱ群a	109
750	WC-9g Ⅱ層	深鉢	口縁部	小突起(刻み)変形工字文、口縁部内面沈線(1条)	Ⅱ群a	109
751	WD-9d Ⅱ層	深鉢	口縁部	変形工字文、口縁部内面沈線(1条)	Ⅱ群a	109
752	VC-1i Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線(4条)	Ⅱ群b	109
753	VC-1j Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線(4条)	Ⅱ群b	109
754	WD-9e Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線(4条)、口縁部内面沈線(1条)	Ⅱ群b	109
755	WC-8g Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、口縁部内面沈線(1条)	Ⅱ群b	109
756	WC-7g Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、口縁部内面沈線(1条)	Ⅱ群b	109
757	WC-8g Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線、口縁部内面沈線(1条)	Ⅱ群b	109
758	VD-0c Ⅱ層	深鉢	口縁部	平行沈線(2条)、口縁部内面沈線(1条)	Ⅱ群b	109
759	WD-9b Ⅱ層下部	鉢	口縁部	平行沈線(4条)、帯流縄文(L,R)	Ⅱ群b	109
760	VC-1j Ⅱ層	鉢	口縁部	平行沈線(3条)、帯流縄文(L,R)	Ⅱ群b	109

第144図 遺構外出土遺物：土器(6)



第145図 遺構外出土遺物：土器(7)

No	出土地点・層位	図柄	部位	文様の特徴・組織・その他	全長	写真図
761	VD-0a 瓦層	波線	口縁部	平行波線(3条)、口縁部内面波線(1条)	V形1部a	106
762	WC-7g 田層	波線	口縁部	平行波線(3条)、口縁部内面波線(1条)	V形1部a	108
763	WC-7g 田層	波線	口縁部	平行波線、華形網文(L.R)	V形1部a	109
764	VD-9b 田層	波線	胴部	平行波線(3条)、華形網文(L.R)	V形1部a	109
765	VD-0a 田層	波線	胴部	平行波線	V形1部a	109
766	WC-7j 田層	波線	胴部	平行波線	V形1部b	109
767	VD-9c 田層	波線	胴部	平行波線(4条)、華形網文(L.R)	V形1部b	109
768	OD-9b 田層下部	波線	口縁部	波線口縁、山形波線文、華形網文(L.R)	V形2部a	110
769	VD-0b 田層	波線	胴部	外面に空ろ、内面に十字・ケズリ	V形2部a	110
770	VD-9c 田層	波線	口縁部	内外面に十字・ケズリ	V形2部b	110
771	VD-0a 瓦層	波線	胴部	無文(L.1段)	V形2部c	110
772	WC-9j 田層下部	波線	胴部	無文(L.1段)	V形2部b	110

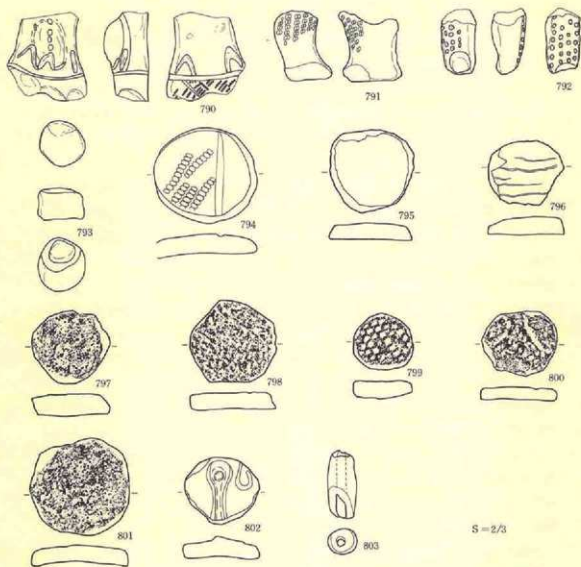


S=1/3

No	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器体・その他	分類	年表記号
773	M D-9 c Ⅱ層	甕	胴部	縞糸文(L 1段)	V群3類b	110
774	M D-8 d Ⅱ層	甕	胴部	縞糸文(L 1段)	V群3類b	110
775	M D-8 d Ⅱ層	甕	胴部	縞糸文(L 1段)	V群3類b	110
776	M C-9 h Ⅱ層	甕	胴部	縞糸文(L 1段)	V群3類b	110
777	M C-7 d Ⅱ層	甕	胴部	縞糸文(L 1段)による斜線縞文	V群3類b	110
778	M C-7 j Ⅱ層	甕	胴部	縞糸文、縞糸文(L 1段)	V群3類b	110
779	M D-8 c Ⅱ層	甕	胴部	縞糸文	V群3類b	110
780	M C-8 j Ⅱ層下部	甕	胴部	縞糸文	V群3類b	110
781	M C-8 i Ⅱ層	注口土器	口縁部	口縁部微段帯(削み)、微段帯による曲線的区画、○段多糸(RL)	V群4類	110
782	M C-7 g Ⅱ層下部	甕	口縁部	微段帯(削み)、口縁部削み	V群4類	110
783	V D-0 a Ⅱ層	深鉢	底部	黄褐色塗	B群	111
784	M C-7 h Ⅱ層	深鉢	底部	黄褐色塗	B群	111
785	M C-7 g Ⅱ層	深鉢	底部	黄褐色塗	B群	111
786	M C-8 h Ⅱ層	深鉢	底部	黄褐色塗	B群	111
787	M C-8 h Ⅱ層	深鉢	底部	黄褐色塗	B群	111
788	M C-7 j Ⅱ層	深鉢	底部	黄褐色塗	B群	111
789	M C-7 j Ⅱ層	深鉢	底部	黄褐色塗	B群	111

第146図 遺構外出土遺物：土器(8)





No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)			最大厚(cm)	重量(g)	備考		540附
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)					
790	WC-7b 扉層	土器	4.7	4.7	2.4	39.15	腰部、沈線、刺突、半筋織文(L,R)		112	
791	ID-5区	土器	3.7	2.9	1.7	34.35	腹部、短筋織文(L,R,L)		112	
792	WC-7b 扉層	土器	3.5	1.9	1.9	10.45	右胸飾、刺突支		112	
793	VD-0b 扉層	瓦甎	2.4	2.4	1.5	8.04	片坐		112	
794	IC-4d 扉層	同輪状土製品	5.1	5.4	1.2	30.05	背筋織文(L,R)、沈線		112	
795	VD-0b 扉層	同輪状土製品	4.4	4.5	0.9	19.45			112	
796	WC-71 扉層	同輪状土製品	3.5	4.0	0.9	14.92			112	
797	WC-71 扉層下部	同輪状土製品	3.9	4.3	1.2	30.04			112	
798	WC-81 扉層	同輪状土製品	4.4	4.5	1.0	23.44			112	
799	WC-9b 紅層	同輪状土製品	3.0	3.2	1.0	9.95	半筋織文(R,L)		112	
800	WC-81 扉層	同輪状土製品	3.5	4.0	0.7	11.85	沈線文、半筋織文(R,L)		112	
801	WC-81 扉層	同輪状土製品	5.2	5.3	1.2	23.89	半筋織文(L,R)		112	
802	VD-0b 扉層	同輪状土製品	3.6	4.0	0.7	11.65	刺突、刺突文、沈線		112	
803	ID-3c 1層	土器	3.7	1.5	内径0.5	4.38			112	

第147图 遺構外出土遺物：土製品

### 3. 石器

遺構外からは石鏃・石匙・石錐等の剥片石器類180点、石斧8点、擦石・石皿等の礫石器14点出土している。剥片石器類は使用の痕跡の認められない剥片やチップ類以外はすべて掲載しており、礫石器類は出土量が少ないためすべて掲載している。これらの石器はすべての地区にわたって出土したものであるが、出土状況からは時代・時期を把握できないため、器種毎に一括して説明することとする。

#### 石鏃（第148～152図804～887、写真図版113～115）

出土した89点のうち804～864は無茎鏃で、804～843は挟りが入っている。804～822は挟りが比較的深く細長い二等辺三角形を呈しており、805・813・822は特に細身になっている。823～828・830・835・836は挟りが浅くなっている。830～834は身部が湾曲し、832は挟りも深く湾曲している。837～843は正三角形に近い形状を呈し、挟りも浅く、小形である。844～863・866は平基の無茎鏃で、二等辺三角形のものが多いが、幾分丸みを帯びるものもある。大半は丁寧な両面からの二次剝離調整が施されているが、836・840のように周縁への簡単な二次調整だけで、一次剝離面を残すものもある。865・867～875は基部が丸みを帯びるもので、872・873は調整が比較的難になっている。876～884は有茎鏃で、基部はすべて凸基である。876は基部が長く、884は身部・茎部共に短く小形である。885は尖基鏃である。886～891は基部が欠損しており、基部形態は不明である。892は所謂アメリカ式石鏃で、基部両側に小さな挟りが施されている。数量的には無茎鏃（挟入鏃40・平基鏃22）62点（70%）、円基鏃（尖基含む）11点（12%）、有茎鏃9点（10%）、不明6点（7%）、アメリカ式石鏃1点（1%）である。89点中完形品は45点で約5割である。欠損部位は先端部が24点で最も多く、そのうち、凹基の脚部と両方のもの4点、基部と両方のもの1点、茎部と両方のもの1点である。他に、脚部だけのもの11点、基部7点、茎部2点である。879の茎部にはタールが付着している。

#### 尖頭器（第152・153図893～902、写真図版115・116）

石鏃に比べて長さ、幅、厚さがあり、重さが4g以上で、10点出土している。893～895は約2分の1程欠損しているが、大きさから木葉状・柳葉状の尖頭器と思われる。896～899は幾分丸みをおびるものの二等辺三角形に近い形状を呈し、899には浅い挟りが入っている。898は石匙の可能性もある。900～902は一部欠損があるものの、柳葉状の尖頭器である。

#### 石鏃（第153・154図903～916、写真図版116）

14点出土している。903～908は頭部を丁寧につくり鏃部が明瞭で、鏃部も長く丁寧な剝離調整が施されているが、906は鏃部が短くなっている。909・910は剝離調整は丁寧であるが、頭部と鏃部とが明瞭に区別されていない。911・912・914・916は頭部の調整がなく三角形の剥片の一部を加工したものである。913は剥片の尖った先端部を片面からの調整で鏃部としたものであ

る。915は片面に自然面を残しているが、剥片の尖った先端を踵部として使用したと思われる摩耗痕がみられる。14点中4点は踵部先端が欠損している。

#### 石 匙 (第154・155図917～926、写真図版117)

10点出土している。917・918は横形石匙で、917は貝殻状の剥片の打点部付近に摘みを作り、両面の側縁部に剝離調整を施している。918は縦長の剥片の側縁中央付近に摘みをつくり横形にしている。919～926は縦形石匙である。ほとんどが縦長剥片の打点部付近に摘みを作り出しているが、925は剥片の末端に摘みを作っている。919・925は片面のほぼ全面に剝離調整があり、920～922・926は片面の全面及び裏面の側縁に丁寧な剝離調整が施され、刃部が形成されている。923は両面の全面に剝離調整が施され、924は摘み部及び片面の側縁に簡単な調整が施されているだけである。欠損品は2点で、918が約半分程度、923は先端部が欠損しており、918は製作過程で折れた可能性がある。

#### 石 篋 (第155図927～931、写真図版117・118)

5点出土している。形態は木槩状(927・928)、頭部が狭く刃部が開くもの(929～931)がある。すべて両面に調整剝離があり、刃部は931を除いて両面からの調整が施されている。大半は片刃であるが、930は両刃に近く打製石斧とっていいものである。

#### 搔器・削器他 (第156～159図932～983、写真図版118～120)

一定の形状をもたないが搔器・削器としての機能を有すると思われる剥片類を一括したが、定形的な剥片石器の欠損品と思われるものも含めている。剥片の周辺部に剝離調整を行い円形、方形、三角形等に整形したものである。調整は両面の全周にあるもの、側面にあるもの、片面の両側面あるいは一方の先端部にあるものなど様々である。932～966は削器としての機能が考えられる一群で、側面に刃部があるエンドスクレーパー的なものが多い。960は錐、953・963は石匙の欠損品の可能性がある。967～969は小形で円形・三角形の形態を見し、両面からの丁寧な調整剝離が施され、身はやや厚くなっている。搔器的な機能が考えられる。970・971は調整加工による抉り状の刃部を有するものである。972～975は搔器としての機能を有するもので、剥片の先端部付近に鈍角で厚い刃部加工が施されている。976～981は剥片の縁部に部分的な調整痕、982・983は使用によると思われる細かな剝離痕が認められるものである。

#### 磨製石斧 (第160図984～991、写真図版121)

8点出土している。完形品はなく基部・刃部・上半部・下半部などが欠損している。984は小形で最大長5.6cm、最大厚0.6cmである。偏平な體の両側縁が研磨され、両面との間に稜をもっている。985～991はほぼ定角的なもので、両側縁が研磨され石斧主面との間に明確な稜をもっているもの(985～988・991)ともたないもの(989・990)がある。

#### 擦石・敲石・凹石他 (第161・162図992～998、写真図版121・122)

992・993・995・996は鏝の両面及び側面に擦痕・敲打痕が重複して認められるもので、994・997は凹石である。998は熔岩塊で、用途等は不明であるが石皿・砥石などに用いられており、破片も多く出土していることから1点のみ掲載している。

#### 石皿・台石（第162図999～1003、写真図版122・123）

5点出土している。石皿と台石の区別は明確ではないが、偏平な鏝の片面あるいは両面が皿状に湾曲した使用面をもつものを石皿（999～1001）とし、平坦な面に擦痕などの使用痕を有するものを台石（1002・1003）としている。

#### 半月状偏平打製石器（第163図1004、写真図版123）

周縁部に両面からの大きな剝離調整を加えて、半月状に整形しているもので、1点（1004）出土している。

#### 石 鐘（第163図1005、写真図版123）

やや偏平な円鏝の両側縁中央に調整剝離による浅い凹みをもつもので、1点（1005）出土している。

### 4. 石製品・その他（第163・164図1006～1014、写真図版123）

1006～1008は棒状石製品で、両面あるいは全面に擦痕をもつもので用途は不明である。1007の先端部は加熱により赤変し、煤状のものが付着している。

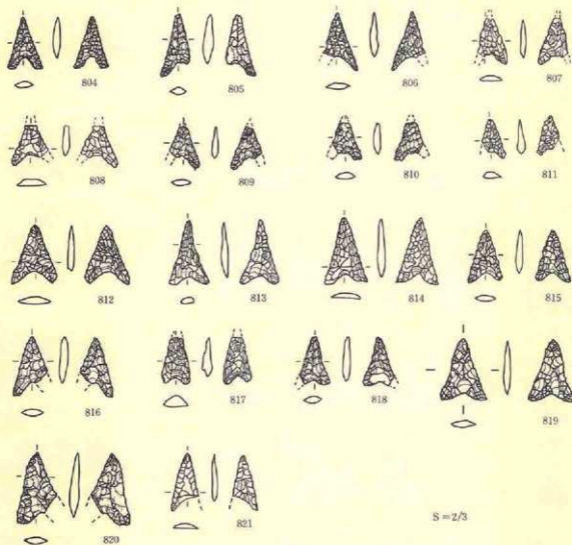
1009は石刀の破片である。偏平な棒状を呈し、ほぼ全面が磨かれており、頭部が丸くなっている。

1010・1011は円盤状石製品で、周縁部を打ち欠いてほぼ円形に整形している。

1012は砥石で、ほぼ全面に擦痕があり、右側面下方には刃物の先端を研いだような痕跡がある。この砥石は出土状況から平安時代以降の遺物と思われる。

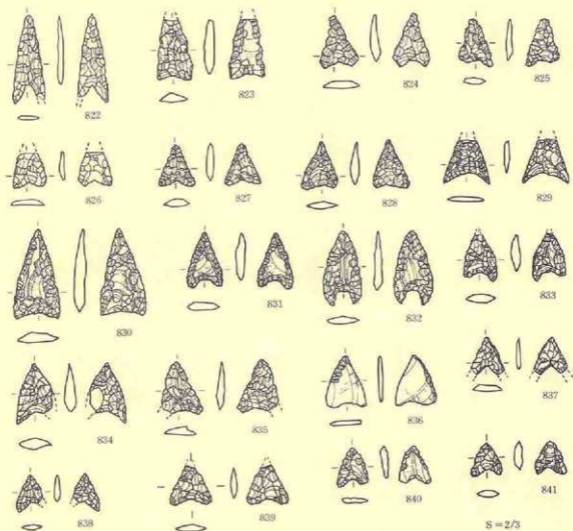
1013・1014は垂飾品で、管状を呈している。両側から穿孔されており、表面は丁寧に研磨されている。

その他に、寛永通寶が3点（1015～1017）出土している。



No.	出土地点・層位	形 類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	写真図
804	I D-7-c I層	右鉄	2.1	1.4	0.3	0.45	流紋岩	興山山地 中新統		113
805	I D-7-j II層	右鉄	2.5	1.9	0.35	0.55	硬質頁岩	興山山地 中新統		113
806	IV C-7-b III層	右鉄	1.7	1.2	0.25	0.40	輝綠閃長岩	北上山地 古生帯	脚部欠損	113
807	I D-8-i II層	右鉄	1.8	1.2	0.2	0.50	流紋岩質細粒凝灰岩	興山山地 中新統	先端部・脚部欠損	113
808	I C-4-j I層	右鉄	1.7	1.5	0.3	0.55	鉄石英	興山山地	先端部・脚部欠損	113
809	I C-2-c II層	右鉄	1.7	1.1	0.3	0.35	鉄石英	不詳	先端部・脚部欠損	113
810	I C-6-f II層	右鉄	1.8	1.0	0.3	0.45	流紋岩	興山山地 中新統	先端部・脚部欠損	113
811	I D-8-i II層	右鉄	1.6	0.9	0.3	0.35	硬質頁岩	興山山地 中新統	脚部欠損	113
812	V D-1-a IV層	右鉄	1.9	1.7	0.35	0.58	硬質頁岩	興山山地 中新統		113
813	I C-1-b I層	右鉄	2.6	1.6	0.5	0.79	珪質頁岩	興山山地 中新統		113
814	I E-8-a II層	右鉄	2.7	1.7	0.2	0.85	硬質頁岩	興山山地 中新統		113
815	I D-4-c I層	右鉄	2.1	1.4	0.25	0.59	粘板岩	北上山地 古生帯		113
816	I C-5-b I層	右鉄	2.4	1.2	0.3	0.75	流紋岩質細粒凝灰岩	興山山地 中新統	脚部欠損	113
817	I D-6-g III層	右鉄	1.9	1.2	0.5	0.65	硬質頁岩	興山山地 中新統	先端部欠損	113
818	I C-1-b II層	右鉄	1.9	1.2	0.3	0.45	硬質頁岩	興山山地 中新統	脚部欠損	113
819	O B-9-b III層	右鉄	2.5	1.8	0.3	0.75	硬質頁岩	興山山地 中新統		113
820	I D-5-a I層	右鉄	2.9	1.4	0.4	1.15	硬質頁岩	興山山地 中新統	脚部欠損	113
821	IV B-6-f I層	右鉄	2.3	1.1	0.2	0.50	粘板岩	北上山地 古生帯	脚部欠損	113

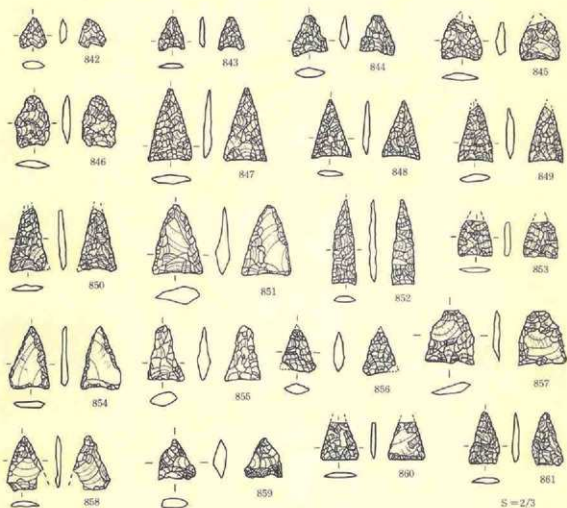
第148圖 遺構外出土遺物：石器(1)



S = 2/3

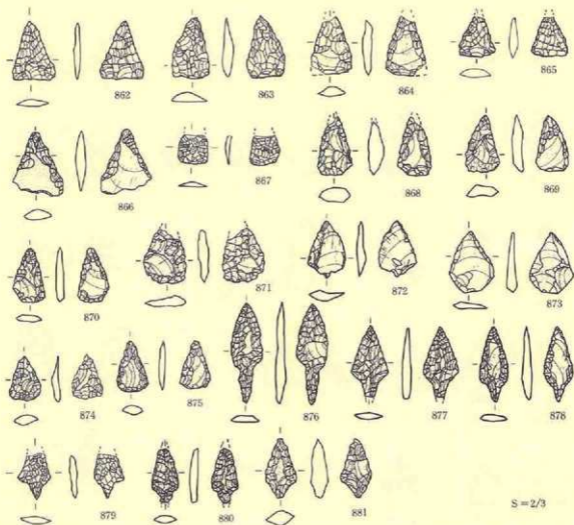
No.	出土地点・層位	部 種	部 種	最大幅(cm)	最大長(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	所属図
822	I E - 3 a	石層	石錐	3.6	1.4	0.2	0.90	流紋岩	奥羽山地 中新統	胴部欠損	113
823	Ⅱ C 区	Ⅱ - Ⅱ層	石錐	2.5	1.4	0.4	1.25	輝岩質岩	奥羽山地 中新統	先端部欠損	113
824	I C - 2 c	石層	石錐	2.1	1.6	0.3	0.60	凝灰岩質凝結凝灰岩	奥羽山地 中新統		113
825	I E - 5 a	石層	石錐	1.9	1.1	0.3	0.55	チャート質輝岩質岩	北上山地 古生界		113
826	I C - 5 b	石層	石錐	1.5	1.5	0.2	0.50	輝岩質岩	奥羽山地 中新統	先端部欠損	113
827	I C - 6 f	石層	石錐	1.6	1.4	0.3	0.55	流紋岩	奥羽山地 中新統		113
828	Ⅱ C - 8 a	石層	石錐	1.8	1.4	0.3	0.70	凝結紅頁岩質岩	奥羽山地 中新統		113
829	Ⅱ D - 1 a	Ⅱ層	石錐	1.5	1.7	0.2	0.71	流紋岩	奥羽山地 中新統	先端部欠損	113
830	Ⅱ D - 3 c	Ⅱ - Ⅱ層	石錐	3.4	1.9	0.4	2.57	輝岩質岩	奥羽山地 中新統		113
831	Ⅱ D - 4 a	Ⅱ層	石錐	1.9	1.4	0.4	0.94	凝結砂板岩	北上山地 古生界		113
832	I D - 1 (包)	埋土	石錐	3.0	1.5	0.4	1.19	凝結岩	北上山地 古生界		113
833	Ⅱ D - 7 a	Ⅱ層	石錐	1.5	1.3	0.4	0.70	凝結紅頁岩質岩	奥羽山地 中新統	先端部欠損	113
834	Ⅱ C - Ⅱ D 区	石層	石錐	2.4	1.4	0.5	1.00	輝岩質岩	奥羽山地 中新統	胴部欠損	113
835	Ⅱ D - 8 b	石層	石錐	1.9	1.5	0.3	0.90	玉髓	奥羽山地 <sup>(*)</sup>	胴部欠損	113
836	Ⅱ C - 3 g	Ⅱ層	石錐	1.9	1.6	0.15	0.53	輝岩質岩	奥羽山地 中新統		113
837	I E - 8 b	I層	石錐	1.5	1.3	0.2	0.40	凝結岩	奥羽山地 中新統	胴部欠損	113
838	Ⅱ C - 7 g	Ⅱ層	石錐	1.6	1.1	0.25	0.25	チャート	北上山地 古生界	胴部欠損	113
839	I D - 7 b	埋土	石錐	1.6	1.7	0.46	0.46	輝岩質岩	奥羽山地 中新統	先端部欠損	114
840	I E - 3 b	I層	石錐	1.6	1.3	0.35	0.35	輝岩質岩	奥羽山地 中新統		114
841	I D - 5 a	I層	石錐	1.3	1.2	0.40	0.40	チャート	北上山地 古生界		114

第149圖 遺構外出土遺物：石器(2)



No	出土地点・層位	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	採取地
842	I C-1 a	I-II層	1.2	1.1	0.3	0.45	キヤ	北上山地 古生帯		114
843	VD-1 a	田層	1.2	1.0	1.5	0.27	キヤ	北上山地 古生帯		114
844	WC-7 b	I層下部	1.3	1.4	0.4	0.55	キヤ	北上山地 古生帯		114
845	WC-9 a	IV層	1.5	1.6	0.3	0.99	輝綠岩質	北上山地 古生帯	先端部欠損	114
846	VD-1 a	田層	1.9	1.4	0.3	1.00	輝綠岩質	北上山地 古生帯		114
847	WC-8 i	田層	2.8	1.7	0.3	1.20	珸質泥岩	奥羽山地 中新統		114
848	WC-9 a	IV層	2.2	1.5	0.3	0.63	流紋岩	奥羽山地 中新統		114
849	VC-0 i	IV層	2.3	1.4	0.35	0.99	輝綠岩質	奥羽山地 中新統	先端部欠損	114
850	WC-9 i	IV層	2.3	1.4	0.2	0.74	流紋岩	奥羽山地 中新統	先端部欠損	114
851	VD-1 (注)	田土	2.2	2.1	0.7	2.10	輝綠岩質	奥羽山地 中新統		114
852	IC-3 b	II層	3.4	1.0	0.2	0.95	輝綠岩質	奥羽山地 中新統		114
853	VD-9 i	田層	1.5	1.4	0.2	0.59	キヤ	北上山地 古生帯	先端部欠損	114
854	WC-9 j	IV層	2.4	1.6	0.3	1.06	輝綠岩質	奥羽山地 中新統		114
855	IC-6 j	I層	2.2	1.5	0.6	1.10	流紋岩	奥羽山地 中新統		114
856	I E-8 b	I層	1.7	1.4	0.4	0.65	キヤ	北上山地 古生帯	先端部・基部欠損	114
857	I E-7 b	田層	2.2	1.8	0.3	1.25	珸質泥岩	奥羽山地 中新統		114
858	I D区	表層	2.2	1.5	0.2	1.00	珸質泥岩	奥羽山地 中新統	基部欠損	114
859	I E-7 b	田層	1.0	1.5	0.5	0.56	珸質泥岩質	奥羽山地 中新統		114
860	WC-8 j	IV層	1.5	1.5	0.2	0.80	流紋岩	奥羽山地 中新統	先端部欠損	114
861	WC-9 j	田層下部	2.1	1.3	0.25	0.55	流紋岩	奥羽山地 中新統		114

第150図 遺構外出土遺物：石器(3)

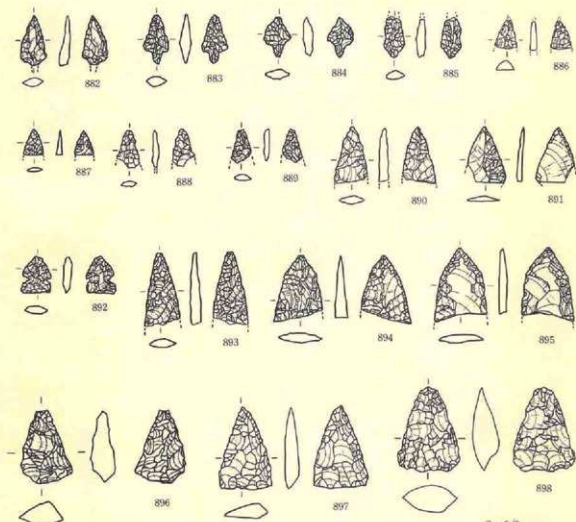


S = 2/3

No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	集産地・生成年代	備考	写真掲載
862	I B区 礫土	石球	2.4	1.7	0.25	0.79	珪質泥岩	養羽山地 中新統		114
863	I D-5b 礫層	石球	2.5	1.6	0.5	1.50	硬質泥岩	養羽山地 中新統		114
864	I C-6 1層	石球	2.4	1.6	0.4	1.45	流紋岩質細粒凝灰岩	養羽山地 中新統	先端部・基部欠損	114
865	I C-5b 1層	石球	1.9	1.5	0.3	0.85	粘板岩	北上山地 古生界		114
866	I C-3e 1層	石球	2.0	2.0	0.4	1.40	粘板岩	北上山地 古生界		114
867	I B-7b 礫層	石球	1.2	1.2	0.2	0.42	粘板岩	北上山地 古生界	先端部欠損	114
868	I D-5a 1層	石球	2.4	1.4	0.7	1.65	珪質泥岩	養羽山地 中新統	先端部欠損	114
869	I C-3e 1層	石球	2.3	1.3	0.5	1.36	流紋岩質細粒凝灰岩	養羽山地 中新統		114
870	I C-5g 1層	石球	2.3	1.3	0.3	0.75	珪質泥岩	養羽山地 中新統		114
871	I D-3a 1層	石球	2.2	1.7	0.4	1.80	珪質泥岩	養羽山地 中新統	先端部欠損	114
872	W C-9g 礫層	石球	2.3	1.5	0.4	0.95	粘板岩質凝灰岩	養羽山地 中新統		114
873	I C-5b 1層	石球	2.5	1.8	0.4	1.60	流紋岩質細粒凝灰岩	養羽山地 中新統		114
874	ⅡF区	石球	1.9	1.3	0.3	0.90	珪質泥岩	養羽山地 中新統		114
875	I D-6a 礫層	石球	2.1	1.3	0.3	0.90	千ヶ岳	北上山地 古生界		115
876	W D-9a 礫層	石球	4.1	1.3	0.4	1.40	珪質粘板岩	北上山地 古生界		115
877	W D-7a 1層	石球	2.9	1.5	0.4	0.96	千ヶ岳	北上山地 古生界	基部欠損	115
878	W D-9c 礫層下部	石球	2.1	1.2	0.4	0.59	粘板岩凝灰岩	養羽山地 中新統		115
879	I B-6b 礫層	石球	1.9	1.3	0.3	0.63	千ヶ岳	北上山地 古生界	先端部欠損, P-6有	115
880	I D-4c 1層	石球	2.2	1.1	0.3	0.90	流紋岩質細粒凝灰岩	養羽山地 中新統	先端部・基部欠損	115
881	ⅡE-4e 1層	石球	2.4	1.3	0.7	1.55	千ヶ岳	北上山地 古生界		115

第154図 遺構外出土遺物：石器(4)

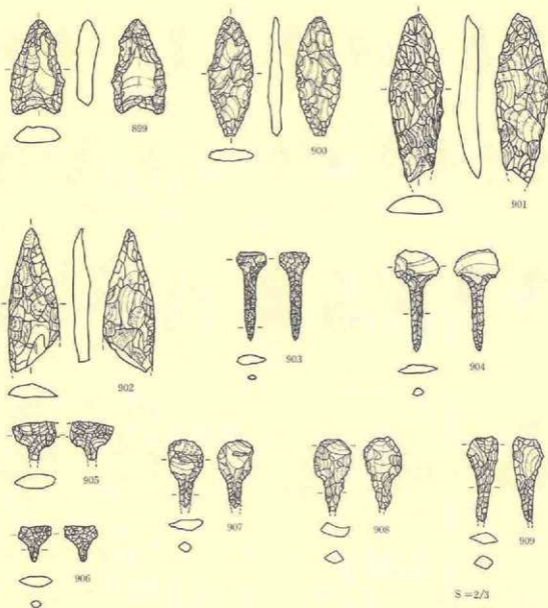




S = 2/3

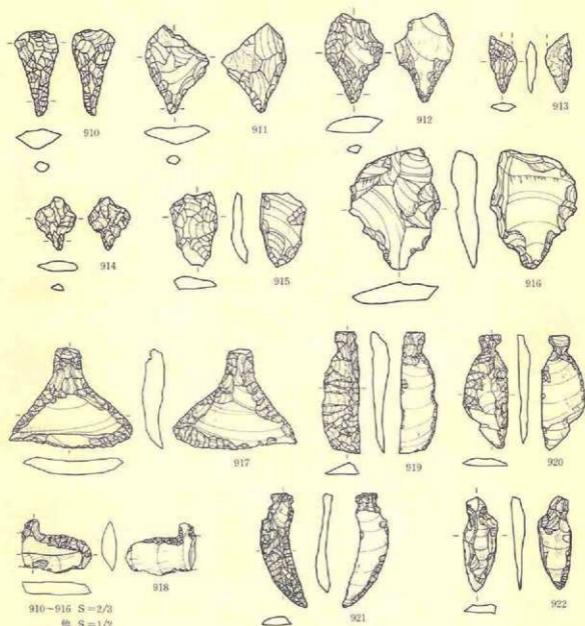
No.	出土地点・單位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	頁数
882	I D-4 c	石銃	2.0	1.0	0.4	0.65	チート層砂凝灰岩	北上山地 古生界	基部欠損	115
883	WC-8 i	石銃	200	1.0	0.4	0.33	輝綠岩質岩	北府山地 古生界		115
884	II E-3 a	石銃	1.7	1.1	0.4	0.45	流紋岩質輝綠岩	北上山地 中新統		115
885	I G-8 b	石銃	1.6	0.9	0.4	0.45	チート質輝綠岩	北上山地 古生界	先端部欠損	115
886	I C-4 i	石銃	1.2	0.9	0.4	0.35	チート	北上山地 古生界	基部欠損	115
887	WC-1 (復)	環土	1.0	0.8	0.25	0.30	チート	北上山地 古生界	基部欠損	115
888	I D-1 (復)	環土	1.5	0.9	0.3	0.30	チート	北府山地 古生界	基部欠損	115
889	I D-5 b	石銃	1.4	0.7	0.2	0.25	輝岩質岩	奥羽山地 中新統	基部欠損	115
890	I D-5 a	石銃	2.2	3.4	0.4	0.70	流紋岩質輝綠岩	奥羽山地 中新統	基部欠損	115
891	V D-1 a	石銃	2.2	1.3	0.2	0.70	柱状流岩	奥羽山地 中新統	基部欠損	115
892	WC-7 j	石銃	1.4	1.2	0.3	0.32	輝岩質岩	奥羽山地 中新統		115
893	WC-9 i	尖錐器	2.9	1.4	0.45	1.50	柱状流岩	北上山地 古生界	欠損	115
894	WC-9 b	尖錐器	1.5	1.7	0.4	2.00	柱状流岩	奥羽山地 中新統	欠損	115
895	V D-1 a	石銃	2.7	2.1	0.3	2.20	精板岩	北上山地 古生界	欠損	115
896	O B-2 b	石銃	2.0	2.1	1.0	4.00	柱状流岩	奥羽山地 中新統		115
897	I D-8 i	石銃	304	0.2	0.6	4.10	柱状流岩	奥羽山地 中新統		115
898	I E-8 a	石銃	3.3	2.5	1.1	7.40	流紋岩	奥羽山地 中新統		115

第152図 遺構外出土遺物：石器(5)



No	出土地点・層位	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	図録
899	ND-9 a	II型	3.5	2.1	0.8	6.90	珉質砂岩	北上山地 古生界		115
900	ID-6 g	II型	4.8	1.8	0.6	4.25	輝岩質頁岩	善形山地 中新世		116
901	不明(平成元)	尖頭部	6.7	2.1	0.7	11.25	輝岩質頁岩	善形山地 中新世	欠損	116
902	不明(平成元)	尖頭部	5.7	2.0	0.5	6.20	輝岩質頁岩	善形山地 中新世	欠損	116
903	ID-4 a	I型	3.5	1.2	0.2	0.85	中---	北上山地 古生界		116
904	ID-7 j	II型	4.6	1.8	0.4	1.35	珉質泥岩	北上山地 古生界		116
905	NC-8 i	II型	1.5	1.3	0.2	1.30	流紋岩	善形山地 中新世	断面欠損	116
906	NC-7 a	III型	1.4	1.3	0.4	0.50	輝綠凝灰岩	北上山地 古生界		116
907	IC-7 a	I型	2.7	1.4	0.6	1.55	珉質泥岩	善形山地 中新世	断面欠損	116
908	ID-7 i	II型	2.9	1.5	0.5	2.60	輝岩質頁岩	善形山地 中新世	断面欠損	116
909	IC-4 e	II型	4.30	2.4	1.2	8.75	中---	北上山地 古生界	断面欠損	116

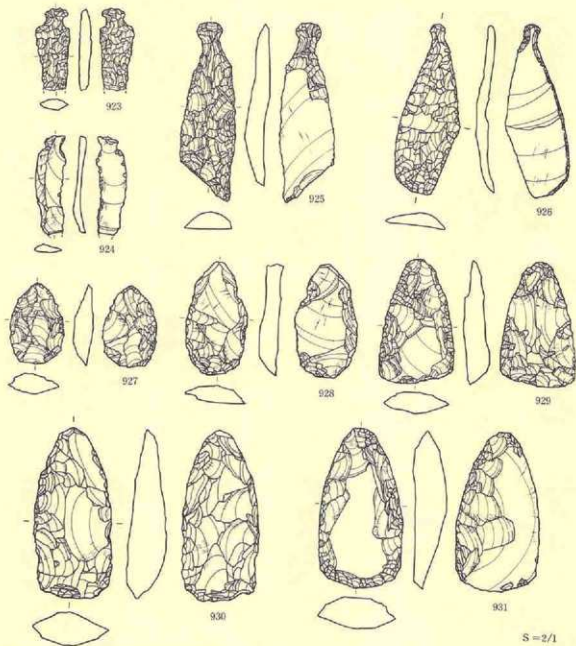
第153図 遺構外出土遺物：石器(6)



910~916 S=2/3  
他 S=1/2

No.	出土地点・層位	器 種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	所属館
910	野D-1(注) 埋土	石鏃	3.4	1.8	1.3	3.50	硬質灰岩	奥羽山地 中新統		111
911	I C-4 c I層	石鏃	3.5	2.6	0.6	4.75	硬質灰岩	奥羽山地 中新統		110
912	I E-5 e I層	石鏃	3.6	2.3	0.7	8.01	成粒岩	奥羽山地 中新統		116
913	野C-8 j 墓層	石鏃	2.0	1.0	0.4	0.85	硬質灰岩	奥羽山地 中新統		116
914	I C-4 c 墓層	石鏃	1.5	1.2	0.4	0.95	硬質灰岩	奥羽山地 中新統		116
915	I E-8 a I層	石鏃	3.0	2.0	0.5	3.20	成粒岩	北上山地 古生界		116
916	I D-7 f 墓層	石鏃	4.65	3.6	0.9	14.96	輪廻状片岩層状岩	奥羽山地 中新統		116
917	野J-1 d I層	石刃/鏃	5.3	6.5	1.2	25.40	片麻岩	奥羽山地 中新統		117
918	I E-8 a I層	石刃/鏃	2.5	2.5	0.7	6.85	成粒岩	北上山地 古生界	欠損	117
919	野D-8 a 墓層	石刃/鏃	5.7	2.4	0.4	6.67	成粒岩	奥羽山地 中新統		117
920	野C-7 g 墓層	石刃/鏃	6.3	1.9	0.6	8.34	成粒岩	奥羽山地 中新統		117
921	野D-9 a 墓層	石刃/鏃	5.4	1.5	0.6	5.73	硬質灰岩	奥羽山地 中新統		117
922	I B-7 b 墓層	石刃/鏃	5.0	1.8	0.7	6.00	硬質灰岩	奥羽山地 中新統		117

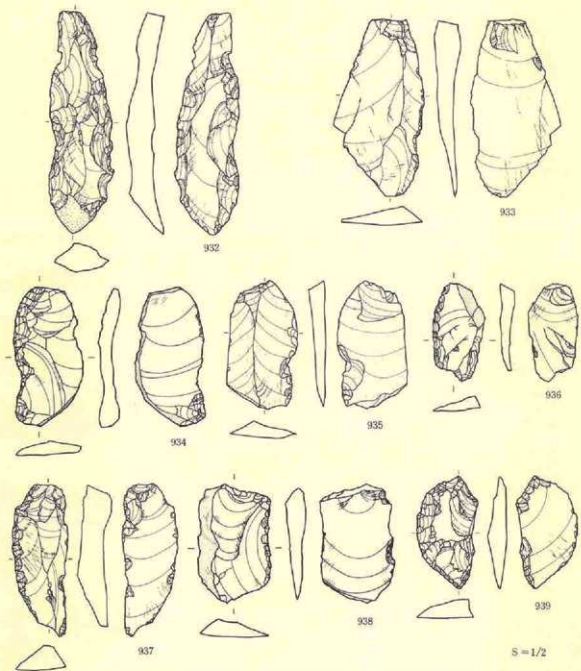
第154図 遺構外出土遺物：石器(7)



S-2/1

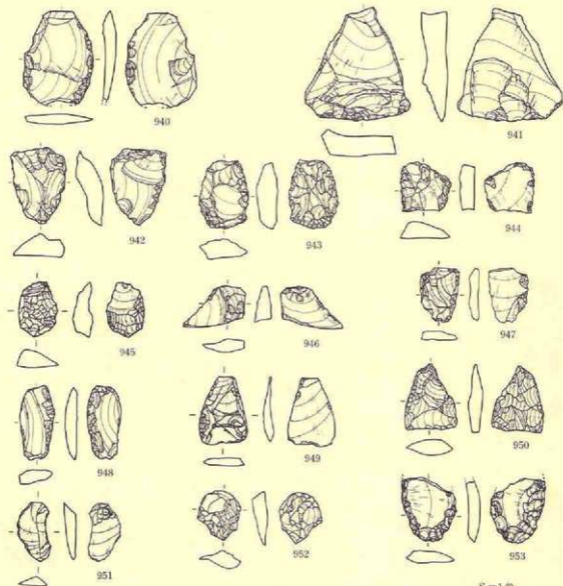
№	出土地点、层位	器 种	最大长(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重(g)	石 质	产地·生成年代	備 考	图版
923	WC-9	I层下部	4.25	1.8	0.6	5.15	燧石	黄岩山地区 中新统		117
924	ID-8	II层	5.3	1.0	0.6	3.40	燧石	黄岩山地区 中新统		117
925	YC-6	IV层	9.2	2.9	1.0	26.00	燧石	黄岩山地区 中新统		117
926	IB-7b	III层	9.0	3.3	1.0	16.25	燧石	黄岩山地区 中新统		117
927	VD-1a	IV层	4.3	2.8	1.1	11.57	燧石	北土山地区 古生界		117
928	VD-9e	IV层	6.0	3.3	1.3	21.67	燧石	黄岩山地区 中新统		117
929	WC-9	IV层	6.5	4.6	1.5	33.50	燧石	黄岩山地区 中新统		117
930	IB-6a	III层下部	10.0	4.2	2.1	75.00	燧石	黄岩山地区 中新统		118
931	VD-1a	IV层	8.42	4.4	1.7	70.00	燧石	黄岩山地区 中新统		118

第155图 遗物出土物：石器(8)



No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	写真図版
932	宮C-0-1 砂層	棒-側磨地	11.7	3.4	1.5	97.7	鴨梳石	北上山塊 古生界		118
933	宮C-8-1 砂層	棒-側磨地	9.4	4.7	1.4	38.13	燧石高岩	奥羽山塊 中新統		118
934	1 B-0-b 砂層	棒-側磨地	7.3	3.7	1.0	26.95	柱貫高岩	奥羽山塊 中新統		118
935	1 C-1-b 砂層	棒-側磨地	6.8	3.75	0.8	21.60	柱貫高岩	奥羽山塊 中新統		118
936	1 B-0-b 砂層	棒-側磨地	5.2	2.9	0.8	12.35	柱貫高岩	奥羽山塊 中新統		118
937	1 C-3-b 砂層	棒-側磨地	8.1	3.0	1.8	32.45	柱貫高岩	奥羽山塊 中新統		118
938	0 B-9-b 砂層	棒-側磨地	6.2	3.3	1.1	32.55	柱貫高岩	奥羽山塊 中新統		118
939	宮C-9-1 砂層	棒-側磨地	5.95	3.0	1.0	17.15	燧石和柱貫高岩	奥羽山塊 中新統	S=1/2	118

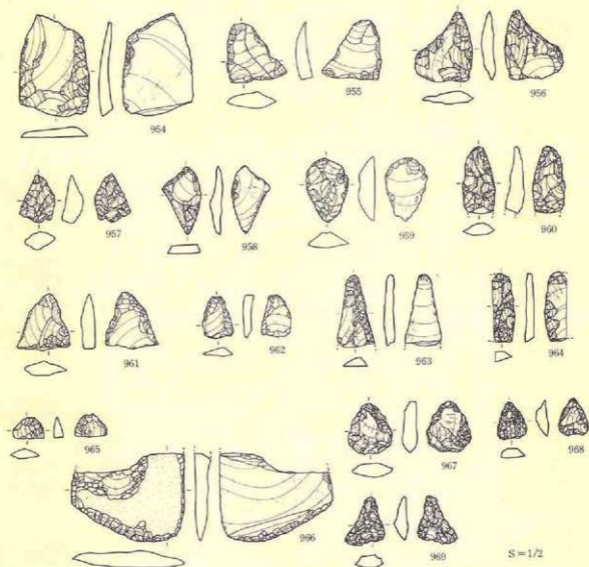
第156圖 遺構外出土遺物：石器(9)



S=1/2

No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	図録
940	平明(平成元)	刮削器	4.05	3.7	0.6	10.92	硬質泥岩	熊谷山塊 中新統	欠損	118
941	W C区 Ⅱ-W層	刮削器	6.0	5.5	1.5	45.11	硬質泥岩	熊谷山塊 中新統		119
942	目E-7 a	刮削器	4.1	2.9	1.3	12.5	珉質砂岩	北上山地 古生界		119
943	I C-4 a I層	刮削器	3.6	2.6	1.1	10.30	砂岩	北上山地 古生界		119
944	I C-7 b I層	刮削器	2.5	2.4	0.5	7.20	流紋岩質砂岩	熊谷山塊 中新統		118
945	I B-3 I層	刮削器	2.9	2.1	1.1	5.025	珉質泥岩	熊谷山塊 中新統		119
946	I C-7 c I層	刮削器	2.2	3.2	0.9	4.85	千—ト	北上山地 古生界		119
947	I D-9 a I層	刮削器	3.8	2.1	0.5	3.80	流紋岩質砂岩	熊谷山塊 中新統		118
948	W F-2 b I層	刮削器	3.9	1.8	0.8	4.60	硬質泥岩	熊谷山塊 中新統		119
949	I B-5 a Ⅱ層	刮削器	3.5	2.5	0.5	4.48	硬質泥岩	熊谷山塊 中新統		119
950	I D-5 a I層	刮削器	3.5	2.8	0.8	6.70	硬質泥岩	熊谷山塊 中新統		119
951	I B-6 b Ⅱ層	刮削器	3.7	1.7	0.7	2.20	珉質泥岩	熊谷山塊 中新統		119
952	I E-9 c I層	刮削器	2.1	2.3	0.7	3.50	千—ト 珉質砂岩	北上山地 古生界		119
953	W F-9 a I層	刮削器	3.3	2.6	0.7	7.00	硬質泥岩	熊谷山塊 中新統		119

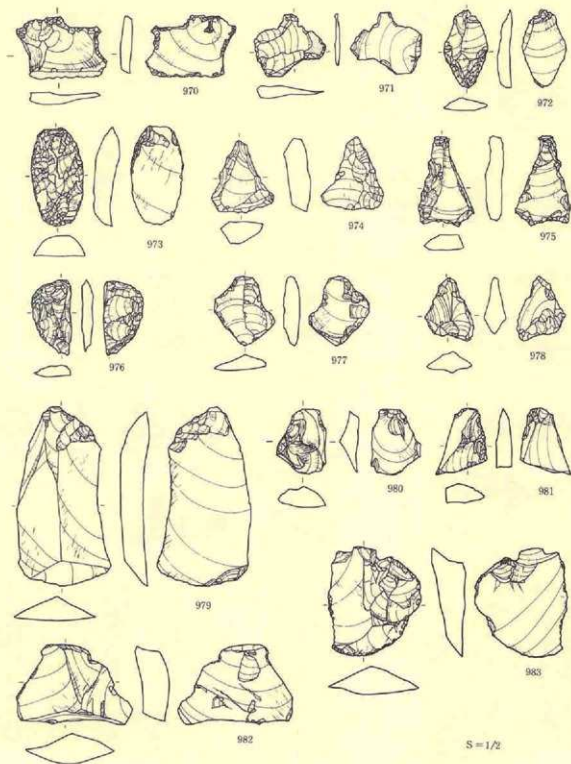
第157图 遺構外出土遺物：石器(II)



S=1/2

No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・形成年代	備考	頁碼
954	VC-6e	刮削器	5.1	3.7	0.6	14.40	礫質閃石	北上山地 古生界	尖形	119
955	IC-4d	1層	3.2	3.1	0.7	6.95	礫質閃石	美原山地 中新統		119
956	VC-1j	刮削器	3.7	2.95	0.6	5.99	礫質閃石	美原山地 中新統		119
957	IC-3b	刮削器	2.5	1.9	1.2	2.20	礫質閃石	美原山地 中新統		119
958	WC-3j	刮削器下部	3.6	2.0	0.6	3.05	礫質閃石	美原山地 中新統	欠損	119
959	ID-5b	1層	3.4	2.2	0.9	5.90	片—片	北上山地 古生界		119
960	ID-5b	1層	3.6	1.8	1.0	4.95	成层岩質礫砂岩閃石	美原山地 中新統	欠損(磨?)	119
961	ID-1(粒)	埋土	3.0	2.9	0.7	5.85	礫質閃石	美原山地 中新統	欠損	119
962	ID-7b	1層	2.2	1.7	0.4	1.95	片—片	美原山地 古生界		119
963	WC-8j	刮削器	3.8	1.9	0.6	3.34	片質閃石	美原山地 中新統	欠損(石磨?)	119
964	WC-9j	刮削器	3.0	1.1	0.4	1.90	片質閃石	美原山地 中新統	欠損	119
965	IC-5j	1層	1.1	1.7	0.6	1.10	片—片	北上山地 古生界	尖形	120
966	ID-7j	1層	4.7	6.0	0.9	26.60	流紋岩	美原山地 中新統	欠損	120
967	ID-9c	1層	2.6	2.3	0.8	5.65	礫石	美原山地		120
968	WC-5j	1層	1.9	1.55	0.6	1.40	礫質閃石	北上山地 古生界		120
969	WC-6j	刮削器	2.3	2.0	0.7	2.75	礫質閃石	北上山地 古生界		120

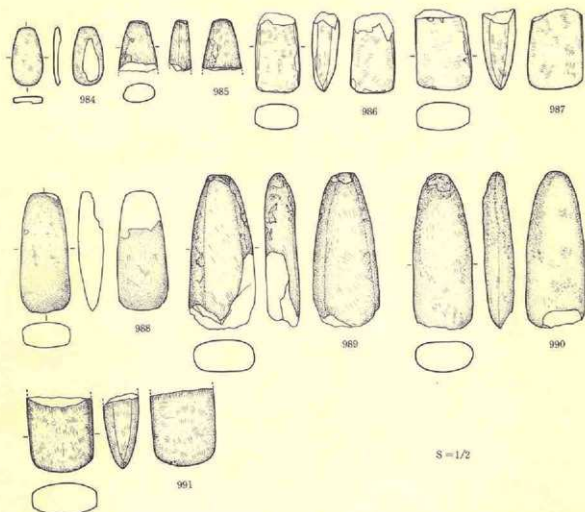
第158图 遺構外出土遺物：石器(II)



S=1/2

第159圖 遺構外出土遺物：石器(17)

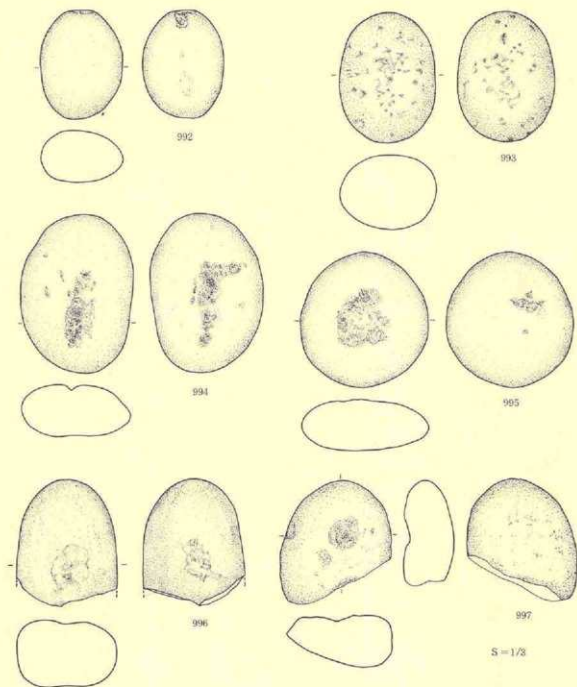




S = 1/2

No.	出土地点・層位	形 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	資料館
970	I B-7 b	磨製	1.6	1.5	0.3	0.56	玻璃質流紋岩	奥羽山地 中新統	欠損	120
971	I C-6 j	I層	3.5	3.8	0.8	5.55	石英	北上山地 古生界	欠損	120
972	I D-1 (佐)	磨土	4.1	2.3	0.7	4.55	石英	北上山地 古生界		120
973	II E-2 d	I層	5.1	2.7	1.0	19.40	珩質流紋岩	奥羽山地 中新統		120
974	I C-3 e	I層	3.3	3.3	1.0	11.80	珩質流紋岩	奥羽山地 中新統		120
975	I C-6 e	I層	4.8	3.0	1.0	11.20	珩質流紋岩	奥羽山地 中新統		120
976	IV C-9 j	磨製	3.0	2.0	0.5	6.00	硬質砂岩	奥羽山地 中新統	欠損	120
977	IV C-8 i	磨製	3.7	3.2	0.5	7.85	珩質粘板岩	北上山地 古生界		120
978	I D-5 b	I層	3.4	2.6	1.1	7.25	透紋岩質凝灰岩	奥羽山地 中新統		120
979	IV C-8 j	磨製	9.6	4.9	1.3	60.00	粘板岩	北上山地 古生界		120
980	I B-7 b	磨製	3.4	2.6	1.0	7.15	珩質流紋岩	奥羽山地 中新統		120
981	IV C-9 g	磨製	3.2	2.3	0.9	8.55	硬質砂岩	奥羽山地 中新統	欠損	120
982	IV C-9 i	磨製	4.2	6.1	1.7	35.50	硬質砂岩	奥羽山地 中新統	欠損	120
983	V C区	III-V層	5.7	4.9	1.8	37.85	輪紋粒状凝灰岩	奥羽山地 中新統		120
984	IV C-7 j	磨製	8.1	2.7	0.6	11.45	粘板岩	北上山地 古生界	欠損	121
985	V D-0 c	磨製	4.4	3.3	1.6	90.50	輝石片岩	北上山地 古生界	欠損	121
986	IV C-9 b	磨製	7.9	3.9	2.2	115.0	粘板岩	北上山地 古生界	欠損	121
987	IV C-7 b	磨製	7.1	4.9	2.3	169.0	硬砂岩	北上山地 古生界	欠損	121
988	O B-1 b	磨土	9.4	3.9	1.9	124.0	珩質流紋岩	奥羽山地 中新統	欠損	122
989	IV C区	磨製	13.6	5.4	2.7	360.0	硬砂岩	北上山地 古生界	欠損	122
990	IV C-7 j	磨製	13.8	5.3	2.7	295.0	硬砂岩	北上山地 古生界	欠損	122
991	IV C-7 e	磨製	6.6	5.8	2.7	315.0	輝石片岩	北上山地 古生界	欠損	122

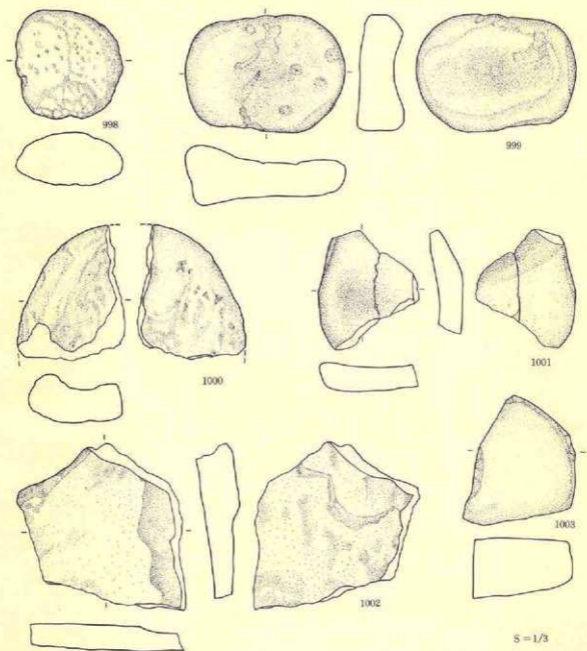
第160圖 遺構外出土遺物：石器(10)



S = 1/3

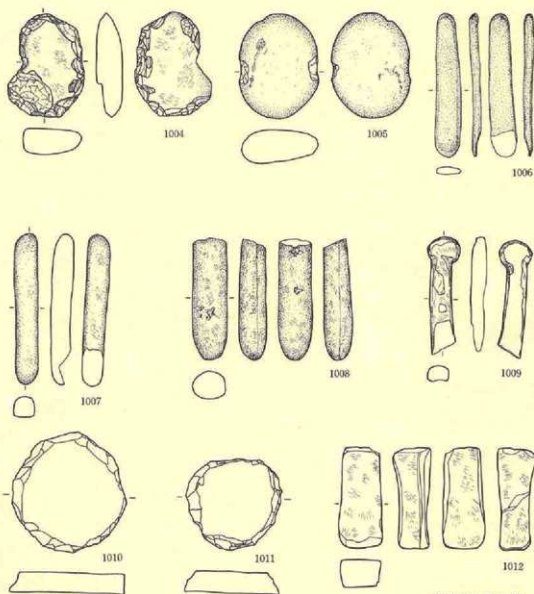
No.	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	打 注	産地・生活年代	備 考	写真番号
992	VC区	IV層	礫石・礫石	8.5	7.3	4.7	450.0	鹿岡門跡跡	豊前山地 中生家	121
993	IC-3C	I層	礫石・礫石	19.4	7.3	6.9	705.0	阿蘇石室山石	豊前山地 中野氏	121
994	PC-7b	II層	礫石	14.4	10.0	4.6	360.0	阿蘇石室山石	豊前川流跡跡 豊前氏	121
995	VD-0a	IV層	礫石・礫石	12.9	11.3	4.5	810.0	阿蘇石室山石	豊前山地 中野氏	122
996	IE-8a	II層	礫石・礫石	19.1	8.2	4.9	350.0	阿蘇石室山石		欠損 122
997	VD-0a	IV層	礫石	19.8	9.3	4.7	435.0	阿蘇石室山石(阿蘇川跡跡)	豊前川流跡跡 豊前氏	欠損 122

第161圖 遺構外出土遺物：石器(14)



No	出土地点・層位	部 種	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	写真順
998	I E - 8 d Ⅱ層	不明	8.6	8.5	4.3	220.0	燧石(宝山岩)(薄岩塊)	新第三紀? 新第三紀?		122
999	I C - 5 f	石葉	10.4	14.0	5.4	495.0	燧石(宝山岩)(厚岩塊)	喜望川流域? 第四系		122
1000	I E - 8 d Ⅱ層	石葉	10.0	8.5	3.8	430.0	流紋岩質燧石(薄岩塊)	新第三紀 中新統	欠損	122
1001	Ⅱ C - 7 i Ⅱ層	石葉	10.5	8.8	2.8	300.0	燧石(宝山岩)(厚岩塊)	喜望川流域? 第四系	欠損	122
1002	I C - 4 g Ⅰ層	白石	12.5	12.2	3.0	720.0	燧石(宝山岩)		欠損	122
1003	I D - 5 w Ⅱ層	白石	10.6	8.0	4.9	570.0	燧石(宝山岩)		欠損	123

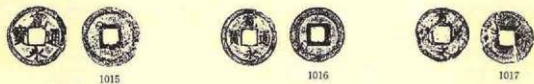
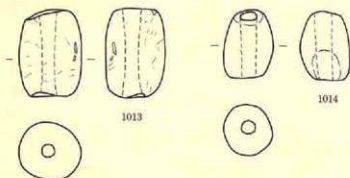
第162図 遺構外出土遺物：石器(5)



1010·1011 S=1/2  
他 S=1/3

No	出土地点・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	産地・生成年代	備考	写真図
1004	V D-1 a	厚層	9.2	6.8	2.3	165.0	粘板岩			121
1005	IV D-1 (佐)	埋土	9.3	7.9	3.0	230.0	鎌石雲山岩	美濃山地		122
1006	I B-7 b	埋土	11.2	2.0	0.7	23.59	片質細粒凝灰岩	美濃山地	欠損	123
1007	IV C-1 (組)	埋土	13.4	2.3	1.9	75.5	細粒凝灰岩	美濃山地	欠損	123
1008	V D-1 a	厚層	10.6	3.0	2.4	130.0	硬砂岩	北上山地	欠損	123
1009	IV C-2 j	埋土	10.3	3.0	1.4	46.14	粘板岩	北上山地	欠損	123
1010	IV C-9 j	埋土	6.5	6.0	1.2	58.3	極細粒片質凝灰岩	美濃山地		123
1011	IV C-9 b	埋土	4.9	6.0	1.15	43.64	極細粒片質凝灰岩	美濃山地		123
1012	IV D区	埋土	8.8	3.9	2.4	140.0	極粒凝灰岩	美濃山地		123

第163図 遺構外出土遺物：石器(①)・石製品(1)



S=2/3

No.	出土地点・層位	形 状	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	産地・生成年代	備 考	図録頁
1013	I 区 区	形物	3.6	2.5	内径0.5	35.80	滑石片岩	富守付近 古生界	—	125
1014	I E - 6 a 耳簪	形物	2.8	2.0	内径0.6	15.01	滑石片岩	富守付近 古生界	—	125
1015	群 C - 6 f 耳 - 簪	寛永通寶	2.4	内径0.7	0.1	—	—	—	—	123
1016	群 B - 4 b 耳簪	寛永通寶	2.3	内径0.6	0.1	—	—	—	—	123
1017	群 B - 4 b 残片	寛永通寶	2.2	内径0.6	0.1	—	—	—	—	123

第164図 遺構外出土遺物：石製品(2)・古銭

## VI. まとめ

### 1. 遺構

平成元年度～3年度の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡15棟、平安時代の竪穴住居跡6棟、土坑104基、配石遺構2基、陥し穴状遺構2基、溝状遺構1条、コマド状遺構1基、焼土遺構15基、柱穴群である。縄文時代の竪穴住居跡と平安時代の竪穴住居跡、土坑を中心にその特徴等を簡単に記載し、まとめたい。

#### (1) 縄文時代の竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡は、調査区南東～南西側のやや高い平坦面及び西南西側低地面に緩やかに傾斜する面から多くの土坑とともに15棟検出されている。これらはすべて、出土遺物から縄文時代中期後～末葉（大木9～10式）に属すると思われる。概要は下表の通りである。

表2 住居跡一覧

住居跡	規模(長軸×短軸m)	平面形	明溝	炉形	柱位置	建て替え・重複(土坑は除く)	時期等
I C-1(住)	6.0×5.4	隅丸長方形	有	複式炉II	確認	—	大木9式
I C-2(住)	6.8×6.2～5.6×5.6	七～六角形	有	複式炉II	確認	1回以上の建て替え(縮小)、I C-4(住)と重複	大木9式
I C-3(住)	5.2×(-)	(楕円・隅丸方形)?	有	—	不明	1回以上の建て替え・重複?	大木9式
I C-4(住)	7.1×6.2	七角形	有	複式炉I	確認	1回以上の建て替え・重複?、I C-2(住)と重複	大木9～10式
I C-5(住)	3.6×(3.1)	(楕円形)?	有	複式炉I	不明	—	大木9式
I C-6(住)	不明	不明	有	—	不明	—	大木10式
I C-7(住)	7.1×6.8	七角形(円形)	有	複式炉III	確認	—	大木10式
I C-9(住)	4.5×(4.0)	不整形(六角形)	無	複式炉IV	不明	—	大木10式
I C-10(住)	(4.4×4.4)	(円形)?	無	複式炉IV	推定	I C-12(住)と重複	大木10式
I C-12(住)	(4.8×4.6)	(円形)?	有	複式炉I	推定	I C-10(住)と重複	大木9～10式
I D-2(住)	不明(径5～6)	不明(円形・多角形)?	有	複式炉III	不明	—	大木10式
I D-3(住)	5.3×(4.2)	(楕円形)?	無	—	不明	1回以上の建て替え・重複?、I D-5(住)と重複	大木10式
I D-5(住)	不明	不明	有	—	不明	I D-3(住)と重複	大木9式
II E-1(住)	5.0×4.3	楕円形(七角形)	有	複式炉I	確認	—	大木9式
II E-2(住)	不明(6.2×5.0)	不明(楕円形)?	無	—	不明	—	大木9式

#### <建て替え・重複>

検出された15棟のうち、1回以上の建て替え・重複が確認されたのは7棟である。この中で同一住居跡内での建て替え・重複がみられるのは、I C-2・3・4・I D-3住居跡である。I C-2住居跡は住居跡の内側を巡る周溝から、炉跡を中心とした同心円状の建て替え(縮小)

が最低2回行われていると思われる。I C-2住居跡の場合は住居跡内を巡る周溝や柱穴列から、最低1棟は先行する住居跡が存在したと思われる。住居跡どうしの重複はI C-2住居跡とI C-4住居跡、I C-10住居跡と同12住居跡、I D-3住居跡と同5住居跡がある。切り合い状況から新旧関係が判明したものはI C-10住居跡と同12住居跡で、I C-10住居跡の方が新しい。I D-3住居跡と同5住居跡は出土遺物から、I D-3住居跡の方が新しいと思われる。I C-2住居跡と同4住居跡の新旧関係は、I C-2住居跡が大木9式土器を主体に出土しているのに対し、同4住居跡は大木9～10式土器が出土しており、また、同一住居跡内での建て替え・重複もからんで不明である。

#### <平面形・規模>

平面形は推定のものを含めて、円形3棟、隅丸長方形1棟、楕円形4棟、多角形3棟、不明4棟である。規模は6m以上3棟、5～6m1棟、4～5m4棟、4m以下1棟、不明6棟である。このうち直線的な辺をなす六～七角形のはI C-2・4・7住居跡で、規模も長径6m以上と大きく、いずれも周溝を伴っている。

#### <炉跡> (第165図1～10)

本遺跡の住居跡から検出された炉跡10基はすべて複式炉で、形態は大きく4種類に分類することができる。この場合、単式炉+掘り込み部(前庭部)のようなものでも一応広義の複式炉として考えることとする。

##### I類 石組炉+前庭部 (I C-4・5・12住居跡、II E-1住居跡)

1～4が該当する。石組炉は、円形・「□」状・方形に礫が並べられ、4のように数段にも積み上げられているものもある。また、2の前庭部には柱穴状土坑(両縁)や溝が伴い、1の前庭部末端には土器を埋設した小土坑が掘り込まれている。

##### II類 石組炉+石組炉+前庭部 (I C-1・2住居跡)

5・6が該当する。石組炉を2つもつタイプである。5の場合は、もともと1つであった石組炉を、後から造り足したような形状である。6は典型的なもので、2つめの炉は礫を3～4段積み上げて作られている。

##### III類 土器埋設炉+石組炉+前庭部 (I C-7住居跡、I D-2住居跡)

7・8が該当する。土器埋設炉は方形・「□」状の浅い掘り込みのほぼ中央に、底部・口縁部を欠いた状態で直立に埋設されている。石組炉は床面から20～26cmの深さまで礫が積み上げられている。

##### IV類 土器埋設(斜位)石組炉+前庭部 (I C-9・10住居跡)

9・10が該当する。III類の土器埋設炉が掘り込みのほぼ中央に直立に埋設されていたのに対し、本類は円形の石組炉の片側縁(9)あるいは両側縁(10)に口縁部を炉中央に向

<I期>



II E-1(住)



I C-5(住)



I C-12(住)



I C-4(住)

<II期>



I C-1(住)



I C-2(住)

<III期>



I C-7(住)



I D-2(住)

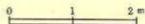
<IV期>



I C-9(住)



I C-10(住)



第165图 複式炉集成图



ける形で斜位に埋設されている。また、Ⅲ類の土器が口縁部・底部を欠いた状態で埋設されているのに対し、本類は斜位に埋設された完形の土器の炉面に表出する部分だけを意図的に打ち欠いた様相を呈している。しかし、9の埋設土器に対し、10の埋設土器は比較的小形のものを使用しているという違いはみられる。

本遺跡から検出された炉跡はいずれも掘り込み部（前庭部）を伴っており、中村良幸氏によれば（1986、観音堂）、Ⅰ類はA類「石組炉+前庭部（他の付属施設）をもつタイプ」、Ⅱ類はB類「石組炉+石組炉+前庭部をもつタイプ」、Ⅲ類はD類「土器埋設炉+石組炉+前庭部をもつタイプ」、Ⅳ類はC類「土器埋設石組炉+前庭部をもつタイプ」に属すると思われる。

複式炉の各部分の機能としては目黒氏（1982）によると、(a)土器埋設部—深い部分で火を用いたと推定され、オキを利用しての蒸焼きの機能、(b)石組部—加熱による石材の亀裂が多く、盛んに木を燃焼させた部分、(c)前庭部—ほとんど火気の使用痕は認められず、焚木を差込んだ「木尻」と送風の機能、のように推定している。また、中村氏は、前庭部の存在を単なる焚口と考えずに、「火による鎮魂・火の呪術・降魔供獻の如き精神的な儀式を行う空間」といい、前庭部内の小ピットを「何らかの儀礼用の木製品を樹立した跡」（梅宮、1974）という説等から、複式炉全体の祭儀的性格は否定できない（1986）としている。本遺跡での複式炉の機能に関することとして、①前庭部の中で、柱穴状の土坑や溝を伴ったり、末端部分に小形の深鉢を埋設しているものがあり、祭儀的性格を窺わせるものがあること、②Ⅲ類とⅣ類の土器の埋設形態の相違が機能的に異なるものなのかどうか、の2点を指摘したいと思う。

炉跡の時期については、出土土器から大きくみると、Ⅰ・Ⅱ類が大木9式、Ⅲ・Ⅳ類が大木10式を伴っている。Ⅰ～Ⅱ類のうちⅠは大木9式でも古い時期の土器が前庭部末端に埋設されており、本遺跡の中では一番古い時期の炉跡と思われる。他は概ね新しい時期の土器が出土しているが、3は伴う土器が明確ではない。また、4は大木9～10式土器を伴っており時期を特定することはできない。Ⅲ類とⅣ類の時期差については不明である。

#### <柱穴>

柱穴配置が確認されたものは、推定を含めて7棟である。内訳は、5本柱が3棟（ⅠC-10・12・ⅡE-1住居跡）、6本柱が2棟（ⅠC-1・4住居跡）、6～7本柱が1棟（ⅠC-2住居跡）、9本柱が1棟（ⅠC-7住居跡）である。これらは、複式炉の長軸方向を中心に概ね対称をなす配置となっている。5・7・9本柱は炉の長軸方向に1個配し、他は左右にそれぞれ2・3・4個ずつ配している。この他に、ⅠC-1住居跡には、炉の前庭部と周溝の境と周溝南西隅に小柱穴を伴っており、入り口状の施設を支える機能をもっていたものと思われる。

#### <住居跡の時期・占地・小結>

住居跡個々の存在時期については不明な点が多いので、全体的な傾向をまとめたい。

①住居跡は、調査区南南東～南西側のやや高い平坦面及び西南西側低地面に緩やかに傾斜する面に構築されており、南側が東西方向に40mほどの空白地帯となっている。この空白地帯が、大木9式期の古い時期の住居跡（南南東側）と新しい時期の住居跡（南西側）との古地の相違によるものか、所謂「馬蹄形集落」の広場部分にあたるのかどうかは、調査区南側～南南東側の開田などによる著しい削平のため不明である。

②大木9式の古い時期の土器を伴う住居跡は、調査区南南東側（II E区）に2棟構築され、新しい時期の土器を伴う住居跡は南西側（I C・I D区）に5棟構築されている。

③大木10式を伴う住居跡は、調査区南西側（I D区）に2棟と西南西側低地面に緩やかに傾斜する面（I C区西側）に4棟構築されており、大木9式の住居跡群及び多くの土坑群を囲むような形となっている（①②の棟数からは所属時期の不確定な2棟は除いている）。

④これらの縄文時代中期後～末葉の住居跡群は、更に南南東～西南西側平坦面に続くと考えられ、大規模な集落跡の一部を調査したにすぎないと思われる。

## （2）平安時代の竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡は、調査区南西側のやや高い平坦面及び西南西側低地面に緩やかに傾斜する面（I C～I D区）から4棟、調査区北北東側（IV C～IV D区）北東側丘陵地に続く緩斜面）から2棟検出されている。概要は下表の通りである。

表3 住居跡一覧

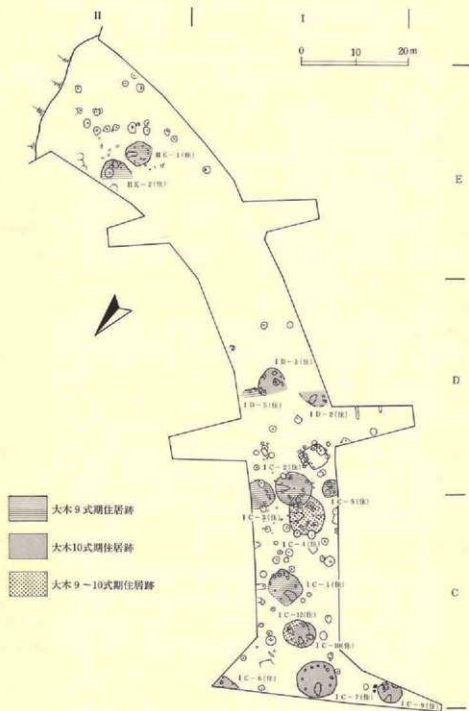
住居跡	規模(長軸×短軸m)	平面形	カマド	柱穴配置	主軸方位	備考
I C-8 (住)	不明	不明	北東壁、くりぬき式	不明	N-55°-E	
I C-11 (住)	(辺2.4)	不明	北壁南寄り、燃焼部のみ	不明	N-19.5°-E	出土遺物なし
I C-13 (住)	1.7×1.3	不整形丸方形	東壁中央、燃焼部のみ	不明	S-80°-E	
I D-1 (住)	4.1×3.7	隅丸方形	北壁中央、くりぬき式	確認	N-1°-E	焼失住居、貯蔵穴
IV C-1 (住)	(辺3.0)	(正方形)	東壁南寄り、くりぬき式	不明	S-86°-E	焼失住居、貯蔵穴、排水溝?
IV D-1 (住)	(辺4.2)	(正方形)	北東壁中央・北西寄り1、くりぬき式	不明	N-33°-E	焼失住居、排水溝?

### <平面形・規模>

平面形は推定のものを含めて、隅丸方形2棟、正方形2棟、不明2棟である。規模は一辺4m前後のもの2棟、辺2～3mのもの2棟、2m以下1棟、不明1棟で、比較的規模の小さいものが多くなっている。

### <カマドの位置と形態>

カマドはすべての住居跡から検出されているが、2棟は燃焼部のみを検出である。カマドが設けられている壁は、北壁のもの2棟、北東壁2棟、東壁2棟である。壁の中央に設けられて



第166図 縄文時代中期(後-末葉)住居跡の時期と占地

いるのは3棟で、その他はどちらかに寄った位置にカマドが設けられている。カマドのつくり替えがみられるのは1棟で、北東壁北西寄りから中央部につくり替えている。この中で、北北東側緩斜面から検出された住居跡のカマドは、斜面の山側につくられている。

袖部は河原石を軸の芯に使って、にぶい黄褐色粘土質シルトをまいてつくったものや、黒褐色粘土質シルトを固めてつくったものなどがある。また、煙道が検出されたものはすべてくりぬき式になっている。

#### <柱穴配置、その他の付属施設>

柱穴が確認されたのは1棟で、4個が主柱穴をなし、カマドのある壁（北壁）に向かって右側（東側）に寄った配置になっている。その他の付属施設としては、2棟からカマドの右側に貯蔵穴と思われる小土坑が検出されている。また、調査区北北東側から検出された2棟には、壁の隅から南側の沢に向かって伸びる溝が検出されている。北東側丘陵地から続く緩斜面に立地し、雨天時には多量の水が流れ込むことなどの立地条件から、排水用としての機能を有していたと考えられる。

#### <時期>

住居跡の床面・埋土中からは、土師器変形土器・坏形土器、須恵器変形土器・壺形土器・坏形土器などが出土しており、これらの遺物の特徴等から、平安時代前半に属すると考えられる。

### (3) 土 坑

本遺跡から検出された土坑は104基で、縄文時代中期後～末葉の住居跡が集中して検出された調査区南南東～南西側のやや高い平坦面及び西南西側低地面（0B～II E区）にかけて101基、調査区北東側緩斜面（IVC～VD区）から2基、東側（IVE区）から1基検出されている。

ここでは、縄文時代中期後～末葉の住居跡群とともに検出されたIC・IB・IE・II E区内土坑を中心にその特徴等を述べ、まとめたい。

#### <形態・規模>

IC～II E区から検出された土坑98基を推定も含めて平面形で分類すると、円形52基、楕円形15基、(隅丸)方形・長方形26基、不整形1基、不明4基である。これを更に断面形でみると、ピーカー形のものが多く、他に逆台形・皿状のものがあり、フラスコ形は平面が円形を呈する3基だけである。これらの土坑から、不整形・不明を除く93基を平面形・副穴の有無で土坑数をまとめると次のようになる。



次に、各タイプ毎に規模（底部長径・長辺、深さ、副穴の深さ）をみると、表4・5のようになる。

表4 タイプ別規模

タイプ、規模 cm	(大きさ)50	51~100	101~150	合計	(深さ)25	26~50	51~75	76~100
円形・ピーカー・副穴(有)	0	13	9	22	2	8	10	2
円形・ピーカー・副穴(無)	4	20	3	27	9	10	8	0
円形・フラスコ・副穴(有)	0	1	1	2	0	1	1	0
円形・フラスコ・副穴(無)	0	1	0	1	0	0	1	0
楕円形・副穴(有)	0	3	4	7	1	2	3	1
楕円形・副穴(無)	2	6	0	8	1	7	0	0
(隅丸)方形・副穴(有)	0	9	11	20	1	5	12	2
(隅丸)方形・副穴(無)	0	3	3	6	1	2	3	0
合計	6	56	31	93	15	35	38	5

表5 タイプ別副穴の深さ（複数の副穴を有する土坑は最も深いもの）

タイプ、副穴の深さcm	~10	11~20	21~30	31~40	41~50	51~60	61~70	合計
円形・ピーカー・副穴(有)	2	3	5	6	1	2	4	22
円形・フラスコ・副穴(有)	0	1	1	0	0	0	0	2
楕円形・副穴(有)	0	1	3	1	2	0	0	7
(隅丸)方形・副穴(有)	1	7	6	5	1	0	0	20
合計	2	12	15	12	4	2	4	51

土坑の規模は、底部の長径・長辺でみると50cm以下が6基、51~100cmが56基、101~150cmが31基である。タイプ別にみると、副穴を有する土坑に101cm以上のものが25基と多くなっている。深さでは、50cm以下が49基、51~100cmが44基で、タイプ別にみると、副穴を有する土坑に51cm以上のものが27基と多く、25cm以下のものは円形・ピーカー形以外の副穴を有しない土坑が9基で一番多くなっている。副穴の深さは、ほとんどが50cm以下で21~40cm台が多く、51~70cmの深さの副穴を有する土坑は円形・ピーカー形他の6基となっている。また、複数の副穴を有する土坑は、フラスコ形以外の各タイプにあり、タイプ毎の特徴は認められない。

### <土坑の時期と占地>

切り合い状況、出土遺物などから各タイプ毎の推定される構築時期及び占地は以下の通りである。

#### ①平面形が円形、断面形がフラスコ形以外で副穴を有しないタイプ

調査区南南東側から2基、南西～西南西側から25基検出されており、調査区南西～西南西側から検出された25基は、概ねⅠD-3住居跡の西側からⅠC-10住居跡の東側の約40mにわたって、東西方向に北に向かって湾曲する形で配されている。

切り合い状況を見ると、ⅠC-60・103土坑がⅠC-1住居跡、ⅡE-68土坑がⅡE-2住居跡を切っており、同タイプの土坑どうしの切り合いでは、ⅠD-51土坑(浅いタイプ)がⅠD-55土坑を切っているが、他のタイプとの切り合いはない。また、出土土器は大木9～10式を伴っている。このことから、大木9式期(新期)と並行かそれ以降に構築され、大木9～10式期の範囲で抱えることができると思われる。

#### ②平面形が円形、断面形がフラスコ形以外で副穴を有するタイプ

調査区南南東側から5基、南西～西南西側から17基検出されている。南南東側では、ⅡE-1・2住居跡の東側に散在し、南西側では、ⅠC-1住居跡の東側からⅠC-4住居跡の幅約10mの間を北東から西、更に南方向に向かって弧状に配されている(11基)。

重複関係では、ⅠC-74土坑がⅠC-4住居跡を切っているが、ⅡE-69土坑とⅡE-2住居跡との新旧関係は不明である。出土土器は大木9～10式を伴っているが、南南東側の土坑からはⅡE-69土坑の埋土上部から大木8a式の浅鉢形土器が1点出土しているだけである。このことから、南南東側は、ⅡE-1・2住居跡(大木9式期の古い時期)と並行か、前後する時期に構築されたものと思われる。南西側は、大木9式期(新期)と並行か、それより新しい大木10式期に構築されたものと思われる。

#### ③フラスコ形土坑

調査区西南西側から3基検出されている。副穴をもたないⅠC-68土坑は、ⅠC-1住居跡と重複しているが新旧関係は不明である。埋土は人為的埋め戻しの様相を呈していることから、住居跡(大木9式)と並行か、近い時期につくられたと思われる。副穴をもつⅠC-55・99土坑も人為的埋め戻しの様相を呈し、埋土に炭化物や焼土が混じり、大木9・10式土器を伴うことから大木9～10式期に構築されたと思われる。

#### ④平面形が楕円形で副穴を有しないタイプ

調査区南南東側から1基、南西～西南西側から7基検出されているが、まとまった配置は認められない。いずれも深さ50cm以下のものである。ⅠD-61土坑はⅠD-1住居跡(平安)に切られ、ⅠD-102土坑はⅠC-4住居跡の炉跡前庭部に切られているが、住居跡との新旧関係

は不明である。遺物は、I C-96土坑から大木9式土器や擦石・凹石が出土しているだけであるが、大木9～10式期に構築されたものと思われる。

⑤平面形が楕円形で副穴を有するタイプ

調査区南南東側から1基、南西側から6基検出されており、深さが50cm以上のI D-62・65・74・85土坑は南東から北西方向に向かって一直線上に並んでいる。

重複関係では、いずれも大木9～10式期の住居跡や他のタイプの土坑を切っているが、出土土器は大木9・10土器を伴っていることから、大木9～10式期並行かそれ以降に構築されたものと思われる。

⑥平面形が(隅丸)方形・長方形で副穴を有しないタイプ

調査区南南東側から2基、南西側から4基検出されているが、まとまった配置は認められない。重複関係では、大木9式期の住居跡や円形の土坑を切っており、大木9式期並行かそれ以降に構築されたものと思われるが、I D-64土坑は円形の土坑に切られており、それ以前に構築された可能性がある。

⑦平面形が(隅丸)方形・長方形で副穴を有するタイプ

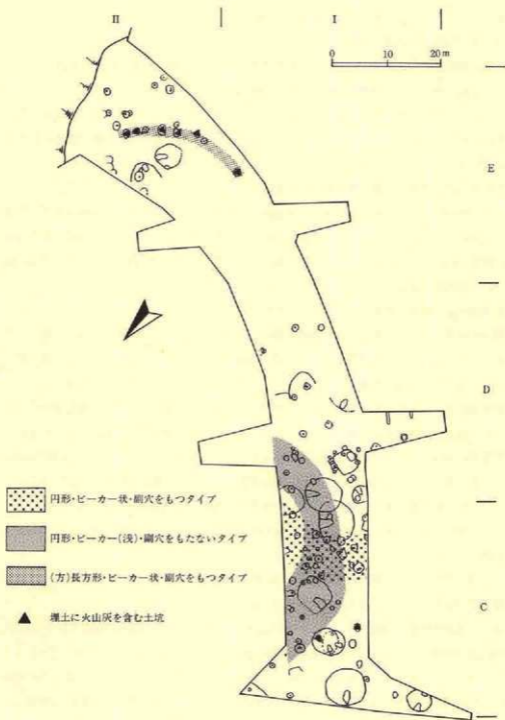
調査区南南東側から10基、南西～西南西側から10基検出されている。南西～西南西側の10基はまとまった配置はみられず散在しているが、南南東側のI E-51・II E-66・67・61・51・62・63・64土坑は南西から北東方向に向かってやや湾曲しながら一列に並んでいる。

重複関係では、I C-83土坑がI C-12住居跡に、I D-75土坑がI D-3住居跡に切られている。出土遺物はほとんど伴わず、I C-76・98土坑から大木9式土器が出土しているが、埋土上部からの出土であり、土坑の時期を決定するものではない。また、これらの土坑の中の、西南西側にあるI C-83・98土坑、調査区南南東側で列をなして並ぶI E-51・II E-67・61・51・63・64土坑の埋土中～上部からいぶい黄褐色の火山灰が検出されている。このことから、これらの土坑は、大木9～10式期の住居跡群が構築される以前につくられたものと思われる。

<小結>

①土坑のタイプには、平面形で分類すると円形(フラスコ形・それ以外)、楕円形、(隅丸)方形・長方形などがあり、さらに副穴を有するものと有しないものがある。

②土坑の構築時期は、概ね大木9～10式期の住居跡群と並行か近い時期に構築されたものと、それ以前に構築されたものがあり、後者には平面形が(隅丸)方形・長方形で副穴を有するタイプが該当する。また、このタイプの土坑のうち8基から検出された火山灰は、北上市石管根遺跡や横町遺跡などから検出された火山灰(約5400年前-安家火山灰相当)と類似しており、火山灰が検出された土坑及び西南西側の一列に並ぶ土坑は、構築時期が縄文時代前期初頭までさかのぼる可能性がある。



第167図 タイプ別土坑の占地



③土坑の性格としては、平面形が楕円形で副穴を有するタイプ（深さ50cm以上）と、平面形が（隅丸）方形・長方形で副穴を有するタイプのものは、一列に並ぶことから陥し穴の可能性はある。他のタイプの土坑は、重複関係・出土遺物・配置などから陥し穴とは考えられず、大半は大木9～10式期の住居跡群に伴う貯蔵穴のような機能をもつものと思われる。

しかし、円形で副穴をもたないタイプで深さ50cm以下の土坑の中に底部に礫を伴うものもあり、基壇の存在も考えられるが、決定できる根拠やまとまった配置などは認められない。

④まとめから除外した土坑の中で、調査区西南西側低地面から検出されたI B-51土坑と調査区北東側緩斜面から検出されたIV C-51土坑は埋土の様子などから現代に近い時期に属すると思われる。また、他の土坑（0 B-51・I B-52・IV E-51・V D-51土坑）は検出面などから縄文時代に属すると思われるが、詳細は不明である。

#### （4）その他の遺構

##### 陥し穴状遺構

調査区南西端東側から2基検出されている。平面形はいずれも西北西～東南東方向に細長い溝状のものであるが、長軸方向の東南東側が調査区外に延びるため全体の規模等は不明である。形態や類別から縄文時代に属すると思われるが、詳細は不明である。

##### 配石遺構

調査区西南西側、I C-9住居跡の北東側に隣接して2基検出されている。長径5～30cmの礫を、開口部長径64～93cmの円形・楕円形に配置している。深さ22～23cmの土坑を伴い、礫も土坑底部まで埋置しているものもある。縄文時代に属すると思われるが、時期を決定できる遺物の出土はなく、隣接する大木10式期の住居跡群に伴うものかどうか不明である。

##### カマド状遺構・焼土遺構

調査区北北東側から16基検出されている。カマド状遺構としたものは、地面を長楕円状に掘り込み、更に、粘土をへっつい状に固めてつくられたと思われるもので、上に大小2つの穴をもっている。焚口部・燃焼部・煙出し部で構成され、粘土部分は加熱により焼土化している。類似する遺構は、平泉町高玉遺跡、紫波町栗田I～III遺跡、盛岡市太田方八丁遺跡などから検出されている。遺構の性格としては屋外カマドなどが考えられるが、詳細は不明である。遺構の所属する時期は明確ではないが、高玉遺跡では近世～明治初頭が考えられるとしている。

焼土遺構15基は、いずれも現地性のもので判断できるものである。規模は、長径10～64cm、厚さ3～20cmと差があり、形も楕円形、不整形、隅丸方形とさまざまである。検出面はIV C-201・202焼土がカマド状遺構と同じ基本層序第II層で、他のものは、III～V層である。

焼土遺構の所属する時期としては、当地区が、北東側丘陵地からの流れ込みによると思われる

る縄文時代早期～平安時代の遺物を混然と包含しているものの、縄文時代に属するとは考えられず、①IVC-203焼土が、掘り込みの底部中央に土師器甕形土器が潰された形で倒立に設置され、平安時代のカマド跡と思われること、②IVC-208焼土が、IVC-1住居跡に伴う溝を切っていること、③当地区では平安時代の住居跡が2棟検出されており、いずれも焼失住居で、基本層序第IV層下部～V層まで掘り込まれていること、④平安時代のカマドの燃焼部と思われるものがあることなどから、住居跡（平安時代）と同時期かそれ以降に形成されたものと思われる。

#### 柱穴群

0B区、IC区、ID区、IIE区、IVC区から検出されているが、いずれも掘立柱建物跡を構成するようなまとまった配列は認められなかったものである。

これらの柱穴群の所属する時期は、IC・ID・IIE区（調査区南西、南南東側）が縄文時代中期の集落跡に隣接して検出され、縄文土器や石鏃が出土している柱穴状土坑のあることから縄文時代～近代、IVC区（北東側）がカマド状遺構とほぼ同じレベルで隣接して検出されたことから近世以降、0B区が碁石状の石製品を伴い、近くから寛永通寶が出土していることから近世以降のものと思われる。

#### 溝状遺構

調査区北東側から1条検出されている。宅地造成の際の盛土層を除去した後検出され、埋土も人為的な様相を呈している。出土遺物も伴わず、性格・時期とも不明である。

## 2. 出土遺物

平成元年～3年度の調査で遺構内外から出土した遺物は、大コンテナ(41×31×30cm)で約42箱である。遺物には土器・土製品・石器・石製品・鉄製品などがある。大半は土器で、石器がこれに次ぎ、他は少量である。ここでは出土量の多い土器及び石器を中心にまとめを行いたい。

### (1) 縄文～弥生・後北式土器

これらの土器については、遺構外出土のものを基準として縄文時代早～前期を第I群として7分類、中期をII群として4分類、後期をIII群として3分類、晩期をIV群、弥生・統縄文時代をV群として4分類、木葉痕・網代痕を有する底部片をVI群とし、更に文様の特徴等からa・b・c……に細分している。以下、これらを概観するとともに、縄文時代の住居跡を中心に多量に出土した第II群3・4類(大木9・10式)については幾分くわしく述べることとする。

#### 第I群土器

I群1類は、沈線と貝殻腹縁文による幾何学的文様が描かれるもので、早期中葉、物見台式に比定される。

I群2類は、胎土に植物性繊維を含み、胴部に結束のない羽状縄文が施文されるもので、前期初頭、上川名2式、花積下層式に比定される。

I群3類は、胎土に植物性繊維を含み、口縁部付近に刻みと縄文原体圧痕による幾何学的文様が描かれ、胴部に羽状縄文をもつもので、前期初頭、上川名2式、花積下層式に比定される。

I群4類は、頸部付近が強く内反し、口縁部に撚糸文がやや斜め方向に施文され、胴部に結束羽状縄文をもつもので、前期末葉、円筒下層d式に類似している。

I群5類は、胎土に植物性繊維を含み、円形竹管文が数条施文されるもので、前期前葉、大木2b式に比定される。

I群6類は、胴部に木目状撚糸文が施文されるもので、前期末葉、円筒下層d式に類似している。

I群7類は、平行沈線や鋸歯状沈線が施文されるもので、前期末葉、大木6式に比定される。

#### 第II群土器

II群1類は、前期初頭～前葉に位置付けられる土器でa～cに細分される。1類aは胴部に縦位綾格文が施文されるもので、大木6～7a式に比定される。1類bは口縁部に円孔をもち、それを囲むように粘土紐が波状に貼付けられているもので、大木7a式に比定される。1類cは口縁に沿って縄文原体圧痕文、交互刺突文、円形刺突文が施文されるもので、大木7a式に比定される。

II群2類は、中期中葉に位置付けられる土器でa・bに細分される。2類aは浅鉢が1点出土しており、口縁部が強く内湾し、粘土貼付による4個の渦巻文と連結した4区画の口縁部文様帯内に、縄文原体圧痕による横楕円状の文様が展開し、胴部にも縄文原体圧痕による直・曲線文が展開するもので、大木8a式に比定される。2類bは地文の縄文の上に沈線や隆沈線による渦巻文や直・曲線文が施文されるもので、大木8b～9式に比定される。

II群3類は、中期後葉（大木9式）に比定される土器でa～gに細分されるが、くわしくは後述する。

II群4類は、中期末葉（大木10式）に比定される土器でa～hに細分されるが、くわしくは後述する。

### 第III群土器

III群1類は、後期初頭～前葉に位置付けられる土器でa～fに細分される。1類aは頸部付近の隆帯や連鎖状隆帯によりやや幅の広い口縁部無文帯と胴部文様帯が区画され、胴部は沈線文で区画された磨消縄文手法が主体になるものである。1類bは波状口縁部付近のボタン状貼付文や1個あるいは数個の小円形刺突文を起点にして文様が展開するもので、地文の縹糸文や縄文に弧状・S字状・「の」字状の曲線的沈線文に区画された磨消縄文が構成されるものである。これら1類a・bは関東では称名寺式、東北部では南境式、県内では門前式、貝島貝塚第II群1・2類、立石第3群1～3類などに類似する。1類cは多条の沈線による同心円の文様が展開するもので、堀之内I式に比定される。1類dは沈線区画による曲線的な文様が展開し、無文帯は丁寧に研磨されているもので、福島県上野台A遺跡V群6類土器に類似しており、堀之内I式に比定される。1類eは数条の平行沈線と磨消手法による帯縄文が直線的・曲線的に展開するもので、堀之内II式、十腰内I式に比定される。1類fは1類a～eに伴うと思われる粗製の土器を一括している。

III群2類は、後期中葉に位置付けられる土器でa～cに細分される。2類aは平行線化した磨消縄文帯をもつもので、加曾利B I式に比定される。2類bは直線的・曲線的な磨消縄文が展開するもので、加曾利B式に比定される。2類cは曲線的な磨消縄文を構成する沈線に沿って連続刺突文が施されるもので、加曾利B II式に比定される。

III群3類は後期後～末葉に位置付けられる土器でa・bに細分される。3類aは所謂貼瘤をもつもので、十腰内V式に比定される。3類bは研磨された器面に浮彫的な文様がみられるもので、後期末～晩期初頭に比定されると思われる。

### 第IV群土器

口縁部付近に数条の平行沈線や変形工字文が施文されるもので、浅鉢や鉢が出土している。晩期末葉の大洞A'式に比定されると思われるが、弥生時代初頭に属する可能性もある。

## 第V群土器

4分類し、1～3類を弥生土器、4類を後北式土器とした。なお、ここでの弥生土器の所属時期は小田野氏の「岩手の弥生式土器編年試論」(1987)によることとする。

V群1類は沈線文を主体とする土器でa・bに細分される。1類aは平行沈線主体とするもので、浅鉢・高環が出土している。4類bも沈線文を主体とするが、1類aに比べやや細くなっている。肩部付近に4条平行沈線が廻り沈線間が磨消されている壺や、口縁に沿って山形沈線文が施文され、口縁部が磨消されている浅鉢(高環?)が出土している。小田野編年によれば、4類aがI期、4類bがII期に比定される。

V群2類は無文の壺・甕で、外面を丁寧に研磨し、内が粗雑なナデ・ケズリ調整されている壺(2類a)や内外面とも粗雑なナデ・ケズリ調整している甕が出土している。2類aがI期、2類bはIV期に比定される。

V群3類は地文のみの粗製の甕で、a・bに細分される。3類aは縄文が横走するものでI期に比定され、3類bは縦走する燃糸文などが施文されるもので、IV～V期に比定される。

V群4類は後北式土器で、摘まみ上げたような微隆帯と連続する縦長の細い刻目をもつもので、後北C<sub>2</sub>・D式に比定される。

## 第VI群土器

木梨痕・網代痕を有する底部片を一括した。大半は縄文時代に属すると思われるが、詳細は不明である。

### ① 第II群3類土器(大木9式)(第168図、1～25)

縄文時代中期後葉(大木9式)に属する土器で、IC-2住居跡を中心に出土しており、中期末葉(大木10式)土器に次いで多量に出土している。文様の特徴などからa～gに細分されるが、同一住居内の出土が多く、時期差を示すものではない。

3類a 1はII E-1住居跡前庭部末端に埋設されていたものである。頸部付近がくびれ、口縁部に向かって緩やかに外反する。口縁部下に2条の平行沈線が廻り、その下に楕円文・「 $\cap$ 」状文・U字文・懸垂文が底部付近まで縦方向に施文されている。

3類b やや幅広い沈線による楕円文・「 $\cap$ 」状文などの区画文や渦巻文が、器面全体に縦方向に流れるもので、2～13が該当する。地文の縄文の上に沈線で区画し、区画外を磨消する手法が多くなっている。器形は、頸部がくびれ口縁部が内湾するものと外反するものがあり、口縁部は4個の大きな波状口縁を呈するものと、平縁のものがある。2～7は楕円文・「 $\cap$ 」状文が縦方向に流れ、8～10は縦方向に流れる楕円形・「 $\cap$ 」状区画文を更に「 $\cap$ 」状沈線文が覆っている。11～13は楕円文・「 $\cap$ 」状文の他に、渦巻文が施文されたり、区画外の無文部分に刺突文が

充填されたりするもので、無文部分の丁寧な研磨により渦巻文や区画文の一部が浮き出る形となっている。

3類c 頸部付近に沈線や隆帯を巡らし、口縁部のやや広い無文帯とを区画し、胴部には沈線区画による「 $\cap$ 」状文が縦方向に展開するもので、14・15が該当する。

3類d 胴部下半に最大径をもち、頸部・口縁部にかけてすばまる壺形に近い器形で、粘土貼付けによる釣手や橋状の把手などが付けられたりするもので、16～19が該当する。

3類e 胴部文様帯と口縁部文様帯の分離がみられるもので、19・20が該当する。口縁部中央付近に大きな波状沈線が走り、その沈線に沿って上下に楕円文を施文した口縁部文様帯を構成し、胴部には縦方向に流れる「 $\cap$ 」状文や渦巻文が展開している。器形は頸部がいくぶんくびれ口縁部が内湾し、口縁部は平縁になっている。

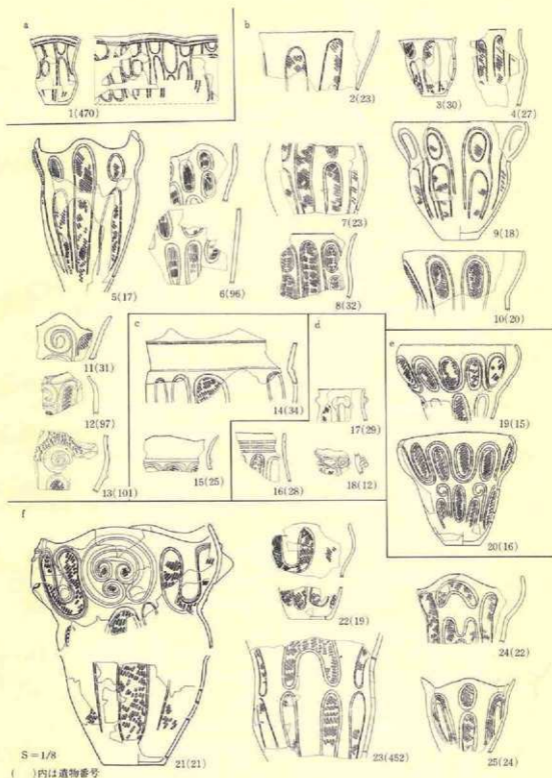
3類f 縦方向に流れる楕円文や「 $\cap$ 」状文を残しながらも、口縁部付近に沈線区画されたU字形や「 $\cap$ 」状の縄文帯が横方向に流れる展開をみせるもので、21～25が該当する。21は大形の深鉢形土器で、4個の波状口縁をもつ。口縁部に波状口縁に沿ってU字形の縄文帯と3個1組の渦巻文が交互に4個配され、渦巻文は立体的に浮き上っている。23は胴部上半の縦楕円文が連結し「 $\cap$ 」状の縄文帯となり、25は縦方向に流れる「 $\cap$ 」状文が上部で連結し縦長の「 $\cap$ 」状の縄文帯となっている。また、24は縦楕円文が横で連結し、H字状の縄文帯となっている。

3類g a～fに伴うと思われる粗製・無文の土器、ミニチュア土器を一括したが省略する。第II群3類土器の時期差であるが、1類aは磨消縄文手法などはみられず大木9式のなかでも古い時期のもので、他は概ね新しい時期のものである。しかし、その中で1類fは、縦方向に流れる楕円文や「 $\cap$ 」状文の中に、横方向に流れる展開がみられ、後続する大木10式につながる新しい要素がみられる。

## ② 第II群4類土器（大木10式）（第169・170図、1～32）

縄文時代中期末葉（大木10式）に属する土器で、IC-9・10・ID-3住居跡を中心に多量に出土しており、本遺跡の中でも最も多い出土量である。文様の特徴などからa～hに細分される。これらは住居跡毎にまとまった出土状況を示しており、それぞれの新旧関係は不明な点が多いが、ある程度の時間差は認められると思われる。

4類a 胴部中央～下半を波頭状・波状の沈線や隆帯で区画し、胴部上半に沈線や隆帯で区画された曲線的な縄文充填帯が展開するもので、1～9が該当する。器形的には胴部中央付近から底部にかけてすばまる形のものが多く（4～9）。1・2は沈線や隆帯による波頭状の区画文が展開し、口縁部付近に文様帯をもたないものである。4・6・7は沈線、5・8・9は隆帯による施文であるが、7は2本の沈線による区画となっている。胴部下半は縄文が施文される



第168図 第II群3類土器(大木9式)集成図

が(6には綾絡文がみられる)、7のように胴部下半が無文になっているものや、9のように縄文帯と無文帯が逆になったようなものもある。

4類b 胴部上半に沈線区画によるC字形・楕円形・「U」字形の縄文充填帯が横方向に展開し、それらの文様を区画するように胴部中央付近に文様に沿った緩やかな波状沈線が巡るもので、10~14が該当する。器形は胴部中央が幾分膨らみ、口縁部がやや外反するどっしりしたものが多く、口縁部は平縁になっている。また、12のように口縁部に涙滴状の粘土貼付文が施文されたり、口縁部下に刺突文が巡るものもある。これらの土器はIC-10住居跡を主体に出土しており、14は炉の石組部の側面に斜位に埋設されていたものである。

4類c 主に断面が三角形を呈する隆帯区画による文様展開を主体とするもので、15~21が該当する。隆帯区画によるJ字形の無文帯や横S字形などの曲線的縄文充填帯が描かれ、15~17・19のように口縁部下に隆帯で区画された無文帯をもつものもある。器形は胴部下半に最大径をもち、頸部が幾分くびれ口縁部が緩く外反するものが多いが、18は頸部が強くくびれている。口縁部は平縁で、17のように内湾するものもある。これらの土器はID-3住居跡の床面から多く出土している。

4類d J字形・O字形の無文帯が横方向に展開し、無文帯の末端や口縁部付近に縹状の隆帯が付けられたり、口縁部付近の沈線区画内などに刺突文が充填されるもので、22~27が該当する。22・23・26・27はJ字形の無文帯が展開し、22は無文帯の末端が反転して横のJ字文と連結している。24・25はO字形の無文帯が横方向に連結するような展開になっている。また、口縁部下の沈線区画内に刺突文が充填される箇所口唇部が肥厚して角張っているのも特徴的である。これらの土器はIC-9・10住居跡の埋土中から出土しており、同一住居内の炉埋設土器(4-1類a、14-1類b)より新しいと思われる。

4類e 胴部下半に最大径をもち、頸部から口縁部にかけてすぼまる壺形に近い土器で、肩部や頸部付近に橋状の把手や釣手をもつもので、28~30が該当する。

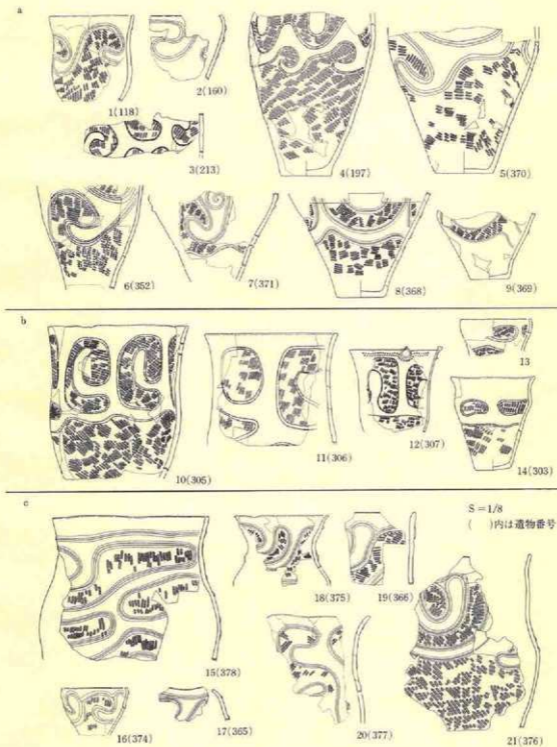
4類f 口縁部にひねったような大形の橋状把手をもち、把手部分や口縁部付近の微隆帯上などに刺突文が施文されるもので、31が遺構外から出土している。

4類g 人体・動物モチーフ付土器で、32がIC-9住居跡の埋土中から出土している。隆起線の粘土貼付けと、それに沿う細い刺突文によって人体及び動物が表現されている。

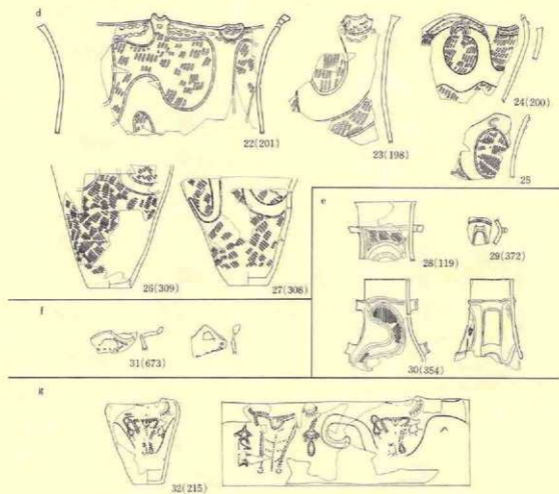
4類h a~fに伴うと思われる粗製・無文の土器やミニチュア土器を一括したが省略する。

第II群4類土器a~gの時期差であるが、4類aの縄文帯が曲線的に展開するのに対し、4類bは単純化されており、4類bの方が新しい可能性があるが、層位や住居跡の重複関係などから断定することはできない。次に隆帯区画が主体をなす4類cであるが、4類aに属する5・7~9が4類cの土器が出土している住居跡内の床面から伴出しており、4類aと並行関係か近い時期





第169図 第II群4類土器(大木10式)集成図(1)



第170図 第II群4類土器(大木10式)集成図(2)

のものと思われる。4類dは、4類a～cの文様の主体が靦文帯であるのに対し、無文帯が文様の主体になっており、また、踏状隆帯や刺突文の多用などから、4類a～cよりは新しい時期のものである。4類eは土器の共存関係から4類aに近い時期のものと思われる。4類fは本遺跡から出土している大木10式土器の中でも一番新しい時期に位置付けられると思われる。人体・動物モチーフ付土器(4類g)は、大迫町観音堂遺跡から類似するモチーフを有する人面付土器片が出土しており、「所謂門前式より古い要素を多くもつ第IV群1・2類に属する」としている(大迫町教育委員会、1986)。この土器が出土したIC-9住居跡からの出土土器では、4類dが一番新しい要素を含んでいるものの後期に属すると思われる土器は出土しておらず、大木10式の範疇で扱えることができるとと思われる。

## (2) 平安時代の土器

平安時代の土器は住居跡を中心に出土している。土師器、須恵器の2種類が出土しており、量的には半々である。器種では坏形土器、甕形土器、壺形土器がある。

土師器の坏形土器は、ロクロ不使用のもの(坏I類)とロクロ使用(坏II類)のものに分けることができ、さらに、ロクロからの切り離し後、無調整のもの(回転糸切り痕-坏II-A類)と再調整のもの(坏II-B類)に分けることができる。坏形土器のロクロからの切り離し後の再調整は、胴部下端から底部全面及び底部の一部の手持ヘラケズリ再調整である。また、坏部の内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

土師器甕形土器はすべてロクロ使用で、口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部が上下あるいは上に伸びる形態がほとんどである。

須恵器は坏形土器、甕形土器、壺形土器などが出土している。坏形土器はすべて回転糸切り痕をもっている。壺形土器はロクロ調整されており、胴部下半をヘラケズリで再調整している。甕形土器は内外面にカキ目調整がなされ、その後外面の口縁部下から櫛描波状文を施文しているもの、内外面に平行叩き目痕・当具痕をもつもの、外面に叩き目痕、内面にカキ目痕をもつものなどがあるが、全体の器形を把握できたものはない。壺形土器・甕形土器の口縁部は外反し、口唇部が上下に伸びる形態になっている。

これらの土器は高橋信雄氏(1982)のIII-2群に属し、9世紀中～後葉に位置付けられ、住居跡の構築時期も大きな時間差はないと思われる。

## (3) 石器

出土した石器は銅片石器286点、石斧13点、礫石器62点の計361点である。このうち、遺構内出土は銅片石器106点、石斧5点、礫石器49点の計160点であり、地区別の石器の器種及び出土

状況の相違は特に認められなかった。

剥片石器には、石鏃、尖頭器、石錐、石匙、石篋、嘴状石器、搔器・削器他がある。礫石器には擦石、凹石、石皿、有溝砥石などがある。

剥片石器286点の内訳は、石鏃138点（48%）、尖頭器18点（6%）、石錐22点（8%）、石匙14点（5%）、石篋5点（2%）、嘴状石器2点（1%）、搔器・削器他87点（30%）で、石鏃が約5割を占めている。

石鏃138点の形状をみると、有茎鏃9点、無茎鏃117点、不明11点で、他にアメリカ式石鏃が1点出土しており、無茎鏃が大半である。有茎鏃の基部の形態はすべて凸基式で、無茎鏃では凹基式61点、平基式34点、円基式21点、尖基式1点である。欠損品は61点で、先端部を欠損するもの32点、基部・茎部・脚部44点、2分の1以上の欠損1点である。（欠損部位は重複するものも1点づつかぞえている）

尖頭器18点は、石鏃に比べて、長さ、幅、厚さがあり、重さが4g以上のもので、木架状・柳葉状のものが多く、三角形状のものは4点である。大半は欠損している。

石匙14点のうち10点が縦形で、4点が横形である。

嘴状石器としたものは、三角形に調整された剥片の1縁辺が鷲の嘴状に湾曲しているもので、IC-7・9住居跡から1点づつ出土している。秋田県八木遺跡で出土したものと同類のものである。基部にアスファルトが付着しており、柄等に装着して、削器のような機能を有していたと思われるが、石鏃のような使われ方をしていた可能性もある。

搔器・削器他は一定の形状をもたない剥片石器を一括し、定形的石器の破損品と思われるものも含めている。サイドスクレーパー的なもの、エンドスクレーパー的なもの、ノッチ状の抉りをもつものなどさまざまである。

石斧は磨製石斧で占められ、すべて定角的なものである。

礫石器62点のうち、擦石、凹石、敲石の類が32点、石皿、台石の類が26点、有溝砥石が2点、半円状偏平打製石器・石錘が各1点である。擦石、凹石、敲石は機能の重複するものが多い。石皿と台石の区別は明瞭ではないが、主に使用面の形態から、使用面が凹状に湾曲するものを石皿、平坦なものを台石とした。有溝砥石は石皿状の礫の表や両面に溝状の擦痕を有するもので、住居跡内から2点出土している。他に、所謂「磐岩塊」の破片が遺構内外から数点出土している。

#### (4) その他

その他の出土遺物として、土製品、石製品、鉄製品、古銭などがある。ここでは、それぞれの遺物の大まかな所属時期について述べることにする。

土製品は土偶3点、耳飾り3点、円盤状土製品13点、土垂4点である。土垂は管状のもので4点のうち3点は平安時代の住居跡から出土しており、他の1点も出土地点が近いことから平安時代に属する。他の土製品は縄文時代のもと思われる。その中で、円盤状土製品の4点と耳飾りの2点は遺構内からの出土であり、大木9～10式期のもと思われる。土偶3点のうち手、足の破片の2点は刺突文等の特徴から後期初頭、腹部が膨らみ正中線を刺突で表しているものは、十腰内V式に比定されると思われる。

石製品としたものは、棒状石製品4点、円盤状石製品2点、有孔石製品1点、垂飾品2点、石棒1点、石刀1点、砥石1点、礫石状石製品1点である。このうち、砥石は平安時代以降、礫石状石製品は近世以降のもので、他は概ね縄文時代に属するが、有溝石製品と石棒は住居跡出土で大木10式期に属すると思われる。

鉄製品は鉄製紡垂車3点、不明2点である。いずれも平安時代の住居跡からの出土で、紡垂車は床面、不明の2点は埋土下部からの出土で当該期のものである。

他に古銭が遺構外から3点出土しており、いずれも寛永通寶である。

#### <参考・引用文献>

- (1) 岩手県教育委員会 (1979) : 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書II」、岩手県文化財調査報告書第34集
- (2) 中川久夫他 (1963) : 「北上川上流沿岸の第4系および地形」、地質学雑誌第69巻第811号
- (3) 岩手県 (1975) : 「北上山系開発地域 土地分類基本調査「北上」
- (4) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1991) : 「上川岸II遺跡発掘調査報告書」、岩埋文報告書第153集
- (5) 大迫町教育委員会 (1986) : 「観音堂遺跡・第1次～6次発掘調査報告書」、大迫町埋蔵文化財報告第11集
- (6) 福島県教育委員会、福島県文化センター (1984) : 「真野ダム関連遺跡発掘調査報告書V」、福島県文化財調査報告書128集
- (7) 秋田県教育委員会 (1989) : 「八木遺跡発掘調査報告書」、秋田県文化財調査報告書第181集
- (8) 大迫町教育委員会 (1979) : 「立石遺跡」、大迫町埋蔵文化財報告第3集
- (9) 草間俊一他 (1971) : 「貝島貝塚」、花泉町教育委員会
- (10) 草間俊一他 (1974) : 「崎山弁天遺跡」、大槌町教育委員会
- (11) 熊谷常正 (1983) : 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」、岩手県立博物館研究報告第1号
- (12) 小田野哲憲 (1987) : 「岩手の弥生式土器編年試論」、岩手県立博物館研究報告第5号
- (13) 丹羽 茂 (1981) : 「大木式土器」『縄文文化の研究・4』、雄山閣
- (14) 目黒吉明 (1982) : 「住居の炉」『縄文文化の研究・8』、雄山閣
- (15) 岩手県埋蔵文化財センター (1982) : 「桜松遺跡-御所ダム関連遺跡発掘報告書」、岩埋文報告書第29集
- (16) 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正 (1982) : 「岩手の土器」、岩手県立博物館

### 3. 館IV遺跡出土試料種子同定報告書

パリオ・サーヴェイ株式会社

#### 1. 試料

試料は、館IV遺跡のID-1住カマド焼土より得られたものである。ほとんどが火を受けていない状態である。しかし、破損している個体も存在した。ID-1住は平安時代に属するとされている。分類した炭化種子はビニール袋に入れ、不明及び種子でないものはそのままシャーレに残した。

#### 2. 方法

種子同定方法は、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて観察した。また、写真図版(図版5・6)も作成した。

#### 3. 結果・考察

ID-1住カマド焼土から得られた個体は、ヤナギ属・ニワヤナギ属・フシグロ近似種・マメ類・キブシ・ナス・メヒシバ・エノコログサ属・不明A・B・C・Dである。

栽培植物と考えられるものには、マメ類・ナスがある。しかし、産出したマメ類は野生種か栽培種かは不明である。

人間が利用したとも考えられる植物には、キブシがある。ニワヤナギ属も利用したかもしれない。

その他の植物は住居まで人為的に運ばれたものであるが、利用目的の有無は不明である。

本カマドから得られた種類のみからは、当時の食糧事情・植生などの詳細は不明であるが、蓄積資料となる。

以下に各種類の特徴を述べる。

#### ・ヤナギ属 (*Salix* sp.) 芽 (1粒) (図版5の1)

芽は灰黒色。側面観は楕円形、上面観はおそらく円形。長さ5mm程度。芽鱗は1枚より成る。

#### ・ニワヤナギ属 (*Polygonum* sp.) 果実 (1粒) (図版5の2)

果実は黒色で光沢がある。側面観は両端がやや尖る卵形、上面観は三角形。長さ2mm程度、幅1.2mm程度。果皮はやや薄いが硬い。

#### ・フシグロ近似種 (*Melandrium* sp. cf. *M. firmum* ROHRBACH) 種子 (12粒) (図版5の3)

種子は灰褐色。側面観は円形、上面観は楕円形。長さ1mm程度。種子の表面には星状イボ突起

が同心円状に分布する。

- ・マメ類 (Leguminosae) 種子 (1粒) (図版5の4a・b)

種子は茶褐色。側面観は心臟形、上面観は楕円形。長さ3mm程度、幅3mm程度、厚さ1.8mm程度。凹部にマメ科に特有な「へそ」が存在する。「へそ」の長さは全体の2/7程度。

- ・キブシ (*Stachyurus praecox* Siebold et Zuccarini) 種子 (1粒) (図版5の5)

種子は淡褐色。側面観は楕円形、上面観はおそらく円形。長さ2.3mm程度、直径1.7mm程度。表面に微細な斑点が存在する。

- ・ナス (*Solanum melongena* Linne) 種子 (1粒) (図版5の6)

種子は茶褐色。側面観は楕円形だが一部はわずかに凹む。上面観は偏平。長さ3mm程度、幅2.5mm程度。表面に微細な畝状の構造があり、これが網目を構成している。

- ・メヒシバ (*Digitaria adscendens* HENRY) 果実 (4粒) (図版5の7a・8、図版6の7b・c)

果実は黄褐色。側面観は細長い卵形、上面観は片凸レンズ形。長さ3.5mm程度、幅0.8mm程度。長網毛が存在。SEMによる表皮細胞構造の観察によるとジグザグ隆起と一定間隔にじゅず型突起が存在する。

- ・エノコログサ属 (*Setaria* Beauvois) 果実 (穎) (2片) (図版5の9)

破片状の穎の一部が得られた。茶褐色。表面には横方向の波状の隆起が存在する。

- ・不明A (Undetermined A) (約3片) (図版5の10)

炭化状態で黒色。回転楕円体。長さ1.5mm、直径1.3mm程度。表面の特徴は不明。

- ・不明B (Undetermined B) (約5片) (図版5の11・12)

茶褐色。直径2.5~3mm程度の球形。薄く柔らかい果皮?より成る。

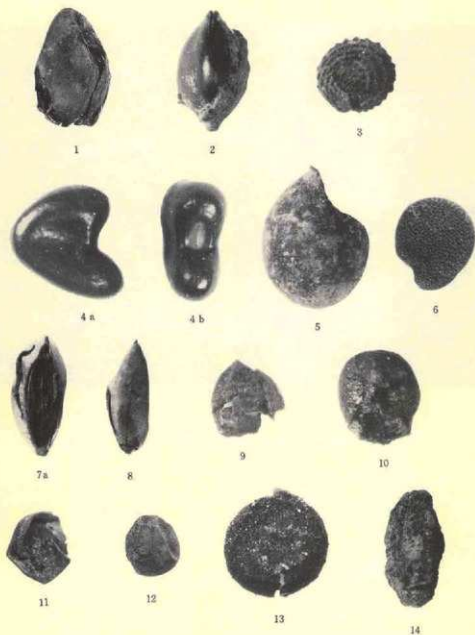
- ・不明C (Undetermined C) (1粒) (図版5の13)

黒褐色。側面観は円形、直径1.7mm程度。上面観・全形とも不明。表面には微細な網目模様が存在する。

- ・不明D (Undetermined D) (1粒) (図版5の14)

やや炭化している部分も存在し、茶褐色~黒色。側面観・上面観とも楕円形。長さ2.6mm程度、幅1.3mm程度。表面の特徴は不明。「へそ」の有無も不明。ニワトコの種子に似る点もある。

図版5 館IV遺跡



1. ヤナギ属 (×7.5), 2. ニワヤナギ属 (×20), 3. フシグロ近似種 (×25),  
 4a・b. マメ類 (×12), 5. キアシ (×20), 6. ナス (×10), 7a・8. メヒシバ (×15)  
 9. エノコログサ属 (×20), 10. 不明A (×20), 11・12. 不明B (×7.5),  
 13. 不明C (×20), 14. 不明D (×15)



図版6 館IV遺跡



7b



7c

7b・c. ヒメシバの電子顕微鏡写真（スケールは写真の右側に示した。）

写 真 图 版



遺跡遠景（北西から）



I C～II E区全景（南西から）

写真図版1 遺跡遠景他



全 景 (西から)



伊理土断面 (南から)



伊断面左 (西から)



伊断面 (北から)



伊断面右 (西から)

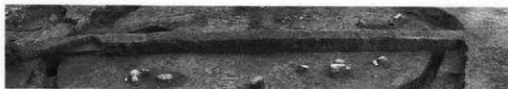
写真図版2 10-1 住居跡



全 景 (北東から)



埋土断面 (南東から)



埋土断面 (南西から)



炉断面 (北東から)



周溝断面 (南西から)

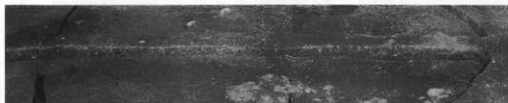
写真図版3 10-2住居跡



全 景（北西から）



埋土断面（南東から）



埋土断面（南西から）

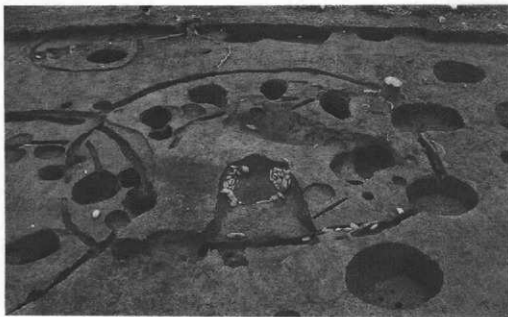


焼土全景（南から）



焼土断面（南から）

写真図版4 IC-3住居跡



全 景（北東から）



検出状況（南から）



炉断面（北東から）



柱穴P<sub>10</sub>断面（南東から）

写真図版5 IC-4住居跡



全景（東から）



炉壇土断面（北から）



炉断面（西から）



炉断面（北から）

写真図版6 10-5住居跡





全 景 (南西から)



埋土断面 (南東から)



埋土断面 (西から)

写真図版7 1C-6住居跡



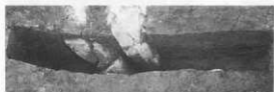
全 景 (南西から)



伊断面 (南西から)



埋設土器断面 (南西から)



伊断面左 (北西から)



石挿出土状況 (北西から)



伊断面右 (北西から)

写真図版8 IC-7住居跡



全 景 (南西から)



埋土断面 (南東から)



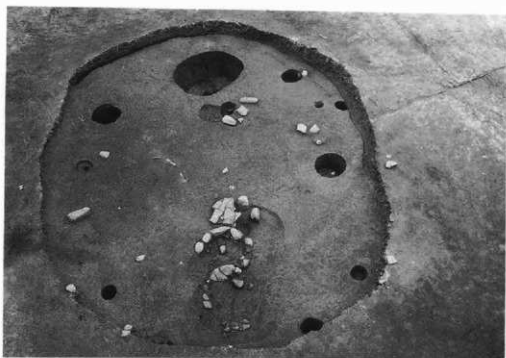
埋土断面 (北東から)



伊断面 (南西から)



伊断面 (北西から)



全 景 (南西から)



土器出土状況 (北西から)

写真図版10 IC-10・12住居跡(1)



埋土断面（南東から）



埋土断面（南西から）



IC-10住居跡断面（南東から）



IC-12住居跡断面（北から）



IC-12住居跡断面（西から）

写真図版11 IC-10・12住居跡(2)



全景（北西から）



炉全景（北西から）

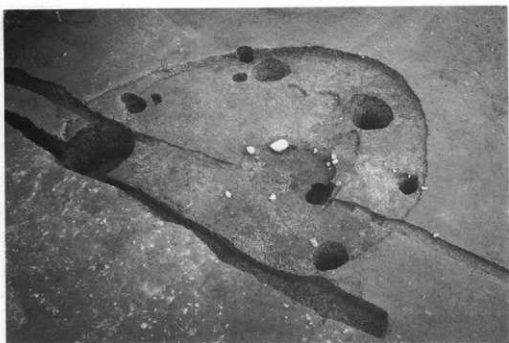


炉断面（南西から）



炉断面（南東から）

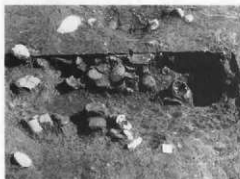
写真図版12 1D-2住居跡



全 景（西から）



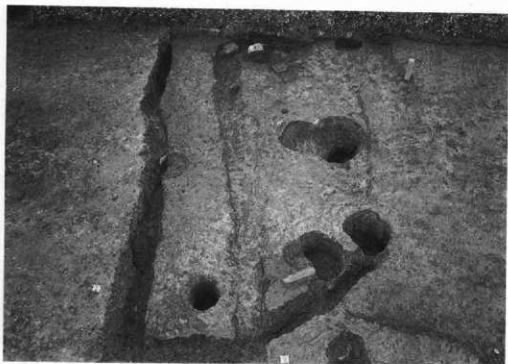
埋土断面（東から）



土器出土状況



土器出土状況



ⅠD-5住居跡全景(南西から)



ⅡE-1住居跡全景(北東から)

写真図版14 ⅠD-5(1)・ⅡE-1住居跡(1)





I D-5 住居跡埋設土器断面 (東から)



II E-1 住居跡間溝断面 (南西から)



II E-1 住居跡が埋土断面 (北西から)



II E-1 住居跡土器出土状況 (北西から)



II E-1 住居跡伊断面 (北西から)



II E-1 住居跡伊断面 (北東から)

写真図版15 I D-5(2)・II E-1 住居跡(2)



全景（西から）



埋土断面（南東から）



埋土断面（北東から）

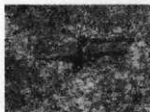
写真図版16 II E-2 住居跡



全 景 (北東から)



埋土断面 (北東から)



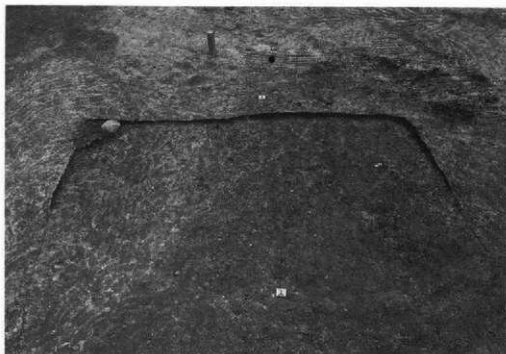
鉄製紡車出土状況(北東から)



カマド煙道断面 (北西から)



カマド左袖断面(北東から)



全 景 (西から)



埋土断面 (南から)



カマド燃焼部断面 (南から)

写真図版18 IC-11住居跡



全 景 (西から)

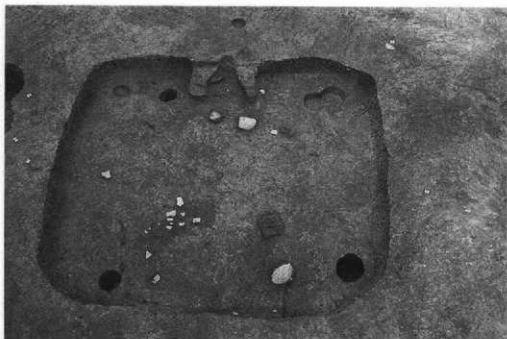


埋土断面 (南から)



カマド燃焼部断面 (北から)

写真図版19 IC-13住居跡



全 景 (南から)



埋土断面 (東から)



埋土断面 (南から)



カマド左袖断面 (南から)



カマド右袖断面 (南から)

写真図版20 ID-1 住居跡



全景（西から）



検出状況（西から）

写真図版21 NC-1住居跡(1)



埋土断面(南から)



溝全景(南東から)



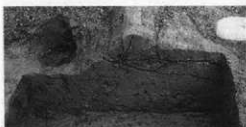
溝埋土断面(北東から)



カマド全景(西から)



カマド煙道部断面(北から)



カマド左袖断面(西から)



カマド右袖断面(西から)





全景(南西から)



埋土断面(北東から)



土器出土状況(南西から)



2号カマド燃焼部全景(南西から)



1号カマド燃焼部全景(南西から)

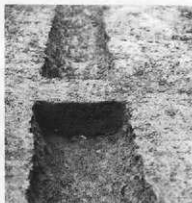
写真図版23 IV-D-1 住居跡(1)



溝埋土断面（東から）



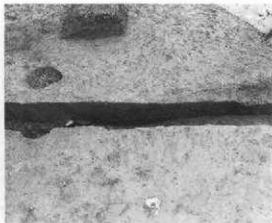
溝全景（東から）



溝埋土断面（東から）



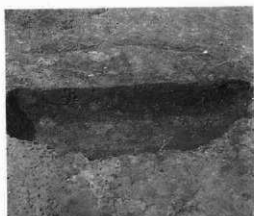
2号カマド熱気部断面（北西から）



1号カマド煙道部断面（北西から）



IC-52土坑埋土断面(南から)



IC-53土坑埋土断面(南西から)



IC-54土坑埋土断面(南西から)



IC-58土坑埋土断面(南西から)

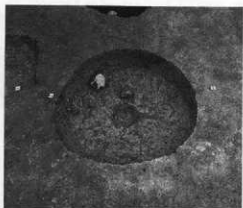


IC-55土坑(南西から)



IC-55土坑埋土断面(南西から)

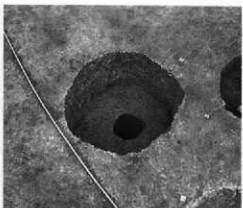
写真図版25 IC-52・53・54・58・55土坑



IC-56土坑 (南西から)



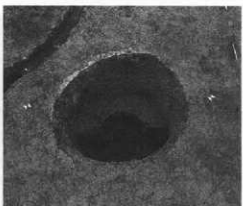
IC-56土坑埋土断面 (南西から)



IC-57土坑 (西から)



IC-57土坑埋土断面 (南西から)



IC-59土坑 (南西から)



IC-59土坑埋土断面 (南西から)



IC-60土坑（南西から）



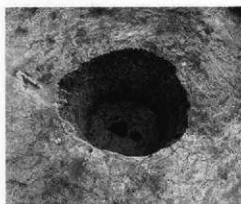
IC-60土坑埋土断面（南から）



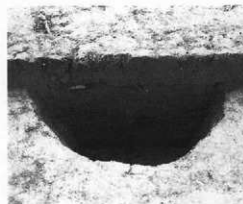
IC-61土坑（西から）



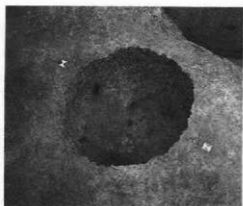
IC-61土坑埋土断面（南西から）



IC-62土坑（北から）



IC-62土坑埋土断面（北東から）



IC-63土坑（西から）



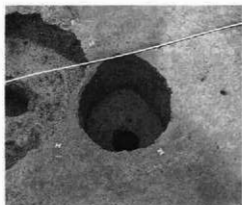
IC-63土坑埋土断面（西から）



IC-64土坑（北東から）



IC-64土坑埋土断面（北東から）



IC-66土坑（南東から）



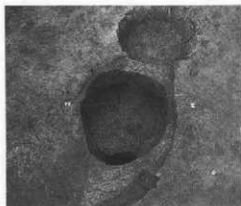
IC-66土坑埋土断面（南から）



IC-67土坑 (西から)



IC-67土坑埋土断面 (南東から)



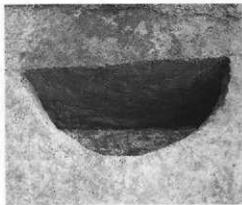
IC-68土坑 (南から)



IC-68土坑埋土断面 (南から)



IC-69土坑 (西から)



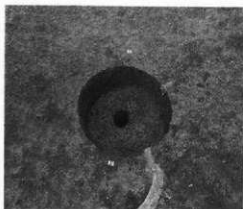
IC-69土坑埋土断面 (西から)



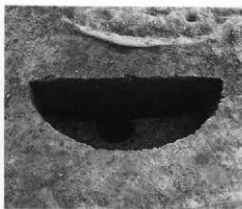
IC-70土坑埋土断面(西から)



IC-73土坑(南西から)



IC-71土坑(北西から)



IC-71土坑埋土断面(北東から)



IC-72土坑(南から)



IC-72土坑埋土断面(南西から)

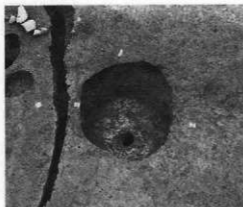




IC-74土坑(西から)



IC-74土坑埋土断面(南西から)



IC-75土坑(西から)



IC-75土坑埋土断面(北西から)



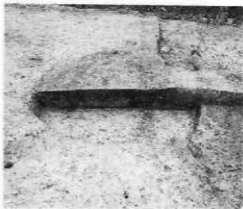
IC-77・73土坑(南東から)



IC-77土坑埋土断面(南東から)



IC-76土坑埋土断面(南西から)



IC-84土坑埋土断面(南西から)



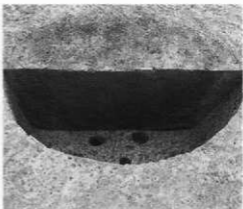
IC-78土坑(北から)



IC-78土坑埋土断面(北西から)



IC-82土坑(南から)



IC-82土坑埋土断面(南から)



IC-83土坑（北西から）



IC-83土坑埋土断面（南から）



IC-86土坑（北東から）



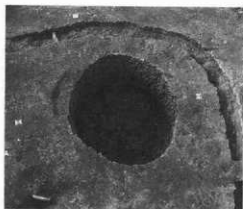
IC-86土坑埋土断面（北東から）



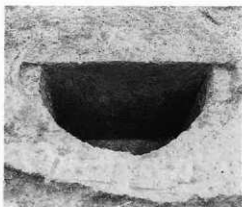
IC-87土坑（西から）



IC-87土坑埋土断面（南西から）



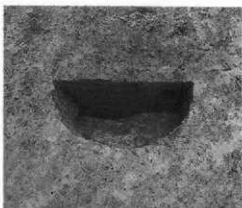
IC-89土坑（東から）



IC-89土坑埋土断面（東から）



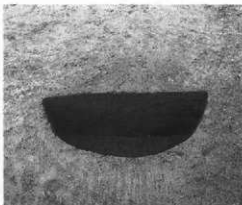
IC-91土坑埋土断面（南西から）



IC-92土坑埋土断面（南西から）



IC-93土坑埋土断面（南西から）



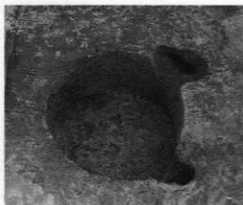
IC-94土坑埋土断面（南西から）



IC-96土坑（南西から）



IC-96土坑埋土断面（北西から）



IC-97土坑（北西から）



IC-97土坑埋土断面（南西から）



IC-98土坑（北西から）



IC-98土坑埋土断面（南西から）

写真図版35 IC-96・97・98土坑



IC-99土坑 (南西から)



IC-99土坑埋土断面 (南から)



IC-100土坑 (南西から)



IC-100土坑埋土断面 (南から)



IC-101土坑 (南西から)



IC-101土坑埋土断面 (南西から)



IC-102土坑（南から）



IC-102土坑埋土断面（南西から）



IC-103土坑（南から）



ID-51・55土坑（東から）



ID-51土坑埋土断面（南西から）



ID-55土坑埋土断面（南西から）



ID-52土坑 (南から)



ID-52土坑埋土断面 (南から)



ID-53土坑 (南西から)



ID-53土坑埋土断面 (南から)

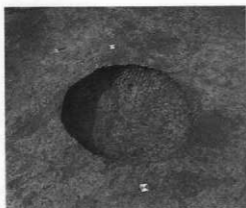


ID-54土坑 (南西から)



ID-54土坑埋土断面 (南西から)





ID-56土坑(東から)



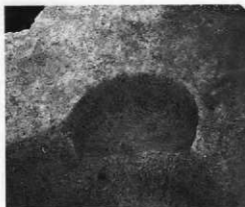
ID-56土坑埋土断面(南東から)



ID-57土坑埋土断面(南東から)



ID-58土坑埋土断面(西から)



ID-59土坑(北から)



ID-59土坑埋土断面(北から)



ID-60土坑（北から）



ID-60土坑埋土断面（北西から）



ID-62土坑（西から）



ID-62土坑埋土断面（北西から）



ID-63土坑（南から）



ID-63土坑埋土断面（南から）



ID-65・64土坑（北東から）



ID-64・65土坑埋土断面（南西から）



ID-66土坑（北東から）



ID-66土坑埋土断面（南西から）



ID-72土坑（南から）



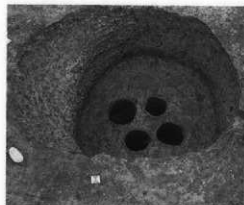
ID-72土坑埋土断面（南から）



ID-74土坑（北から）



ID-74土坑埋土断面（南西から）



ID-75土坑（西から）



ID-75土坑埋土断面（南から）



ID-76・78・81・82土坑（西から）



ID-76土坑埋土断面（東から）

写真図版42 ID-74・75・76・78・81・82土坑



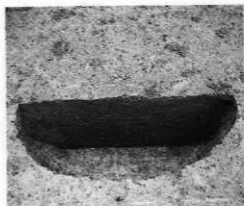
ID-61土坑埋土断面(南から)



ID-77土坑(北東から)



ID-79土坑(北西から)



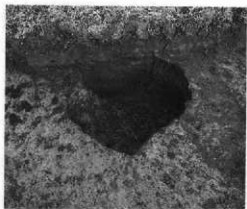
ID-79土坑埋土断面(西から)



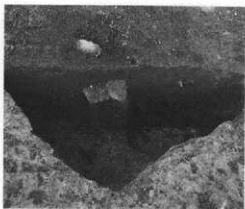
ID-80土坑(北西から)



ID-80土坑埋土断面(西から)



ID-83土坑（南から）



ID-83土坑埋土断面（南西から）



ID-85土坑（西から）



ID-85土坑埋土断面（東から）



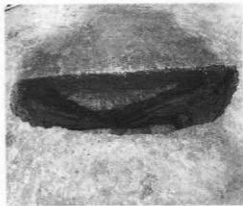
IE-51土坑（西から）



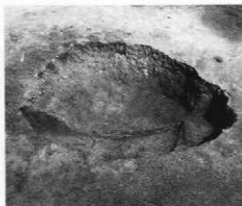
IE-51土坑埋土断面（北西から）



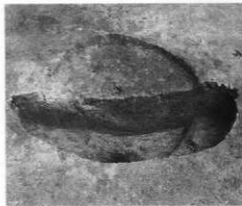
II E-51土坑（北東から）



II E-51土坑埋土断面（北東から）



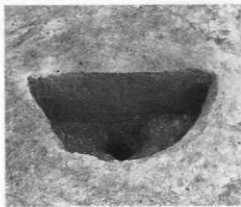
II E-53土坑（南西から）



II E-53土坑埋土断面（南西から）



II E-54土坑（北東から）



II E-54土坑埋土断面（南西から）



II E-55土坑 (南西から)



II E-55土坑埋土断面 (南西から)



II E-57土坑 (南西から)



II E-57土坑埋土断面 (南西から)



II E-58土坑 (南西から)



II E-58土坑埋土断面 (南西から)





II E-59土坑（南西から）



II E-59土坑埋土断面（南西から）



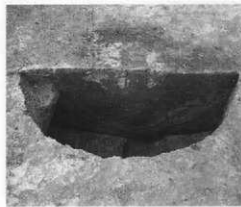
II E-60土坑（西から）



II E-60土坑埋土断面（西から）



II E-61土坑（北東から）



II E-61土坑埋土断面（南西から）

写真図版47 II E-59・60・61土坑



II E-62土坑（西から）



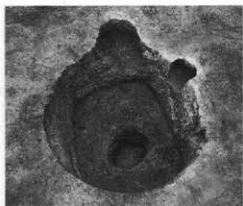
II E-62土坑埋土断面（南西から）



II E-63土坑（南東から）



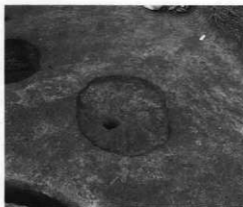
II E-63土坑埋土断面（南東から）



II E-64土坑（南東から）



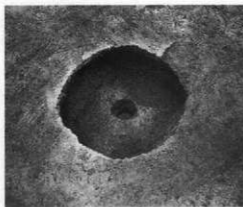
II E-64土坑埋土断面（南東から）



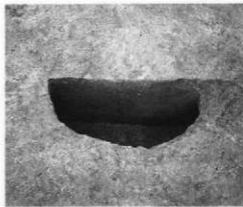
IIE-65土坑（南東から）



IIE-65土坑埋土断面（南西から）



IIE-66土坑（北西から）



IIE-66土坑埋土断面（南西から）



IIE-67土坑（北西から）



IIE-67土坑埋土断面（北西から）



II E-68土坑（西から）



II E-68土坑埋土断面（西から）



II E-69・70土坑（南西から）



II E-69・70土坑埋土断面（南西から）



II E-71土坑（南西から）



II E-71土坑埋土断面（南西から）



IIE-73土坑（南から）



IIE-56土坑埋土断面（北から）



IVC-51土坑（南から）



IVC-51土坑埋土断面（北東から）



VD-51土坑（北から）



VD-51土坑埋土断面（北東から）

写真図版51 IIE-56・73・IVC-51・VD-51土坑



OB-51土坑（北西から）



IB-51土坑（北西から）



IB-52土坑（南西から）



IB-52土坑埋土断面（南東から）



IC・ID区作業風景

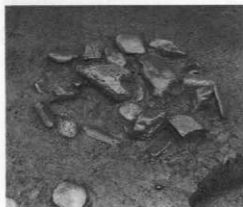
写真図版52 OB-51・IB-51・52土坑



全 景 (北東から)



完 掘 (南西から)



1号配石全景 (西から)



1号配石断面 (西から)



2号配石全景 (北西から)



2号配石断面 (南から)



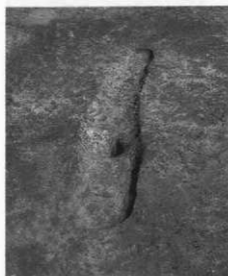
1D-151陥し穴状遺構（北西から）



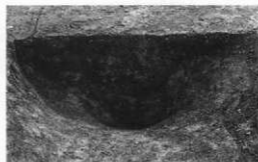
1D-151陥し穴状遺構埋土断面（北西から）



1D-152陥し穴状遺構埋土断面（北西から）



VD-101溝状遺構（北西から）



VD-101溝状遺構埋土断面（北西から）





IVC-1号カマド状遺構埋土断面（南西から）



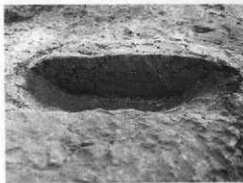
IVC-1号カマド状遺構（北西から）



IVC-1号カマド状遺構断面（南西から）



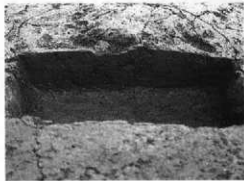
IVC-201焼土遺構（北東から）



IVC-201焼土遺構断面（北東から）



IVC-202焼土遺構（北西から）



IVC-202焼土断面（北から）

写真図版55 IVC-1号カマド状遺構・IVC-201・202焼土遺構



WC-203焼土遺構（北から）



WC-203焼土遺構埋土断面（南東から）



WC-203焼土遺構土器出土状況（北から）



WC-204・205・206焼土遺構（南西から）



WC-204・206焼土遺構断面（南から）



WC-205焼土遺構断面（西から）



WC-207焼土遺構（南西から）



WC-207焼土遺構断面（南西から）

写真図版56 WC-203・204・205・206・207焼土遺構



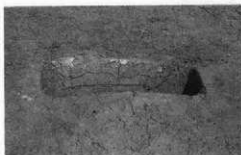
IVC-208焼土遺構（西から）



IVC-208焼土遺構断面（南西から）



IVC-209焼土遺構（南から）



IVC-209焼土遺構断面（南西から）



IVC-210焼土遺構（南西から）



IVC-210焼土遺構断面（南から）



IVD-201焼土遺構（北から）



IVD-201焼土遺構断面（西から）

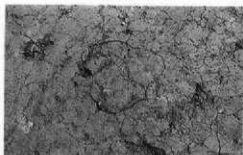
写真図版57 IVC-208・209・210・IVD-201焼土遺構



WD-202焼土遺構（西から）



WD-202焼土遺構断面（南西から）



WD-203焼土遺構（北から）



WD-203焼土遺構断面（西から）



VC-201焼土遺構（南から）



VC-201焼土遺構断面（南から）



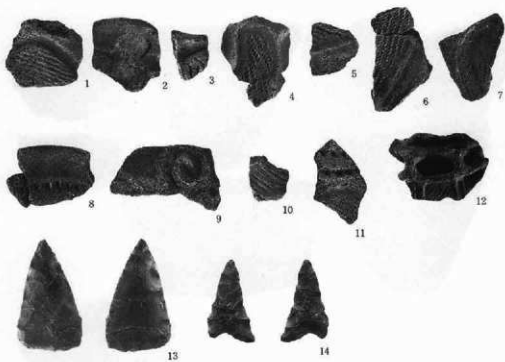
VD-201焼土遺構（北から）



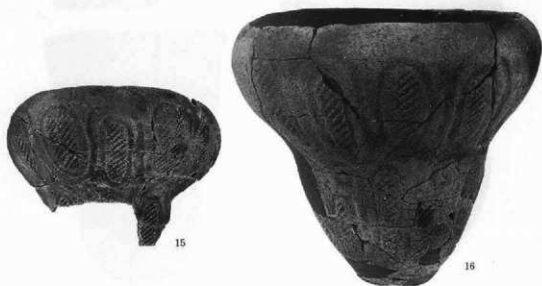
VD-201焼土遺構断面（西から）

写真図版58 WD-202・203・VC-201・VD-201焼土遺構

IC-1住居跡

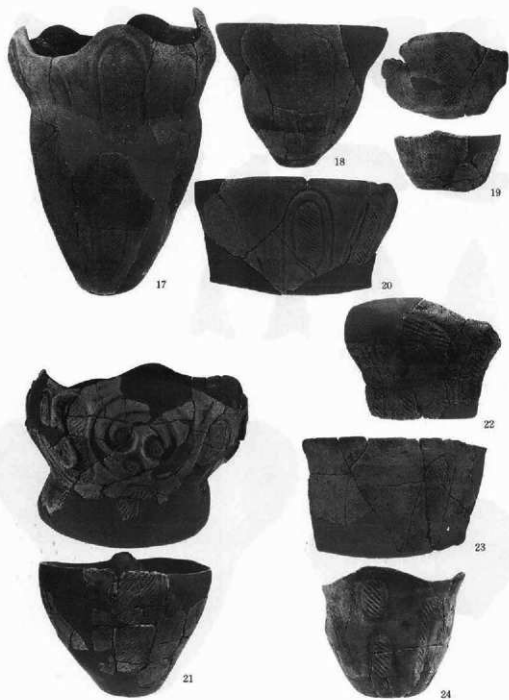


IC-2住居跡(1)



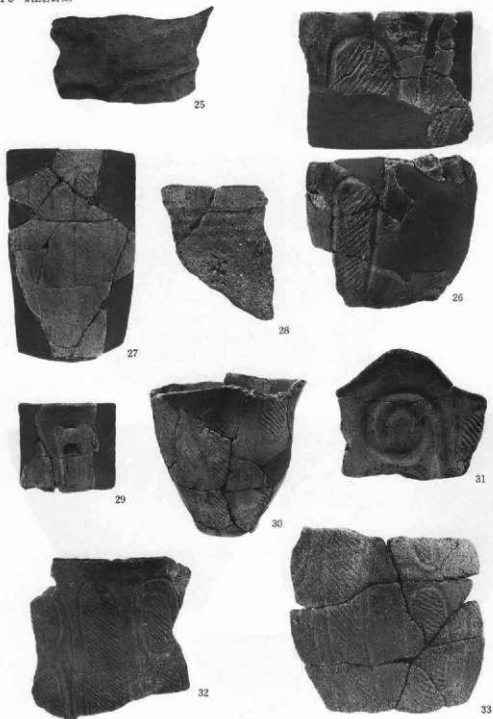
写真図版59 IC-1・2住居跡出土遺物(1)

IC-2住居跡出土物(2)



写真図版60 IC-2住居跡出土物(2)

IC-2住居跡(3)



写真図版61 IC-2住居跡出土遺物(3)

IC-2住居跡(4)



34



35a



36



37



38

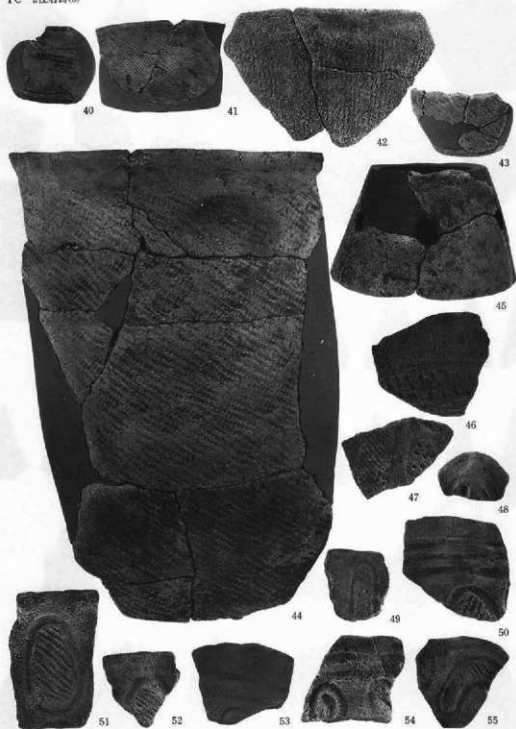


39

写真図版62 IC-2住居跡出土遺物(4)

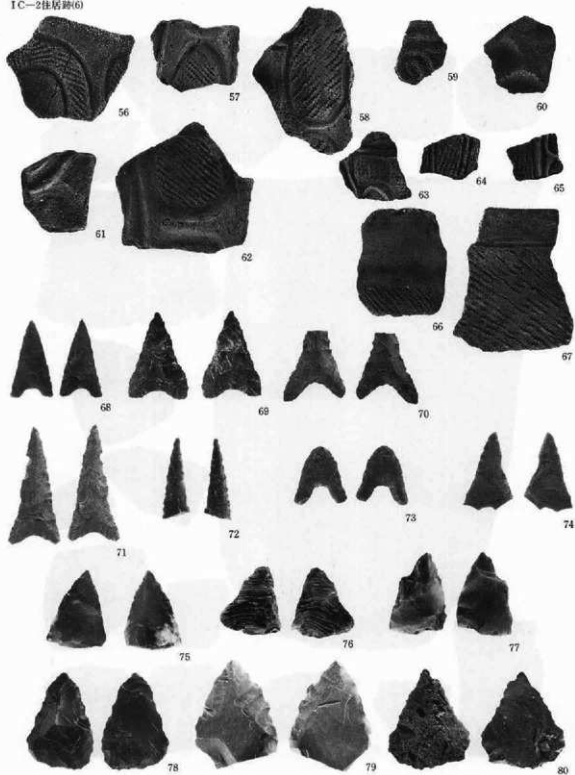


IC-2住居跡(5)



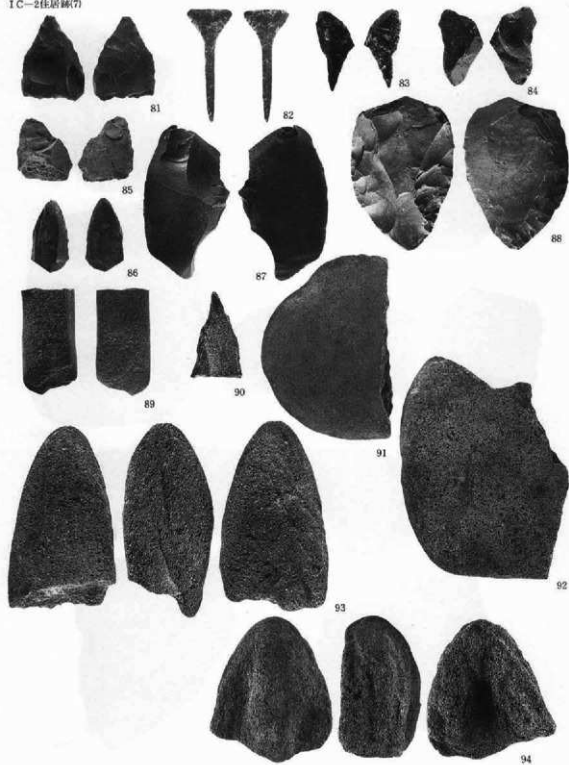
写真図版63 IC-2住居跡出土遺物(5)

IC-2住居跡(6)



写真図版64 IC-2住居跡出土遺物(6)

IC-2住居跡(7)



写真図版65 IC-2住居跡出土遺物(7)

IC-3住居跡(1)



95



96a



97



98



96b



99



100



102a



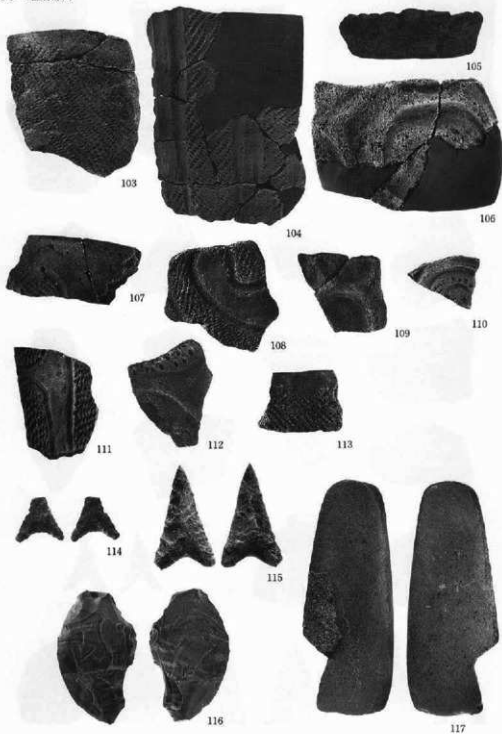
101



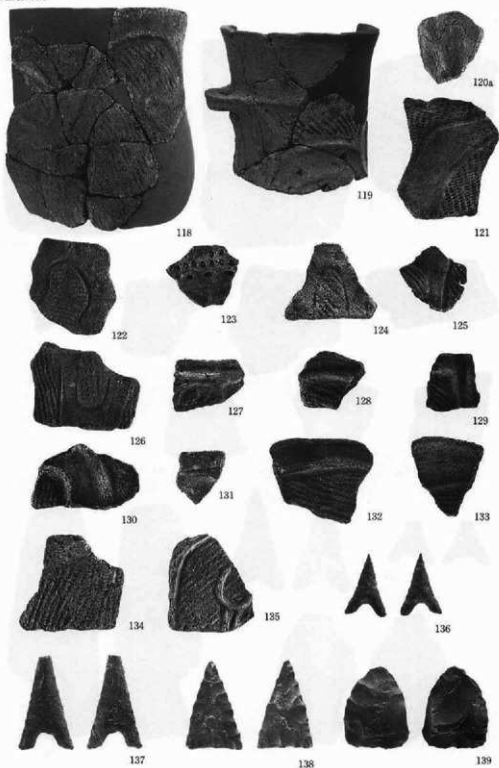
102b

写真図版66 IC-3住居跡出土遺物(1)

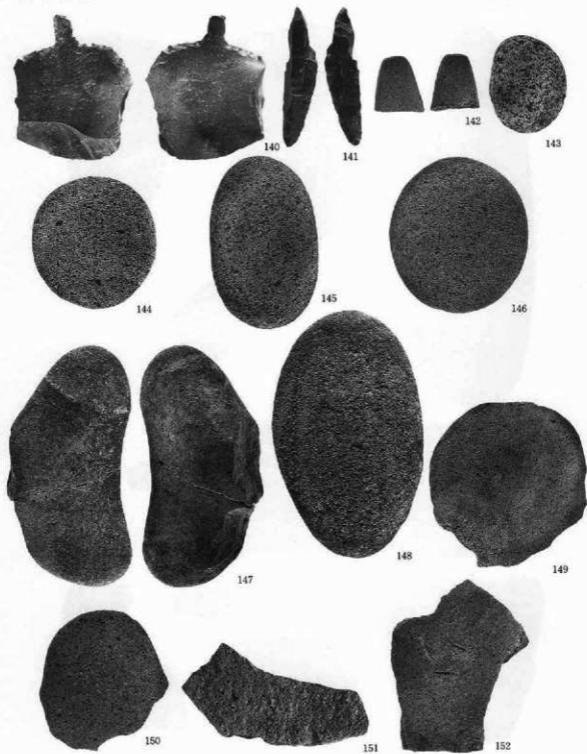
IC-3住居跡(2)



写真図版67 IC-3住居跡出土遺物(2)



写真図版68 IC-4住居跡出土遺物(1)



写真図版69 IC-4住居跡出土遺物(2)

IC-4住居跡(3)



153



154



155

IC-5・6住居跡(1)



156



157



158



159



160



161



162



163

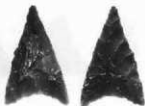


164

写真図版70 IC-4(3)・5・6住居跡出土遺物(1)



IC-6住居跡(2)



165



166

IC-7住居跡(1)



167



168



169



170



172



173



174



175



176



177



178



179



180



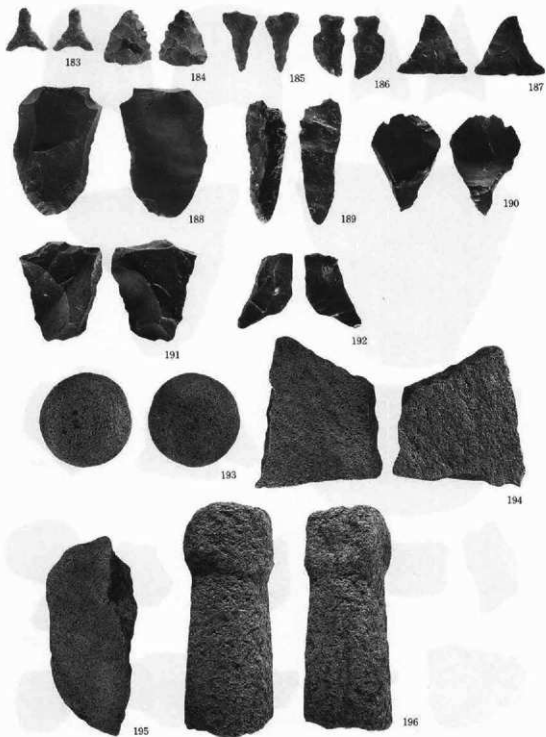
181



182

写真図版71 IC-6(2)・7住居跡出土遺物(1)

IC-7住居跡(2)



写真図版72 IC-7住居跡出土遺物(2)

IC-9住居跡(1)



197



198



199



201



200



202



203



204

写真図版73 IC-9住居跡出土遺物(1)



205



206a



207



206b



208



209



210



211

IC-9住居跡(3)



212



214



213



215a



216



217



218



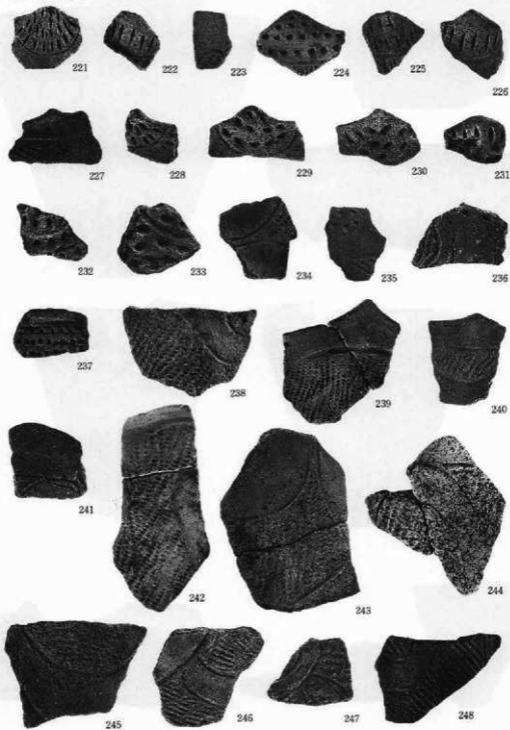
219



220

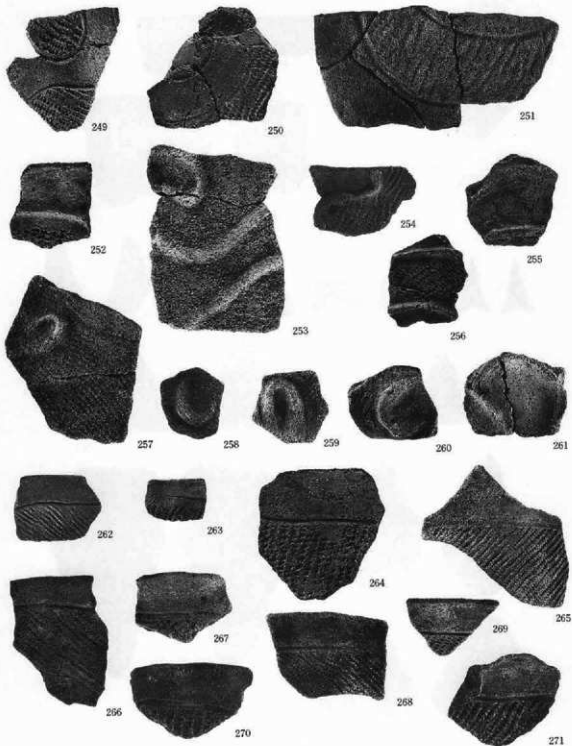
写真図版75 IC-9住居跡出土遺物(3)

IC-9住居跡(4)



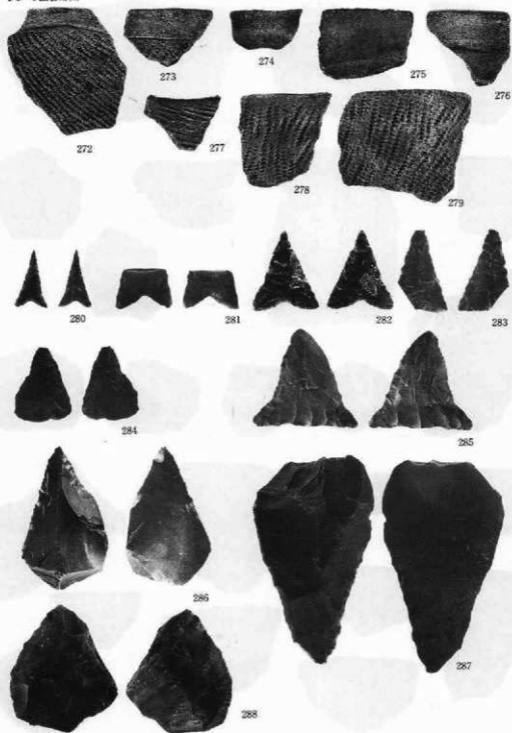
写真図版76 IC-9住居跡出土遺物(4)

IC-9住居跡(5)



写真図版77 IC-9住居跡出土遺物(5)

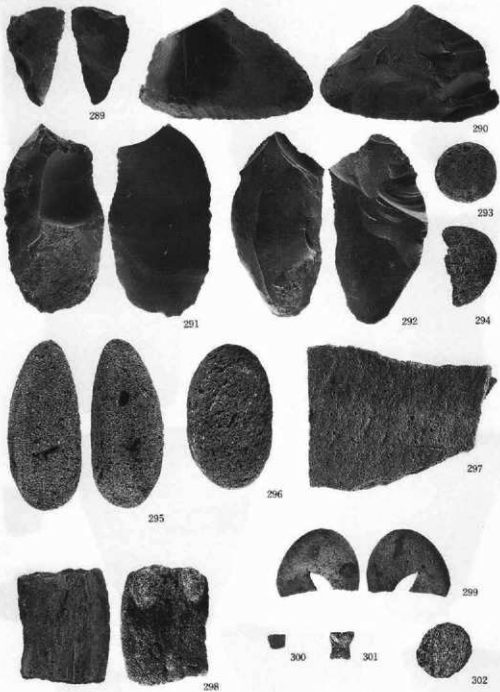
IC-9住居跡(6)



写真図版78 IC-9住居跡出土遺物(6)

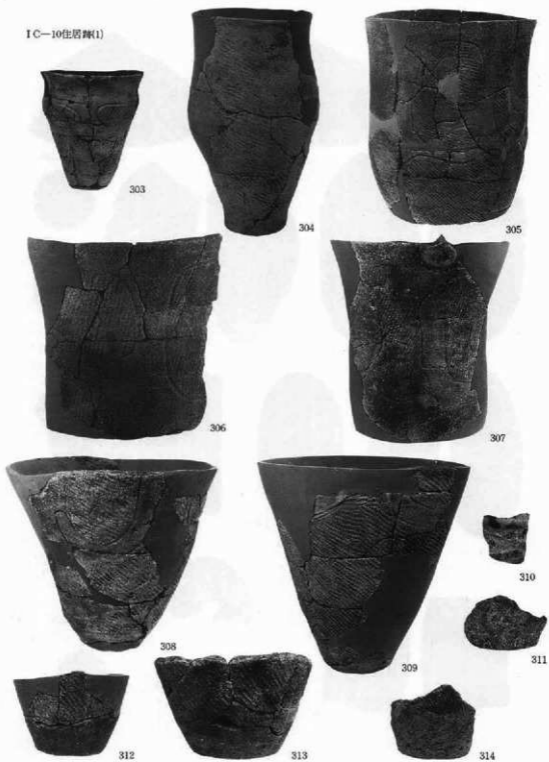


IC-9住居跡出土遺物(7)



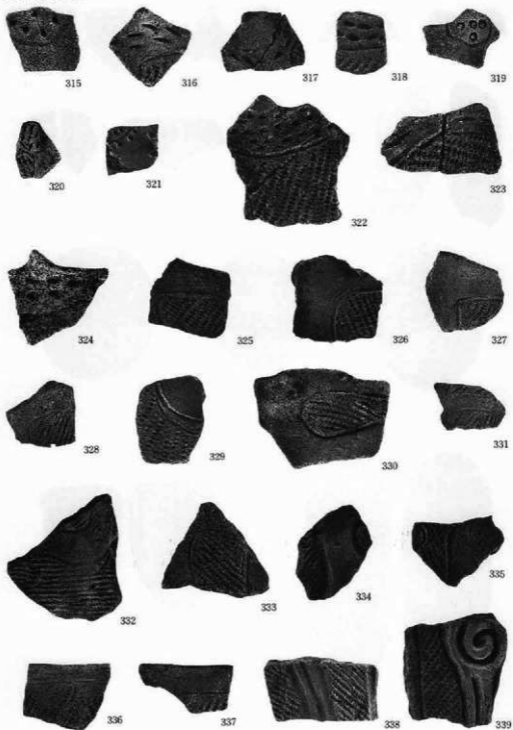
写真図版79 IC-9住居跡出土遺物(7)

I C—10住居跡(1)



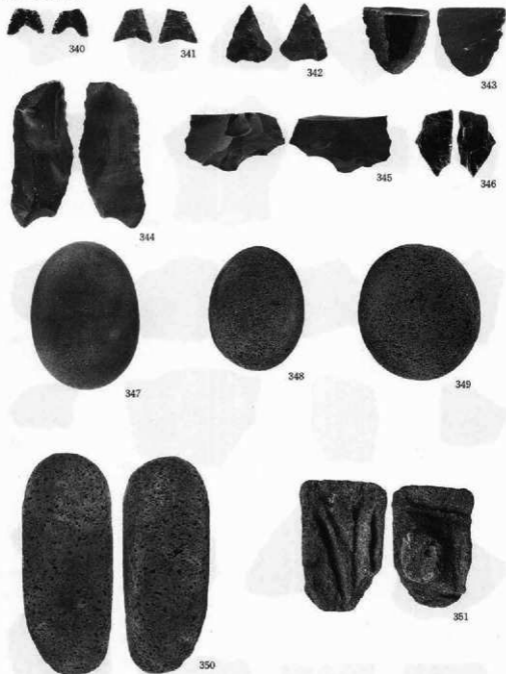
写真図版80 I C—10住居跡出土遺物(1)

IC-10住居跡(2)



写真図版81 IC-10住居跡出土遺物(2)

I C-10住居跡(3)



写真図版82 I C-10住居跡出土遺物(3)

1D-2住居跡(1)



352



353



354a



355



356



357



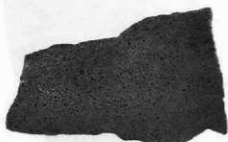
358



359

写真図版83 1D-2住居跡出土遺物(1)

I D-2住居跡(2)



360



361

I D-3住居跡(1)



362



363



364



365



366



367

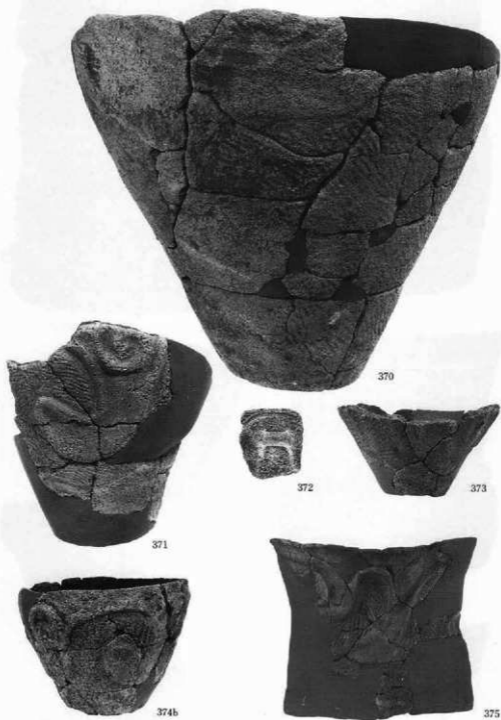


368



369

写真図版84 I D-2(2)・3住居跡出土遺物(1)



写真図版85 1D-3住居跡出土遺物(2)



376



377



378



380



379



381

写真図版86 ID-3住居跡出土遺物(3)

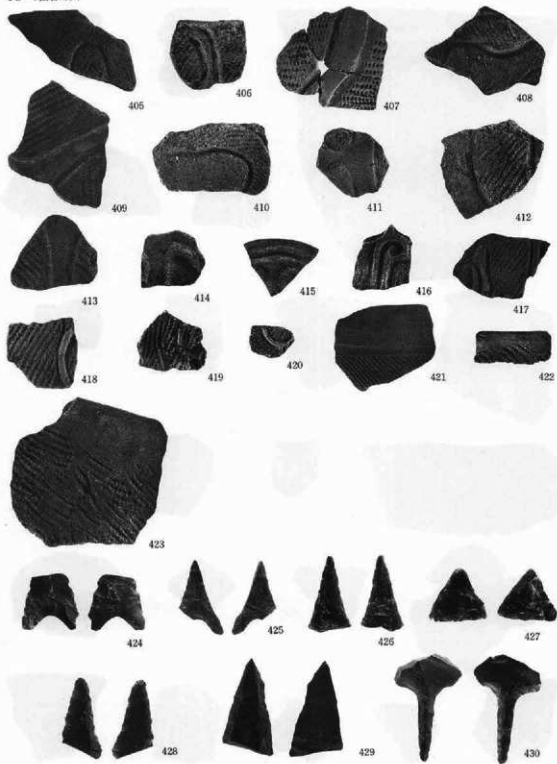


ID-3住居跡(4)



写真図版87 ID-3住居跡出土遺物(4)

ID-3住居跡(5)

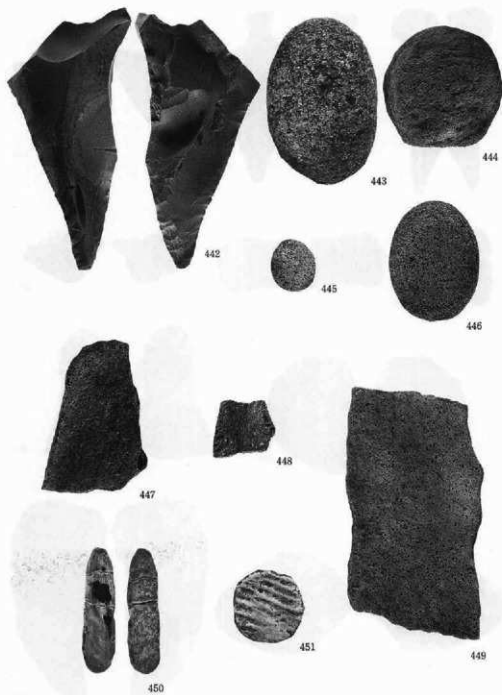


写真図版88 ID-3住居跡出土遺物(5)

ID-3住居跡(6)

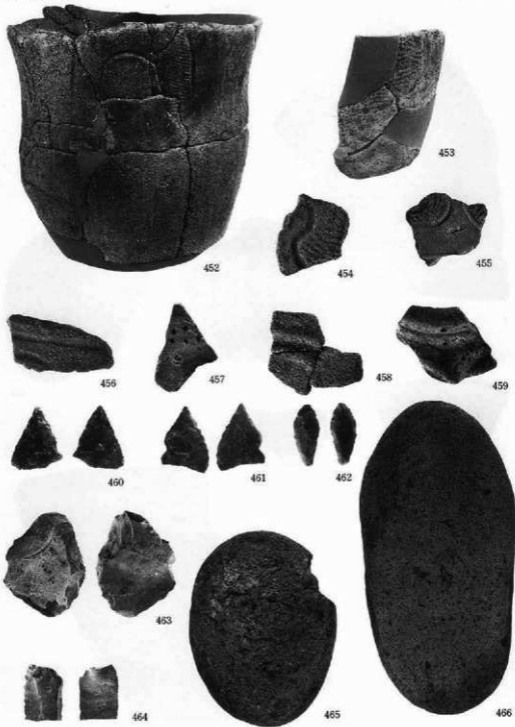


写真図版89 ID-3住居跡出土遺物(6)



写真図版90 1D-3住居跡出土遺物(7)

ID-5住居跡(1)

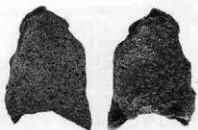


写真図版91 ID-5住居跡出土遺物(1)

I D-5住居跡(2)



467



468



469

II E-1住居跡



470a



471

II E-2住居跡



472



473



474

写真図版92 I D-5(2)・II E-1・2住居跡出土遺物

IC-8住居跡



475



476



477



478

IC-13住居跡



479



480



481

ID-1住居跡(1)



482



483



484



485



486



487



488



489



490



491



492



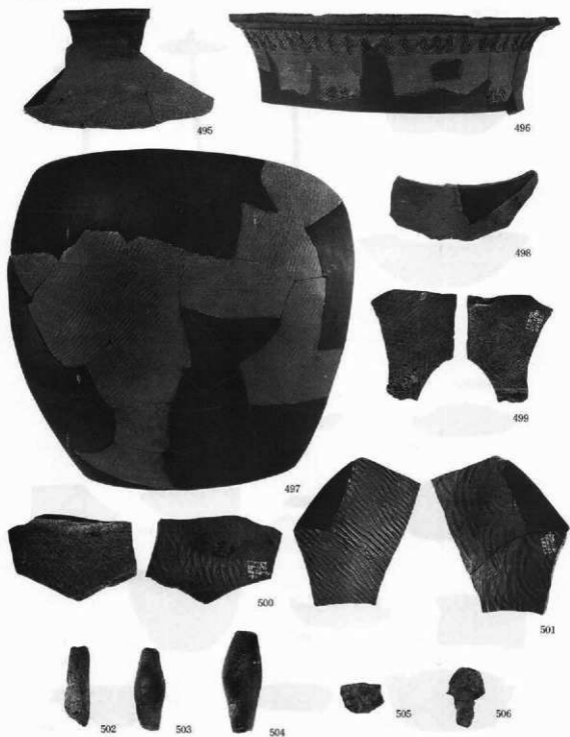
493



494

写真図版93 IC-8・13・ID-1住居跡出土遺物(1)

I D-1住居跡(2)



写真図版94 I D-1住居跡出土遺物(2)



WC-1住居跡

WD-1住居跡(1)



507



508



509



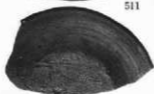
510



511



512



513



514



515



写真図版95 WC-1・WD-1住居跡出土遺物(1)

ND-1住居跡(2)



516



517



518



519



520

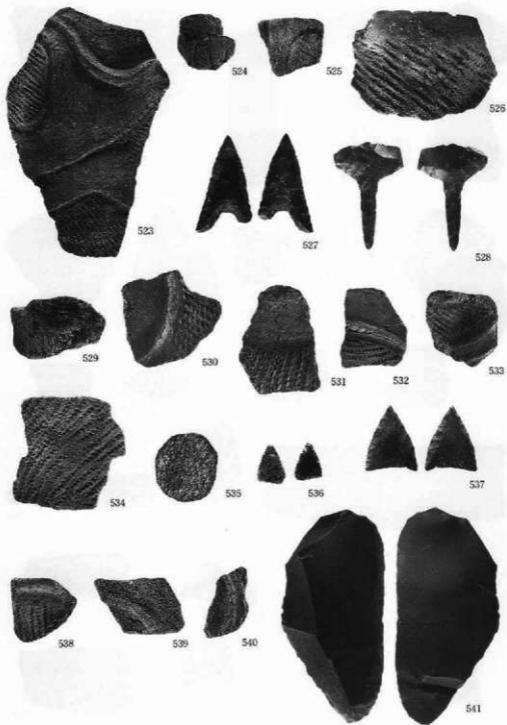


521

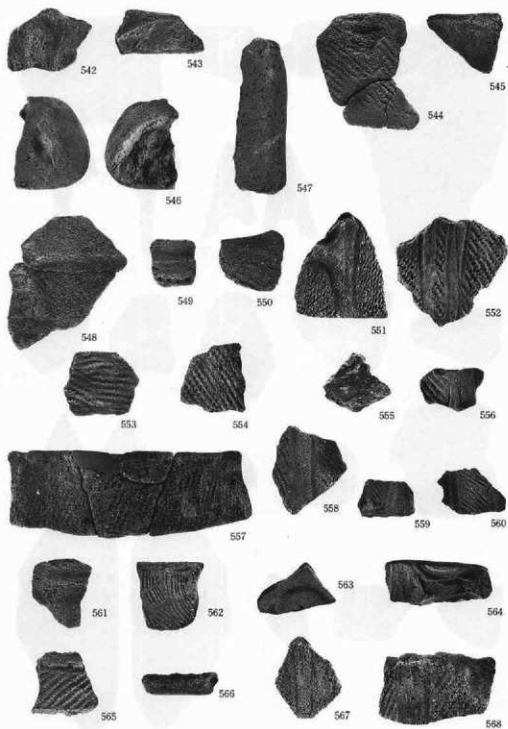


522

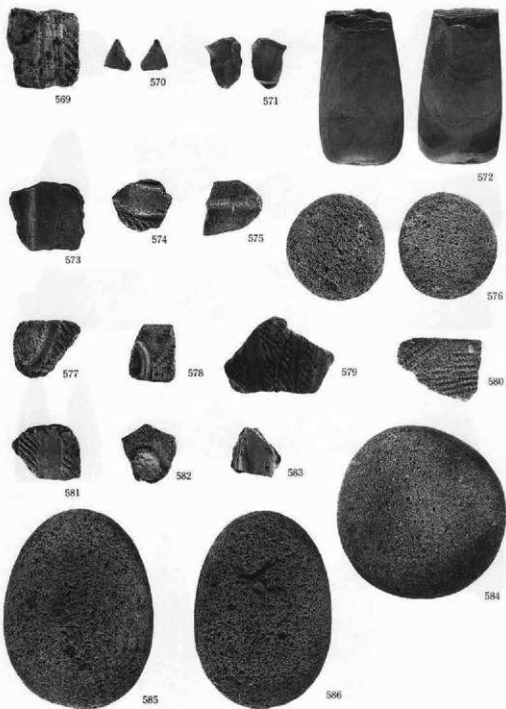
写真図版96 ND-1住居跡出土遺物(2)



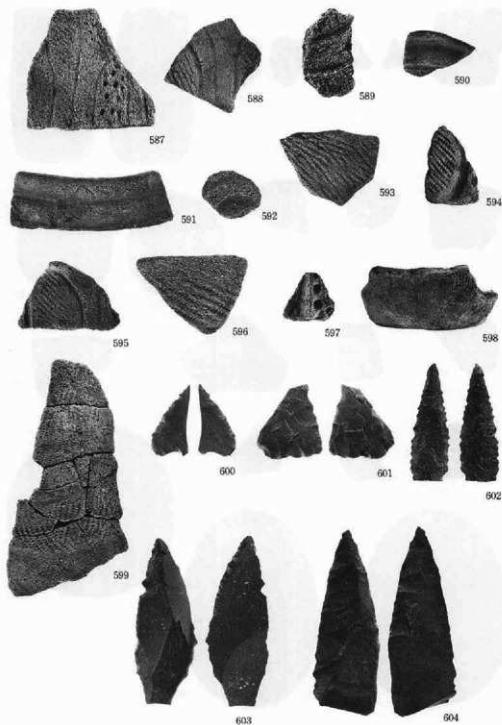
写真图版97 I C-55·56·57·58土坑出土遗物



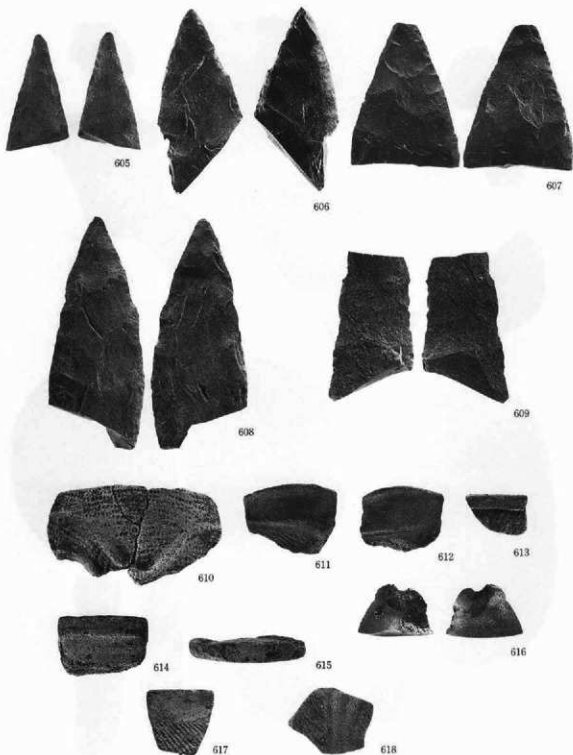
写真図版98 I C-60·61·67·70·73·74·76·78·84(1)土坑出土遺物



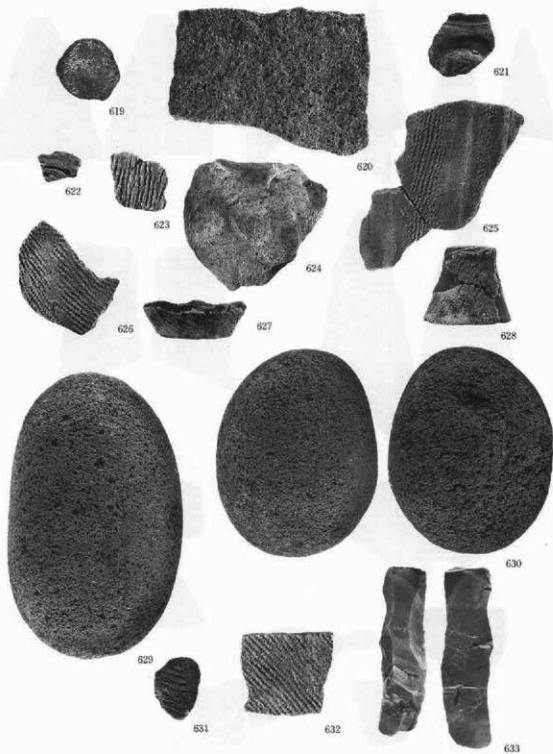
写真図版99 I C-84(2)・87・89・91・96土坑出土遺物



写真图版100 I C-98-99-101 · I D-52-53(1)土坑出土遗物

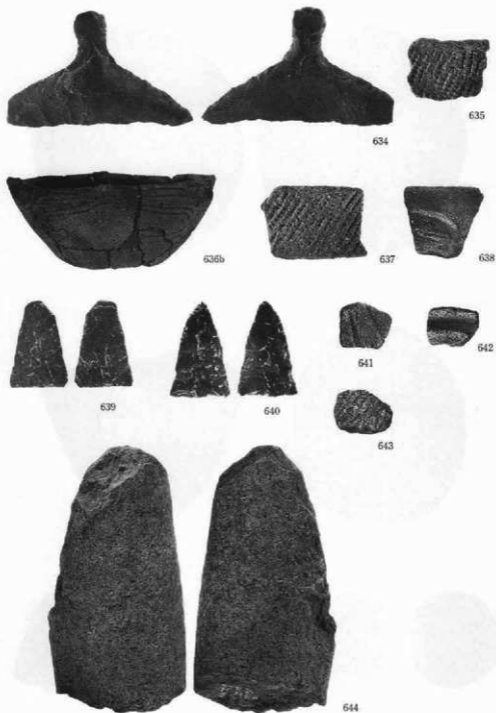


写真図版101 ID-53(2)・66・68(1)土坑出土遺物

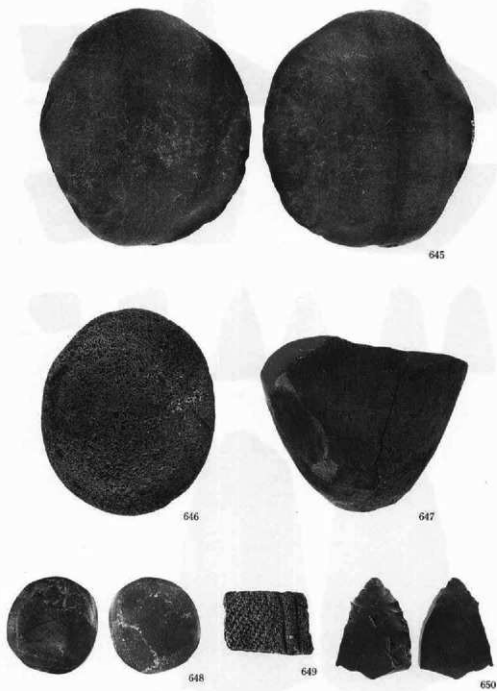


写真図版102 ID-68(2)・70・74・81・83・85土坑出土遺物

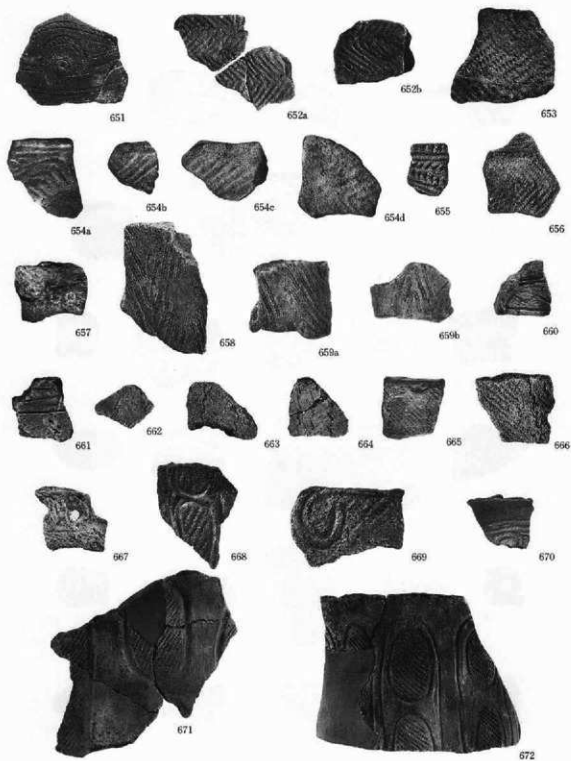




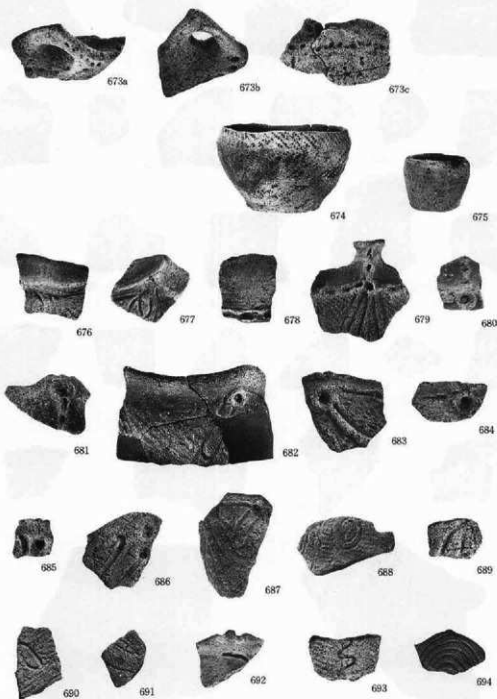
写真図版103 II E-64·68·69·72 · IV C-51 · V D-51 · I B-51·52土坑·  
I C-2号(1)配石出土遺物



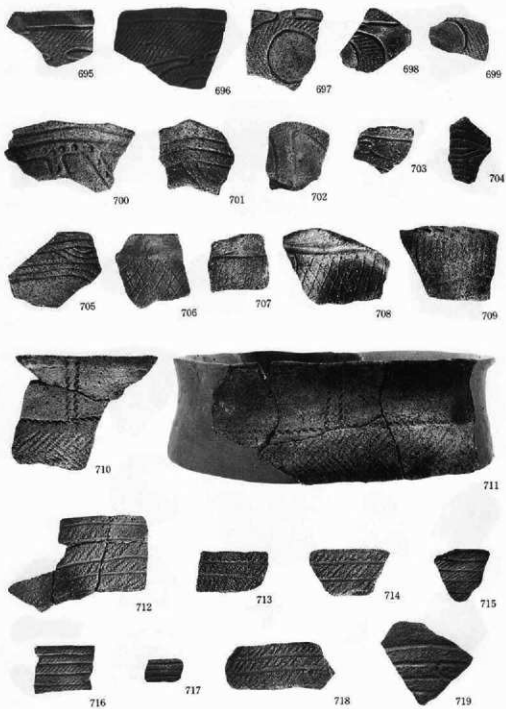
写真図版104 IC-2号配石(2)・WC-203焼土・OB-33・II E-31・34  
柱穴出土遺物



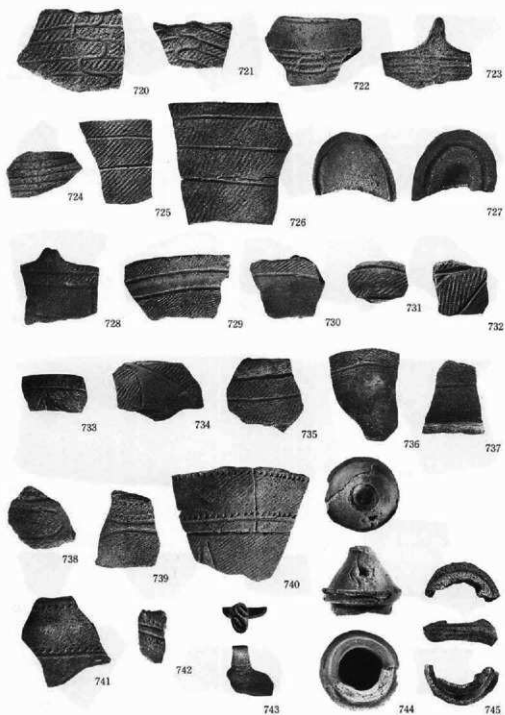
写真図版105 遺構外出土遺物：土器(1)



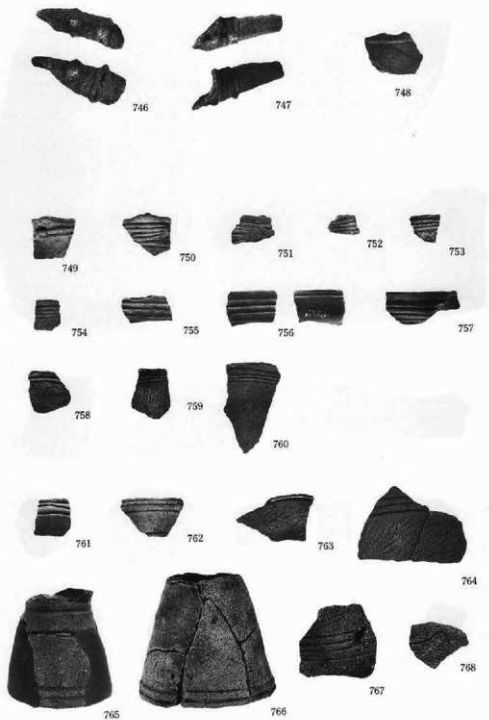
写真図版106 遺構外出土遺物：土器(2)



写真図版107 遺構外出土遺物：土器(3)



写真図版108 遺構外出土遺物：土器(4)



写真図版109 遺構外出土遺物：土器(5)



769



770



771



772



773



774



775



776



777



778



779



780



781



782

写真図版110 遺構外出土遺物：土器(6)





783



784



785



786



787



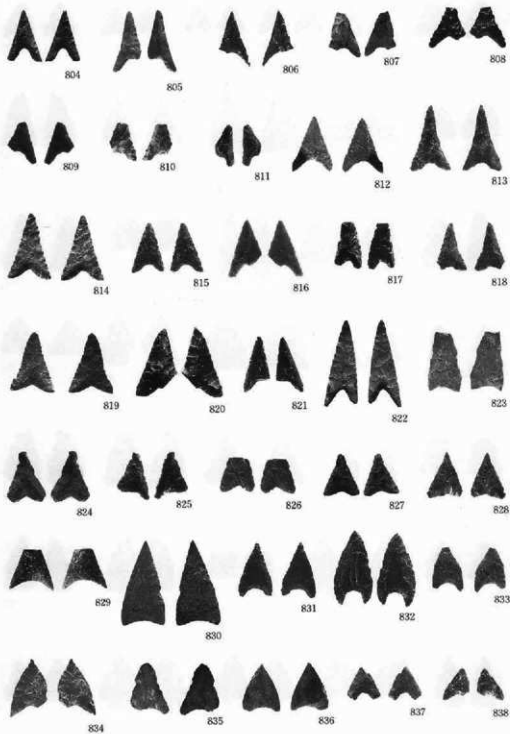
788



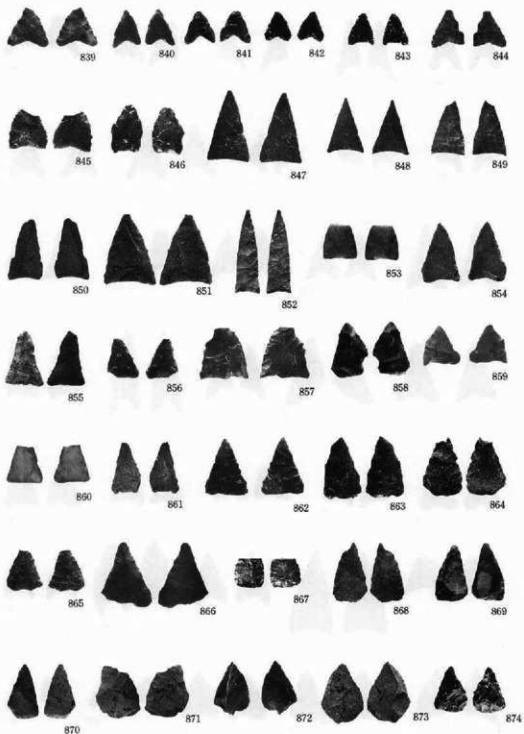
789



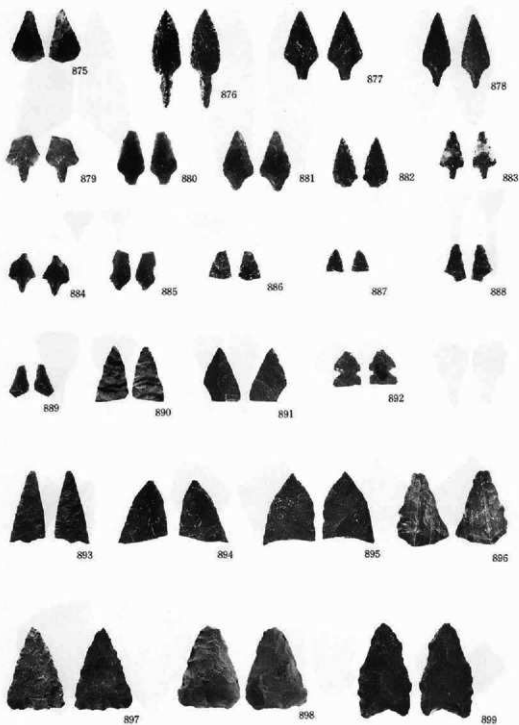
写真図版112 遺構外出土遺物：土製品



写真図版113 遺構外出土遺物：石器(1)



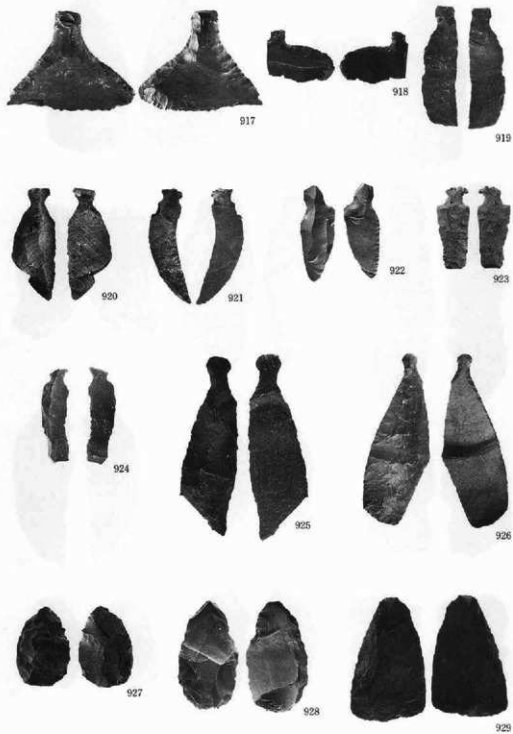
写真図版114 遺構外出土遺物：石器(2)



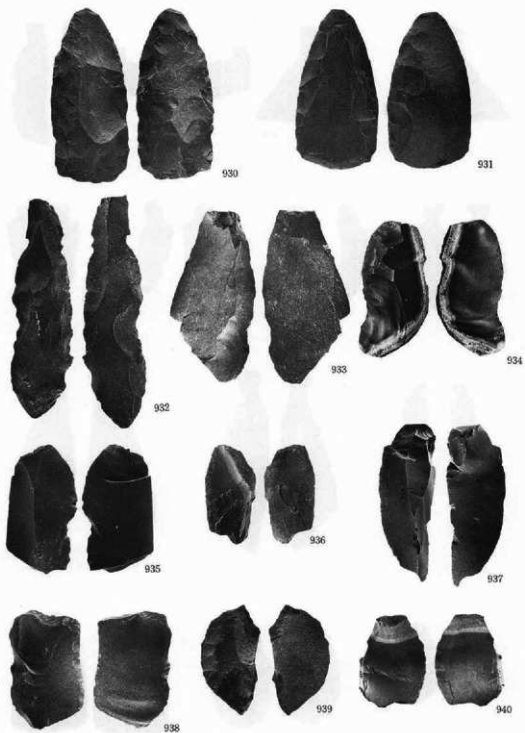
写真図版115 遺構外出土遺物：石器(3)



写真図版116 遺構外出土遺物：石器(4)

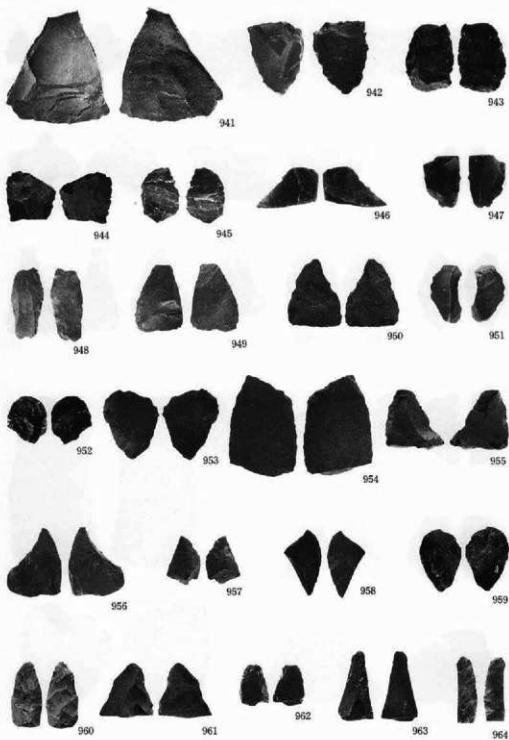


写真図版117 遺構外出土遺物：石器(5)

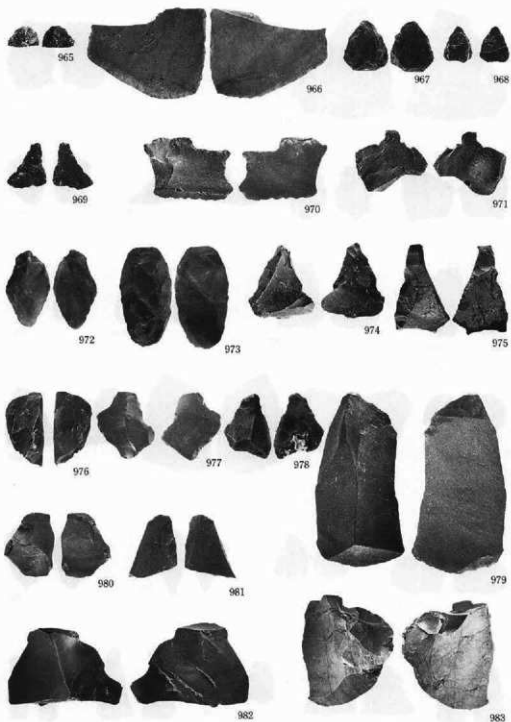


写真図版118 遺構外出土遺物：石器(6)

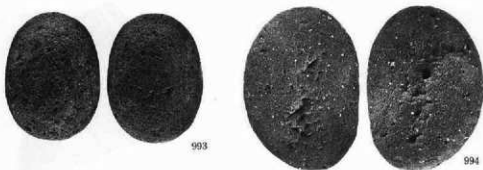
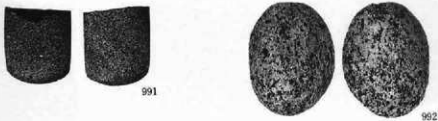
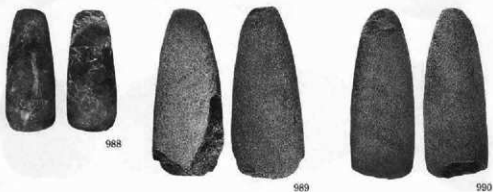




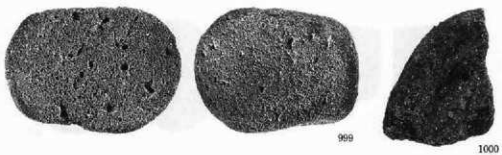
写真図版119 遺構外出土遺物：石器(7)



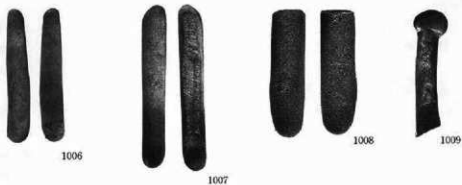
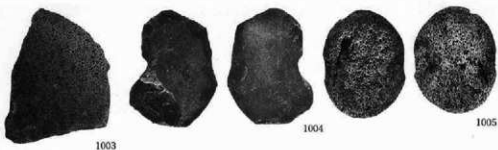
写真図版120 遺構外出土遺物：石器(8)



写真図版121 遺構外出土遺物：石器(9)



写真図版122 遺構外出土遺物：石器(10)



写真図版123 遺構外出土遺物：石器(11)・石製品・古銭

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 所長 小笠原 喜 一  
副所長 高 橋 敬 明

〔管理課〕

管理課長(兼) 高 橋 敬 明  
課長補佐 森 岡 陽 一  
主 事 佐 藤 理

〔調査課〕

調査課長 村 上 康 昭  
課長補佐 鈴 木 恵 治  
主任文化財 三 浦 謙 一  
専門調査員 高橋 與右衛門  
工 藤 利 幸  
中 川 重 紀  
藤 村 敏 男  
高 橋 義 介  
高 橋 正 之  
渡 辺 洋 一  
佐々木 清 文  
齋 藤 實 隆  
千 葉 孝 雄  
齋 藤 司 幹  
東 海 林 弘 均  
佐々木 村 均  
川 村 貞 行  
伊 東 邦 雄  
齋 藤 敏 明  
佐々木 信 一  
小 原 真 一  
酒 井 宗 孝

〔資料課〕

資料課長 村 松 義 夫  
文化財 高 橋 一  
専門調査員

彌 託 根 橋 文 一  
// 吉 田 十 次  
選 兼 佐 藤 春 男  
技 務 士 員  
文 化 財 松 本 建 遠  
專 門 調 査 員 笹 平 克 子  
// 花 坂 政 博  
// 佐々木 努  
// 金 子 昭 彦  
// 濱 田 宏 人  
// 羽 柴 直 之  
// 星 雅 之  
// 高 木 晃 勉  
// 鎌 田 精 造  
期 限 職 付 阿 部 勝 則  
專 門 員 千 葉 博 由  
// 熊 谷 信 一  
// 新 倉 博 英  
// 山 口 博 透  
// 柳 田 中 元 明  
// 菅 原 藤 剛 悦  
// 工 藤 敏 樹 可  
// 高 橋 英 浩 樹  
// 溜 佐 藤 修 一

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第187集

## 館IV遺跡発掘調査報告書

国道107号新珊瑚橋整備関連遺跡発掘調査

印刷 平成5年3月25日

発行 平成5年3月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 川口印刷工業㈱

〒020 岩手県盛岡市本町通2-13-8

TEL (0196) 23-3351

---

---